

一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4

中野美保遺跡



2004年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4

中野美保遺跡

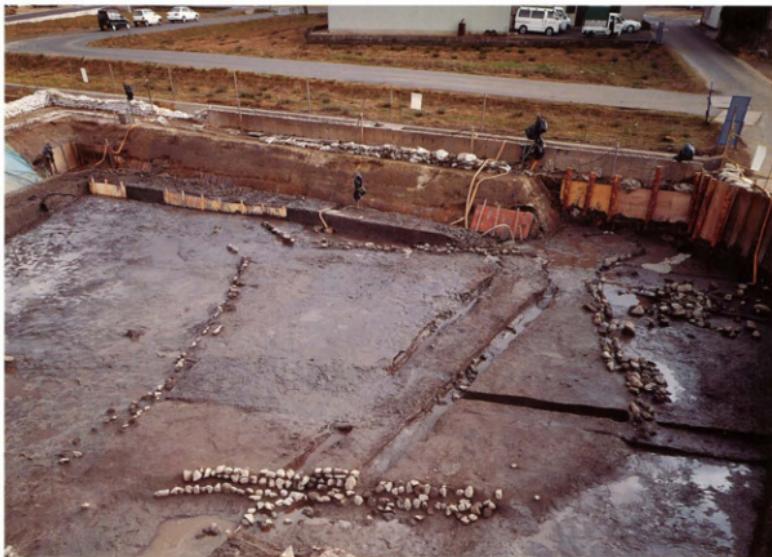
2004年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

巻頭カラー図版 1



中野美保遺跡全景（東から撮影）



中野美保 1 号墓（西から撮影）

序

一般国道9号は、京都市を起点として山陰地方の主要都市を結び、山口県下関市に至る総延長約690キロメートルの主要幹線道路です。

国土交通省中国地方整備局松江国道事務所においては、出雲市内的一般国道9号の慢性的な交通渋滞を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、出雲バイパスの建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当出雲バイパスにおいても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の協力のもとに平成8年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成13・14年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のために広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行われていることへの理解をいただきたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご尽力いただいた島根県教育委員会並び関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成16年3月

国土交通省中国地方整備局
松江国道事務所
所長 本田 幸一

序

島根県教育委員会は、国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成8年度を嚆矢に一般国道9号出雲バイパス建設予定地内の埋蔵文化財の発掘調査を行っています。この報告書は平成13年度から14年度にかけて実施した出雲市中野町地内中野美保遺跡の発掘調査結果をとりまとめたものです。

出雲平野一帯は県内でも有数の遺跡の宝庫であり、原始・古代の遺跡が数多く存在しています。本遺跡は出雲平野のほぼ中央に位置し、弥生時代を中心とする多数の遺構と遺物が見つかりました。

このうち特に注目されるのが、弥生時代後期後半の四隅突出型墳丘墓と、四隅突出型墳丘墓の下層から弥生時代中期中葉の方形貼石墓が確認されたことです。四隅突出型墳丘墓の低地からの発見は山陰地方では初めてで、全国でも3例目になります。方形貼石墓は、これまで石見地方から丹後地方の日本海沿岸部を中心に見つかっています。しかし、まだ不明な点が多く、新たな方形貼石墓の発見はこの時期の墳墓の様子を解明する貴重な手がかりとなります。

本報告書がこの地域における人々の暮らしや、それを取り巻く自然の営みを後世に伝える基礎的資料として多少なりとも役立てば幸いと思います。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

島根県教育委員会

教育長 広沢 卓嗣

例　　言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局松江国道事務所の委託を受けて、島根県教育委員会が平成13年度と14年度に実施した一般国道9号（出雲バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県出雲市中野町660ほか 中野美保遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

（平成13年度）中野美保遺跡現地調査

事務局 宮道正年（埋蔵文化財調査センター所長）

内田 融（同総務課長）今岡 宏（同総務係長）

松本岩雄（同調査第1課長）川原和人（同調査第2課長）

調査員 内田律雄（同第5係主幹）中野靖睦（同教諭兼文化財保護主事）渡邊貢二（同調査補助員）

仁木 聰（同主事）岩崎 健（同教諭兼主事）田中玲子（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）

岩本次郎（帝塚山大学人文科学部教授）

金田明大（独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第二調査室研究員）

田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）

蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）

深澤芳樹（独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官）

義江彰夫（東京大学教養学部教授）

渡邊貢幸（島根大学法文学部教授）

（平成14年度）中野美保遺跡現地調査

事務局 宮道正年（埋蔵文化財調査センター所長）

卜部吉博（同副所長）

内山 敏（同総務課長）坂本淑子（同総務係長）

川原和人（同調査第2課長）

調査員 仁木 聰（同主事）山根 肇（同教諭兼主事）田中玲子（同調査補助員）

調査指導（50音順、敬称略）

金田明大（独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第二調査室研究員）

佐古和枝（関西外語大学国際言語学部助教授）

田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）

春成秀爾（国立歴史民俗博物館考古研究部教授）

深澤芳樹（独立行政法人奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官）

藤田憲司（財団法人大阪府文化財センター中部調査事務所長）

(平成15年度) 中野美保遺跡報告書作成

事務局 宮道正年(埋蔵文化財調査センター所長)

ト部吉博(同副所長)

永島静司(同秘書課長)

川原和人(同調査第2課長)

調査員 仁木 聰(同主事) 山根 塁(同教諭兼文化財保護主事)

調査指導(50音順、敬称略)

山崎博之(愛媛大学法文学部助教授)

4. 発掘調査は I ~ IV・VII区(平成13年度)、VI区(平成14年度)を仁木が担当し、V・VI区(平成13年度)を内田が担当した。

5. 発掘作業(発掘作業員雇用、重機借り上げ、発掘用具調達等)については、国土交通省中国地方整備局、社団法人中国建設弘済会、鳥根県教育委員会の三者協定に基づき、鳥根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

(平成13年度)

〔現場担当〕布村幹夫(現場事務所長) 梶木 忍(技術員)

〔事務担当〕馬庭明美

(平成14年度)

〔現場担当〕梶木 忍(技術員)

〔事務担当〕馬庭明美

6. 現地調査及び資料整理に際し、鳥根県教育府文化財課、古代文化センター、八雲立つ風土記の丘資料館、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。また、調査指導をお願いした方々のほかに、多くの方から有益な御指導・御助言をいただいた。

浅田公年、後川恵太朗、岸上智博、岡本圭司、奥村茂輝、亀井 聰、川瀬貴子、西村 歩、(財團法人大阪府埋蔵文化財調査研究センター)、田邊弘宏(福井市教育委員会文化財保護センター)、松村知也(福井市立郷土歴史博物館)、赤澤徳明、川越光洋、鈴木恵介、富山正明、中森敏輔(福井県教育府埋蔵文化財調査センター)、坂本豊治(出雲市教育委員会)、中村唯史(財團法人三瓶フィールドミュージアム財団指導課)

7. 採図中北は、測量法による第3座標X軸方向を指す。また、平面直角座標系XY座標は、日本測地系による。レベル高は海拔高を示す。

8. 第2図は建設省国土地理院発行の1/50,000図を使用した。第3図は昭和23年4月・9月に極東米国軍が撮影した航空写真を基に、国際航業株式会社が製作した1/5,000図を使用した。第36図は株式会社北陽技研が設置した基準杭を用いて、国際航業株式会社が製作した1/100の測量図をもとに、仁木が修正加筆した。

9. 図版1上(巻頭カラー)、5上、10上、27上は国際航業株式会社が撮影した。図版1下(巻頭カラー)、2上は鳥根県埋蔵文化財調査センター熱田貴保が協力し、鳥根県教育委員会文化財課広江耕二が撮影した。同じく、図版54は熱田が撮影した。図版2下(巻頭カラー)は鳥根県埋蔵文化財調査センター山原淳史が撮影した。図版56は鳥根県教育府古代文化センター増田浩太が撮影した。その他の写真図版は仁木が撮影した。

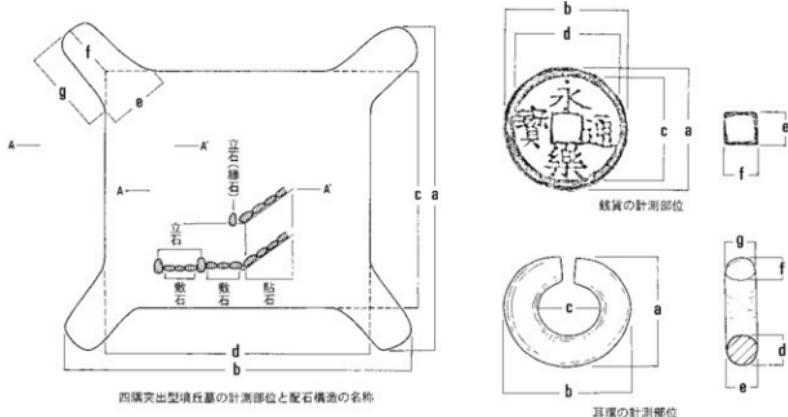
10. 本書に掲載した実測図は各調査員の他に、埋蔵文化財調査センター調査員、今岡一三、角田徳

- 幸と整理作業員が行った。
11. 遺物整理・報告書作成作業は各調査員と整理作業員が行った。
 12. 本書の執筆は第5章を除き調査員が分担して行い、その文責を日次に記した。また、第5章第4・5節については篠科哲男氏（京都大学原子炉実験所）に御執筆いただいた。ただし、執筆者の了解のもと、体裁を一部改変して掲載している。
 13. 中野美保遺跡出土木製品の¹⁴C年代測定は、株式会社古環境研究所に委託し第5章第1節に成果を収録した。同じく中野美保出土木製品の樹種鑑定及び自然科学分析は文化財コンサルタント株式会社（渡辺正巳）に委託し、それぞれ第5章第2節同第3節に成果を収録した。
 14. 本書の編集は各調査員の協力を得て、仁木が行った。
 15. 本書掲載の出土遺物（非掲載含む）及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

凡　　例

- 1 本文、挿図および写真図版の番号は一致する。
- 2 検出された二基の弥生墳丘墓の学術用語については、次のように統一して記載する。中野美保1号墓（四隅突出型墳丘墓）、同2号墓（方形貼石墓）とする。
- 3 四隅突出型墳丘墓の各計測箇所と墳丘斜面と墳端における「貼石・列石構造」の用語は次頁のとおりである。なお、方形貼石墓の「貼石・列石構造」の用語もこれに準じている。
- 4 出土鏡の各計測位置は次頁のとおりである。
- 5 耳環の各計測位置は次頁のとおりである。
- 6 剥片石器・礫石器の計測は、最終剥離面の向きが確実に分かるものはそれに従い、不明なものは最大長を「長さ」、これに直交する最大幅を「幅」、両者が形成する面に対する最大厚を「厚さ」として行った。
- 7 土器の時期決定は主として以下の文献を参考に行った。曲解があるとすれば、その責はすべて編集者の仁木にある。

- 松本岩雄 1992『出雲・隱岐地域』「弥生上器の様式と編年」山陽・山陰編 木耳社
鹿島町教育委員会 1992『南譜武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5
松山智弘 2000『小谷式再検討－出雲平野における新資料から』『島根考古学会誌』17 島根考古学会
松山智弘 2002『神原神社古墳埋納出土の上器について』『神原神社古墳』加茂町教育委員会
松山智弘 1991『出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大束式の再検討』『島根考古学会誌』8 島根考古学会
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
大谷晃二 1994『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌』11 島根考古学会
大谷晃二 2001『上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室』『上石堂平古墳群』平田市教育委員会
柳浦俊一 1995『出雲における須恵器の生産・流通と特質』『風土記の考古学3』同成社
柳浦俊一 2001『島根県東部（出雲）の切り離し技法と長頸壺類接合技法』『古代の上器研究－律令的上器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその伝換－』古代の上器研究会 第6回シンポジウム
島根県教育委員会 2003『風土記の丘内地内遺跡発掘調査報告書14 史跡出雲国府跡 1』
広江耕史 1995『山陰の煮炊具－出雲・石見－』『古代の土器研究－律令的上器様式の東・西4 煮炊具－』
広江耕史 1992『島根県における中世土器の変遷について』『松江考古』8



本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	仁木 聰	(1)
第2章 中野美保遺跡周辺の環境	山根 塁・仁木 聰	
第1節 地理的環境		(1)
第2節 歴史的環境		(2)
第3章 調査の方法と概要	仁木 聰	
第1節 調査区の設定と調査方法		(7)
第2節 調査成果		(7)
第4章 検出した遺構と遺物	仁木 聰	
第1節 中世後半以降の遺構と遺物		(11)
第2節 古代～中世の遺構		(19)
第3節 古代～中世の包含層（3層）出土遺物		(22)
第4節 弥生～古墳時代の遺構と遺物		(24)
第5節 その他の遺物と出土上器・観		(137)
第6節 小結		(150)
第5章 自然科学的分析		
第1節 烏根県・出雲バイパス建設予定地内遺跡における	古環境研究所	(157)
放射性炭素年代測定		

第2節	中野美保遺跡出土木製品の樹種	渡辺 正巳・古屋 稲	(159)
第3節	中野美保遺跡発掘調査に係る自然科学分析	渡辺 正巳	(161)
第4節	中野美保遺跡出土の黒曜石製造物の原材料地分析	薦科 哲男	(178)
第5節	中野美保遺跡出土の管玉の产地分析	薦科 哲男	(191)

第6章 考察

仁木 晴

第1節	四隅突出型墳丘墓の付随施設について —円形状石組の認識について—		(205)
第2節	日本海沿岸部における方形貼石墓について —中野美保2号墓の事例から—		(212)

挿図目次

第1図	中野美保遺跡の位置	1
第2図	出雲平野周辺の主な遺跡 ($S = 1/100,000$)	5
第3図	昭和23年当時の中野美保遺跡周辺の旧地図 ($S = 1/10,000$)	6
第4図	中野美保遺跡調査区の配置図 ($S = 1/2,500$)	8
第5図	中野美保遺跡基本土層図 (II・Ⅲ区より) (垂直 $S = 1/40$ 、水平 $S = 1/60$)	9~10
第6図	各調査区検出の中世水田遺構 ($S = 1/800$)	13
第7図	I・II・IV区検出の中世水田遺構 ($S = 1/400$)	14
第8図	III区検出の中世水田遺構 ($S = 1/400$)	15
第9図	V・VI区検出の中世水田遺構 ($S = 1/400$)	17
第10図	VII・VIII区検出の中世水田遺構 ($S = 1/400$)	18
第11図	II・V区中世水田遺構出土古錢 ($S = 1/1$)	19
第12図	各調査区検出の中世水田下層遺構 ($S = 1/800$)	25
第13図	I・II・IV区検出の中世水田下層遺構 ($S = 1/400$)	26
第14図	III・IV区中世水田遺構下層土層図 ($S = 1/40$)	27~28
第15図	I区包含層 (4層) 出土遺物 (1) ($S = 1/3$)	29
第16図	I区包含層 (4層) 出土遺物 (2) ($S = 1/3$)	30
第17図	I区包含層 (4層) 出土遺物 (3) ($S = 1/3$)	31
第18図	I区包含層 (4層) 出土遺物 (4) (1~4・6は $S = 1/3$ 、5は $S = 1/4$)	32
第19図	II区包含層 (4層) 出土遺物 (1) ($S = 1/3$)	34
第20図	II区包含層 (4層) 出土遺物 (2) ($S = 1/3$)	35
第21図	III区包含層 (4層) 出土遺物 (1~9・11は $S = 1/3$ 、10は $S = 1/2$)	37
第22図	IV区包含層 (4層) 出土遺物 (1) ($S = 1/3$)	38
第23図	IV区包含層 (4層) 出土遺物 (2) ($S = 1/3$)	39
第24図	IV区包含層 (4層) 出土遺物 (3) ($S = 1/3$)	40
第25図	IV区包含層 (4層) 出土遺物 (4) ($S = 1/3$)	41

第26図	V区包含層（3・4層）出土遺物（S=1/3）	42
第27図	VII区包含層（4層）出土遺物（S=1/3）	43
第28図	V・VII区検出の中世水田下層遺構（S=1/400）	44
第29図	V区中世水田下層検出の遺構配置図（S=1/200）	46
第30図	V区中世水田下層検出の建物1・2（S=1/60）	47
第31図	V区SX01遺物出土状況・土層断面図（S=1/20）	49
第32図	V区SX02遺物出土状況・土層断面図（S=1/20）	50
第33図	V区SX01出土遺物（S=1/3）	51
第34図	V区SX02出土遺物（S=1/3）	52
第35図	V区SD02・03・04・05出土遺物（S=1/3）	53
第36図	VII区中野美保1号墓墳丘測量図（S=1/100）	54
第37図	VII区中野美保1号墓と周辺遺構の平面図（S=1/100）	55
第38図	VII区中野美保1号墓・2号墓墳丘上層図（S=1/40）	56
第39図	VII区包含層（3層）出土遺物（1）（S=1/3）	57
第40図	VII区包含層（3層）出土遺物（2）（1~5・7~9はS=1/3、6はS=1/2）	58
第41図	VII区包含層（3層）出土遺物（3）（1~14はS=1/3、15はS=1/4）	60
第42図	VII区中野美保1号墓遺物出土地點と半・立面図（S=1/100）	61~62
第43図	VII区中野美保1号墓遺物出土状況（第42図A・A'・B・B'枠）（S=1/10）	63
第44図	VII区中野美保1号墓遺物出土状況（第42図C・C'枠）（S=1/10）	64
第45図	VII区中野美保1号墓遺物出土状況（第42図D・D'枠）（S=1/10）	65
第46図	VII区1号墓周辺出土遺物（S=1/3）	66
第47図	VII区1号集石遺構の半・立面図（S=1/40）	67
第48図	VII区1号集石遺構出土遺物（S=1/3）	68
第49図	VII区2号集石遺構の半・立面図（S=1/40）	68
第50図	VII区2号集石遺構精査時の平・立面図（S=1/40）	69
第51図	VII区2号集石遺構周辺出土遺物（S=1/3）	70
第52図	VII区2号集石遺構付近出土の不明木製品（1）（S=1/4）	71
第53図	VII区2号集石遺構付近出土の不明木製品（2）（S=1/4）	72
第54図	VII区3号集石遺構の平・立面図（S=1/40）	73
第55図	VII区中野美保1号墓南東隅と2号集石遺構・3号集石遺構の位置関係（S=1/40）	74
第56図	VII区中野美保1号墓・2号墓と3号集石遺構の配置図（S=1/100）	75
第57図	VII区中野美保2号墓の平・立面図（S=1/40）	76
第58図	VII区中野美保2号墓周辺（1号墓・2号墓墳丘盛土内）出土遺物（S=1/3）	77
第59図	VII区中野美保2号墓下層出土遺物（S=1/3）	78
第60図	VII区中世水田遺構下層検出の遺構群（弥生時代～中世）（S=1/300）	79
第61図	VII区中世水田遺構下層検出の遺構群（古代～中世）（S=1/300）	80
第62図	VII区中世水田遺構下層検出の建物群、遺構配置図（S=1/300）	81

第63図	VII区中世水田遺構下層検出の土器溜まり（S = 1／10）	82
第64図	VII区中世水田下層検出井戸の遺物出土状況の平・立面図（S = 1／40）	83
第65図	VII区A包含層（3層）土器溜まり出土遺物（S = 1／3）	84
第66図	VII区中世水田下層検出井戸出土遺物（S = 1／3）	84
第67図	VII区中世水田下層検出の建物1・2（S = 1／60）	85
第68図	VII区中世水田下層検出の建物3・4（S = 1／60）	86
第69図	VII区中世水田下層検出の建物5・6（S = 1／60）	87
第70図	VII区中世水田下層検出の建物7・8（S = 1／60）	88
第71図	VII区中世水田下層検出の建物9（S = 1／60）	89
第72図	VII区中世水田下層検出井戸の井戸枠（S = 1／6）	90
第73図	VII区中世水田下層検出建物1の柱材（S = 1／6）	91
第74図	VII区A包含層（3層）出土遺物（1）（S = 1／3）	92
第75図	VII区A包含層（3層）出土遺物（2）（S = 1／3）	93
第76図	VII区A包含層（3層）出土遺物（3）（S = 1／3）	94
第77図	VII区A包含層（3層）出土遺物（4）（1・2はS = 1／4、3・4はS = 1／3）	95
第78図	VII区A包含層（3層）出土遺物（5）（S = 1／3）	96
第79図	VII区B包含層（3層）出土遺物（1）（S = 1／3）	97
第80図	VII区B包含層（3層）出土遺物（2）（S = 1／3）	98
第81図	VII区C包含層（3層）出土遺物（1）（S = 1／3）	99
第82図	VII区C包含層（3層）出土遺物（2）（S = 1／3）	100
第83図	VII区C包含層（3層）出土遺物（3）（1・2はS = 1／3、3はS = 2／3）	101
第84図	VII区C包含層（4層）出土遺物（1）（S = 1／3）	101
第85図	VII区C包含層（4層）出土遺物（2）（S = 1／3）	102
第86図	VII区中世水田下層検出弥生時代遺構群（S = 1／300）	103
第87図	VII区SD01・SX14上層断面図（S = 1／20）	104
第88図	VII区弥生時代遺構群・遺物出土状況（第86図分割部分Ⓐ）（S = 1／60）	105
第89図	VII区SX05・08検出時の遺物出土状況の拡大図（S = 1／20）	106
第90図	VII区弥生時代遺構群・遺物出土状況（第86図分割部分Ⓑ）（S = 1／60）	107
第91図	VII区弥生時代遺構群・遺物出土状況（第86図分割部分Ⓒ）（S = 1／60）	108
第92図	VII区弥生時代遺構群・遺物出土状況（第86図分割部分Ⓓ）（S = 1／80）	109
第93図	VII区弥生時代遺構群SX06遺物出土状況（S = 1／60）	110
第94図	VII区SX01・02・03・04出土遺物（S = 1／3）	111
第95図	VII区SX05出土遺物（1）（S = 1／3）	112
第96図	VII区SX05出土遺物（2）（S = 1／3）	113
第97図	VII区SX06出土遺物（1）（S = 1／3）	115
第98図	VII区SX06出土遺物（2）（1・4～8はS = 1／3、2・3はS = 1／4）	116
第99図	VII区SX07出土遺物（S = 1／4）	117
第100図	VII区SX08出土遺物（1）（S = 1／3）	118
第101図	VII区SX08出土遺物（2）（1～5はS = 1／3、6はS = 1／4）	119

第102図	■区SX09・10・11・12出土遺物 (S = 1/3)	121
第103図	■区SX13出土遺物 (S = 1/3)	122
第104図	■区SX13・14出土遺物 (S = 1/3)	124
第105図	■区SX15出土遺物 (1) (S = 1/3)	125
第106図	■区SX15出土遺物 (2) (S = 1/3)	127
第107図	■区SX16出土遺物 (S = 1/3)	128
第108図	■区SX17・18・19・20・21出土遺物 (1~7はS = 1/3、8はS = 1/4)	129
第109図	■区SX22南出土遺物 (1) (S = 1/3)	130
第110図	■区SX22南出土遺物 (2) (S = 1/3)	131
第111図	■区SX22北・SX23・SD01出土遺物 (1~8・10・11はS = 1/3、9はS = 1/4)	133
第112図	■区SX24出土遺物 (1) (S = 1/3)	135
第113図	■区SX24出土遺物 (2) (1はS = 1/3、2はS = 1/4)	136
第114図	■区出土弥生土器焼成失敗品 (1) (S = 1/3)	138
第115図	■区出土弥生土器焼成失敗品 (2) (S = 1/3)	139
第116図	■区出土弥生土器焼成失敗品 (3) (S = 1/3)	140
第117図	中野美保遺跡出土石製品 (1) (1~5はS = 1/1、6~9はS = 1/3)	141
第118図	中野美保遺跡出土石製品 (2) (S = 1/3)	142
第119図	中野美保遺跡出土石製品 (3) (S = 1/3)	143
第120図	中野美保遺跡出土木製品 (1) (S = 1/2)	144
第121図	中野美保遺跡出土木製品 (2) (S = 1/2)	145
第122図	中野美保遺跡出土木製品 (3) (1~4・5はS = 1/6、2~3はS = 1/8)	146
第123図	中野美保遺跡出土土器一覧 (1) 〈弥生時代前期・弥生時代後期～古墳時代中期〉(S = 1/6)	147
第124図	中野美保遺跡出土土器一覧 (2) 〈弥生時代中期〉(S = 1/6)	148
第125図	中野美保遺跡出土土器一覧 (3) 〈古墳時代後期～中世〉(S = 1/6)	149
第126図	四隅突出型墳丘墓の規模 (墳丘幕はS = 1/600)	153
第127図	円形状石綱の諸例 (1)	206
第128図	円形状石綱の諸例 (2) (S = 1/50)	207
第129図	日本海沿岸部における方形貼石墓の諸例 (中期中葉～後期前葉を中心に)	213
第130図	中野美保2号墓南西隅部の配石構造 (上はS = 1/80、下はS = 1/40)	214

表 目 次

表1	中野美保遺跡出土土器総数	219
表2	中野美保遺跡出土石器・石製品総数	225
表3	中野美保遺跡掲載土器・土製品観察表	225
表4	中野美保遺跡出土の焼成失敗品 (弥生土器)	246

表5 中野美保遺跡出土銛觀察表	247
表6 中野美保遺跡出土石器・石製品觀察表	247
表7 中野美保遺跡出土木製品觀察表	248
表8 中野美保遺跡出土金属器觀察表	249
表9 中野美保遺跡検出弥生墳丘墓剖測值	249
表10 中野美保遺跡検出建物一覧表	249
表11 中野美保遺跡検出建物計測表	250

第5章図表目次

第5章第2節

表1 樹種鑑定結果一覧表

第5章第3節

- | | | |
|-------------------------|--------------------------|--------------------|
| 図1 濃査区の配置（試料採取地点） | 図2 I区の花粉ダイアグラム | 図3 III区の花粉ダイアグラム |
| 図4 VI区の花粉ダイアグラム | 図5 III区の珪藻ダイアグラム | 図6 III区の珪藻総合ダイアグラム |
| 図7 VI区の珪藻ダイアグラム | 図8 VI区の珪藻総合ダイアグラム | |
| 図9 I区のプラント・オパールダイアグラム | 図10 III区のプラント・オパールダイアグラム | |
| 図11 VI区のプラント・オパールダイアグラム | | |

第5章第4節

図1 黒曜石原産地

表1-1～4 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

表1-5・6 黒曜石製造物群の元素比の平均値と標準偏差値

表2 九州西北地域原産地採取原石が各原石群に同定される割合の百分率（%）

表3 中野美保遺跡出土黒曜石製石器、剥片の元素比分析結果

表4 中野美保遺跡出土黒曜石製石器、剥片の原産地分析結果

第5章第5節

図1 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

図2 弥生（新穂穂）時代の碧玉製、緑色凝灰岩製に類の現在使用分布図および碧玉・碧玉様岩の原産地

図3 碧玉原石のESRスペクトル 図4-（1）～（4）碧玉原石の信号（III）のESRスペクトル

図5 中野美保遺跡出土碧玉の信号（I・II・III）のESRスペクトル

（1）全域掃引 （2）信号（III）のESRスペクトル

表1-1 各碧玉の原産地における原石群の平均値と標準偏差値

表1-2 各原石产地不明碧玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

表2-1・2 中野美保遺跡出土碧玉の分析結果 表3 中野美保遺跡碧玉の原産地分析結果

写真図版目次

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 図版1 I区中世水田遺構（北から撮影）：上 | I・II区中世水田遺構（西から撮影）：下 |
| 図版2 II区西半・IV区中世水田遺構（東から撮影）：上 | III区中世水田遺構（北西から撮影）：下 |
| 図版3 II区東壁土層断面（西から撮影）：上 | IV区西壁土層断面（東から撮影）：下 |

- 図版4 II区北半中世水田下層遺構（北から撮影）：上 VI区中世水田下層遺構（西から撮影）：下
- 図版5 V区中世水田遺構（上空から撮影）：上 VI区中世水田遺構（東から撮影）：下
- 図版6 V区中世水田下層検出遺構（南西から撮影）：上 V区SX01土器出土状況（東から撮影）：中 V区建物1・2（西から撮影）：下
- 図版7 VII区中世水田遺構（南から撮影）：上 VII区東部中世水田遺構（北西から撮影）：下
- 図版8 VII区西部中世水田遺構水口（西から撮影）：上 VII区北部中央中世水田遺構水口（北から撮影）：下
- 図版9 VII区中野美保1号墓（調査範囲拡張前、西から撮影）：上 VII区中野美保1号墓北西突出部：下
- 図版10 VII区中野美保1号墓（調査範囲拡張後、東から撮影）：上 VII区中野美保1号墓墳丘西側（南から撮影）：下
- 図版11 VII区中野美保1号墓南西突出部付近の土層断面①（東から撮影）：上 VII区中野美保1号墓南西突出部付近の土層断面②（東から撮影）：下
- 図版12 VII区中野美保1号墓墳丘東裾土器出土状況（南東から撮影）：上 VII区中野美保1号墓墳丘東裾出土土器取り上げ後の状況（南東から撮影）：下
- 図版13 VII区中野美保1号墓墳丘東裾出土土器取り上げ後の状況（北西から撮影）：上 VII区中野美保1号墓墳丘北裾東部出土状況（南から撮影）：下
- 図版14 VII区中野美保1号墓墳丘北裾西部土器出土状況（北から撮影）：上 VII区中野美保1号墓墳丘西裾北部土器出土状況（北から撮影）：下
- 図版15 VII区中野美保1号墓墳丘西裾精査中上器出土状況（南から撮影）：上 VII区中野美保1号墓墳丘西裾中央部土器出土状況（西から撮影）：下
- 図版16 VII区中野美保1号墓墳丘西裾の円形状石組（西から撮影）：上 VII区中野美保1号墓南東突出部検出状況：下
- 図版17 VII区中野美保1号墓墳丘南裾（西から撮影）：上 VII区中野美保1号墓墳丘南裾（東から撮影）：下
- 図版18 VII区1号集石遺構（南から撮影）：上 VII区1号集石遺構上部石除去後（北から撮影）：下
- 図版19 VII区2号集石遺構（南から撮影）：上 VII区2号集石遺構精査中①（南から撮影）：下
- 図版20 VII区2号集石遺構精査中②（南から撮影）：上 VII区2号集石遺構精査中③（南から撮影）：下
- 図版21 VII区2号集石遺構精査後（南から撮影）：上 VII区2号集石遺構付近検出の不明木製品：下
- 図版22 VII区3号集石遺構（南から撮影）：上 VII区3号集石遺構精査後（南西から撮影）：下
- 図版23 VII区3号集石遺構（中野美保1号墓墳丘南裾下層）（東から撮影）：上 VII区中野美保2号墓（南から撮影）：下
- 図版24 VII区中野美保2号墓南部（西から撮影）：上 VII区中野美保2号墓（東から撮影）：下
- 図版25 VII区中野美保2号墓南西隅（南西から撮影）：上 VII区中野美保2号墓墳丘南斜面（南西から撮影）：下

- 図版26 VII区中野美保2号墓北西隅（東から撮影）：上 VII区中野美保2号墓北西隅（南から撮影）：下
- 図版27 VII区中世水田下層検出遺構（上空から撮影）：上 VII区建物1（北から撮影）：下
- 図版28 VII区建物1～8、井戸（西から撮影）：上 VII区建物9（南から撮影）：下
- 図版29 VII区井戸（北から撮影）：上 VII区井戸完掘状況（西から撮影）：下
- 図版30 VII区土器溜まり（北から撮影）：上 VII区東南部遺構群検出状況（東から撮影）：下
- 図版31 VII区SX05上面検出土器（東から撮影）：上 VII区SX08上面検出土器（南東から撮影）：下
- 図版32 VII区SD01（南西から撮影）：上 VII区SX07（東から撮影）：下
- 図版33 VII区SX06、07、08土層断面（東から撮影）：上 VII区SX06土器出土状況（南西から撮影）：下
- 図版34 VII区SX06中央部底土器出土状況（南から撮影）：上 VII区SX14上器出土状況と土層断面（北から撮影）：下
- 図版35 VII区SX13土器出土状況（西から撮影）：上 VII区弥生中期遺構面（地山面）下層の土層断面（南東から撮影）：下
- 図版36 I区包含層（4層）出土遺物①
- 図版37 I区包含層（4層）出土遺物②
- 図版38 II区包含層（4層）出土遺物①
- 図版39 II区包含層（4層）出土遺物②
- 図版40 III区包含層（4層）出土遺物
- 図版41 IV区包含層（4層）出土遺物①
- 図版42 IV区包含層（4層）出土遺物②
- 図版43 IV区包含層（4層）出土遺物③
- 図版44 IV区包含層（4層）出土遺物④
- 図版45 V区包含層（3・4層）出土遺物：上 VI区包含層（4層）出土遺物：下
- 図版46 V区SX01出土遺物
- 図版47 V区SX02、SD02・03・04・05出土遺物
- 図版48 VII区包含層（3層）出土遺物①
- 図版49 VII区包含層（3層）出土遺物②
- 図版50 VII区包含層（3層）出土遺物③
- 図版51 VII区中野美保1号墓周辺出土土器：上 VII区1号集石遺構出土土器：下
- 図版52 VII区2号集石遺構出土遺物：上 VII区中野美保2号墓周辺（1号墓墳丘盛土内）出土遺物：下
- 図版53 VII区中野美保2号墓周辺（1号墓墳丘盛土内）出土遺物：上 VII区中野美保2号墓下層出土遺物：中 VII区2号集石遺構付近検出木製品顕微鏡写真：下
- 図版54 VII区2号集石遺構付近検出木製品
- 図版55 VII区A包含層（3層）土器溜まり出土遺物：上 VII区中世水田下層検出井戸出土遺物：下
- 図版56 VII区中世水田下層検出井戸の井戸枠：上 VII区中世水田下層検出建物1の柱材：下

- 图版57 VII区包含层（3层）出土遗物：上 壁区A包含层（3层）出土遗物①：下
- 图版58 VII区A包含层（3层）出土遗物②
- 图版59 VII区A包含层（3层）出土遗物③
- 图版60 VII区A包含层（3层）出土遗物④
- 图版61 VII区A包含层（3层）出土遗物⑤：上 壁区B包含层（3层）出土遗物①：下
- 图版62 VII区B包含层（3层）出土遗物②
- 图版63 VII区B包含层（3层）出土遗物③
- 图版64 VII区C包含层（3层）出土遗物①
- 图版65 VII区C包含层（3层）出土遗物②
- 图版66 VII区C包含层（3层）出土遗物③：上 中世水田遗構出土古钱：下
- 图版67 VII区包含层（4层）出土遗物①
- 图版68 VII区包含层（4层）出土遗物②
- 图版69 VII区SX01・02・03・04出土遗物
- 图版70 VII区SX05出土遗物
- 图版71 VII区SX05・06出土遗物
- 图版72 VII区SX06出土遗物
- 图版73 VII区SX06・07出土遗物
- 图版74 VII区SX07出土遗物：上 壁区SX08出土遗物①：下
- 图版75 VII区SX08出土遗物②
- 图版76 VII区SX08出土遗物③：上 壁区SX09・10・11・12出土遗物：下
- 图版77 VII区SX10出土遗物：上 壁区SX13出土遗物①：下
- 图版78 VII区SX13出土遗物②：上 壁区SX14出土遗物：下
- 图版79 VII区SX15出土遗物①
- 图版80 VII区SX15出土遗物②：上 壁区SX16出土遗物①：下
- 图版81 VII区SX16出土遗物②：上 壁区SX17・18・21出土遗物：下
- 图版82 VII区SX19・20・21出土遗物：上 壁区SX22（南）出土遗物①：下
- 图版83 VII区SX22（南）出土遗物②
- 图版84 VII区SX22（南）出土遗物③：上 壁区SX22（北）出土遗物：下
- 图版85 VII区SX22（北）・23出土遗物：上 壁区SD01出土遗物：下
- 图版86 VII区SX24出土遗物①
- 图版87 VII区SX24出土遗物②：上 壁区弥生土器烧成失败品①：下
- 图版88 VII区弥生土器烧成失败品②
- 图版89 VII区弥生土器烧成失败品③
- 图版90 中野美保遺跡出土石製品①
- 图版91 中野美保遺跡出土石製品②
- 图版92 中野美保遺跡出土木製品①
- 图版93 中野美保遺跡出土木製品②
- 图版94 中野美保遺跡出土木製品③
- 图版95 中野美保遺跡出土木製品④

第1章 調査に至る経緯と経過

中野美保遺跡は出雲市中野町地内に所在する（第1図）。当遺跡の調査は一般国道9号（出雲バイパス）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所と協議を重ね、平成11年（1999）の本県教育委員会の試掘調査に基づき、実施したものである。

本遺跡に調査のメスが入ったのは、平成12年度（2000）の区画整理事業に伴う出雲市教育委員会の調査をその嚆矢とする（第1図）。本県教育委員会の調査は平成13年度（2001）および平成14年度（2002）に実施された。足かけ2年の調査面積は出雲市教育委員会の115m²を含めて、延べ9,815m²を越える。そのうち出雲市教育委員会の115m²については報告書が刊行されている。同じく、中野美保遺跡に隣接する中野西遺跡（約600m²）についても同市教育委員会より報告書が刊行されている。本県教育委員会が調査を行った9,700m²は、平成15年度（2003）に報告書作成業を行った。

中野美保遺跡及び中野西遺跡に関する既刊報告書

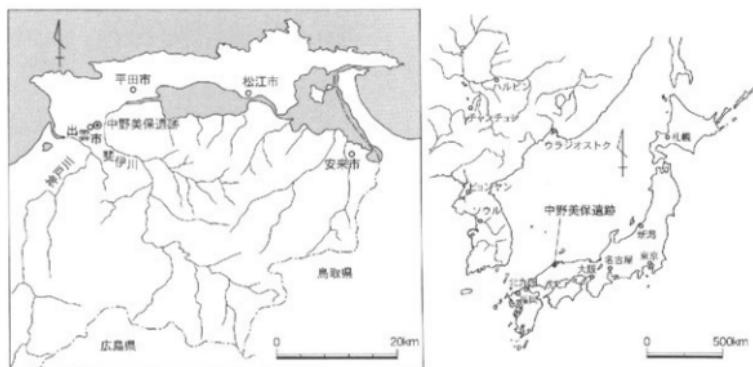
出雲市教育委員会2001年『中野美保遺跡』

出雲市教育委員会2002年『中野西遺跡』

第2章 中野美保遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

中野美保遺跡は、北に弥山、南東に仏経山を望む出雲市街北東方向1kmの出雲平野中東部に所在し、斐伊川左岸の後背低地に位置する。南を中国山地、北を鳥根半島に、東を宍道湖、西を日本海に囲まれた出雲平野は、中国山地から北流してきた斐伊川・神戸川の沖積作用により形成された沖積平野である。約6000～5000年前頃の繩文時代から徐々に沖積作用が開始されたと推定され、それ以前は日本海から現在の松江市辺りまでは古宍道湖が占めていたと考えられている。弥生時代頃には、沖積作用により古宍道湖が縮小され平野が形成されている。日本海に開けた入り海とともに広



第1図 中野美保遺跡の位置

大な平野からの恩恵により、生活や生業を営むうえでは適地であったことが推測される。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると、出雲平野西部には、周囲約18kmに及ぶ「神門水海」という潟湖が存在していたという。その後「神門水海」は後の両河川による沖積作用により縮小し、現在では、「神西湖」としてその姿を残している。出雲平野が現在のような景観になったのは江戸時代以降であり、遺跡が出現する箇所は出雲平野の形成と密接に関わっている。すなわち、これらの河川による沖積地帯の微高地に、その都度人々の生活が営まれてきたと言える。中野美保遺跡もまた、旧斐伊川支流の微高地（自然堤防上）に位置し、人々の営みの痕跡が残された遺跡の一つである。

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代

旧石器・縄文時代には、平野部への人々の進出は非常に少ない。最も早くは、縄文時代早期末の菱根遺跡（大社町）、上長浜貝塚（出雲市）が知られている。そのほとんどが平野縁辺部に位置しており、この頃の出雲平野は、古尖道潮溝が占めていたと考えられる。前期末～中期にかけては縄文海進にあたり、平野部のほとんどが海域となり遺跡は上ヶ谷遺跡（斐川町）で確認されているのみである。

海進後、海退が進み後期～晚期にかけて平野縁辺部の南西部の御陵山遺跡（湖陵町）・三部竹崎遺跡（湖陵町）、南部の一山谷Ⅰ遺跡、南東部の後谷遺跡（斐川町）、大社境内遺跡、平野部に矢野遺跡、蔵小路西遺跡、浅柄遺跡、旧河道らしき跡の見つかった善行寺遺跡などの遺跡が確認されている。そのうち三田谷Ⅰ遺跡では縄文時代後期前半の堰き止め湖が検出され、この湖沼からは同時期の縄文土器片及び丸舟が出土し注目されている。

弥生時代

弥生時代までには、中国山地から拡張してきた出雲平野は島根半島まで達していたと考えられる。前期には、縄文時代から続く平野部の矢野遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、蔵小路西遺跡、浅柄遺跡などに加え、新たに出現する縁辺部の原山遺跡、中野西遺跡、角田遺跡、古志本郷遺跡、田畠遺跡などがある。本遺跡の出現もほぼこの時期にあたる。いずれも斐伊川、神戸川、神門水海により、形成された自然堤防の微高地に形成される。中でも中野西遺跡は、中野美保遺跡の北西約200mに位置し、関係深い。

中期になると斐伊川・神戸川の氾濫による流路の変化や沖積作用によって出雲平野は稲作を行う上で適地になったとみられ、遺跡数は飛躍的に増加する。中期～後期、沖積平野の3ヶ所の微高地に上に営まれた集落として、白枝荒神遺跡、天神遺跡、下古志遺跡、古志本郷遺跡、小山遺跡、矢野遺跡、田畠遺跡、知井宮多聞院遺跡などがある。中でも、白枝荒神遺跡、天神遺跡、下古志遺跡、古志本郷遺跡、小山遺跡、矢野遺跡の時期は、環濠集落の様相を見せている。一方、これらの低地集落遺跡とは別に、長廻遺跡のような斐伊川左岸の標高40mに営まれた遺跡も存在する。後背湿地に立地する藤ヶ森南遺跡ではほぼ同時期の水田跡を検出している。この頃、他地域との交流が盛んに行われていたとみられ、白枝荒神遺跡、矢野遺跡、正蓮寺周辺遺跡からは吉備系の土器が出土している。中期後半～後期の木製造品が海上遺跡、姫原西遺跡で多く出土している。これらの遺跡の

繁栄を背景に、平野南側の丘陵上にこの地の首長を葬ったと思われる四隅突出型埴丘墓の西谷3号墓をはじめとする西谷墳墓群が出現する。西谷墳墓群では合計6基の四隅突出型埴丘墓が築造されており、特に、西谷3号墓には大量の土器が供獻され、その中には吉備や北陸の土器も含まれていたため、これらの地域との交流も指摘されている。

近年、中野美保遺跡や出雲市平野北東部の青木遺跡からも方形貼石墓や四隅突出型埴丘墓が発見された。前者の四隅突出型埴丘墓は山陰地方では初めて検出される低地部に築造されており、後者の四隅突出型埴丘墓と共にこの地における首長の勢力分布に一考察を与えることと思われ、注目に値する。

古墳時代

古墳時代の集落は基本的に弥生時代の集落が踏襲され、継続していたと考えられる。しかし、出雲平野における弥生時代後期～古墳時代前期の集落の様相は未だ不明な点が多く、現状では平野中央部の低湿地地帯において、人々の生活の様子を直接窺うことは困難である。その一方で、古志本郷遺跡や中野清水遺跡のように、古墳時代初頭の大量の土器が検出されている遺跡が存在する点は注意される現象である。前期末～中期の遺跡としては、井原遺跡や長廻遺跡、古志本郷遺跡、平野南側丘陵周辺の三田谷I遺跡、平野南西部の浅柄遺跡、そして平野中心部には、この中野美保遺跡、中野西遺跡、中野清水遺跡が存在していた。三田谷I遺跡では、堅穴住居や方形周溝墓が検出されている。

前期古墳としては、西谷墳墓群の同一丘陵上に古墳時代初頭に属する西谷7号墳（方墳）を始め、出雲地方では最古の前方後円墳となる可能性が考えられている平野北東部の丘陵状に築かれた大寺古墳、平野西側の神西湖東岸に築かれ、簡形銅器を出土した山地古墳（円墳）などが挙げられるのみである。中期の古墳としては、池田古墳、西谷15号墳、同16号墳、北光寺古墳（前方後円墳）、浅柄II遺跡検出の古墳などが知られているものの、その検討が行えるほどの調査所見の蓄積はない。

後期後半になると出雲西部地域を領域とするような大規模な首長墳群が形成される。神戸川東側に出雲地方最大の前方後円墳今市大念寺古墳を始め、上塩治築山古墳、地蔵山古墳などの首長墳が継続して築造される（今市・塩治古墳群）。一方、神戸川西岸の丘陵上に妙蓮寺山古墳、放れ山古墳、小坂古墳などの中小規模の古墳が、前者の古墳群を補佐するかのように次々と築造される（古志古墳群）。

終末期になると、全国最大規模と言われている上塩治横穴墓群（約180穴）・神門横穴墓群（約100穴）に代表される横穴墓が多数営まれる。しかし、最近の調査では、上塩治横穴墓群の周辺で三田谷2号墳・3号墳、光明寺4号墳、大井谷古墳、狐廻谷古墳といった後期から終末期にかけての古墳が次々と確認されている。

後期の集落遺跡としては、中野美保遺跡、中野清水遺跡、三田谷I遺跡が知られているが、未だ大きな発見はない。しかし、こうした大型古墳や横穴墓が飛躍的に増えたことから、その支持基盤になった人々の生活域が出雲平野にあり、人口が増加していたことが推測される。

律令期の出雲平野は、天平5年（733）に作成された『出雲國風土記』に記載されているように、鳥神山より西流して神門水海に入る「出雲大川」（斐伊川）と琴引山より流れ神門水海に入る神戸川に挟まれた肥沃な土地に恵まれた。先述した弥生時代中期に集落が急激に増加した現象は、この

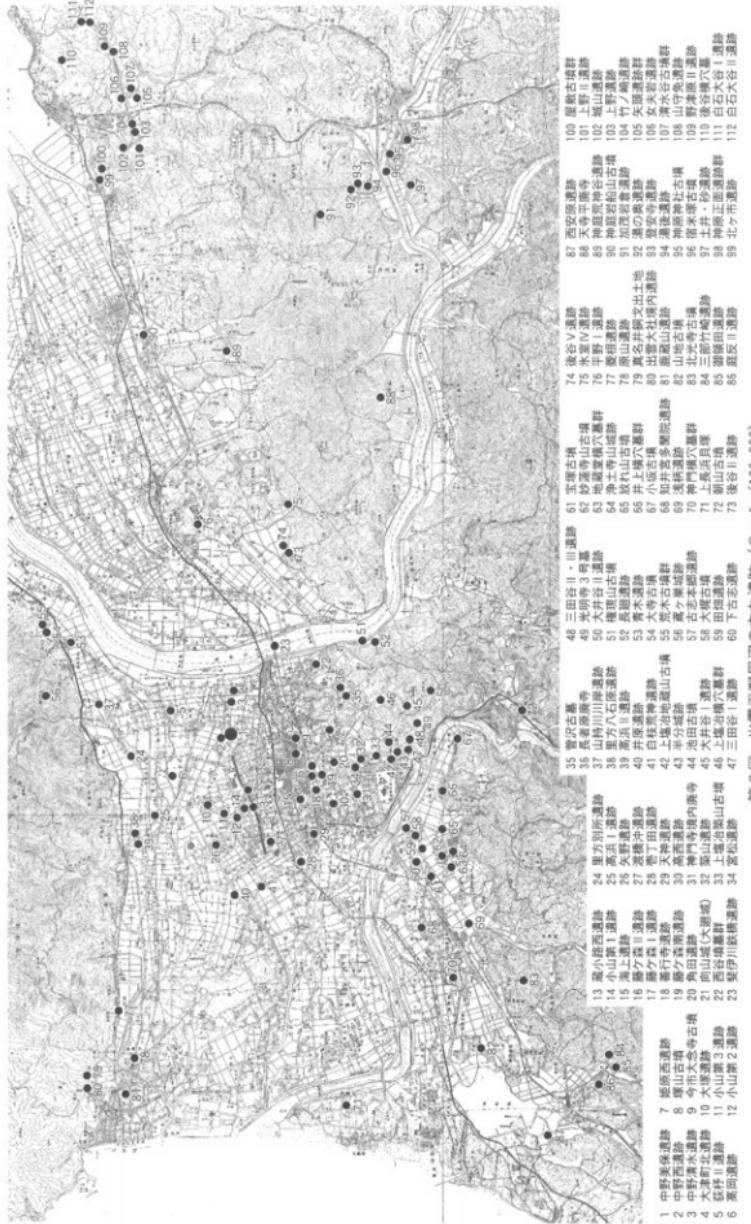
ような肥沃な土地が現れたためでもあろう。

7世紀末の律令国家の成立に伴い、国・郡制が敷かれ出雲平野は出雲神門都と出雲部の一部に編成され、それに伴い郡の官庁である都衙（郡家）が設置された。官衙跡と推定される大形の掘立柱建物跡や墨書き土器、円面鏡などが検出され、神門郡家との関連が注目されている古志本郷遺跡、墨書き土器、綠釉陶器、大型掘立柱建物跡などを検出した天神遺跡、墨書き土器、木簡などを検出した音木遺跡などがある。近年の調査で墳丘を有する光明寺3号墓から石櫃が発見され、小坂古墳や朝山古墳とともに、出雲平野の火葬墓導入期の解明に進展をみせつつある。また、『出雲國風土記』には神門郡に二所（朝山郷新造院・古志郷新造院）、山芸郡に一所（河内郷新造院）が建立されたことが記載されており、天寺平廬寺（斐川町）は河内郷新造院、神門寺境内廬寺は朝山郷新造院に、矢野遺跡は八野郷に比定されている。中野美保遺跡は、風土記では「塩治郷」にあたりる可能性もあり、古代末の建物群が検出されている。さらに隣接する中野清水遺跡からは、「塩」の文字の書かれた墨書き土器も出土している。

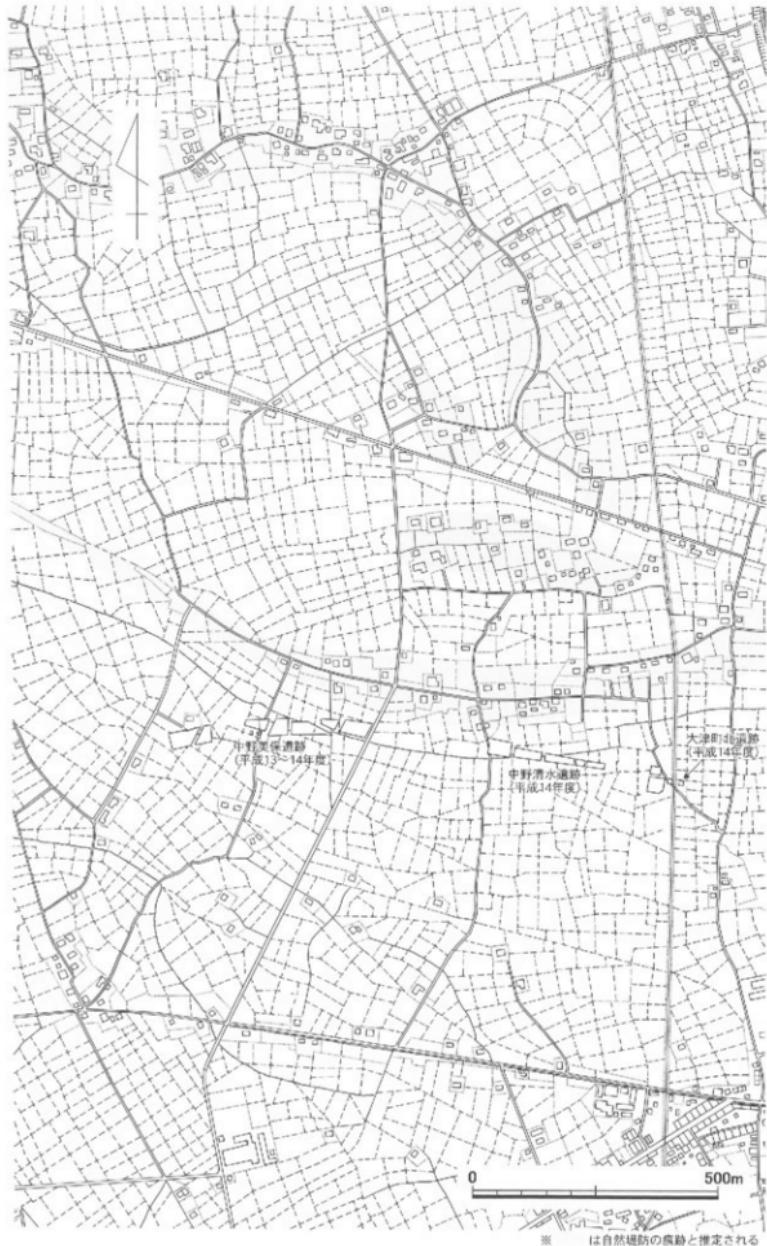
中世の遺構と考えられるものは非常に少ないが、矢野遺跡では、14～15世紀の塗敷跡が発見されている。また、歳小路西遺跡から周囲を溝で囲まれた約1haの規模を有する12世紀後半～15世紀の官跡が発見された。隣接して三木氏館跡が存在しており、「中世朝山家惣領家」の居館である可能性が指摘されている。その他、平野部では、歳小路西遺跡、渡橋沖遺跡、下古志遺跡などで館跡が検出され、当時の状況が明らかとなりつつある。また平野部から谷奥深い大井谷II遺跡では、寺院関連の遺跡ではないかと考えられる遺構、遺物が検出されている。山間部では、鳴ヶ堀城、大廻城（向山城）、大井谷城、半分城などが築城されている。その他、生産遺構としては高岡遺跡、中野美保遺跡、中野清水遺跡で中世以降の水田遺構が検出されている。

（参考文献）

- 出雲市教育委員会1997『白枝荒神遺跡 1997出雲市教育委員会』
出雲市教育委員会2000『光明寺3号墓・4号墳』
出雲市教育委員会2000『浅柄遺跡 西出雲駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘報告書』
出雲市教育委員会2001『大井谷I・II遺跡～斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ～Ⅴ』
出雲市教育委員会2001『天神遺跡第11次発掘調査（社）中国建設弘済会事務所建設に伴う発掘調査報告書』
出雲市教育委員会2001『出雲市埋蔵文化財調査報告書第11集 出雲市教育委員会』
出雲市教育委員会2002『白枝荒神遺跡 井原遺跡 白枝地区ふるさと農道整備事業に伴う発掘調査報告書』
出雲市教育委員会2002『中野西遺跡 出雲市北部第2十地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』
出雲市教育委員会2002『天神遺跡（第10次発掘調査）市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財調査報告書』
出雲市教育委員会2002『天神遺跡（第12次発掘調査）都市計画道路山陰本線市道沿線設置予定地内埋蔵文化財調査報告書』
出雲市教育委員会2002『古志本郷遺跡・下古志遺跡 平成11年度古志遺跡評議会認定調査報告書』
出雲市教育委員会2002『下古志遺跡一考察編－ 山芸市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集』
出雲市教育委員会2002『小山遺跡第3地点第3次発掘調査報告書 平成12年度市道四輪30号外1線道路改良工事に伴う』
島根県古代文化センター1999『上塩治榮山古墳の研究』
島根県教育委員会1999『那原西遺跡 一般国道9号山陰バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書1』
島根県教育委員会2002『古志本郷遺跡IV・放れ山横穴墓群・只谷間附、上沢Ⅲ遺跡（分析編）斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XIV』
島根県教育委員会2003『古志本郷遺跡V 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVI』
島根県教育委員会2003『古志本郷遺跡VI 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVII』



第2図 出雲平野周辺の主な道路 (S = 1 / 100,000)



第3図 昭和23年当時の中野美保遺跡周辺の旧地図 ($S = 1 / 10,000$)

第3章 調査の方法と概要

第1節 調査区の設定と調査方法

中野美保遺跡は、格子状に敷設された市道や用水路、水田耕作地、そして宅地内的一部分に所在する。ここを東西方向に貫く通幅40mのバイパス道路の建設用地が、本調査の対象地である。本調査では住民生活に支障を来さないように市道・上水道・用水路を避け、併せて湧水対策や排水処理を行いやすいように8つの調査区に分けた。調査区番号は調査に着手した順番を表したものである（第4図）。バイパス建設の工事過程と調査の兼ね合い上、一方向から順次調査を進めることのできる一貫した区画の設定は出来なかった。また、調査区内とその周辺は斐伊川伏流水の地下水位が高くなっているため、調査中に膨大な地下水が湧き出し、周辺に地盤沈下等の影響を及ぼしかねない状況であった。調査は市道・用水路からは2~3mの余裕をもたせ、安全勾配を考慮して掘削を行う方針を探った。

平成11年度の試掘調査の結果を受けて、現地表面より下1m前後は斐伊川の洪水土砂が厚く堆積にも堆積していることから、中世水田遺構の上面から10~20cm上を残して、その上層を重機掘削とした。

第2節 調査成果

1. 基本層序（第5図）

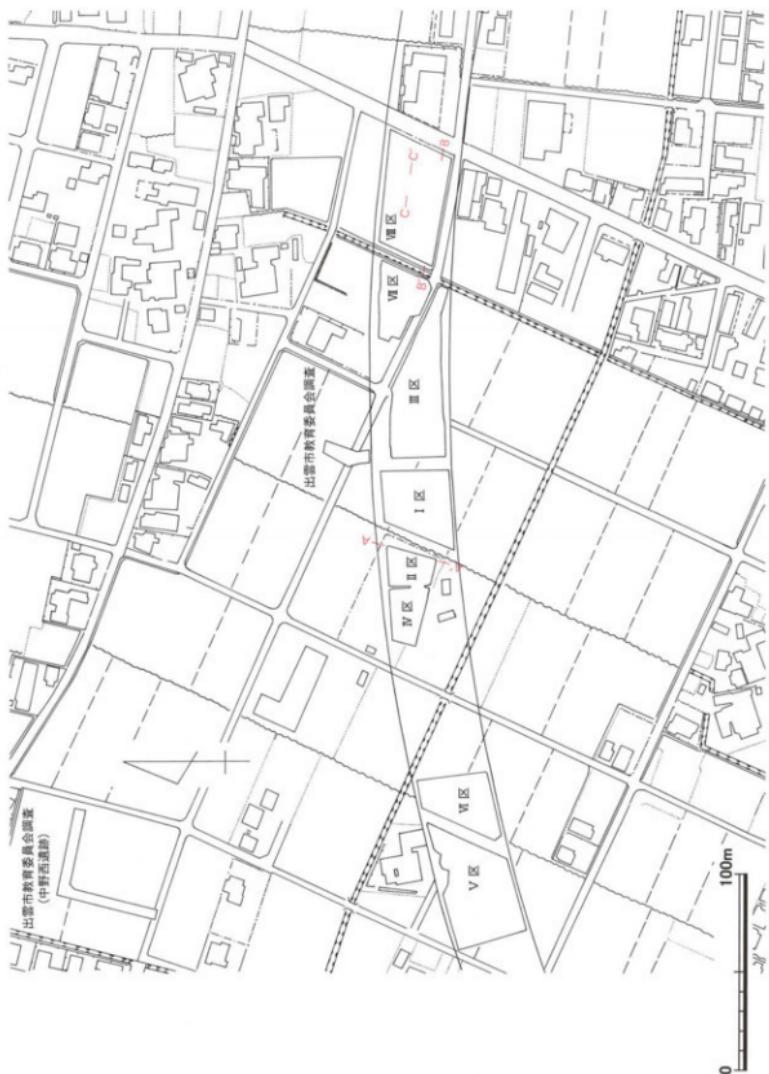
基本的に4つの堆積に分類できる。全調査区で共通する基本層序は1~3層である。以下、その概要を上層から順次記す。

1層は現代の整地土や耕作面を除く洪水堆積層である。ただし、2層の中世水田面が復旧された二次水田面の堆積もこの層に含める。2層から上の復旧された二次水田面は、砂層やシルトの堆積が水田面を形成しているため、畦畔や足跡等の痕跡が検出されにくく、畦畔の復旧が均一に旧水田面全体に行き渡っていないため、調査区の土壌断面で確認する方針を探った。

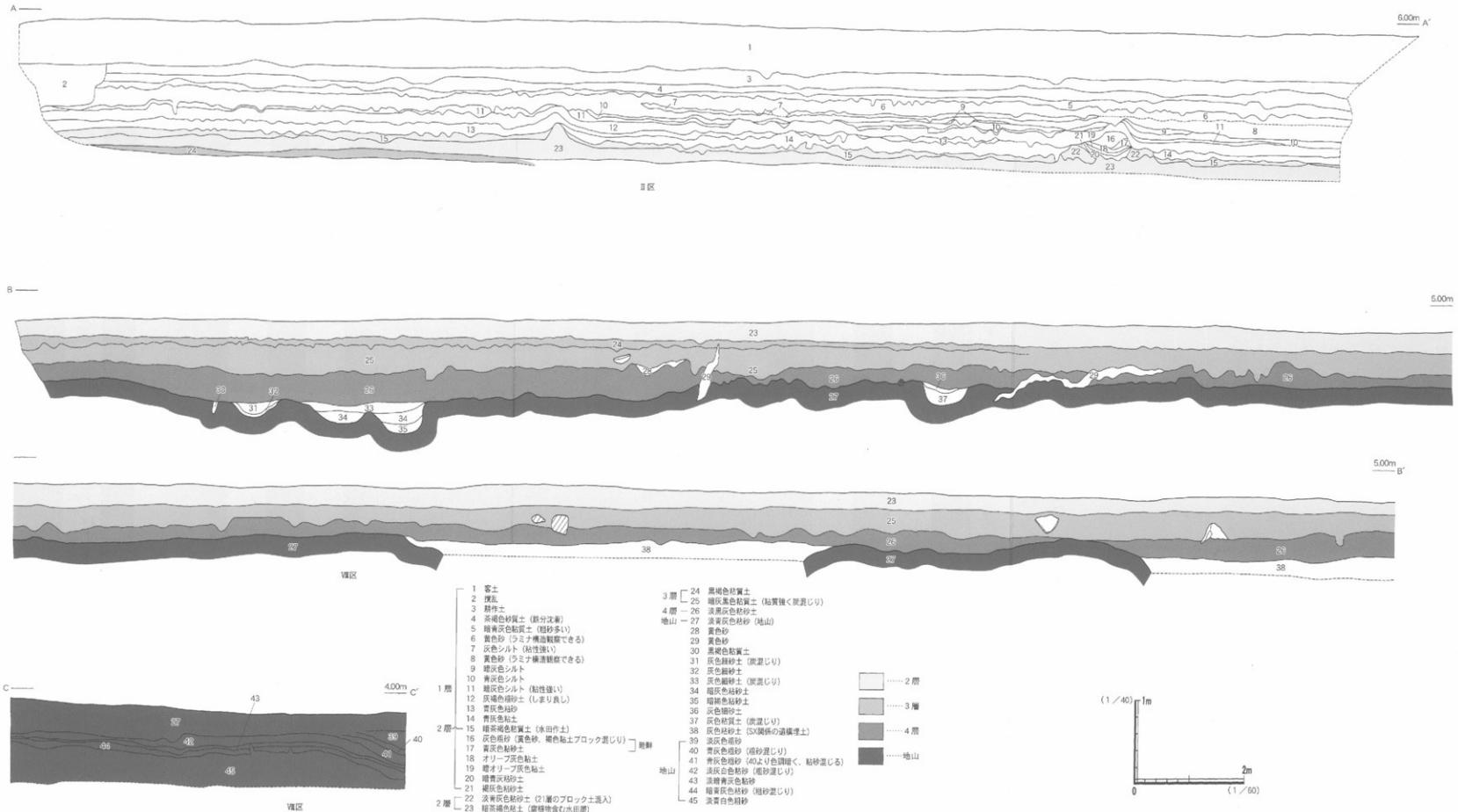
2層は中世水田面の作土と床土（暗茶褐色粘質系の土層）である。作土と床土の分層は部分的にしか確認できなかったため、両者を併せて2層とする。

3層は黒灰色粘質土、あるいは黒褐色粘質土の黒色系粘砂質土層で、古墳時代後期・古代~中世の上器を中心に含んでいる。その厚さは調査区によって違いはあるが、2~3cm、10~20cmの厚さになる。Ⅶ区の場合、さらにその下層にも同時期の上器を多量に含む包含層（第5図25層）が存在する。これも含めて3層とする。

4層は弥生時代前期末~古墳時代中期に亘る遺物包含層である。このうち、I区~IV区からは地形の傾斜が南に向かって確認され、その傾斜の堆積層からは古墳時代初頭~前期の土器が出土している。一方で、中世水田下層の調査が続行不可能だったV区を除けば、V区・VI区・VII区は傾斜の見られない平坦地であり、4層に該当する層からは、弥生時代中期中葉~後期前葉を中心とした土器が検出されている。4層は3層の下層にある遺物包含層であるが、調査区の地形環境や遺跡の中心地の変遷によって遺物の中心時期が異なっている。堆積する層は一律同じではないが、4層の共通性はI~IV区のグループ（第4図）とV・VI・VII区のグループに区分することができる。以下、



第4図 中野美保遺跡調査区の配置図 ($S = 1/2,500$)



第5図 中野美保遺跡基本土層図（II・VII区より）（垂直S=1/40、水平S=1/60）

各地区の包含層遺物はこの基本層序（1～4層）を基準に報告する。

2. 中世～近世

調査区全面に涉って水田遺構が広がっていた。出土遺物の様相から、最下層の水田遺構は中世後半以降を中心に行なわれたものと考えられる。水田面には、人・牛の足跡が無数に検出されている。斐伊川の洪水により最低1～2回の水田復旧が行なわれていることが、畦畔の土層観察やプランツ・オパール分析で判明している。

3. 飛鳥、奈良～平安時代

この時期の成果としては、包含層（基本層序の3層）より大量の土器が出土したことが挙げられる。遺構はV区とⅧ区の建物群を除くと、殆ど検出されなかった。Ⅷ区の建物群は古代末に當まれ、中世には廃絶するものと考えられる。この包含層は調査区によって堆積の厚みが異なり、比例して遺物の多寡がある。

4. 弥生時代～古墳時代

水田下層より深くなればなるほど湧水が激しく、さらに遺構の検出は難しくなった。数台の排水ポンプを設置しても、湧水量には追いつかない場合が幾度となく生じた。また、地下水と共に噴き出す砂により周辺の地盤が陥没しかねない状態になり、調査地の土壤も地下水が飽和状態となり泥沼化した。一時的に保たれた湧水量と排水量の均衡状態は数時間にして破られ、調査区が水没することも度々あった。このため遺構の検出は困難を極めた。

Ⅶ区においては比較的湧水の均衡状態が保たれた時間が長かったため、弥生時代中期中葉の方形貼石墓1基（中野美保2号墓）、後期後葉の四隅突出型埴丘墓1基（中野美保1号墓）、集石遺構が3基が検出された。ただし、部分的には埴丘や列石・貼石の沈下、水没は免れ得なかった。Ⅷ区は県道に面し、周辺環境の安全を確保する上で矢板施工がなされた。このため地下水の影響は殆ど無く、水田下層の遺構が良好に検出された。弥生埴丘墓2基を検出したⅧ区に隣接するが、当該期の埴丘墓等は検出されなかった。

第4章 検出した遺構と遺物

第1節 中世後半の遺構と遺物

1. 水田遺構（調査I～Ⅷ区）（第6図）

水田遺構はI～Ⅷ区のすべての調査区で確認されている。すべての調査区で確認されたその主な遺構には、畦畔と無数の人や牛の足跡が挙げられる。このうち、調査I区、Ⅲ区、V区、VI区、Ⅷ区で水口が確認されている。土層断面観察の結果、洪水による畦畔の復旧は全てではないが、少なくとも2回行なわれている箇所が確認できた。また、I区、Ⅲ区、VI区で検出水田床土まで花粉分析を行った。その結果、足跡や畦畔などの遺構は上層断面からは確認できなかったが、度重なる洪水後も1～2面に渡り水田として機能していたことが確認できた。畦畔の断面形態はほぼ台形で、遺存状態の良好なもので、上辺15cm、下辺30～40cm、高さ20cm前後となる。

調査I区（第7図）

検出された畦畔は、ほぼ南北・東西方向に向けて造られている。人や牛による無数の足跡は水田

面をはじめ、畦畔上でも検出されている。南北方向の畦と東西方向の畦が丁字形に結節する付近に、人頭大の石が置かれていた。置石の可能性が考えられる。また、畦畔の盛土を除去すると、幾片かの小礫が検出された。これらの小礫の位置関係を把握したが、その間隔や方向等に規則性は見出せなかった。これらの石が直石として機能していたかどうかは判断出来ない。耕作の障害になった小礫を畦畔に寄せた結果、このような現象になった可能性がある。

水口が調査区南東隅で検出されている。調査区の南西部では、II区・IV区から続く2条並列の畦畔が検出されているが、途中から不明瞭になる。これは、洪水によって畦畔が破壊された結果によるものと考えられる。

調査II区（第7図）

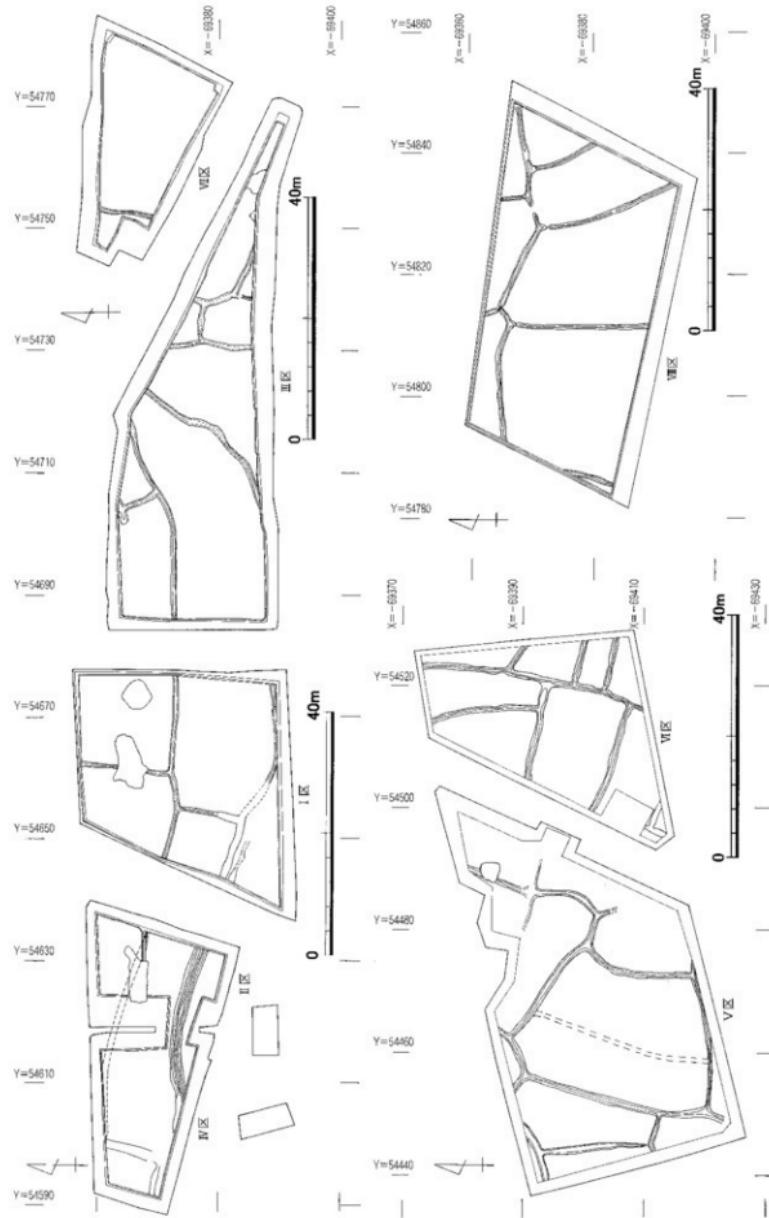
東西方向にI区とIV区にかかる2条並列の畦畔が検出された。I区での遺存状態に比べて、遙かに良好な状態で検出された。2条並列の畦畔は西に向けてIV区に延びるが、緩やかに南へカーブして行く。この畦畔掘に北宋銭の「至道元宝」1枚が貼り付いていた（第7図）^{※1)}。2条並列の畦畔と水田面、洪水堆積砂等の層位を観察したところ、2条並列の畦畔を復旧していることが見て取れた。すなわち、洪水堆積土砂に覆われた2条並列の畦畔直上に、これを統合した一本の畦畔が造られていた。断面形態は台形状で、他の畦畔よりやや幅広の畦畔になっていた。この畦畔は他の畦畔とは異なるものである可能性がある。それは他の畦畔に見られない2条並列という形態、その規模や復旧された畦畔の状態が他の畦畔とは異なることから、坪境や地割り等の目印になっていた可能性が考えられる。ただし、部分的な水田調査ではあるものの、この畦畔が正位方向を探らず直線状に延びていないことから、この畦畔は条單制に伴う、一町を区画するような大畦畔とは考えにくい。

この他、攪乱により一部しか検出されていないが、2条並列の畦畔にはほぼ平行するかたちで、IV区に向かって西北西方向に延びる畦畔がある。

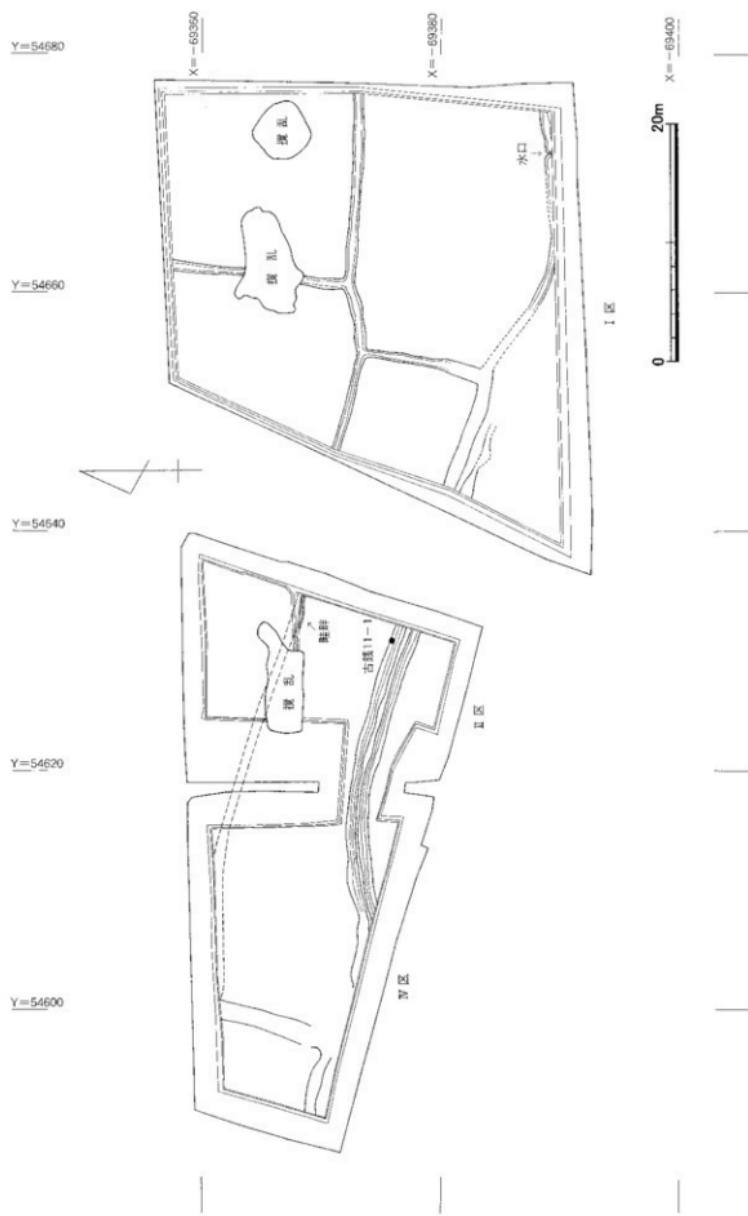
調査III区（第8図）

ここでも、他の調査区と同じ水田遺構を検出している。調査区の西半では、I区から東西方向に延びる畦畔が続いている。この畦畔はI区ではほぼ東西正位方向であるが、III区になると途中から序々に北方向にカーブして行く。調査区外の北に向けて延びて行くこの畦畔は、調査区北限付近で北北東方向に分岐し、やや張り出した突起状の高まりを造る。この突起状の高まりの東側水田面は、他の水田面に比べて10~20cm程度低くなっている状態が検出されている。用水を部分的に溜めるため、水田面を低くした箇所の土を盛った可能性もあるが、その機能は断定出来ない。

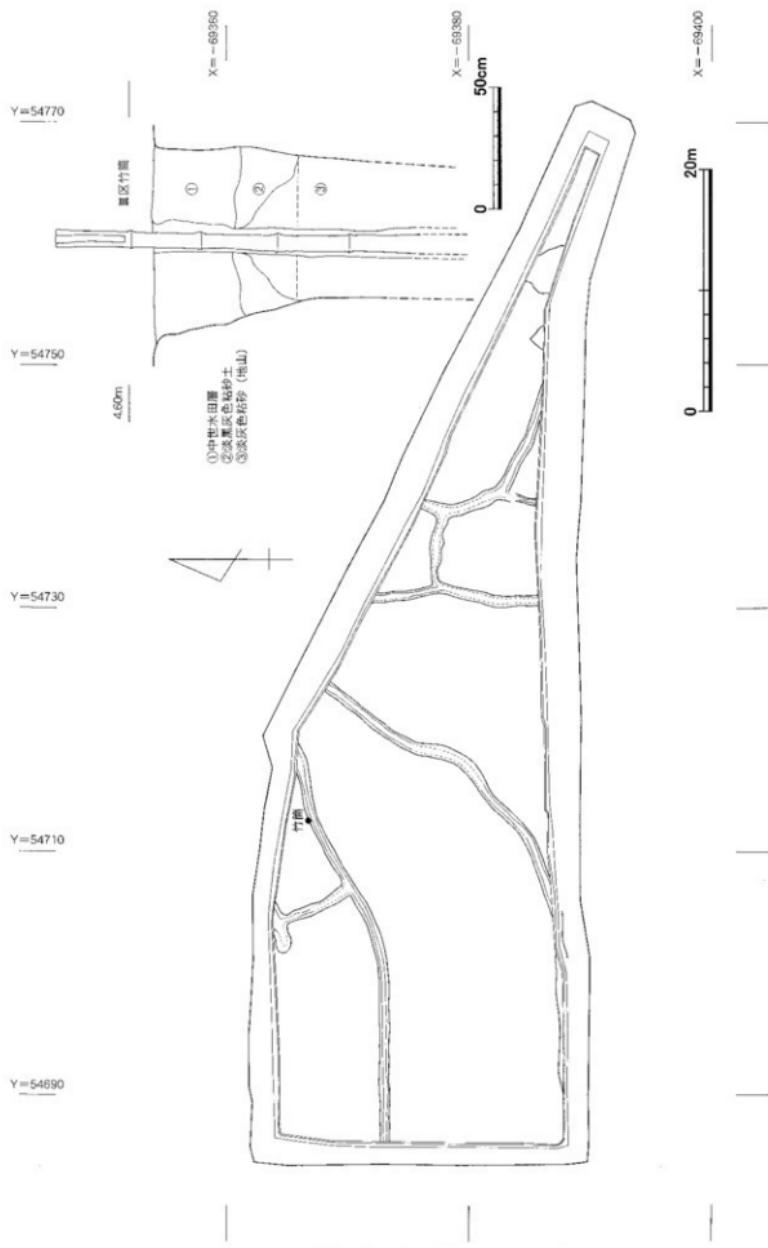
調査区の東半でも、南北に延びる2本（うち、東側の畦畔は調査区南側で南東方向に分岐）の畦畔と、その間に東西方向に延びる畦畔が1本検出されている。南北方向に延びる西側の畦畔には、水口が検出された。また、水田面に突き刺された状態の竹が検出された（第8図）。竹は現状で4.417mに達する長さを有し、水田面下4.017mまで突き刺されていた（第8図右）。この竹の機能は確定できないが、水田下からの湧水を取りしたり止めたりする機能を有していたものと考えられる。なお、この竹が¹⁴C年代法で分析した結果、1680~1770年、1800~1940年の年代が導き出されている。のことから、洪水による復旧を繰り返しながらも、少なくとも近世のある段階までは水田として利用されていたことが窺える。



第6図 各調査区検出の中世水田造構 ($S = 1/800$)



第7図 I・II・IV区検出の中世水田遺構 ($S = 1/400$)



第8図 Ⅲ区検出の中世水田遺構 (S = 1 / 400)

調査IV区（第7図）

2条並列の畦畔と、同じく通常の畦畔がⅡ区より延びてきている。前者の畦畔は、調査区の南壁付近で枝分かれする。すなわち、北側の畦畔が西側に延びて行き、南側の畦畔は調査区外の南側に延びて行く。北側の畦畔は一部洪水により断絶するが、そのまま調査区外の西側に向けて延びて行き、南北方向の畦畔と結節するようである。ただし、南北畦畔の結節部分やそれより南側の部分は、洪水による破壊を受けていたため不明である。後者の畦畔は攪乱部分で破壊されており、その他の部分でも平面的には検出されなかった。ただし、南北方向の畦畔が北壁にぶつかる付近で、この畦畔が斜めに壁にぶつかっている上層断面が僅かながら観察された。

2条並列畦畔の北側の畦畔は西側に延びて行くのが、上層断面の観察の結果、他の畦畔に比べて規模の大きな畦畔であることが判明した（図版3下）。断面規模は上辺40cm、下辺100cm、高さ30cmである。なお、西壁の断面を観察すると水田床土に疑似畦畔と考えられる2つの高まりが見られることから、本來は2条並列の畦畔であった可能性も考えられる。また、Ⅱ区東壁上層断面で観察した2条並列の畦畔と同じく、洪水後の復旧が行われている。ただし、両者の洪水堆積は微妙に異なっているため、洪水の破壊規模によって復旧の差が現れている可能性も考えられる。2条並列の畦畔は途中で南に分岐するものの、その規模から他の畦畔とは区別される前述した役割を担っていたものと考えられる。

調査V区（第9図）

V区で検出された畦畔は他の調査区に比べて、その方向に統一性が見られない。また、水田プランが完全ではないものの、他の調査区に比べて一枚の水田プランをほぼ確認できる唯一の調査区となつた。しかし、水田プランには規格性が認められない。一部、南北方向の畦畔を明確に確認できなかつたため、結果的にこれを削除した部分がある。この畦畔を復元すると3面の水田規格が検出できる。西側の水田から、およそ100m²、130m²、130m²の規模が計測できる。水口は調査区の西壁付近で検出されている。

調査VI区（第9図）

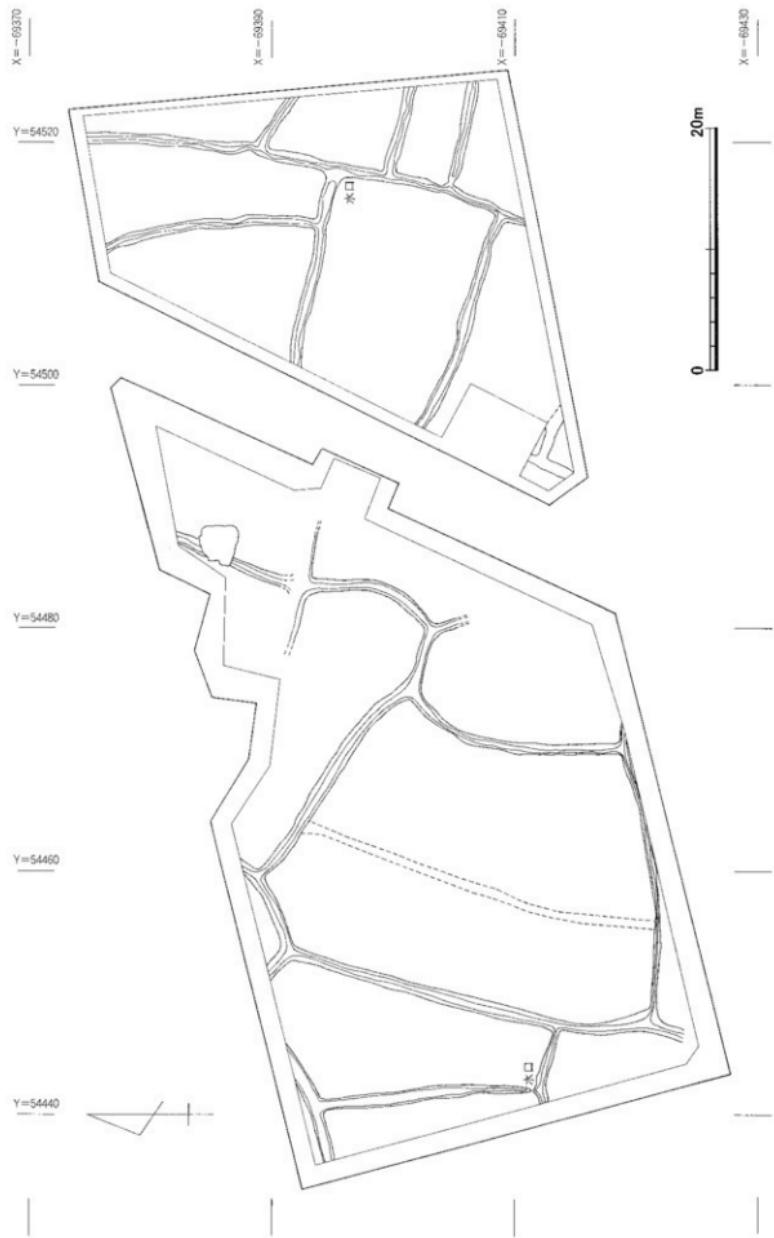
VI区で検出された畦畔は、南北方向の畦畔が2本検出されている。そのうち東側の南北畦畔に東西方向の畦畔がその西側で2本、同じく東側で3本結節している。また、調査区南西隅で部分的に南北・東西方向の畦畔がT字形に検出されている。水口は畦畔が結節する付近に、合計2箇所検出された。各水田プランの全容は検出されていないが、I区と同じく方形に区画された水田プランが推定される。西壁にある調査V区の畦畔とどのように繋がるかは不明である。

調査VII区（第10図）

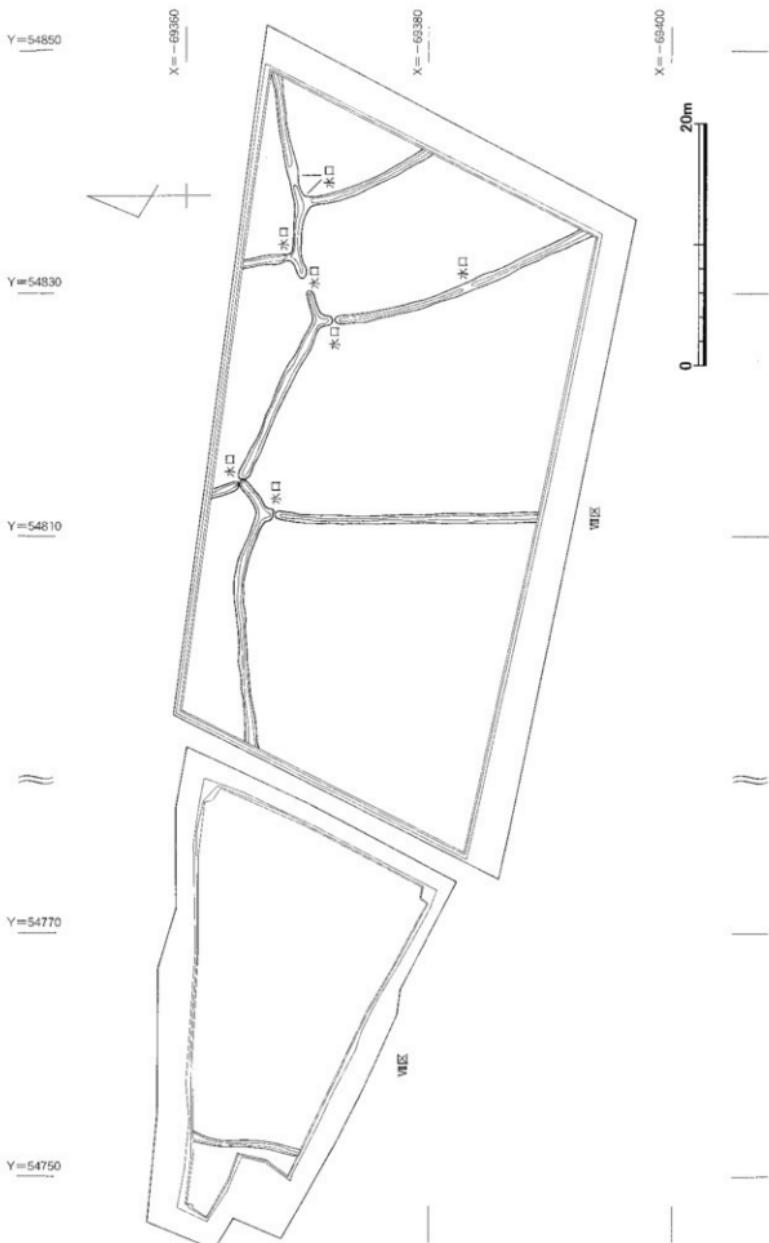
VII区の水田造構面では、南北方向に延びる畦畔しか検出されなかった。VII区の南側にあるIII区の畦畔と対応するものは、明確には確認出来なかつた。

調査VIII区（第10図）

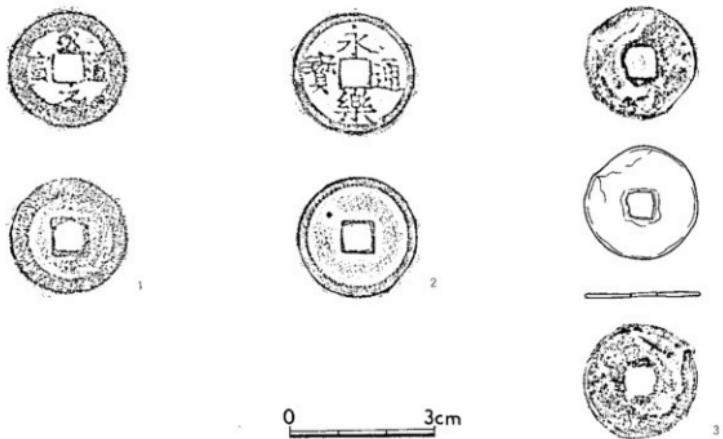
VIII区の水田造構面では、概ね東西方向に延びる畦畔とその北で結節する南北方向の畦畔が2木、同じくその南で結節する南北方向の畦畔が3本存在する。また、調査区の最も西側で検出されている南北方向の畦畔は、調査区西壁外に延びているため東西方向の畦畔に結節するかは不明である。畦畔のすべての結節点には水口が検出されている。また、東西方向の畦畔と西から3本目の南北方向の畦畔の途中に、前者では2箇所、後者では1箇所の水口が検出された。



第9図 V・VI区検出の中世水田遺構 ($S = 1/400$)



第10図 VII・VIII区検出の中世水田遺構 ($S = 1/400$)



第11図 II・V区中世水田遺構出土古銭 (S=1/1)

2. 出土遺物

各調査区内の水田遺構から出土する明確な土器資料は、畦畔盛土内の固化し得ない細片のみである。ここでは水田遺構に伴う銭貨について報告する。

水田遺構出土の銭貨 (第11図)

先述したように、II区で検出された2条並列の畦畔では、北宋銭の「至道元宝」1枚が貼り付いた状態で出土している。また、水田遺構を覆う洪水堆積層の黄色砂層より明銭の「永楽通宝」、16~17世紀代に多く見られる「無文銭」がそれぞれ1枚出土している¹¹⁾。表5に各銭貨の計測値を掲載している。

当初、水田作土や畦畔内から古代の須恵器・土師器の細片ばかりが出土したこと、水田に確實に伴う銭貨が北宋銭1枚であったことから、古代末~中世にかけての水田遺構と2000年、2001年の調査概報に記した¹²⁾。しかし、Ⅳ区の水田下層から古代末を中心に営まれたと考えられる掘立柱建物群が検出されたこと、また、2003年度に行われた中野清水遺跡の水田遺構の調査によって以下のことも明らかになった¹³⁾。

中野清水遺跡からは北宋銭の他、明銭の「永楽通宝」が水田（作土・床土）より出土し、備前焼等の陶磁器が出土している。また、水田床上内より検出された木片に16~17世紀代という値が、¹⁴⁾C年代測定法によって得られている。一方、中野美保遺跡Ⅲ区の水田面に突き刺さっていた竹筒の年代も¹⁴C年代測定法から、17~20世紀代という値が出されている。

中野清水の水田遺構は基本層序の層位関係から、中野美保遺跡とは同時代であると考えられる。ただし、洪水堆積層の層位数が少なく、その厚さも異なっており畦畔の復旧も観察されていない。このため、同一地域内においても地形の差異によって、洪水の影響や水田形成のあり方に違いが見られるものと考えられる。地区によって、水田化する時期が異なる可能性も考慮しなければならないが、以上の結果も踏まえて、本報告書ではこれまでの見解を次のように訂正する。すなわち、中野美保遺跡の水田遺構は室町時代のある段階をその上限とする。中世後半には水田化した遺構と考

えられる。そして、中野美保遺跡の場合、土層断面より観察できる畦畔が最大で2回復旧しているため、洪水後も水田の復旧されながら、少なくとも近世のある段階までは継続して営まれていたものと考えられる。

第2節 古代～中世の遺構

この時期に該当する遺構が検出されたのは、V区とⅧ区である。

1. 調査V区（第28・29図）

掘立柱建物

V区の掘立柱建物はビットの位置関係から、少なくとも2棟立つことが判明した。ただし、ビットの並びが部分的にしか検出されなかったため、建物の全容は確認できていない。また、出土物が無いため時期の特定は出来ていない。ただし、水田下層の基本上層（3層）から8世紀代を中心とする遺物が検出されているので、後述するⅧ区の建物群と同時期のものと考えられる。

掘立柱建物1は、桁行2間（4.3m）以上、梁行2間（4.0m）の南北棟の建物である（第30図）。柱掘方は円形で、径が0.3～0.4m前後、底の平均標高が3.79mである。

掘立柱建物2は、桁行3間（6.3m）以上、梁行2間（3.8m）の南北棟の建物である（第30図）。柱掘方は円形で、径が0.4～6.5m前後、底の平均標高が3.83mである。

2. 調査Ⅷ区

掘立柱建物

Ⅷ区の掘立柱建物は検出されたビットの位置関係から、少なくとも9棟立つことが判明した。さらに検出された9棟の建物群のうち8棟は、後述する井戸をコの字形に囲むように配置され、1棟のみがこの配置から離れたところに存在する。この1棟は9本柱の総柱建物であり、倉庫のような機能を有した施設である可能性が考られる。これらの建物同士の位置関係から、複数回の世代交代が行われた一つの単位集団を表している可能性が考えられる（第62図）。

建物に伴うビットからは明確な遺物がほとんどなく、細片であるため時期の確定は困難である。また、建物同士の切り合い関係が、ビットのそれからも判断できない。そこで、大きな時間幅でしか捉えられないが、包含層（3層）遺物の分類と井戸から出土する上器の様相からおおよその存続期間を推定するに至った。包含層（3層）からは7～12世紀代までの上器が出上しているが、その大半が8世紀代の上師器・須恵器であり、井戸から出土する土器が11～12世紀代になる。井戸から出土する土器の殆どが包含層出土遺物に比べて、新しい時期になる。建物群と井戸の配置関係を重視するならば、これらの存続期間を井戸出土の遺物と併せて考えることも可能である。建物群の重複を考慮して複数回の世代交代が行われたとし、井戸から出土する新しい時代の出土遺物をその発絶時期に近い遺物とするならば、これらの遺構群はかなり長い営みになる。つまり、8～12世紀にかけて存続したものと考えることも可能である。一方、井戸の枠木に対して、¹⁴C年代法を行ったところ、8世紀後半～10世紀後半の年代が得られている。ただし、井戸が建物群に先行して営まれた可能性、井戸枠木が建築部材等からの転用材である可能性も考慮しなければならない。

少なくともビットが8世紀代を中心とする遺物包含層を貫いていることは確かめられているので、理化学的年代測定の結果も踏まえて、遺構群存続期間の中心を10～11世紀代前後とし、12世紀前半

代をその廃絶時期とするのが妥当であるものと考えられる。

掘立柱建物や井戸の上面は遺物包含層中（3層）にあり、ピット埋土の色調や土質が非常に類似していたため、その精査は困難であった。そのため、これらの遺構は弥生時代の遺構が掘り込まれる地山面で検出した。従って、建物に伴うピット等の本来の規模は検出していない。本報告書で記す建物群や井戸の規模はあくまでも完掘された際の規模である。

掘立柱建物1は、桁行3間（6.6m）・梁行2間（4.7m）の東西棟の建物である（第67図）。柱掘方は円形で、径が0.4～0.5m前後、底の平均標高が3.68mである。一部の柱材を抜き取り、樹種鑑定を行ったところ、スギとイヌエンジ属であることが判明した。

掘立柱建物2は、桁行4間（6.4m）・梁行2間（2.4m）の東西棟の建物である（第67図）。柱掘方は円形で、径が0.3～0.4m前後、底の平均標高が3.71mである。

掘立柱建物3は、桁行4間（6.0m）・梁行1間（2.6m）の東西棟の建物である（第68図）。柱掘方は円形で、径が0.3～0.4m前後、底の平均標高が3.76mである。

掘立柱建物4は、桁行4間（7.2m）・梁行2間（4.6m）の東西棟の建物である（第68図）。柱掘方は円形で、径が0.3～0.4m前後、底の平均標高が3.66mである。

掘立柱建物5は、桁行3間（4.8m）・梁行2間（4.2m）の東西棟の建物である（第69図）。柱掘方は円形で、径が0.3～0.6m前後、底の平均標高が3.73mである。

掘立柱建物6は、桁行3間（5.5m）・梁行1間（1.7m）の東西棟の建物である（第69図）。柱掘方は円形で、径が0.3～0.4m前後、底の平均標高が3.75mである。

掘立柱建物7は、桁行4間（6.7m）・梁行1間（4.1m）の南北棟の建物である（第70図）。柱掘方は円形で、径が0.4～0.6m前後、底の平均標高が3.67mである。

掘立柱建物8は、桁行4間（6.9m）・梁行1間（3.6m）の南北棟の建物である（第70図）。柱掘方は円形で、径が0.4～0.8m前後、底の平均標高が3.64mである。

掘立柱建物9は、桁行2間（3.7m）・梁行2間（3.8m）の東西棟の建物である（第71図）。柱掘方は円形で、径が0.3～0.4m前後、底の平均標高が3.69mである。

これらの建物群とV区検出建物の詳細なデータについては、表10・11を参照されたい。

井戸（第64図）

コの字形に配置された建物1～8の中心に位置する。井戸の平面形態は、西側がやや飛び出した歪な形である。ただし、掘削を行うと中心に向かってほぼ正円形をなすプランに落ち着き、5枚の板材を使用した井戸枠も検出された。西側に飛び出した部分を他の遺構による搅乱部として認識し、平面形態を正円形として捉えれば、径3.2m、底部径1.0m。深さが最大で1.6mとなる。また、井戸枠の平面プランは、縦横それぞれ約1.0m×約1.0mのはば正方形のプランをなす。底部付近で曲物の残欠を1点、籠か甕状の編み物の残欠を確認した。5枚の板材は建築部材の再利用品の可能性もあったので、遺存状態の良好な2枚の板材の実測・写真撮影を行った（第72図・図版56）。板材1は縦116cm×横32cm、厚さが最大で2.0cmである。約4.0cm四方の2つの方形透かしが穿たれている。板材2は縦117cm×横26cm、厚さが最大で4.0cmである。板材1と同じく、4.0cm×6.5cmの方形透かしが2つ穿たれている。これらの方形透かしの穿孔は、それぞれの板材を井戸枠として井桁組みするために入れる、横木の挿入孔である可能性がある。これは井戸枠材の中に棒状の板材が検出されていることからも見える。樹種はスギであった。

出土遺物（第66図）

1は高台付壺、2・3は壺、4は手捏土器、5は甕である。1～3とも底部に糸切痕跡がみられる。2・3とも底部の厚みが増し、3は柱状の底部になる。1は10～11世紀、2・3は12世紀前半代、4・5は古墳時代終末期～古代のものと考えられる。

土器溜まり（第63図）

Ⅶ区の東側の3層包含層から検出された土器群である。甕破片の周辺に手捏土器が4点検出された。その他、甕片も出土している。何らかの行為によって一括廃棄されたものと考えられる。

出土遺物（第65図）

1～4は手捏土器である。1は丸底であるが、他は平底である。いずれも指頭圧痕が著しい。5・6は甕である。いずれも内面頸部までケズリが施されており、肩部は張り出さない形態である。7は甕で、炊き口の上部のみ復元できた。これらは、8世紀代の時期が考えられる。

第3節 古代～中世の包含層（3層）出土遺物

全調査区の当該期包含層出土遺物は、細片を含めるとコンテナにして、約300箱に上った。これらの遺物は洗浄・注記作業を終えた後に、器種とその各部位ごとに分類した。本報告書に掲載した包含層出土遺物は、これらの中から抽出した代表的なものである。

水山下層の調査において、古代以降の遺物が多数出土した調査区はⅦ区とⅨ区である。このうち、Ⅸ区に関しては、建物群と包含層遺物の関係を捉える目的で、便宜的にA・B・Cの3区に分割して包含層（3層）遺物を取り上げている。Ⅶ区・Ⅸ区以外の調査区は出土総量が少ないため、第4節において4層に混入した当該時期の遺物を若干数掲載するにとどめた。なお、この包含層の中でその主体となる土器は、奈良・平安時代に相当すると考えられる須恵器・土師器である。これらはその形態の違いにより時期差があることは確かである。しかし、層位的に検討できない…括弧の少ない遺物群であるため、その時期比定については当該期の一括資料を検討した文献を参考に、大まかな時期の括りで報告する。形態変化の特徴については、151頁の「出土土器一覧について」で触れてある²⁴⁾。

1. Ⅶ区3層（包含層）出土遺物（第39～41図・図版48～50）

39-1～4は古墳時代後期後葉～終末期（TK209～飛鳥I）の須恵器である。6は回転ヘラ削りの後にナデを施し、ヘラ起こしの痕跡が著しいものである。5は宝珠つまみを持つ蓋で、8世紀代後葉のものと考えられる。7・8は底部回転糸切りの壺で同じく10世紀代前半のものと考えられる。9は高台が付いた壺の底部である。10・11は高壺で、10は脚部に二箇所の切れ込みがある。11は壺部内面に一本線状のヘラ描きが認められた。10・11は古墳時代終末期と考えられる。12は口縁部端部が大きく外反する壺である。8世紀代のものと考えられる。13～17は手捏土器である。指頭圧痕が著しい。13・14はほぼ同じ大きさで、底部が15・17と同じく平底を成している。16のみは底部から器底まで湾曲している。18は碗、20は高壺脚部である。共に共通の胎土で、赤色顔料を塗布している。後述する第41図掲載の土師器と類似しており、古墳時代後期（TK10～TK43型式併行）の年代が考えられる。21は高壺である。赤色顔料は塗布されていないが、18・20と同様の時期と考えられる。19は墨書き土器である。可能性としては「本」という字が考えられる。土師器の形態は不明で

あるが、他の出土遺物の胎土や焼成具合を考えると8世紀代の坏底部と考えられる。

40・1はつまみを有する蓋と考えられる。弥生時代中期以降の時期が考えられる。2は紡錘車である。弥生時代中期～後期の壺胴部の破片を円形に成形し、穿孔したものである。3～5は土錐である。3・4はほぼ同じ規模である。5は欠損部分が多いが、これらに比べて大きな規模になるものである。6は石製の紡錘車である。鋸歯文が幾重にも巡っている。7は古墳時代中期の土師器砲である。8は瓶の口縁部、9は把手付きの瓶あるいは壺である。両者は別個体である。

第41図の掲載遺物は、中野美保1号墓の南側3層でまとまった状態で検出された・活性の高い遺物である。1・2・15は須恵器である。それ以外は土師器で、9を除くと全て赤色顔料が塗布されている。1・2の須恵器蓋と同時代のものとすると、これらの遺物は古墳時代後期、TK10～TK43型式併行に相当するものと考えられる。3・4は坏、5～11は高坏、12は瓶、13・14は壺で、同一個体の可能性がある。15は須恵器の横瓶で、外面に須恵器片の付着が見られる。

2. 墓区3層（包含層）出土遺物（第74～77図・図版57～60）

第74図掲載の遺物は古墳時代終末期～古代（8世紀代）を中心とする須恵器である。1・2は輪状つまみを有し、かえりのある蓋である。3も輪状つまみを有するが、かえりのない蓋である。4は宝珠つまみを有するかえりのない蓋である。5は蓋の口縁部しか残っていない。1・2は古墳時代終末期、3～5は8世紀代のもとと考えられる。6は高台付きの坏で胴部は内湾し、底部には糸切り痕跡が見られる。7は坏で、糸切り痕跡が見られる。8は口縁部端が僅かに外反する皿である。底部には回転ヘラ切りが見られ、中央部にヘラ起こしをする際の工具痕が見られる。9も高台付きの坏であるが、胴部は6のように内湾せずに直線的に立ち上がる。10は高台付きの皿である。9・10共に底部に回転糸切り痕が見られる。11・12は短頸壺である。13・14は高坏の脚部である。13の脚部には2段2方向の綫長の三角形透かしが穿たれている。14のそれには1段2方向の綫長の三角形透かしが穿たれている。15は高台付きの壺底部である。16の高坏脚部には透かしの痕跡となる綫方向の切れ込みが1段2方向に入る。6～11は概ね8世紀代に収まるものと考えられ、胴部が直線的な7は9世紀代に下る可能性も考えられる。13～16は古墳時代後期後葉～終末期のものと考えられる。

第75図掲載の遺物は10の須恵器皿を除いて全て、土師器と土師質製の煮炊具である。1～3は坏である。このうち、1はやや深い椀形で、胴部に2本の稜線が見られる。形態上、41・3に似ていることから、ほぼ同時期の古墳時代後期のものと考えられる。2は内面底部付近にケズリの痕跡が見られる。その形態は赤色顔料を内外面に塗布した3に似る。4～6は手捏上器である。4と5は器高3cm程度の小型のものである。7は脚部内面を除く内外面に赤色顔料が塗布されている。2・3・7は第41図の土師器と同じく古墳時代後期前半代のものと考えられる。8・9は皿である。共に底部に糸切り痕が観察される。10は底部に糸切り痕が観察される皿である。これらは10～11世紀代のものと考えられる。11は柱状高台皿の脚部である。底部に糸切り痕が観察される。12世紀代のものと考えられる。12は壺の吹き口の上部である。13は瓶の口部である。14は高坏の脚部裾である。その形態は39～12と類似する。15～17は土製支脚である。15は背に突起がある。16・17は背に突起はないが、穿孔が施されている。ただし、その穿孔は貫通していない⁵⁾。煮炊具類は8世紀代と考えられる。

第76図は土師器の蓋類である。時期はいずれも古墳時代後期～古代（7～8世紀代）のものと考えられる。1・2のように、口縁部の口径が小さいものがある。3の口縁部形態は1・2に類似する。これらは肩部が張り出す形態である。一方、4・6は口縁部が外反するものの、肩部は張り出さない。5はさらに張り出さないものとなる。

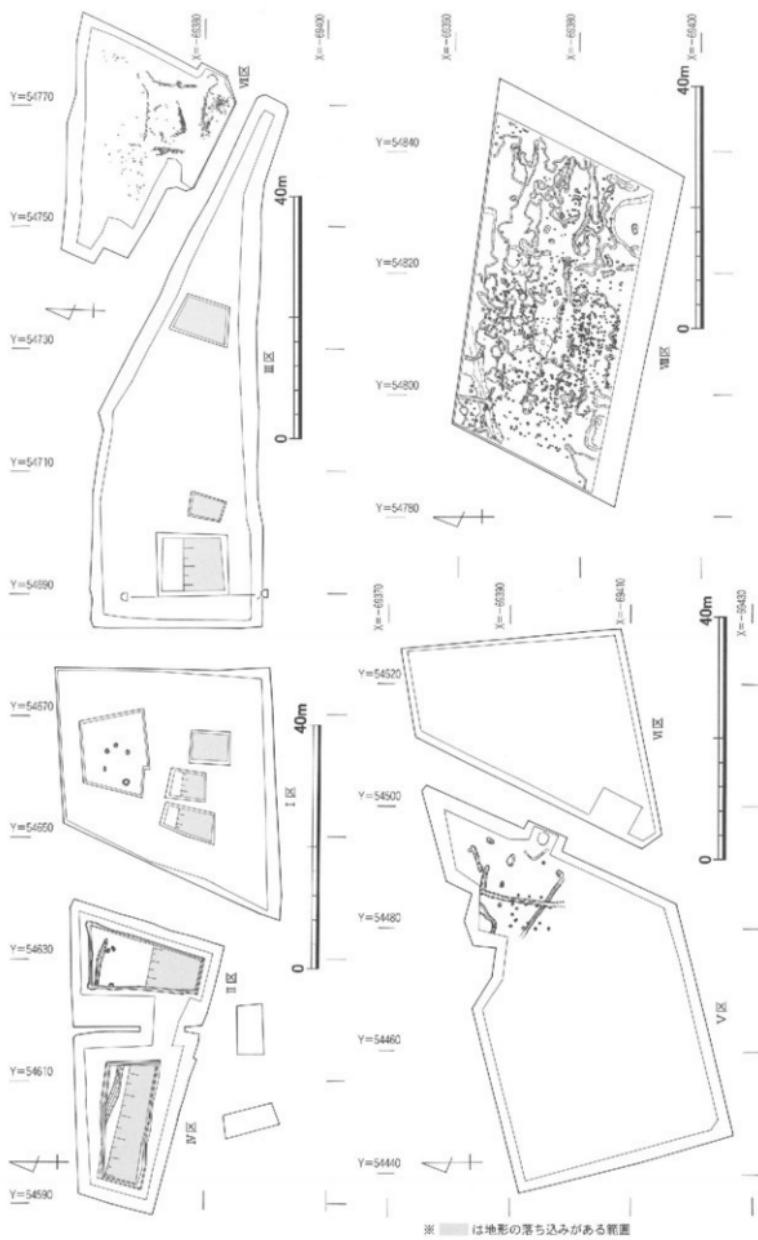
第77図は須恵器である。1は横瓶で、胴部に須恵器片が付着する。2は横瓶、あるいは壺か壺の胴部である。3・4は壺または壺の口縁部である。いずれも古墳時代後期～古代（8世紀代）のものと考えられる。

第78図は古墳時代後期～古代に属する須恵器の壺または壺の胴部である。叩き成形のバラエティーを抽出したものである。第82図にも同様の体裁で肩部～胴部片を掲載している。

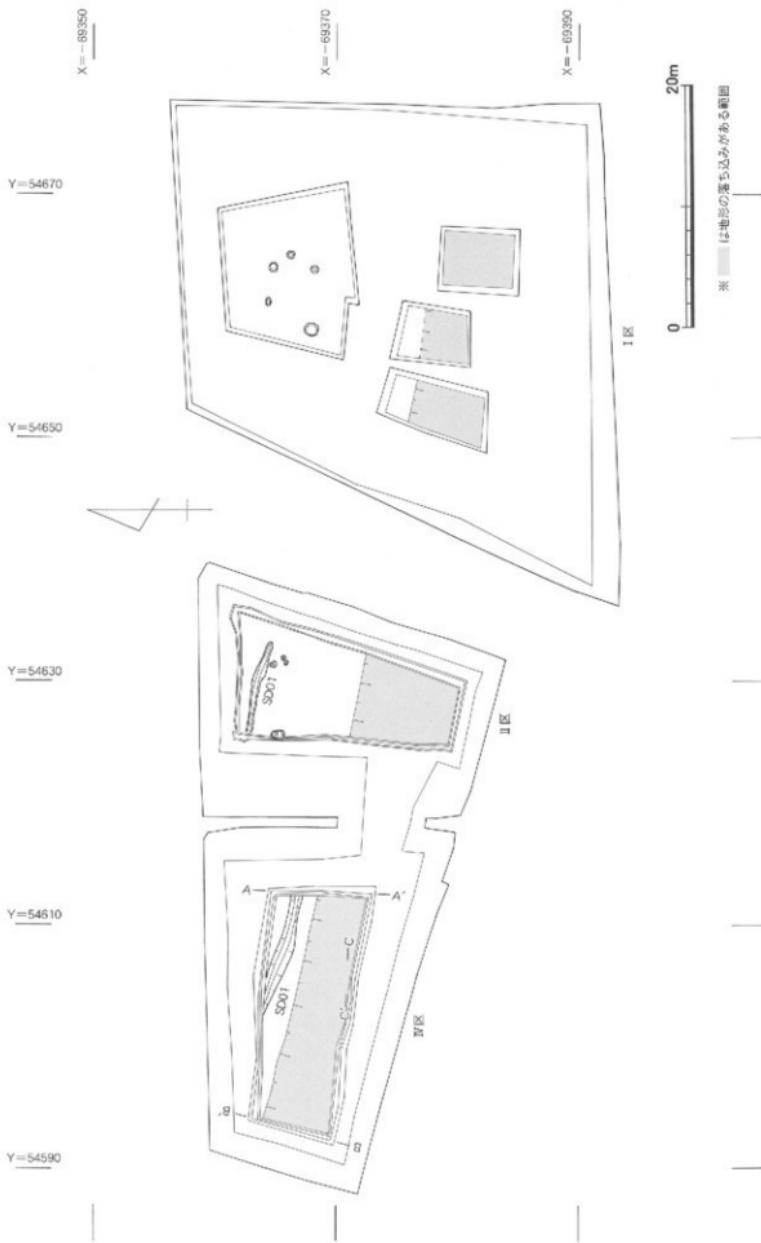
第79図掲載の遺物は古墳時代～古代（8世紀代を中心）に属する須恵器である。1・2は古墳時代後期後半（TK43型式併行）の蓋坏である。3・4は古墳時代終末期の蓋である。4は3に比べてつまみが扁平になったものである。5・6は胴部が内湾した高台付きの坏である。7・8は胴部が内湾し、口縁部端が内側に向かって内傾する底部回転糸切りの坏である。9は胴部が直線的な形態の高台付の坏である。5～9は8世紀代のものと考えられる。底部には静止糸切り痕が見られる。10は高坏の脚部である。古墳時代終末期のものと考えられる。11は底部回転糸切り痕の見られる胴部が直線的な坏で、9世紀後半代のものと考えられる。12は静止糸切り痕の見られるやや大型の高台付き皿である。13は短頭壺、14・15は直口壺の口縁部である。16は壺もしくは壺の口縁部である。17は円周視の脚部である。方形の透かしと、3～4を単位とする一角柱形の刺突文が見られる。18は台付き壺である。

第80図掲載の遺物は古代（8世紀代）を中心とする土師器である。1は蓋である。2は底部が深く楕状の形態である。ここでは楕として報告する。3は小型の壺である。外面にかなりの炭化物が付着しているので、実用に供したものであろう。4は坏である。胴部は直線的に延びているが、成形時における凹凸が見られる。6も坏である。胴部は内湾する形態である。5・7～9は皿である。10は高台付きの皿である。高台内面と底部外面には赤色顔料は塗布されていない。11は小型の壺の底部と考えられる。12は高台付きの坏である。底部は欠失しているため不明であるが、高台部の内面には赤色顔料は塗布していない。13・14は焼塙壺である。15の壺は頭部がくびれ、肩部・胴部共にそれほど張らないが、やや丸みを帯びた形態である。7世紀代のものと考えられる。16は壺である。口縁部に穿孔が確認される。17は背に突起が1つある土製支脚である。

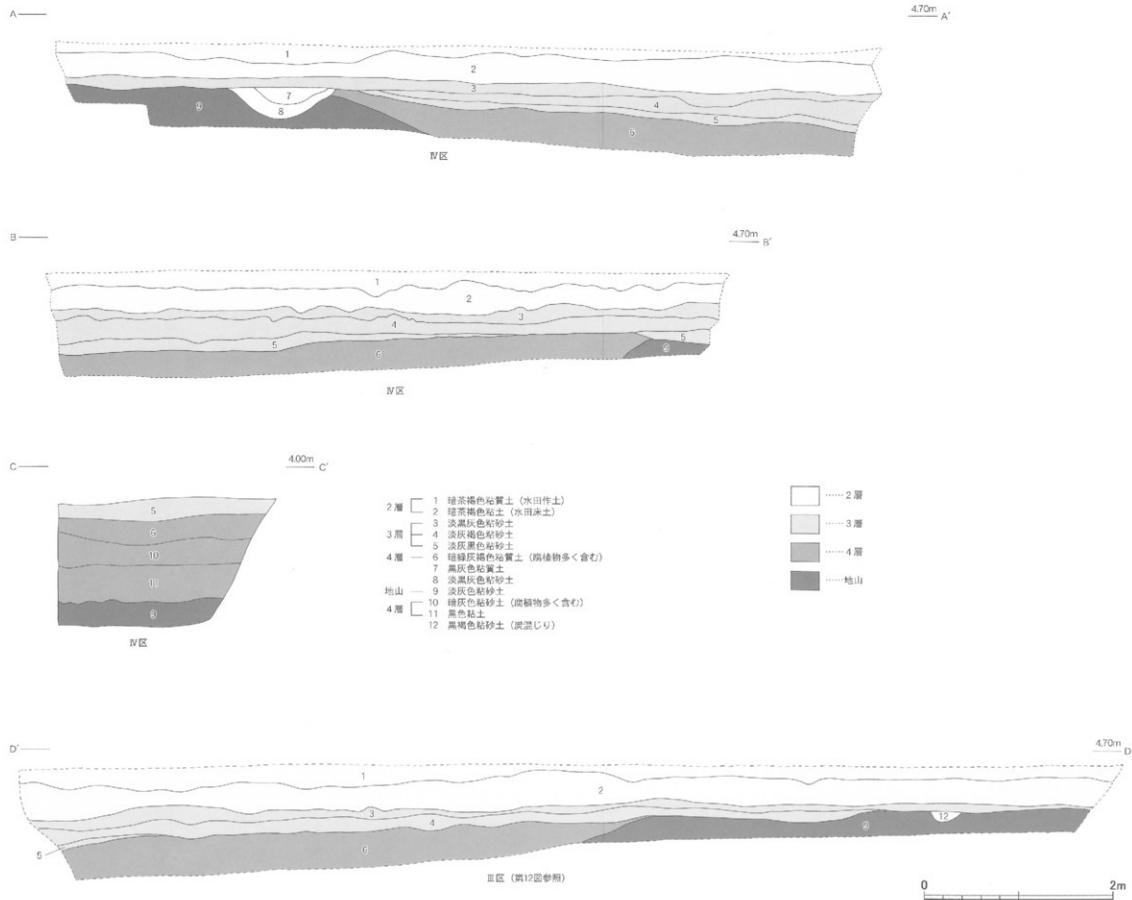
第81図はⅧ区Cの3層包含層遺物である。古代（8～9世紀代）、古代末（11世紀後半代～12世紀）を中心とする時期に属する。1～7・9・10は須恵器、それ以外は土師器である。1～3は蓋である。1・2は輪状のつまみを有し、1の口縁端部は屈曲して、下方に折れ曲がる。2は全体的に緩やかに屈曲するもので、短頭壺の蓋と考えられる。1は8世紀代前半、2は8世紀代のものと考えられる。3は頭部に観察されるつまみの剥離面から、宝珠状のつまみを有するものと考えられる。口縁端部は外方に屈曲し、段を形成しやや外方に向かって収まる。4・7は高台付きの坏である。4の胴部は直線的で急な立ち上がり方である。底部は回転糸切りの痕跡が見られる。7の胴部も直線的であるが、4に比べて立ち上がりの角度は緩い。4は8世紀代、7は9世紀後半のものと考えられる。同じく、10の坏は口縁端部が僅かに外反するものの、体部が直線的な形態をしており、9世紀後半のものと考えられる。9は皿である。底部には回転糸切り痕跡が明瞭に残る。8世紀代後



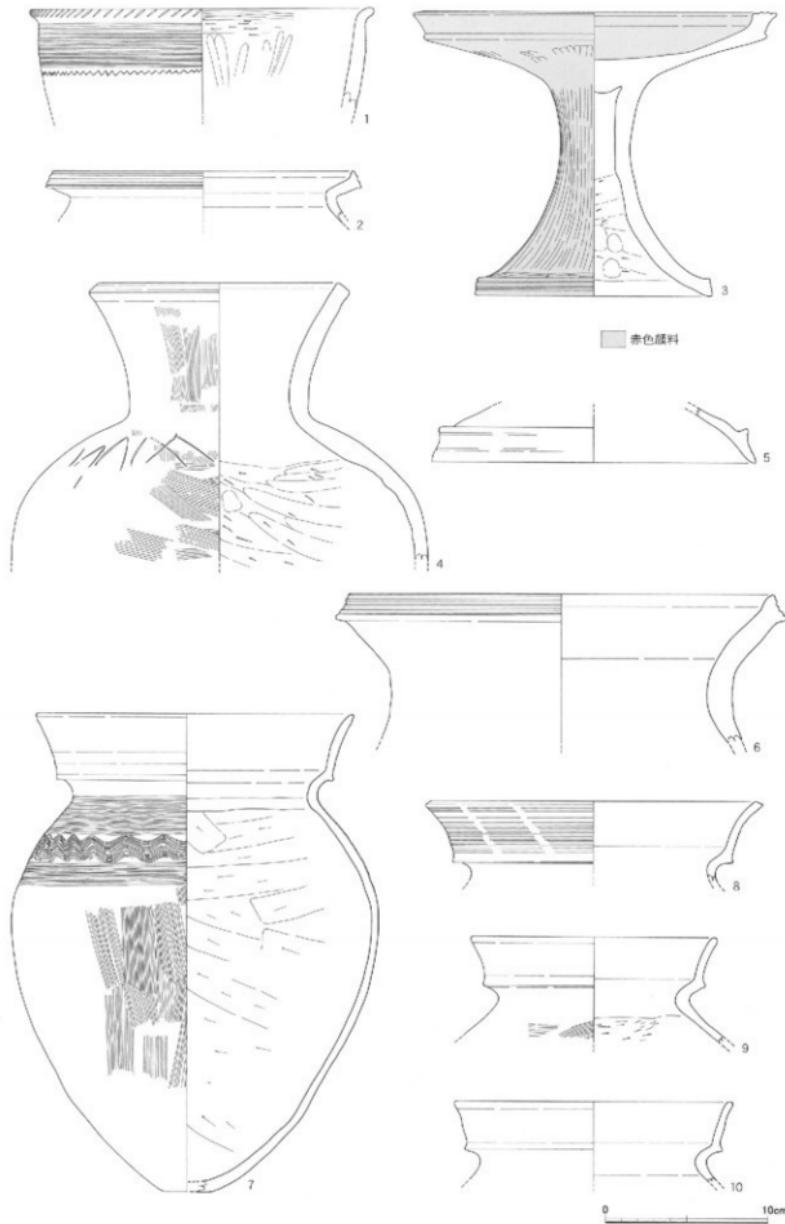
第12図 各調査区検出の中世水田下層遺構 ($S = 1/800$)



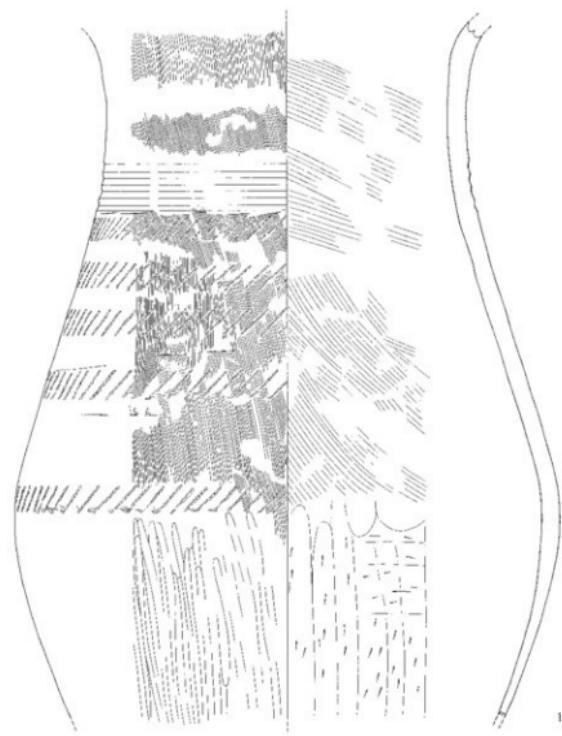
第13図 I・II・IV区検出の中世水田下層遺構 ($S = 1/400$)



第14図 III・IV区中世水田遺構下層土層図 (S = 1 / 40)



第15図 I区包含層（4層）出土遺物（1）（S=1/3）



1



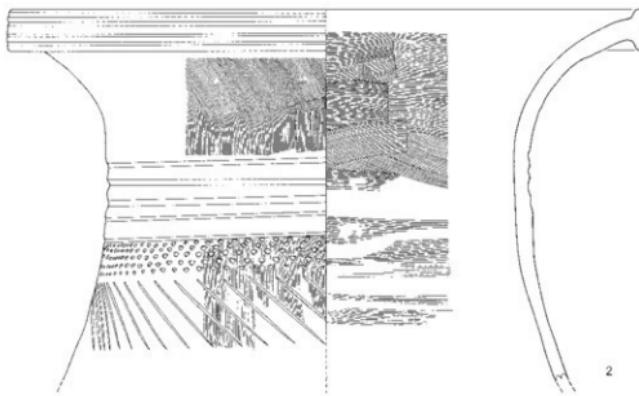
2

0 10cm

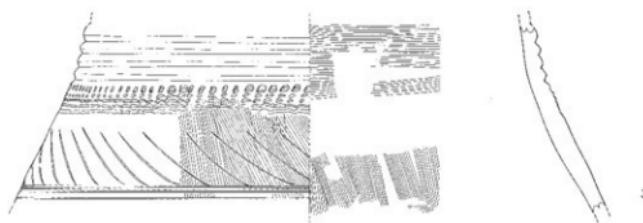
第16図 I区包含層(4層)出土遺物(2)(S=1/3)



1



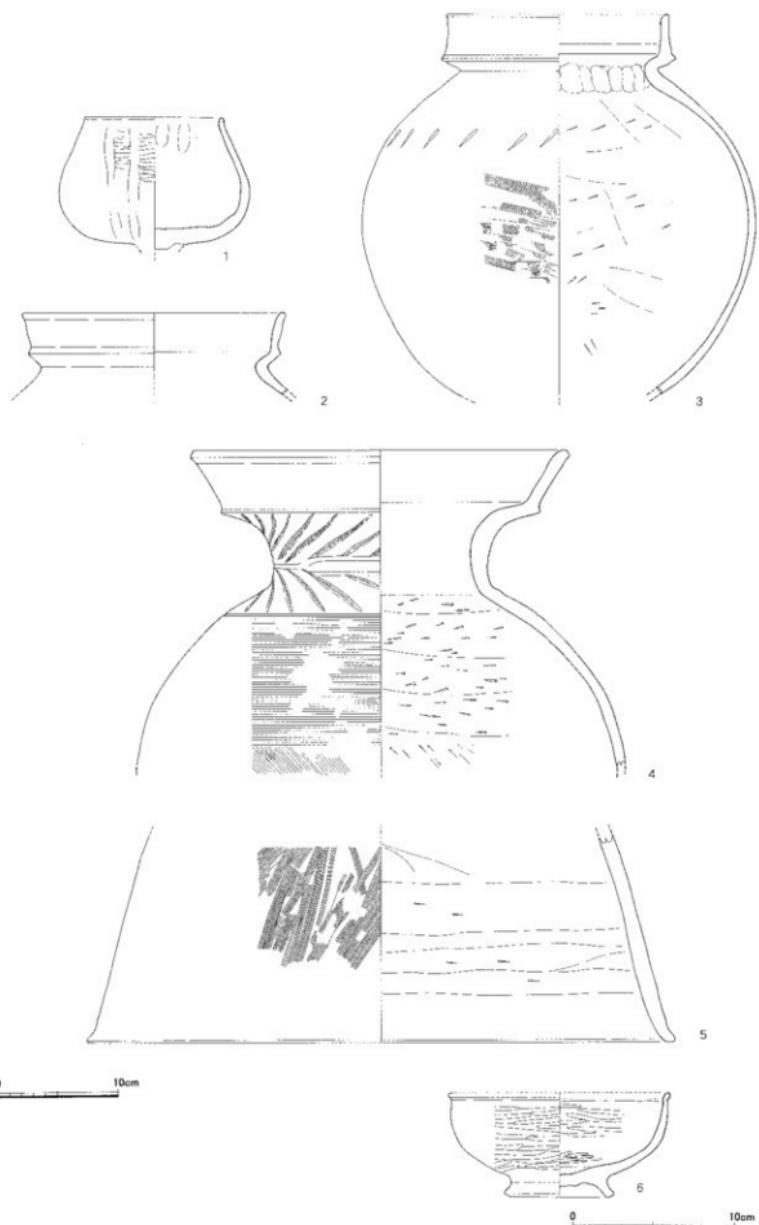
2



3

0 10cm

第17図 I区包含層（4層）出土遺物（3）（S=1/3）



第18図 I区包含層（4層）出土遺物（4）（1～4・6はS=1/3、5はS=1/4）

半のものと考えられる。8は器壁の厚い上部器の坏である。古墳時代後期前半のものと考えられる。13を除く11~21は赤色顔料を内外面に塗布した土器器である。11・13・14・17・20は皿である。20は大型の皿になる。これらは8世紀紀代のものと考えられる。12・15・18・21・23は胴部が直線的で、立ち上がりの角度が緩やかな坏である。これらは9世紀代のものと考えられる。このうち、底部が平らな15・18・21・23の底部外面には赤色顔料は塗布されていない。底部外面の調整が観察できる21・23は静止ヘラ起こし痕、もしくは製作台の木目痕と考えられるものが観察できる。16・19は埴状の坏あるいは、埴と考えられるものである。8世紀紀代のものと考えられる。22は全体的に器壁が厚く、胴部が内溝する坏である。24は高台付きの坏である。内面全面に黒色の煤が塗られている。25~28の底部には回転糸切り痕が見られる。25・26は皿、27は坏、28は柱状高台坏に分類される。22・24~28は11世紀後半~12世紀代のものと考えられる。

83-1・2はミニチュアの土製支脚である。1には背に一つの穿孔があるが、貫通はしない。2の背には突起が一つ付加する。3は中実耳環である(表9参照)。金筋張りの場合、開口部の縁部で金箔の収束痕跡が観察できる場合があるが、現状では剥離しているため不明である。金鍍金が施されたものである可能性も考えられる。

第4節 弥生~古墳時代の遺構と遺物

1. 調査I区(第12・13図)

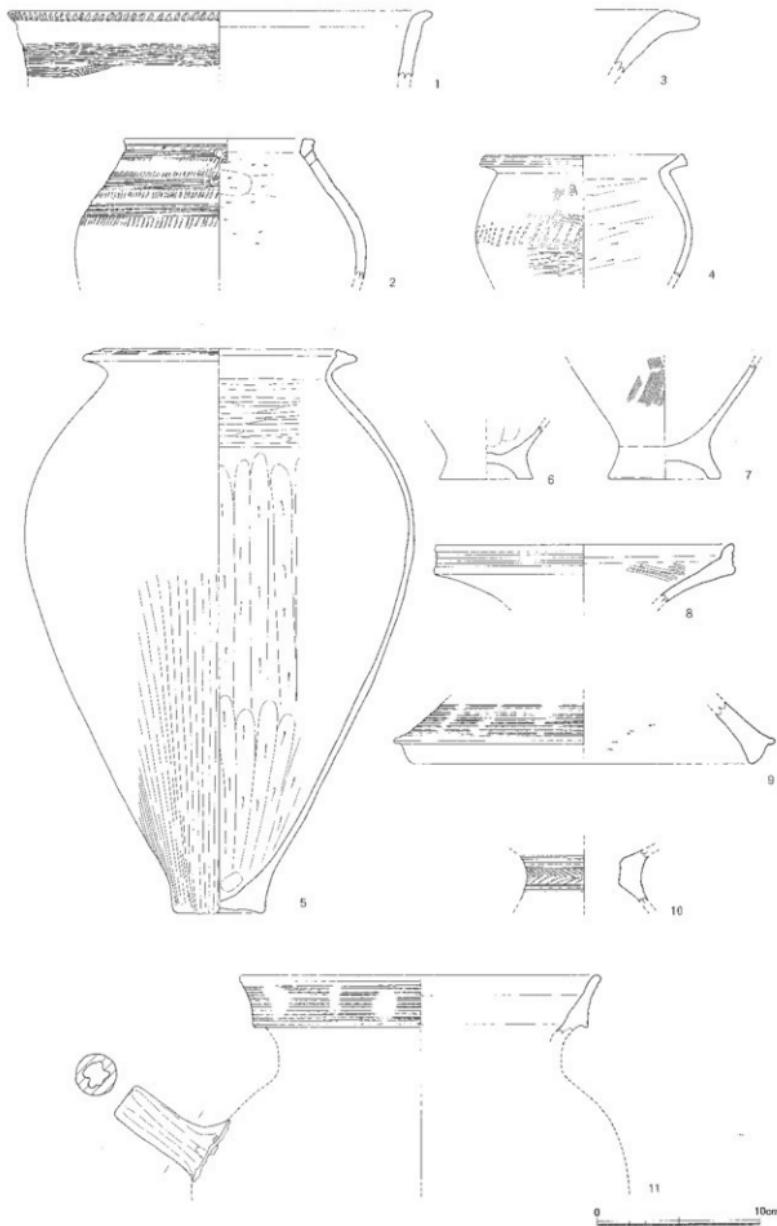
水田下層の調査は激しい湧水のため、困難を極めた。そのため、小区画を任意に設定し弥生時代までの旧地形が復元できるよう掘削を行った。その結果、水田下層の古代包含層堆積(基本層序3層)は薄く、遺物も非常に少なかった。調査区北側で若干の遺構を検出したが、いずれも出土遺物を作わない小規模なビットや土坑であった。出土遺物は表1に掲載している器種と個体数が確認された。第18図-6に掲載しているのはそのうちの一部である。

包含層(4層)出土遺物(第15~18図)

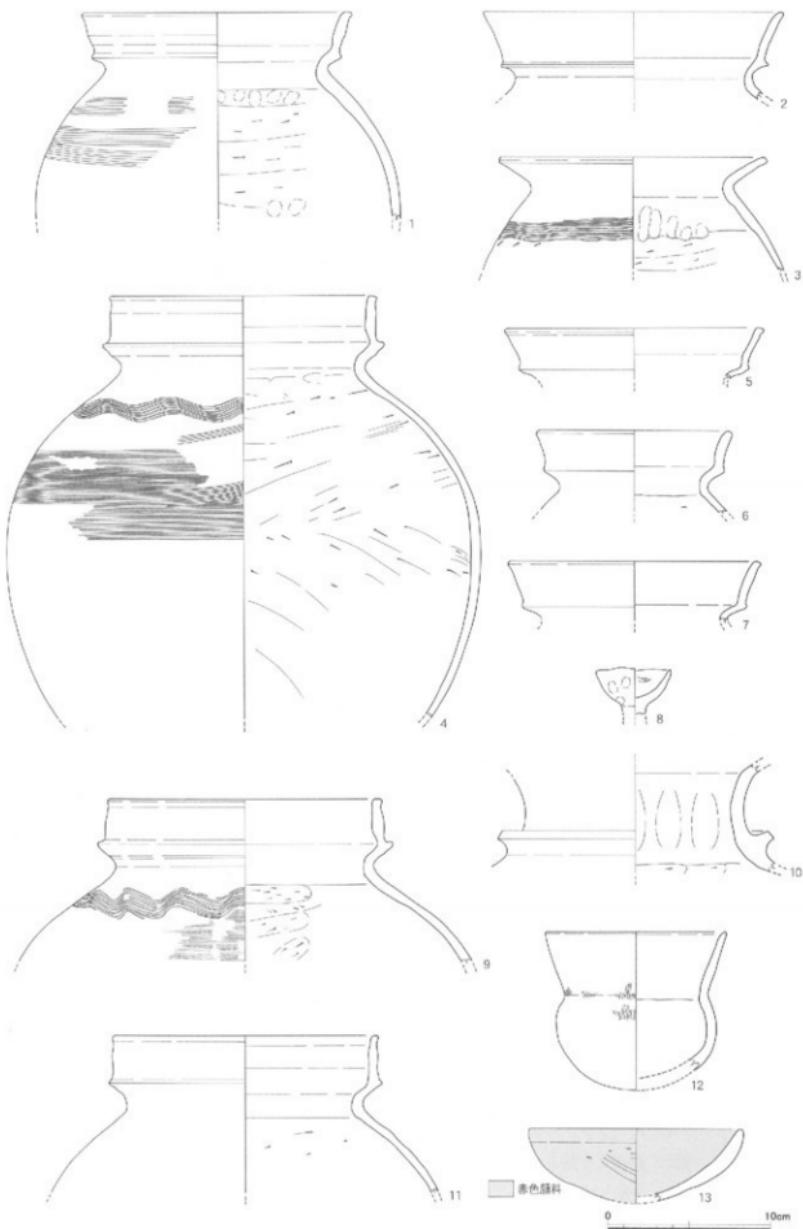
15-1は口縁直下にヘラ描直線文が施される壺である。2は口縁が肥厚し、3条の凹線文が回っている壺である。4は直口壺で、肩部にヘラ状の工具で施文がなされている。5は高坏の脚部である。6は口縁部に4条の凹線文を施した壺である。3と同様の時期である。7~10は壺である。7は頸部~肩部にかけて平行線文と波状文が施されている。口縁部は緩やかに外反し、ナデが施されている。8の口縁部には擬問線が施された後に、部分的にナデ消しが施されている。10は口縁端部が平坦面をなしている。1はI-4様式(弥生時代前期末)、2・3・6は凹線の特徴からIV-1様式(弥生時代中期後葉)、5・7・8は草田5期(弥生時代後期後葉)、9は草田6期(弥生時代末~古墳時代初頭)、4・10は草田7期(古墳時代前期前葉)の時期が考えられる。

16-1・2~17-1~3はそれぞれ別個体の大型の壺の口縁部や胴部である。肥厚した口縁部には4条の凹線文が回り、頸部~肩部にかけては緩い四線文がめぐり、斜状の木口による刺突列点文が施されている。これらは、IV-2様式(弥生時代中期後葉)の様相を示す。

18-1は高坏である。坏部は内傾しワイングラス形を成す。2・3は壺である。口縁端部が平坦面を形成し、二重口縁部の突出部が鋭くなく、頸部の屈曲がつまり気味になる。3は口縁部が直立気味になる。4は二重口縁の壺である。頸部に有輪羽状文がめぐる。5は瓶型上器である。1は草田6期(弥生時代終末期~古墳時代初頭)、2~5は小谷1~2式(古墳時代前期前葉)の時期に



第19図 II区包含層（4層）出土遺物（1）（S=1/3）



第20図 II区包含層（4層）出土遺物（2）（S=1/3）

相当する。なお、6は3層からの混入であるが、古代末の時期が考えられる。

2. 調査Ⅱ区（第13図）

ここでも、湧水による地下の状態が劣悪であったため、I区と同様の方法で掘削を行った。遺構は僅かながら調査区北側で検出されている（図版4上）。いずれも出土遺物が無いため、時期は不明である。古代以降の包含層遺物は表1のとおり数は少ない。これは基本層序3層が薄いためであり、弥生～古墳時代の遺物の包含層である基本層序4層とは密接には区別できなかった。

包含層（4層）出土遺物（第19・20図）

19-1は口縁直下に始点を切ってヘラ描直線文が施されている壺である。3は壺の口縁部である。口縁端部上面に凹線文が施されている。2は無頸壺で、口縁直下に焼成前穿孔がなされている。3段にわたってヘラ描直線文と木口による斜状の刺突列点文が施されている。4は肥厚した口縁に2条の凹線文がめぐらしである。5は口縁端部が水平気味に肥厚しており、2条の凹線文が施されている。外面のミガキは底部付近まで施されている。6・7は台付き壺の底部である。底部端面は水平な接地面をなす。8は高杯の口縁部で、3条の凹線文がめぐらしである。9は高杯脚部の裾部分である。10は鼓形器台のくびれ部である。貝殻腹縫による綾杉文がめぐらしである。11は注口土器の口縁部と注口部である。口縁には擬凹線が施されており、一部にナデ消しが施されている。注口部の内部には穿孔する際の工具（7mm角程度の小棒）による痕跡が見られる。1はI-4様式（弥生時代前期末）、2・6・7はIII-1様式（弥生時代中期中葉）、3・5はIV-1様式（弥生時代中期後葉）、8・9はIV-2（弥生時代中期後葉）、10・11はV-3様式（弥生時代後期後葉）の様相を示す。

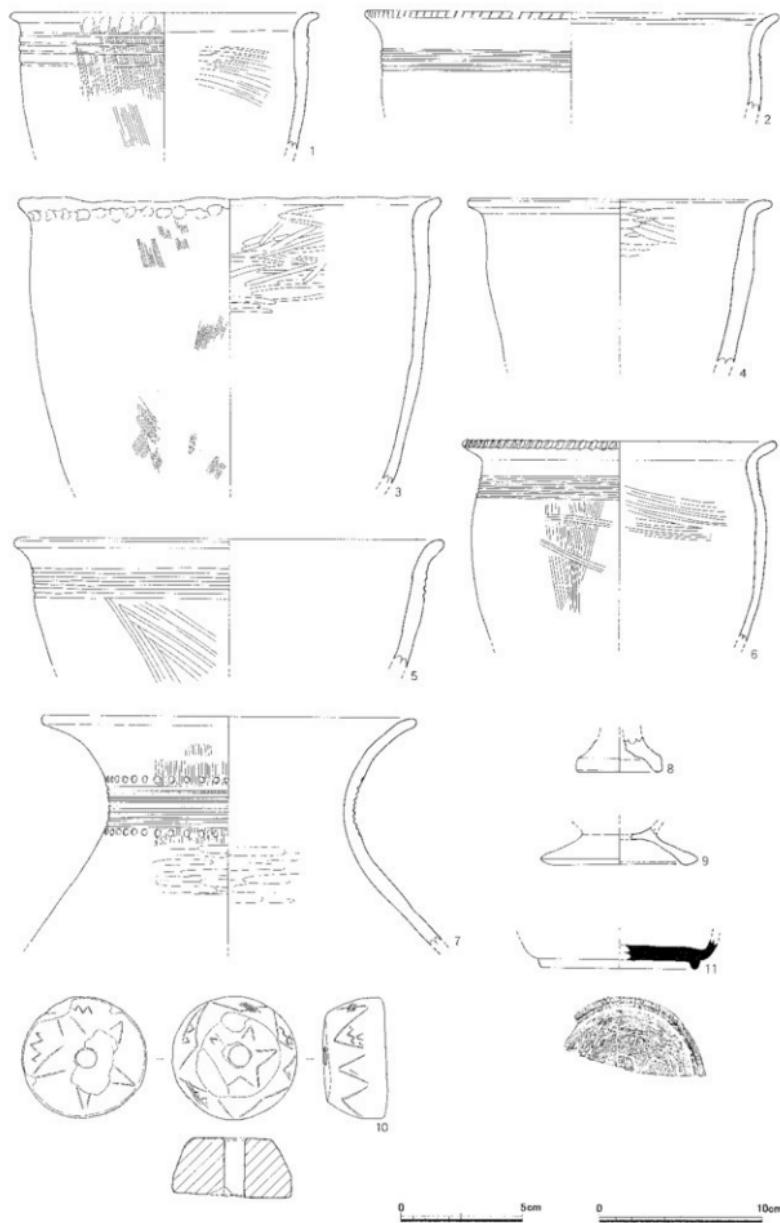
20-1～7・9・11は甕である。2・3は弥生時代終末～古墳時代初頭、1・5～7は古墳時代前期前半、4・9・11は古墳時代前期後半と考えられる。8はミニチュアの高杯、10は頸部に突起が付いた壺である。共に古墳時代前半期と考えられる。12は古墳時代中期の小型丸底の直口壺である。13は内外面に赤色顔料を塗布した壺で、古墳時代後期と考えられる。

3. 調査Ⅲ区（第12図）

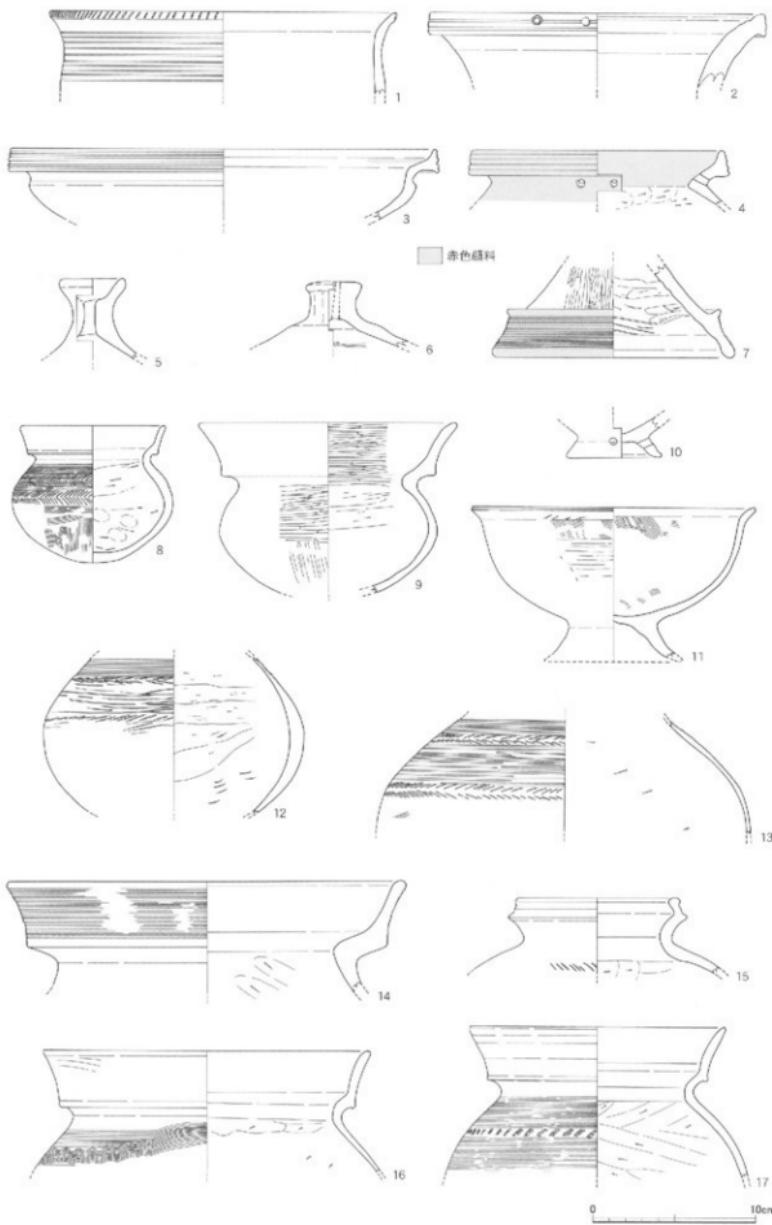
この調査区もI区と同じく、湧水の激しい地区であった。小区画を3箇所設定して掘削を行った。ここでは遺構の検出はなかったが、地山（弥生中期）の地形が南に向かって徐々に下がっている状況が確認できた。包含層遺物はこの地形が下がった箇所から出土している。古代以降の土器は水田下層の黒灰色粘砂土層（基本層序3層）から少量出土している。

包含層（4層）出土遺物（第21図）

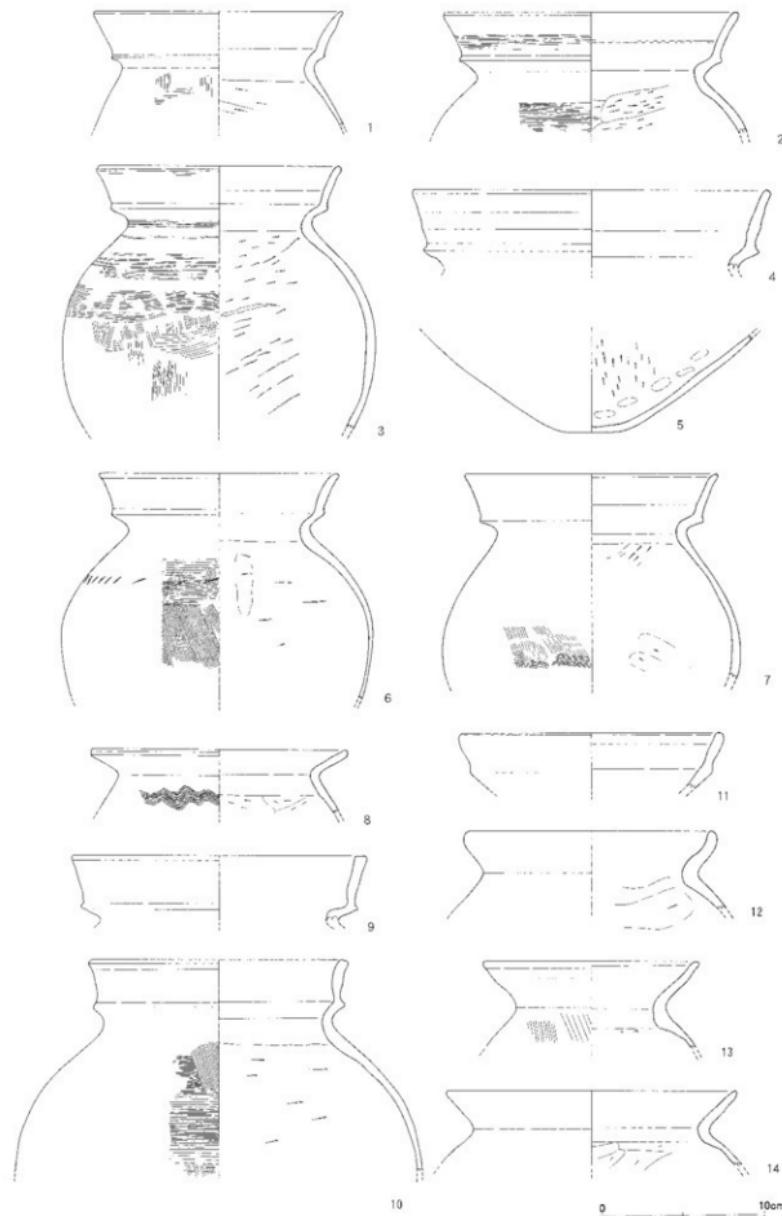
21-1～6は壺である。口縁端部が屈曲しするもので、1・2・5・6には口縁直下にヘラ描直線文が施されている。7は頸部に円形刺突文とヘラ描直線文が施されている壺である。1～7はI-4様式（弥生時代前期末）の様相を示す。8・9は蓋である。8は蓋上部に焼成前穿孔がなされており、9には皿状のつまみが付加する。共に弥生時代中期～後期のものと考えられる。10は石製の紡錘車で、全面に鏽斑文が施されている。11は高台付き須恵器壺の底部である。底部外面に「中」と読みとられるヘラ描文字が見られる。10・11は3層からの混入と見られる。



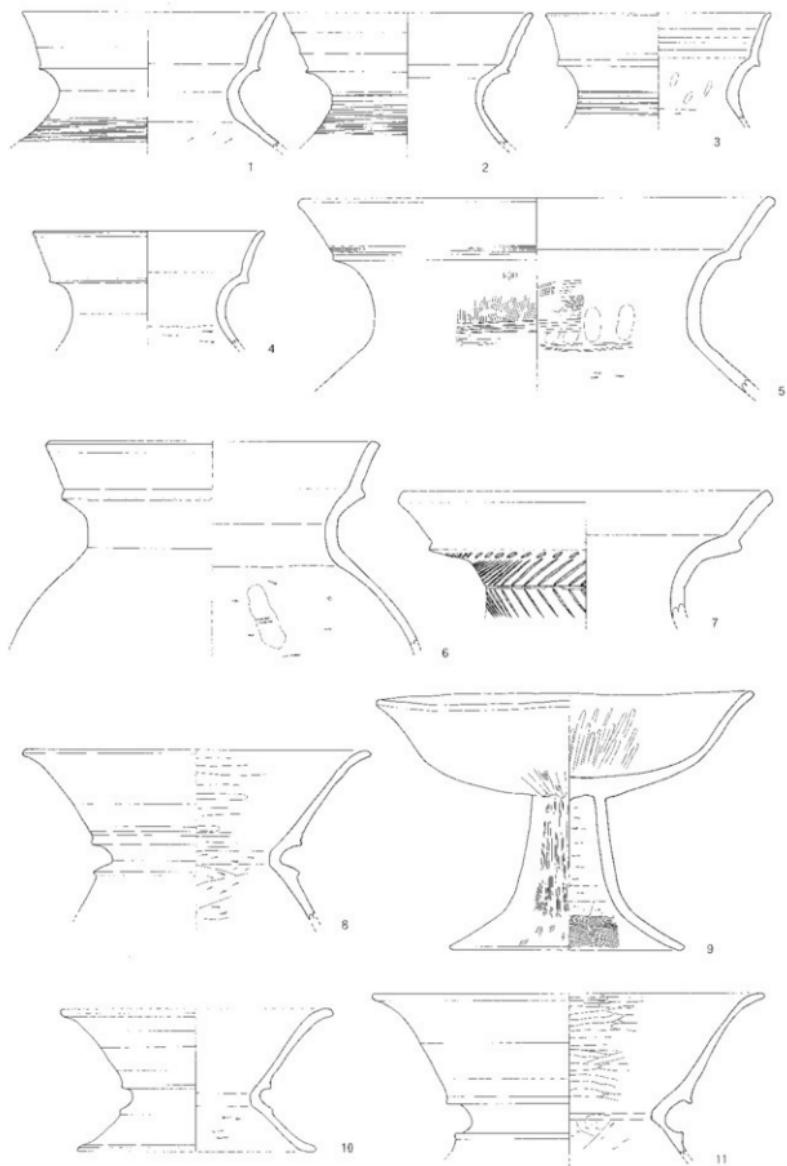
第21図 Ⅲ区包含層（4層）出土遺物（1～9・11はS=1/3、10はS=1/2）



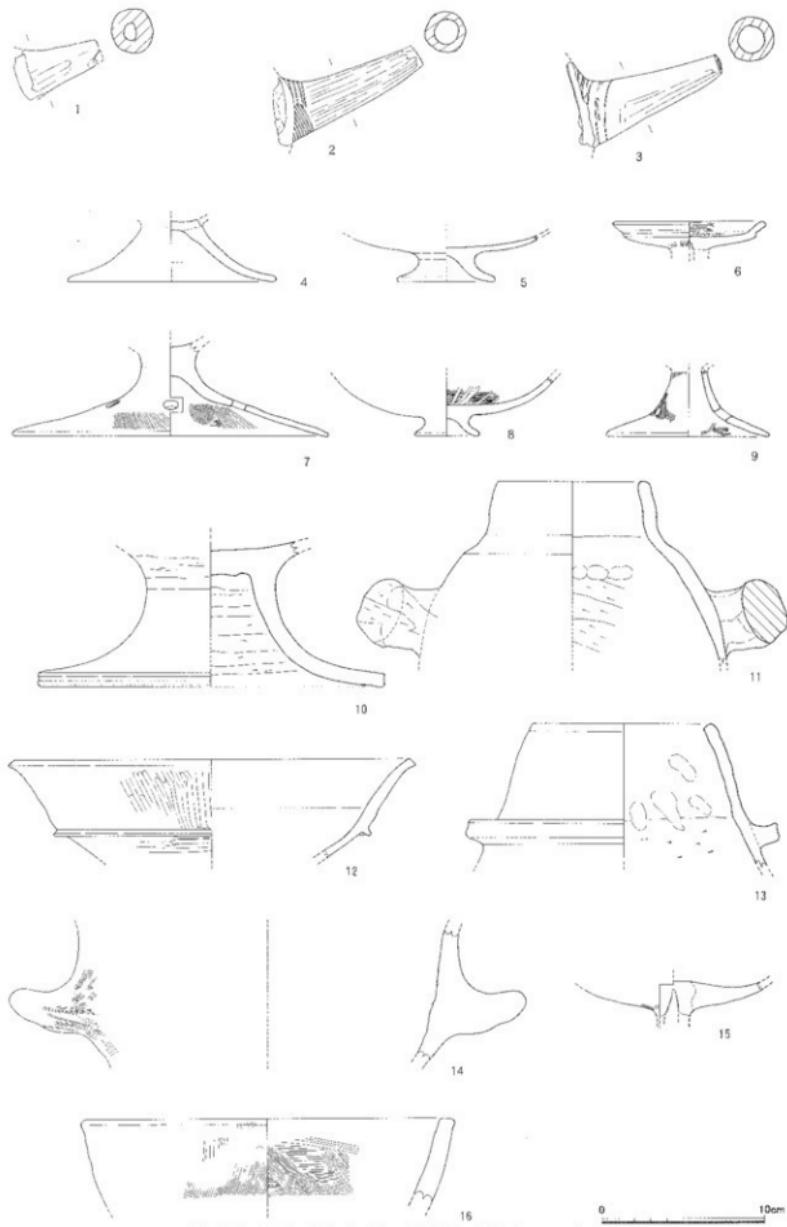
第22図 IV区包含層（4層）出土遺物（1）（S=1/3）



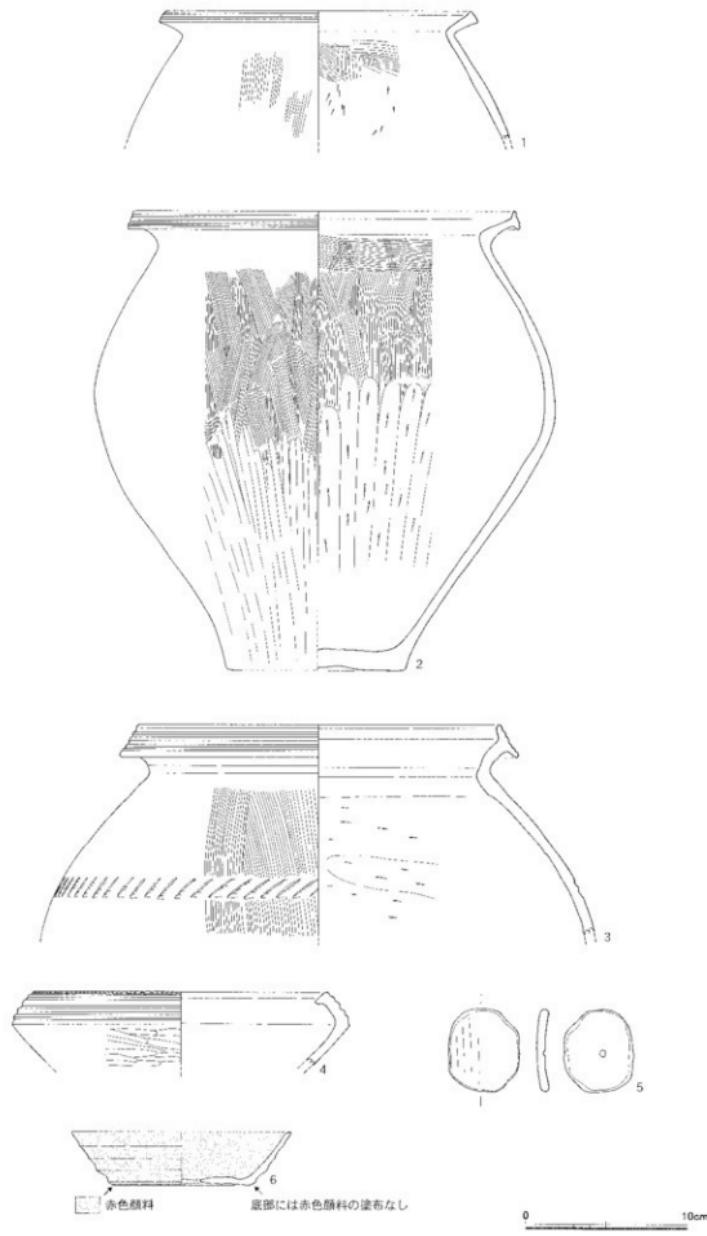
第23図 IV区包含層（4層）出土遺物（2）（S=1/3）



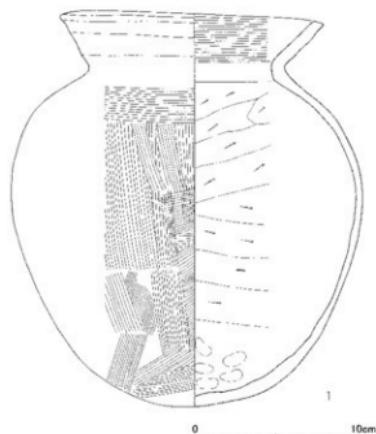
第24図 N区包含層（4層）出土遺物（3）（S=1/3）



第25図 N区包含層（4層）出土遺物（4）（S=1/3）



第26図 V区包含層（3・4層）出土遺物（S=1/3）



第22図 IV区包含層（4層）出土遺物（S=1/3）

表面と口縁部の内面に赤色顔料を塗布している。5・6は蓋である。いずれもつまみ部上部に焼成前穿孔を施している。7は外面端部に赤色顔料を塗布した高環脚部である。8は口縁端部が直立気味で、肩部に貝殻腹縁で綾杉文を施している。9は口縁が外反する壺である。8と同じく内面胸部の調整はケズリである。10は低脚環の脚部で、坏部と脚部の境に焼成前穿孔1つが見られる。11は高台付きの坏と考えられる。口縁端部は僅かに外反し、端部に1条の凹線文が回っている。12・13は壺あるいは注口土器の胴部である。肩部にヘラ描直線文、貝殻腹縁による綾杉文が回っている。14は壺の口縁である。口縁部の擬凹線は部分的にナデ消されている。15は口縁部径が小さい「重口縁部」の壺である。16は口縁が外反し、頸部～肩部にかけて間隔の狭い波状文が施されている壺である。17は口縁部が外反し、肩部に木口による刺突列点文が施されている壺である。頸部～肩部にかけて僅かに赤色顔料が施されているのが確認できる。1はI-4様式（弥生時代前期末）、2～4はV-1様式（弥生時代後期前葉）の様相を示す。5・6は弥生時代後期と考えられる。7はV-2様式（弥生時代後期前半）の様相を示す。8～17は草山4～5期（弥生時代後期後葉）の様相を示す。

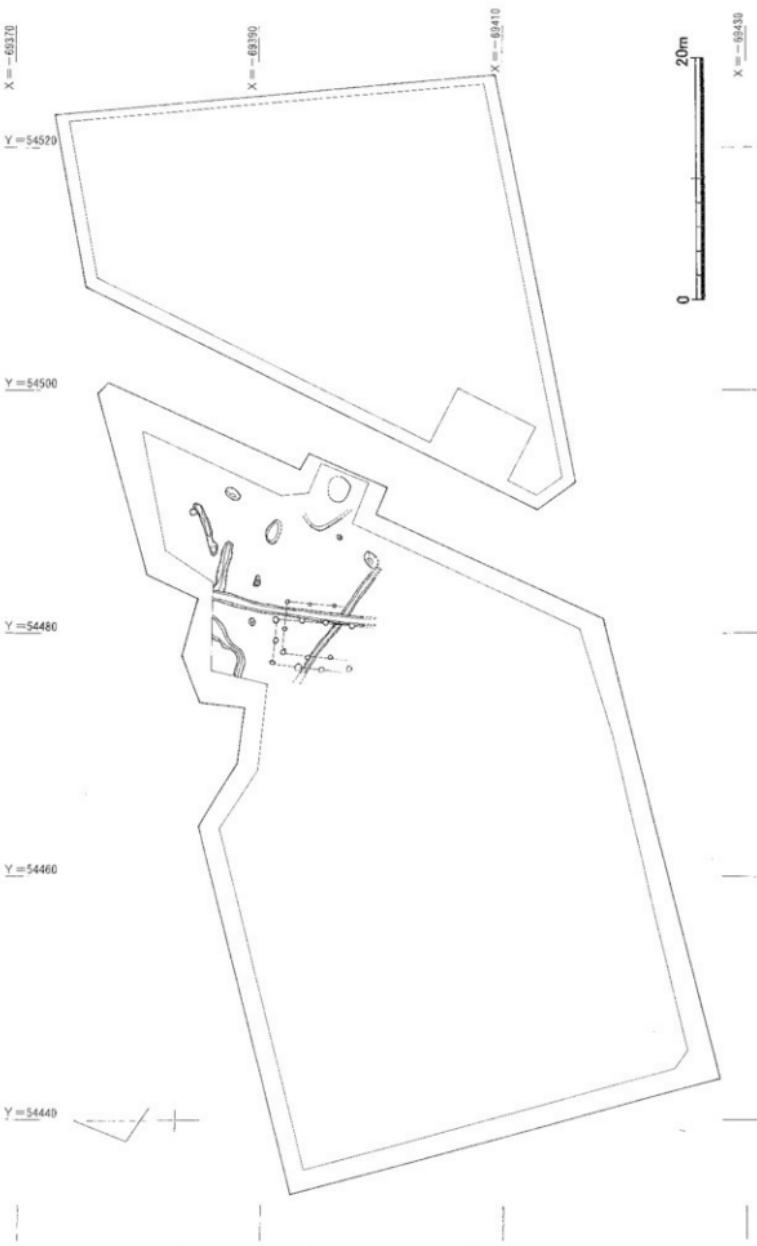
第23図は弥生時代後期～古墳時代中期前半の壺である。1は口縁端部が僅かに外反し、肩部は撫で肩である。2は口縁端部が丸く収まり、肩部～胴部が膨る。3は口縁端部の外面に平坦面が形成されており、胴部は球状をなす。4は大型の壺である。二重口縁部の突出部は親く突出する。5は壺の底部である。痕跡的な平底をなし、内面底部附近には指頭圧痕が見られる。6の壺は、口縁端部が外反する。7はやや外反する口縁端部が平坦面をなし、頸部から胴部にかけての器壁が厚くなる。8は単純口縁の壺で、肩部に波状文が施されている。9は口縁端部が水平方向に平坦面をなしており、口縁部も直立気味で器壁も厚い壺である。10の口縁端部はやや下がり気味ではあるが、平坦面をなしている。頸部～胴部にかけて器壁が厚い。11は二重口縁部が退化した口縁をなす。12は口縁が内湾するものである。13の口縁部は僅かに内湾気味で、二重口縁部の退化した屈曲部の緩

4. 調査IV区（第13図）

IV区の水手下層もまた、II区に劣らぬ湧水量である。造構は溝（SD01）が1つ検出されているにすぎない。地山に掘り込まれており、土師器の小片が出上していることから弥生時代後期～古墳時代前期の時期が想定される。調査区の南側は、土層の観察から南に向かって地形が傾斜しており、この包含層（4層）から多量の上器が検出されている。

包含層（4層）出土遺物（第22～25図）

22-1は口縁直下にヘラ描直線文が回る壺である。I-4様式（弥生時代前期末）の様相を示す。2は口縁端部に2条の凹線と竹管文が施された蓋である。3は口縁部に4条の凹線文が施された高環の坏部である。4は口縁に3条の凹線文を施し、頸部に焼成前穿孔を2つ施している。5・6は蓋である。いずれもつまみ部上部に焼成前穿孔を施している。7は外面端部に赤色顔料を塗布した高環脚部である。8は口縁端部が直立気味で、肩部に貝殻腹縁で綾杉文を施している。9は口縁が外反する壺である。8と同じく内面胸部の調整はケズリである。10は低脚環の脚部で、坏部と脚部の境に焼成前穿孔1つが見られる。11は高台付きの坏と考えられる。口縁端部は僅かに外反し、端部に1条の凹線文が回っている。12・13は壺あるいは注口土器の胴部である。肩部にヘラ描直線文、貝殻腹縁による綾杉文が回っている。14は壺の口縁である。口縁部の擬凹線は部分的にナデ消されている。15は口縁部径が小さい「重口縁部」の壺である。16は口縁が外反し、頸部～肩部にかけて間隔の狭い波状文が施されている壺である。17は口縁部が外反し、肩部に木口による刺突列点文が施されている壺である。頸部～肩部にかけて僅かに赤色顔料が施されているのが確認できる。1はI-4様式（弥生時代前期末）、2～4はV-1様式（弥生時代後期前葉）の様相を示す。5・6は弥生時代後期と考えられる。7はV-2様式（弥生時代後期前半）の様相を示す。8～17は草山4～5期（弥生時代後期後葉）の様相を示す。



第28図 V・VI区検出の中世水田下層遺構 ($S = 1/400$)

やかな稜線が見られる。14は口縁端部外面が僅かに内湾する。

1は草田5期（弥生時代後期後葉）、2～6は草田6～7期（弥生時代終末～古墳時代初頭）、7・8は小谷2式（古墳時代前期前葉）、9・10は小谷3式（古墳時代前期中葉）に相当するものと考えられる。11～14は二重山縁部の退化が著しく、単純山縁化する古墳時代中期の壺である。

第24図は弥生時代後期後葉～古墳時代前期の土器である。1～7は壺である。1～4は口縁は外反し、外面には強いナデが施されている。5は口縁端部が丸みを帯びる大型の壺である。6・7の口縁端部は下がり気味ではあるが、平坦面をなしている。口縁直下には木口による刺突列点文が施される。頸部は細くなり、有輪羽状文が施される。8・10・11は鼓形器台である。10は小型化したものである。9は高壺である。

1～4は草田5期（弥生時代後期後葉）、5・6・8～11は草田6期（弥生時代終末から古墳時代初頭）～小谷2式（古墳時代前葉）、7は小谷2～3式（古墳時代前期前葉～中葉）に相当するものと考えられる。

第25図は弥生時代後期後葉～古墳時代中期を中心とした土器である（一部中世のものを含む）。1～3は注口土器の注口部である。2は21～13と同一個体の可能性が考えられる。4・7・9は高壺の脚部と考えられる。7には裾部4箇所に焼成前穿孔が施されている。9には裾部に3箇所の焼成前穿孔が認められる。6は小型高壺の壺部で、壺部内面にはミガキが施されている。5・8は低脚壺の脚部である。10は大型の高壺脚部であるものと考えられる。脚部の裾端部には強いナデが施され、凹線状をなす。11・13は瓶型土器の口縁部である。13には口縁部の裾に突帯が回る。11には突帯は回らないが、口縁部と肩部の境に緩やかな段が見られる。12は高壺で、胴部に突帯が回る。14は把手付きの甕あるいは瓶と考えられる。15は高壺の壺部である。16は鉢である。

1～3は草田5期（弥生時代後期後葉）、4・5・8は概ね草田5～6期（弥生時代後期後葉～終末期）、6・7・9・12は草田7期（古墳時代前期前葉）、10は草田6期（弥生時代終末～古墳時代初頭）、11・13は草田6～7期（弥生時代終末～古墳時代前葉）、14・15は古墳時代中期～後期に相当するものと考えられる。16は3層からの混入と考えられる中世の鉢である。

5. 調査V区（第28図）

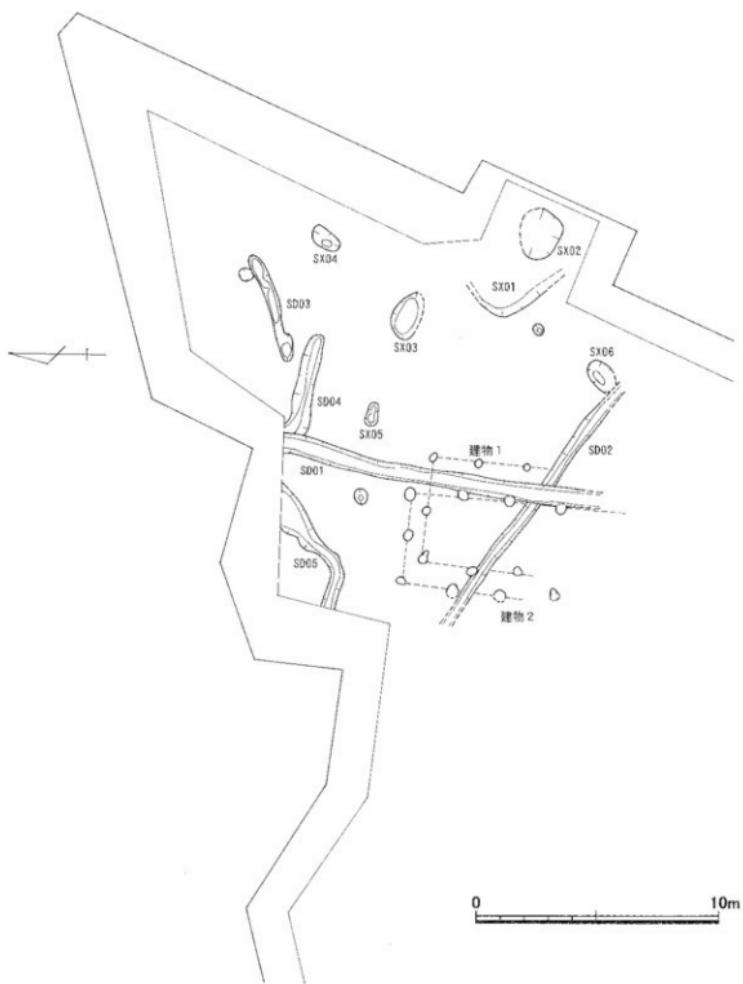
調査区が広いため、一気に水山下層を掘削することは困難であった。このため、東西方向にサブトレントを入れ、下層の確認を行った。しかし、ここでも湧水が激しかったため調査は困難を極めた。調査区の北東部でのみ掘削が継続でき、若干の遺構が検出された。

SX01（第29・31図）

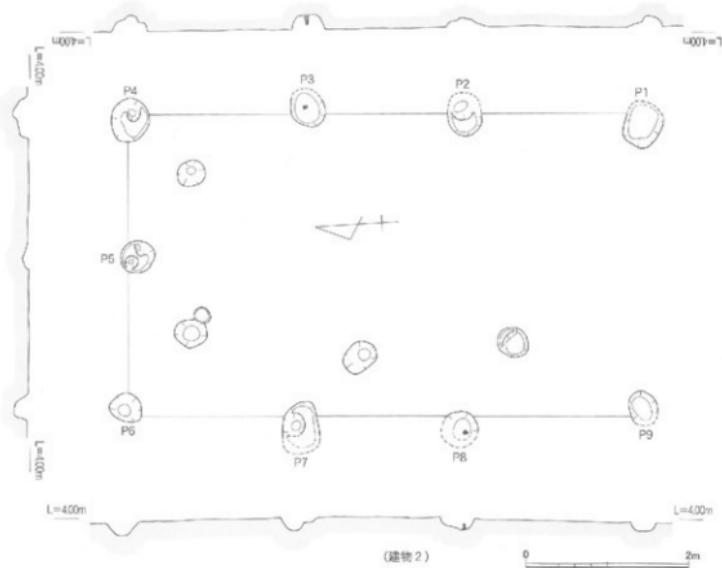
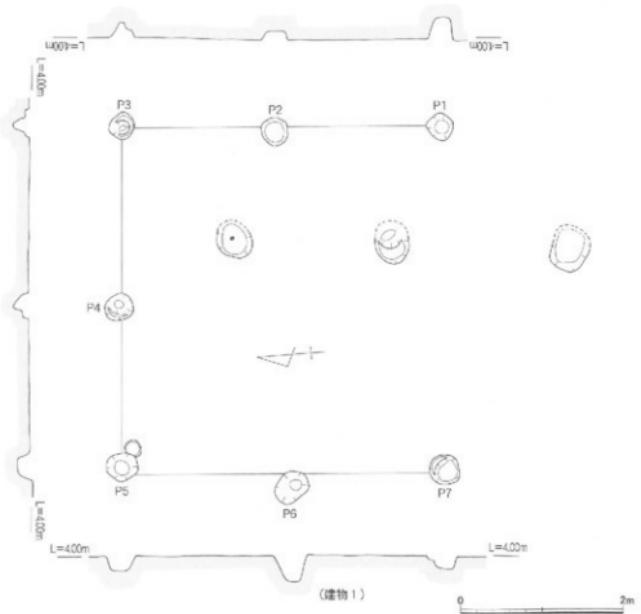
調査区の北東隅に位置する。平面形態は部分的にしか判明していないが、方形の可能性が考えられる。規模は南北2.0m以上、東西3.5m以上である。遺構は深さ20cm程度の緩い傾斜をなした掘り込みである。遺構埋土には炭化物が多く含まれている。遺物が床面直上より複数出土していることから、一括性の高い遺物である可能性が高い。遺構自体の広がりは、部分的な検出のためその性格は判然としないが、住居址の一部である可能性も考えられる。また、遺構埋土を洗浄したところ、碧玉製の管玉1点が検出された。

出土遺物（第33図）

SX01から出土した一括性の高い遺物群である。口縁部が残る遺物は、いずれも口縁が肥厚し、



第29図 V区中世水田下層検出の遺構配置図 ($S = 1/200$)



第30図 V区中世水田下層検出の建物1・2 (S = 1/60)

凹線が施されている。

1は小型の長頸壺と考えられる。外面の状態が摩耗しており調整は不明である。肩部に3条の沈線が部分的に確認できる。2は肥厚した口縁に3条の凹線文が施され、頸部に貼り付け突帯文が回る。3～5は高杯である。3は口縁部に3条の凹線文がめぐる。また、内面に杯部の底を充填する粘土の痕跡が見られる。4は口縁端部が欠失しているが、2条以上の凹線文がめぐる。5は完形品であるが、杯底部を充填した部分は失われている。外面杯部には横方向のミガキ、同じく脚部には縦方向のミガキが施されている。脚部と脚部縫には螺旋状に沈線が施されている。杯部内面には漆が付着している。6～9は壺である。6の口縁は他の壺に比べて、薄く凹線文は2条である。他の壺の口縁部には3条の凹線文がめぐる。8の底部には粘土を円盤充填した痕跡が観察される。10は壺の底部である。外面底部付近にはミガキの後にナゲが施されている。

1・2・4・6はIV-1様式、その他はIV-2様式の様相（弥生時代中期後葉）を示す。

SX02（第32図）

SX01の東側に位置する南北1.4m×東西1.5mの隅丸方形の土壙である。この遺構は他の遺構を切っており、出土遺物は遺構上面付近と、遺構埋土の1層から出土している。

出土遺物（第34図）

1は口縁が肥厚し、2条の凹線文が回る壺である。2・3は壺の底部である。3は底部には粘土を円盤充填した痕跡が観察される。

SD02（第29図）

ほぼ東南東方向と西北西方向を向く溝である。検出できた溝の規模は、全長10m以上、幅40～50cm、深さ約20cmである。建物1・2、SD01に切られている。遺構埋土より土器片が3点出土している。

出土遺物（第35図）

1～3は壺の口縁部である。1の口縁端部は丸味を帯び、直立した口縁部には3条の擬凹線がめぐる。2・3は口縁端部が丸味を帯びながら、僅かに外方に向く。それぞれ、3条と7条の擬凹線がめぐる。

1はV-1様式（弥生時代後期前葉）、2・3はV-2様式（弥生時代後期中葉）の様相を示す。

SD03（第29図）

調査区北東部北寄りに位置する東西長4.5m×幅0.5mの溝状の遺構である。深さは一定ではなく、複数の遺構が切り合っている可能性が考えられる。遺構埋土より土器片が2点出土している。

出土遺物（第35図）

4の肥厚した口縁部は内傾し、3条の凹線文が施される。5は壺の底部である。内面底部付近までケズリが施され、指揮さえの痕跡が認められる。

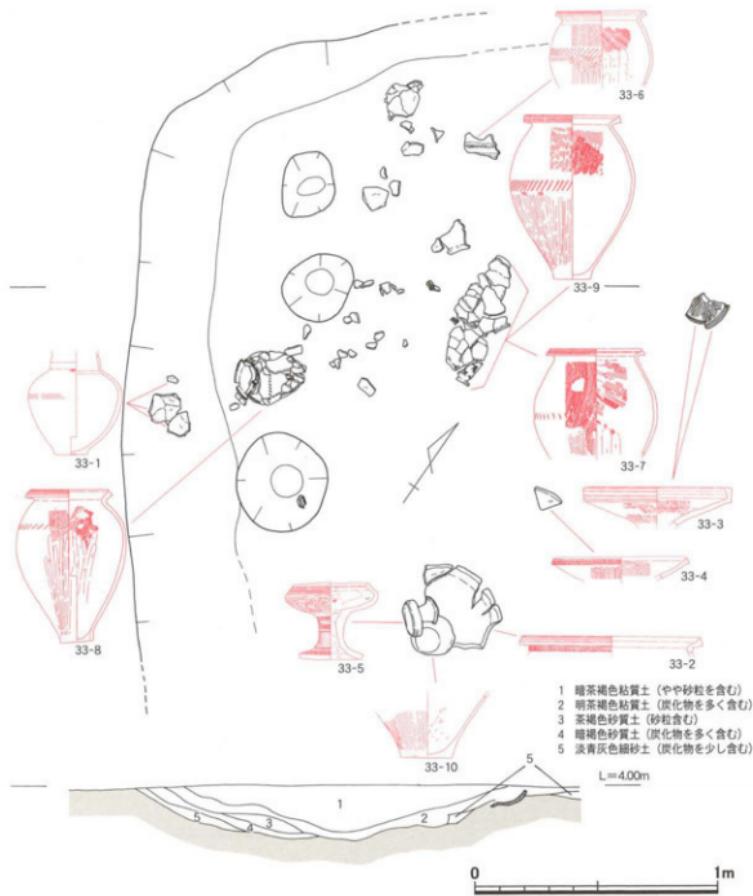
4はIV-2様式、5はIV-2～V-1様式（弥生時代後期初頭～後期前葉）の様相を示す。

SD04（第29図）

SD01に切られた溝状の遺構である。東西長4.3m、幅1.0m、深さ約25cmである。遺構埋土より6点の遺物が検出されている。

出土遺物（第35図）

口縁部の残る土器には、すべて凹線文が施されている。6・7・8は壺であるが、いずれも凹線



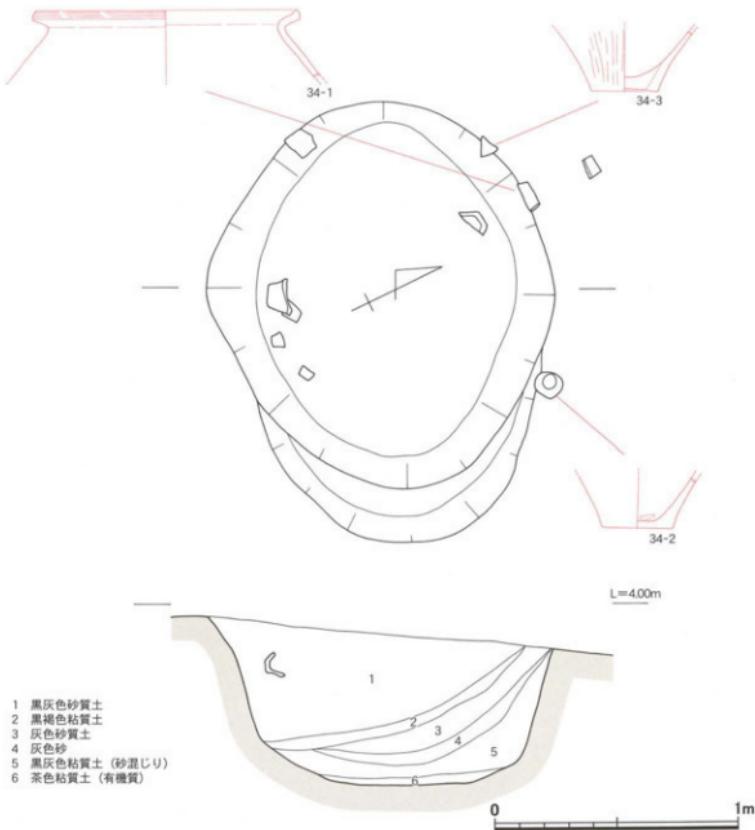
第31図 V区SX01遺物出土状況・土層断面図 ($S = 1/20$)

文が施されており、内面には頸部までケズリが施されている。6の外面肩部にはハケを施した原体の木口で刺突列点文が施されている。7は口縁部のくびれ部が平らになり、二重口縁化の様相をなす。9・10は甕の底部である。9は底部に厚みがあり、筒状をなす。10は外面にススが付着する。

これらは、V-1様式（弥生時代後期前葉）の様相を示す。

S005 (第29図)

調査区北東部から調査区外北側に延びる溝状の遺構である。現状で「L」字状のプランをなす。検査出面の全長は6.0m、幅0.7~1.3m、深さ約10cmである。遺構埋土より土器片が出土している。



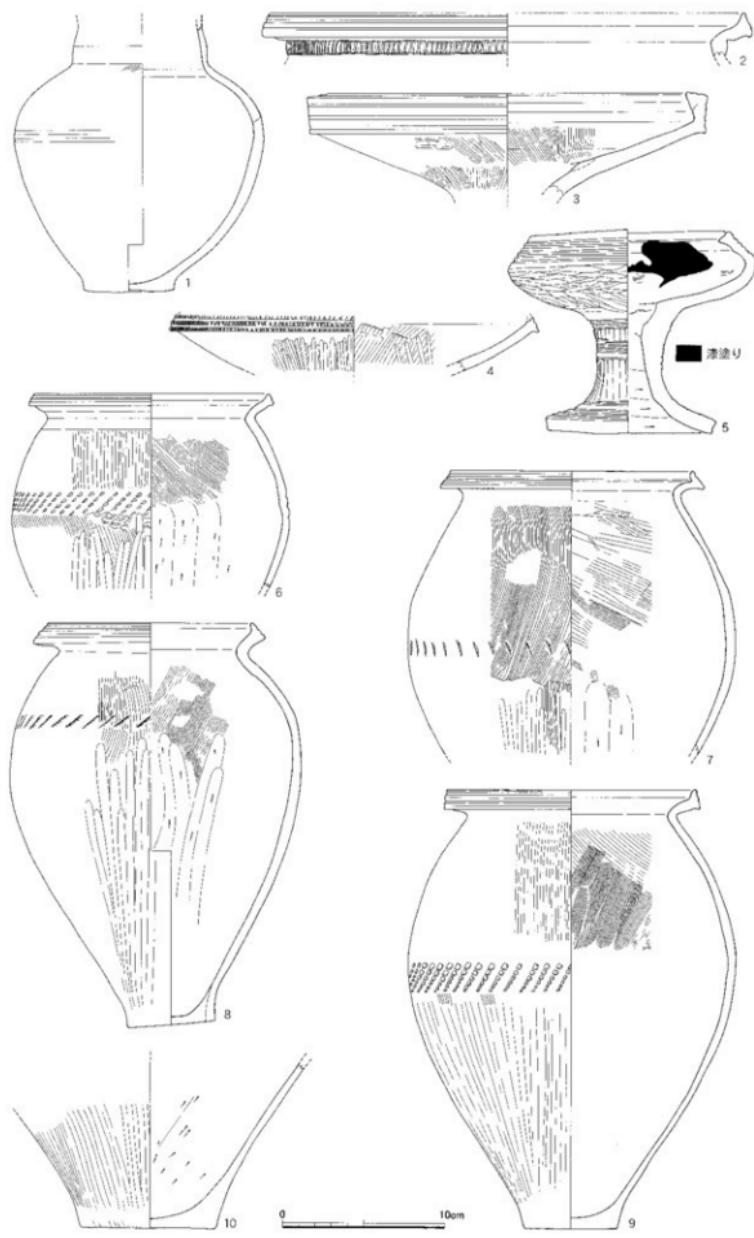
第32図 V区SX02遺物出土状況・土層断面図 ($S = 1/20$)

出土遺物（第35図）

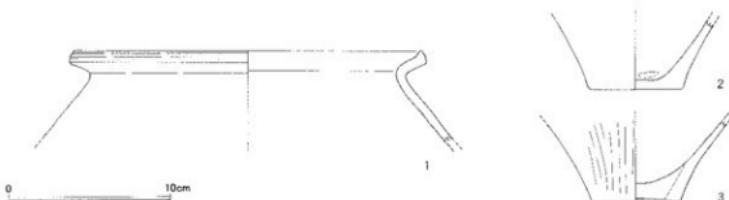
12は口縁部に凹線文が施され、内面のケズリは頸部にまで達している。V-1様式（弥生時代後期前葉）の様相を示す。

包含層（3・4層）出土遺物

26-1～5は4層出土の弥生土器で、6は3層出土の土師器である。1は口縁が肥厚し、2条の凹線文がめぐる。2・3は口縁部がさらに肥厚したもので、それぞれ3条と4条の凹線文がめぐる。4は高坏の坏部である。口縁端部に刻目文、4条の凹線文がめぐる。5は紡錘車と考えられる土製円盤である。壺の胴部片を円形に成形している。内面中央に穿孔を施そうと試みた痕跡が見られる。6は底部外面以外に赤色顔料を塗布したものである。1はIV-1様式（弥生時代中期後葉）、2～



第33図 V区SX01出土遺物 (S = 1 / 3)



第34図 V区SX02出土遺物 (S = 1 / 3)

4はIV-2様式（弥生時代中期後葉～後期初頭）、5は弥生時代中期～後期の様相を示している。6は底部外面を除いた内外面に赤色顔料が塗布された胴部が直線的な土師器環である。9世紀代のものと考えられる。

6. 調査VI区（第28・29図）

水田下層の調査は湧水が激しいため、ここでは水田下層部の花粉分析を行って、中世以前の古環境を確認した。詳細は第5章にあるが、水田下層には弥生時代以降の水田が存在していたことが判明している。

包含層（4層）出土遺物（第27図）

1はほぼ完形で検出されている。単純口縁の口縁端部は平坦面をなしている。口縁部内面にも横方向のハケが施されている。口縁部外面には僅かに外反と内湾を繰り返す二重口縁の名残が見られる。古墳時代中期の壺と考えられる。

7. 調査VII区

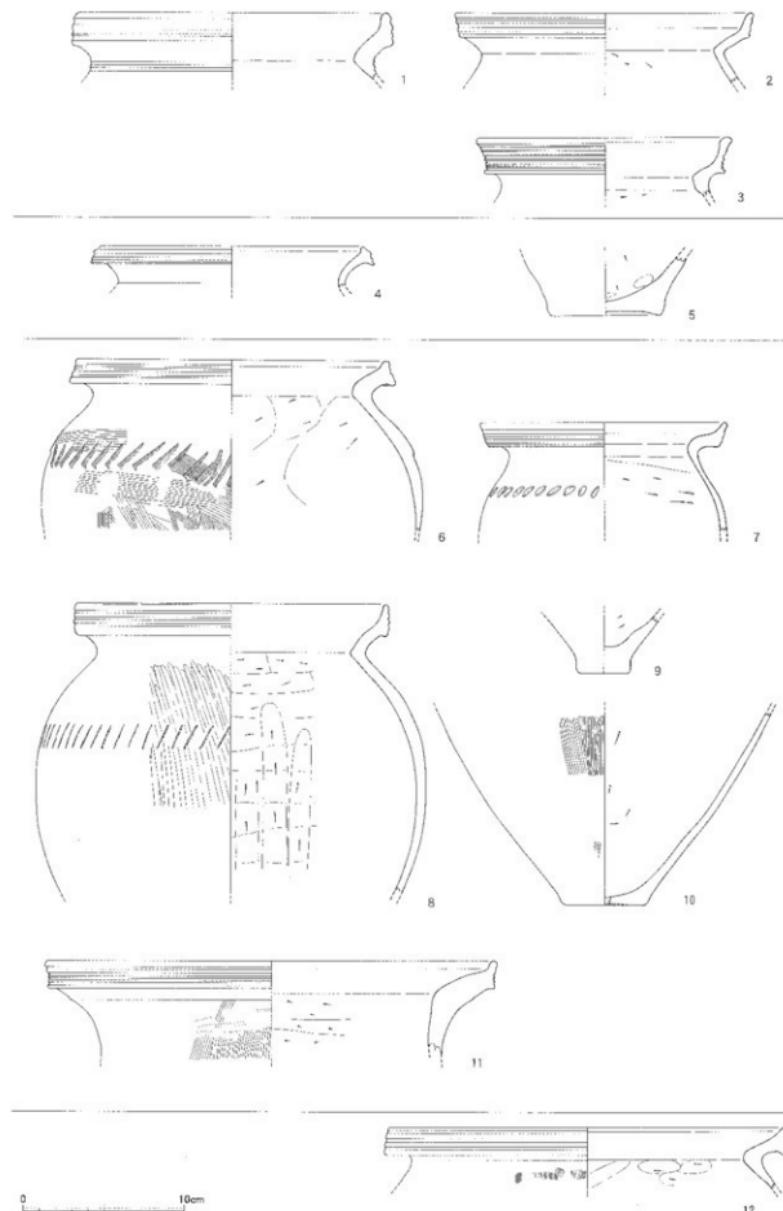
(1) 四隅突出型墳丘墓：中野美保1号墓（第36・37図）

VII区水田下層の調査はVI区東端から開始した。水田床土直下の淡黒色粘砂土層からは多量の須恵器、土師器が検出された（3層包含層）。さらに、その直後には多数の石が列状になって検出された。この石列の検出当初は、これが掘り込まれて並べられたのか、遺構面に並べられたのか判断が付かなかったため、先ず水田床上直下に3層包含層の掘削に専念した。この時、石列の間に須恵器や土師器が多数入り込んだ状態で検出された。しかし、包含層の掘削を進めるうちに石列の一部が凸状に張り出し、石列付近で口縁部を逆さまにした弥生後期の壺が原位置を保っているかのように据え置かれている状況が検出された。結果、石列は一部攢乱されているものの、四隅突出型墳丘墓の外郭を描き出すに至った。石列の内側はその外側に比べて、ややしっかりした土質であった。この石列は四隅突出型墳丘墓における「立石」に該当することが判明した。

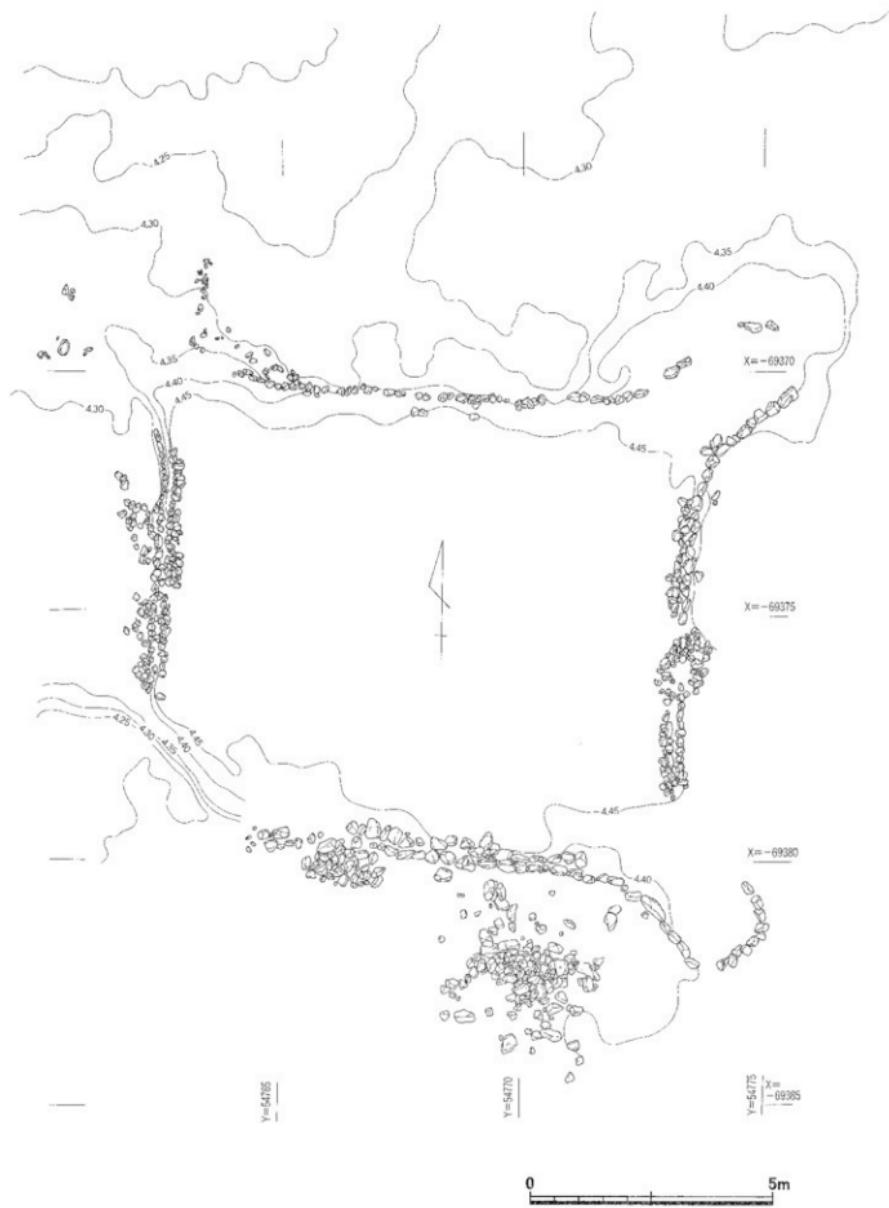
墳丘は盛土で構築され、墳丘上部と南西部の突出部は黑色系粘質土の3層包含層遺物から見て、奈良～平安時代に削平を受けていたものと考えられる。北西突出部は貼石・立石列が検出されず、その転石なども殆ど見られなかった。

規模・配石構造

中野美保1号墓の復元規模は、突出部を含めると南北約14m前後(a)、東西は復元で約15m前後



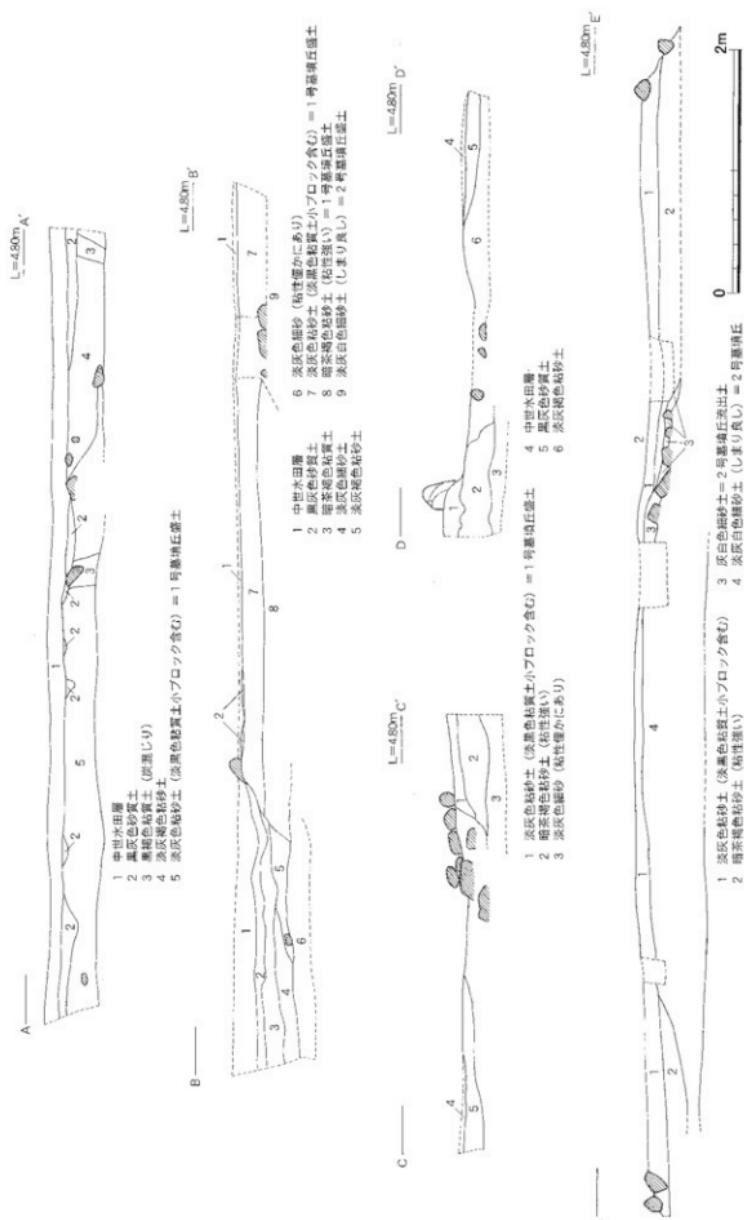
第35図 V区SD02・03・04・05出土遺物 (S = 1 / 3)



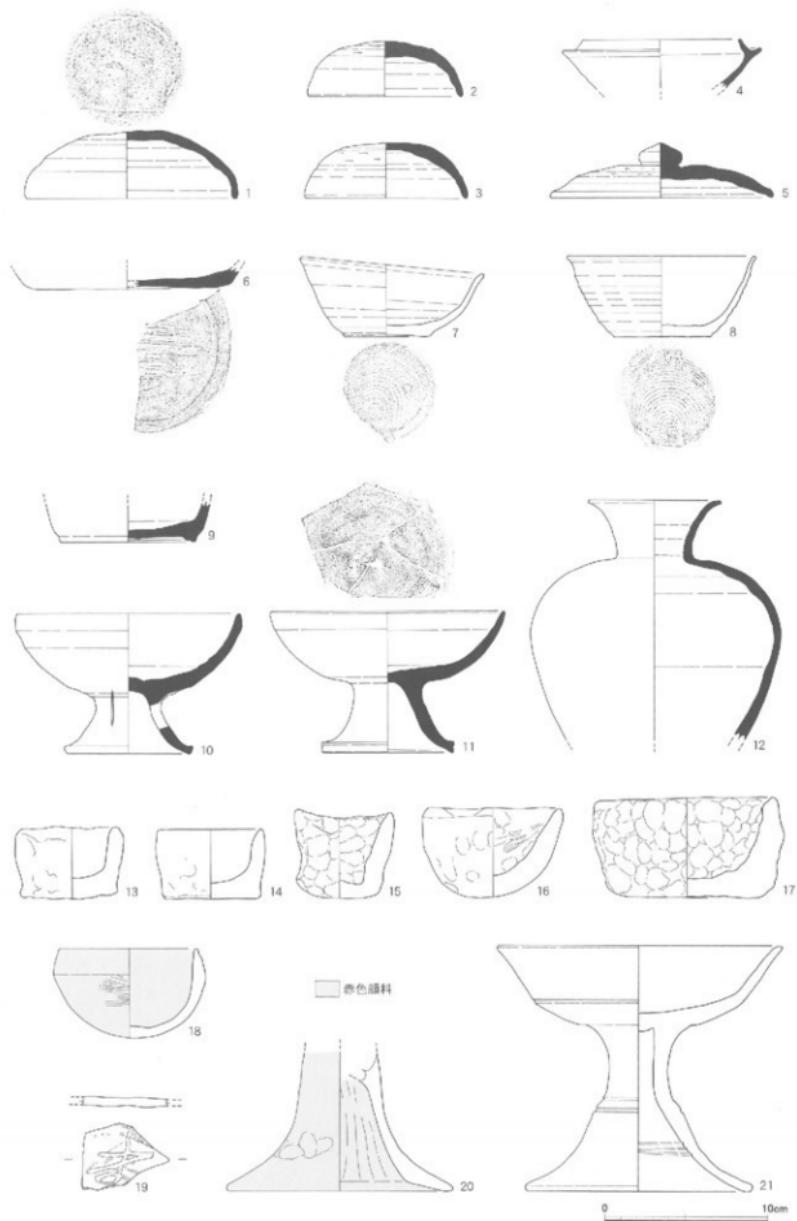
第36図 VII区中野美保 1号墓墳丘測量図 (S = 1 / 100)



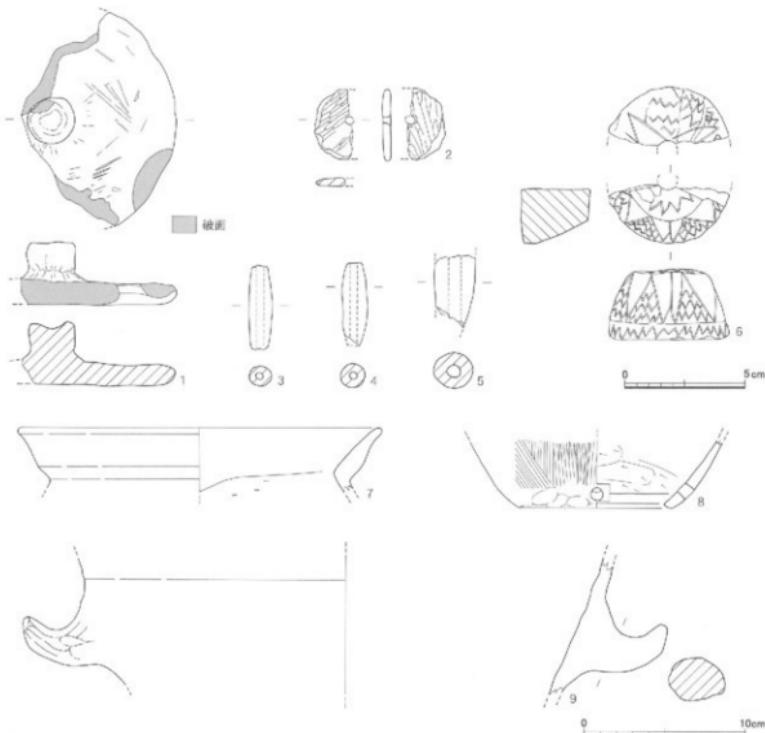
第37図 VII区中野美保1号墓と周辺造構の平面図 (S = 1 / 100)



第38図 VII区中野美保1号墓・2号墓填丘土層図 ($S = 1/40$)



第39図 VII区包含層（3層）出土遺物（1）（S=1/3）



第40図 VII区包含層（3層）出土遺物（2）（1～5・7～9はS=1／3、6はS=1／2）

(b)、突出部を除くと南北約9.5m (c)、東西約11m (d) になる。標高約4.25mに當まれ、墳丘の高さは最も良好な墳丘西側でも立石底面から見て15cm程度である。北東突出部の幅は約3.5m (e)、その長さは復元で約2.5m (f) と約3.5m (g) である。同じく、南東突出部の幅は約3.0m (e)、その長さは約2.0m (f) と約3.5m (g) である（表9参照）。墳丘南側、南東突出部、北東突出部では、人頭大の立石が集中して使用されている状況が確認できる。その他の辺も人頭大の立石が使用されているが、大半は拳大の立石である。同じく、墳丘斜面に貼り付けられた貼石でも拳大から人頭大の礫が使用されている。場所によって礫の大小に差異がある。遺存状況の良好な墳丘西側の貼石は、拳大の石が使用されている。現状では2～4段貼り付けられた状況である。同じく、墳丘東側の貼石もこれと同様の規模である。これに対し、墳丘南側では人頭大の比較的大きな20～30cm前後の礫を使用している。墳丘北側のそれは拳大の礫が中心に使用されている。

また、立石や貼石に付設されているかのように礫が円形状に組まれた石列が幾つか確認できた。調査時においては、これらの円形状の石組みが偶然、あるいは主観的にそのように見えてしまった結果による可能性も検証する必要があった。しかし、墳丘東側のほぼ中央部で、立石に隣接した円

形状の石組（直径45cm）から注口土器片（全体の1／3が残存、ただし口縁部のみ完存する）が出土しているの確認したのを始め、墳丘各辺の縁石や貼石に円形状の石組みが隣接して幾つも確認されるに至った。このことから、本報告書においてはこれらの石組みを遺構と認識して報告する。これは第6章で後述するように、他の四隅突出型墳丘墓にも、これに類似した石組みが存在することから首肯できるものとする。

これらの遺構をここでは「円形状石組」として、仮に命名する。1号墓の円形状石組は確認出来るものとして、少なくとも10箇所前後確認することが出来る（第37図）。また、半円や弧状を描いているものが存在する。この場合は礫が3～4しか使用されなかった結果なのか判断できないが、円形状のものが破壊されている可能性も考えられる。平面規模は概ね50cm前後になる。

遺物出土状況（第42～45図）

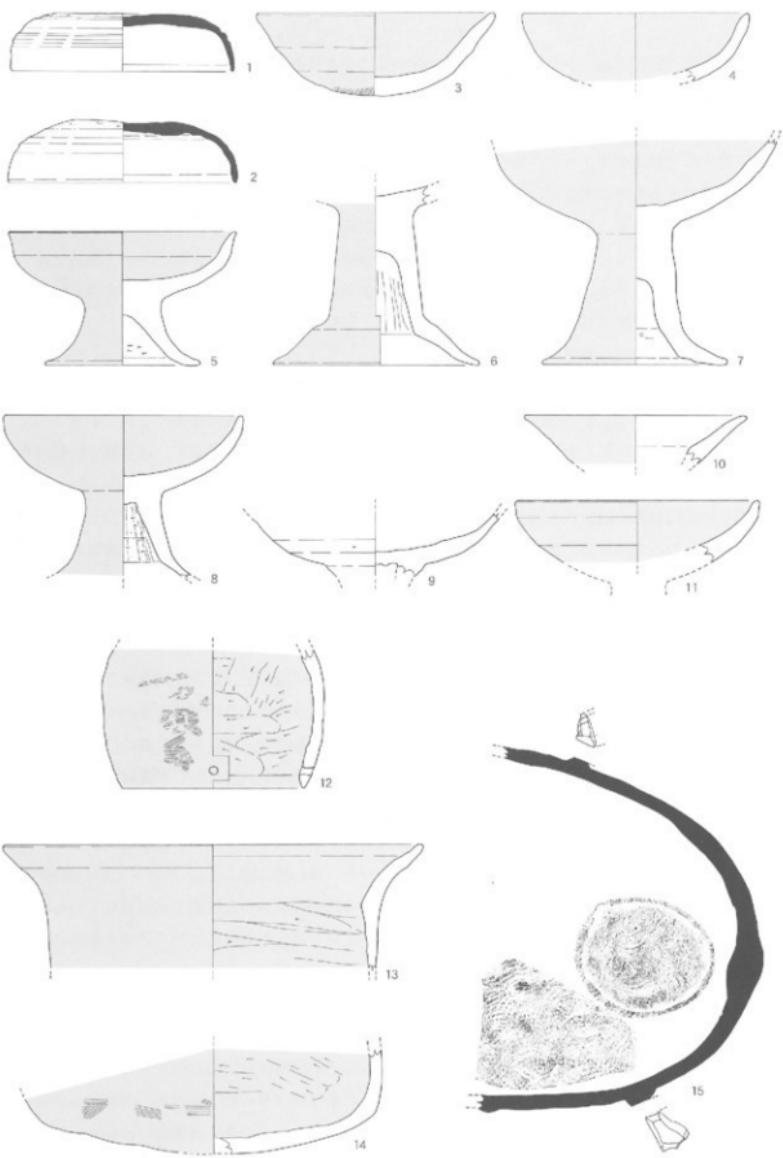
1号墓に確実に伴う遺物としては、原位置を保っていると考えられるものが4個体、可能性の高いものが1個体ある。その他、墳丘北の縁石付近で破片となっているものが検出されている。

原位置を保っていると考えられるもののうち、先述した注口土器以外は全て、墳丘裾で口縁部を逆さにした状態で据え置かれていた。口縁部のみ完存しているが、胸部以下は失われている。なお、検出された口縁部の周囲にも胸部以下の破片は僅かしか検出されなかつた。これらの出土地点は第42図に記した。このうち、第42図の②は四隅突出型墳丘墓と認識していない段階に検出された遺物であったため、出土地点の記録と写真撮影を行った後に取り上げてしまい、出土状況の詳細な実測図は作成していない（図版13下）。なお、他の遺物の出土状況の実測図は（第42図）に実測範囲を記し、第43～45図にその詳細図を掲載している。

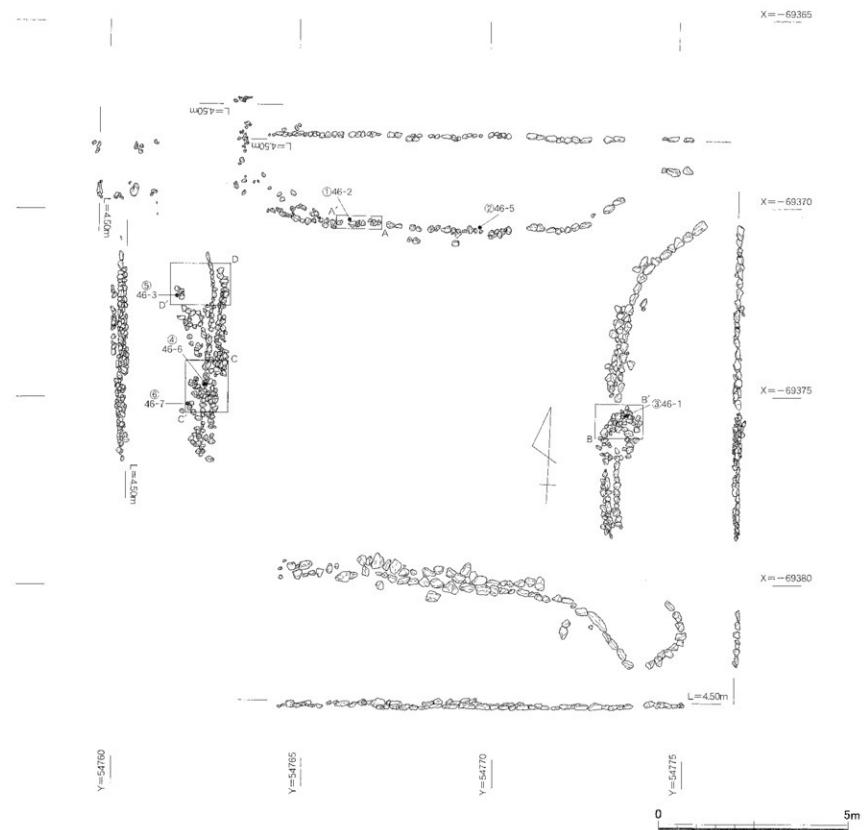
墳丘北の立石裾部では2箇所で壺が検出された（第42図の①と②）。両者は口縁部を倒立させた状態で検出されている。また、墳丘東辺では立石に付随するかのような円形状石組の中から、注口土器の破片が検出されている（第42図の③）。墳丘西辺の北側には、倒立させた壺の口縁部が検出されている（第42図の⑤）。この壺は立石から約1m離れた場所で、二つの石が弧状を描くように並べられたその内側で検出されている。石が意図的に弧状に並べられたか否かの判断は難しいが、この周囲に円形状石組が確認されることから可能性は高いものと考えられる。同じく墳丘西辺の南側では低脚壺が一点と鼓形器台の破片が検出されている（第42図の④と⑥）。前者は完形の遺物で、やはり倒立した状況で出土しているが、立石や貼石から10cm程度浮いた状態で検出されている。このため、墳丘の周辺が埋没した後に、墳丘上から転落した可能性や意図的に倒立させて置かれた可能性が考えられる。なお、内部には土砂が充満していた。

これに対し、墳丘裾で検出された壺が3点は倒立した状態で出土している。これは偶然とは考えにくく、また、墳丘上からの転落とも考えにくい。墳丘の裾部で出土し、埋没した土の上にも乗っていない状態であったことから、1号墓が造られた後の早い段階に意図的に倒立させて使用した土器と考えられる。ただし、墳丘西辺の北側で検出された壺は墳丘から約1m離れた円形状石組の一部と考えられる弧状の石列から出土しているため、他の2点に比べて若干時間的には後出する可能性も考えられる。もちろん、1号墓築造時に円形状の石組を付設していた可能性も考慮する必要はある。

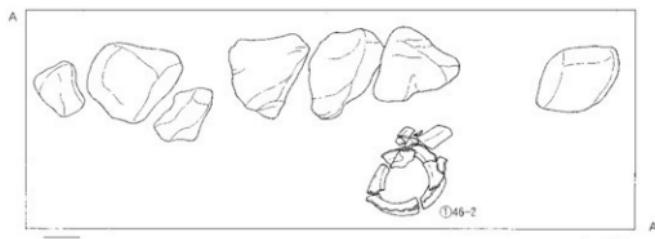
同じく、墳丘西側の円形状石組の中から検出された注口土器も、意図的に円形状石組の中に入れられたとする前提が必要であるが、上述に従えば時間的には1号墓に後出する可能性が考えられる。



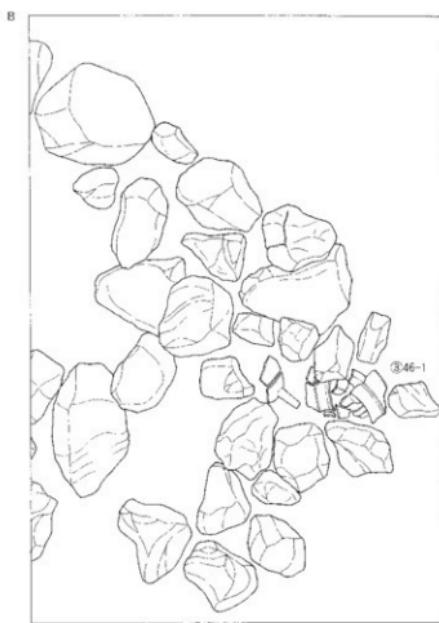
第41図 VII区包含層（3層）出土遺物（3）（1～14はS=1/3、15はS=1/4）



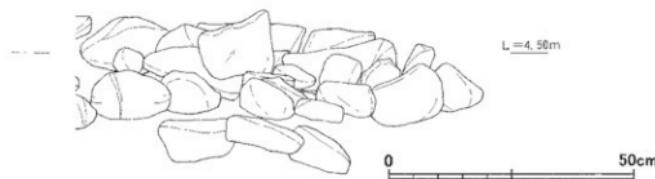
第42図 VII区中野美保 1号墓遺物出土地点と平・立面図 (S = 1 / 100)



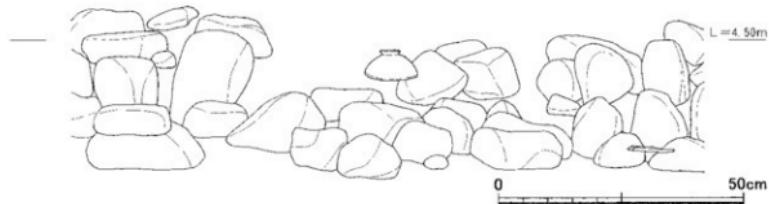
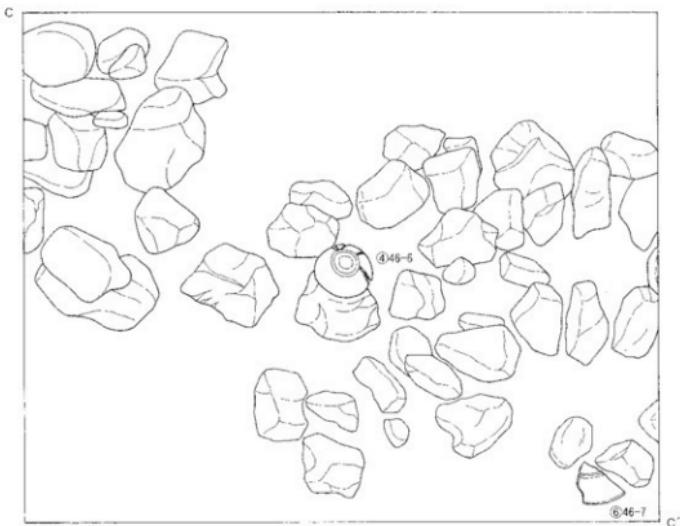
A'



B'



第43図 VII区中野美保1号墓遺物出土状況（第42図A・A' と B・B'枠）（S = 1/10）



第44図 VII区中野美保1号墓遺物出土状況（第42図C・C'枠）(S=1/10)

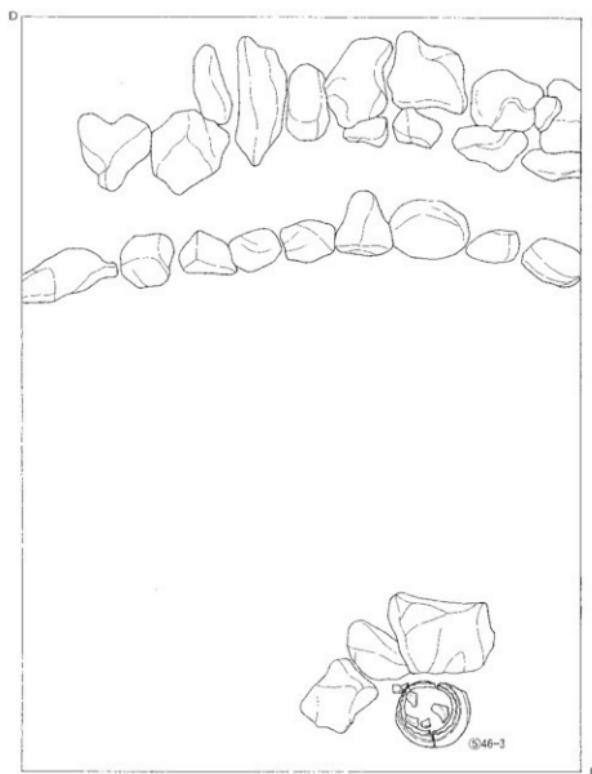
さて、出土状況からこれらの遺物の新旧を並んで類推すれば、大まかではあるが、①・②→(③・⑤)・④・⑥)の流れが考えられる。ここで、これらの遺物の出土状況とその型式学的な比較検討が必要となる。

出土遺物（第46図）

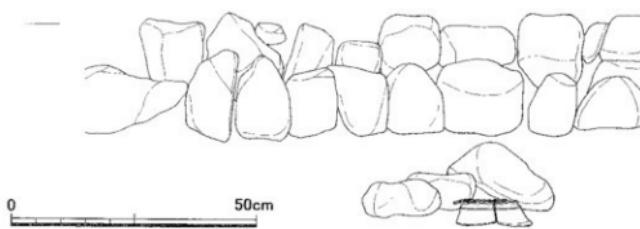
1は③の出土位置に対応する注口土器である。口縁部の擬円線にはナデが施されており、擬円線にシャープさは見られない。肩部～胴部の擬円線にはナデは施されていない。また、貝殻文が施されている。

2は①の出土位置に対応する壺である。口縁部には強いナデの跡が見られる。また、頸部直下に波状文が施されている。施文する際の始点と終点が観察でき、正位状態で反時計回り方向に施文される。波状文の間隔は狭く、細かな文様となる。

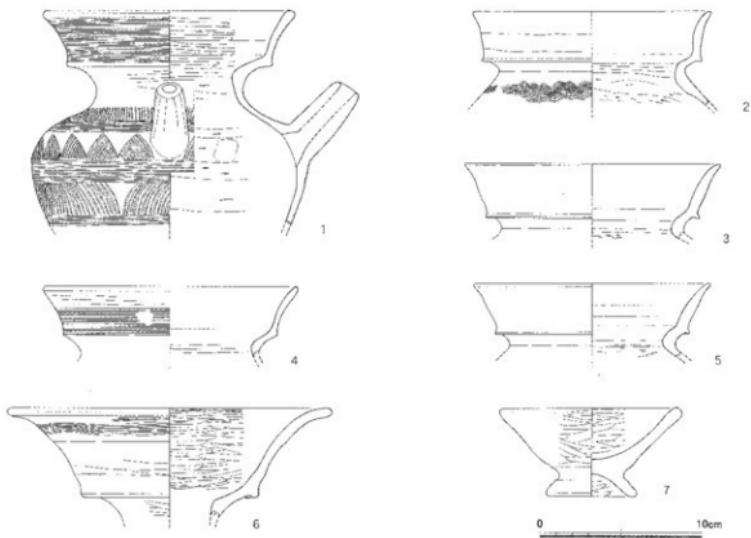
3は⑤の出土位置に対応する壺である。口縁部の外反は4に比べて強く、端部もややシャープになる。口縁部のナデは4ほどではないが観察できる。



L = 4.50m



第45図 VII区中野美保1号墓遺物出土状況（第42図D・D'枠）（S=1/10）



第46図 VII区1号墓周辺出土遺物 (S = 1 / 3)

4は1号墓の北側立石付近の墳丘外埠上内から出土したものである。口縁部の1／2程度の破片である。口縁部の擬凹線にはナデが施されており、擬凹線のシャープさは見られない。口縁端部は丸みを帯びる。

5は②の出土位置に対応する壺である。口縁部は3と同じく外反が強い。口縁部のナデは4ほどではないか明瞭に観察できる。

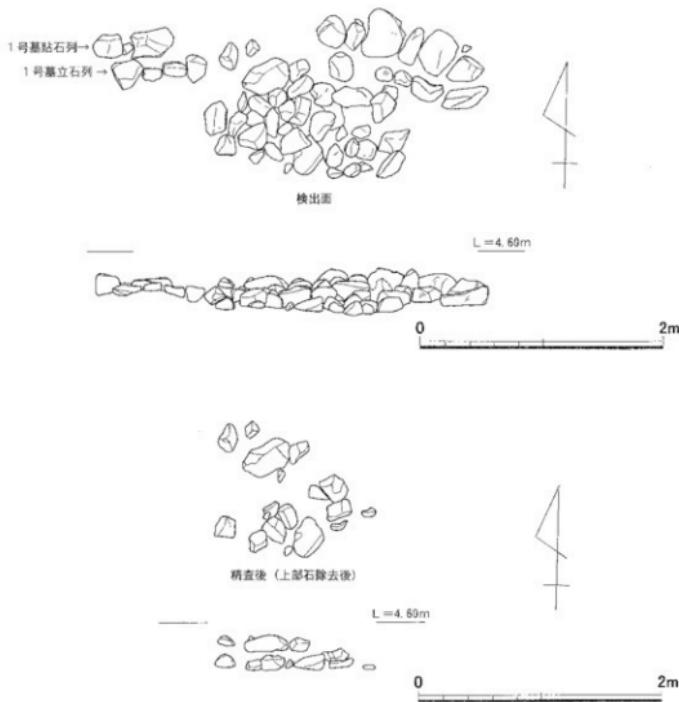
6は⑥の出土位置に対応する鼓形器台である。口縁部の擬凹線にはナデが施されており、擬凹線のシャープさは見られない。

7は④の出土位置に対応する低脚壺である。脚部の外面以外、内外面とも口縁端部の際までミガキが施されている。

以上の土器は擬凹線とそのナデ消しの有無で大別することが出来る。また、1の注口土器は口縁端部が丸みを帯び、貝殻施文が見られるなど4～6に比べて占い要素が看取できる。本稿で参照する出雲地方の上器編年研究に従えば、1・4・6・7が草田3期、2・3・5が草田4期の範疇に収まる。

先に出土状況に先後関係を設けたが、遺物の型式差とは必ずしも対応しない。すなわち、①・②(草田4期)→③(草田3期)・⑤(草田4期)→④・⑥(草田3期)となる。

このことから、主体部が複数営まれた可能性を考慮して、それに伴う後代の墳墓祭祀を仮定した場合、1号墓の存続期間は草田3～4期(弥生時代後期後葉)になるものと考えられる。なお、四隅突出型墳丘墓の変遷を捉える上で、型式学上の草田3期と4期で1つの段階とする見解が提示されている^[6]。



第47図 VII区 1号集石遺構の平・立面図 ($S = 1/40$)

(2) 集石遺構

1号墓の墳丘南側には多数の石が2箇所で集中して見つかっている。これらを平面的に見た場合、複数の石が同心円状に集められていることが確認されたので、遺構として認識した。円形状石組と類似するが、石が密集していることから、これとは区別されるものと考えられる。また、四隅突出型墳丘墓の周辺に営まれた配石幕・石岡上塙(墓)等の埋葬施設の可能性も想定し、調査は平面・立面を精査した上で、上部の集石を解体しつつ、墓坑の検出等を行うなど精査を加え、断ち割り調査を行う方針を採った。

1号集石遺構 (第47図)

墳丘南側の西よりに位置する集石遺構。中野美保1号墓の縁石に付隨するかのように、隣接している。このため、一部の集石は1号墓の縁石と区別が出来ない。集石の広がりは $1.75 \times 1.0\text{m}$ 程度である。検出面での石の配置は円形状の石組が2つ、眼鏡状に連結しているように見える。上部の石を除去したところ、特に明確な円形状等の集石は確認されず、掘方等も検出できなかった。1号墓南辺の墳丘裾から断ち削を入れ、土層の確認作業を行った (第38図C-C'、D-D')。しかし、すでに還元状態の土質になっており、最後まで土層の違いを確認できなかった。従って、1号

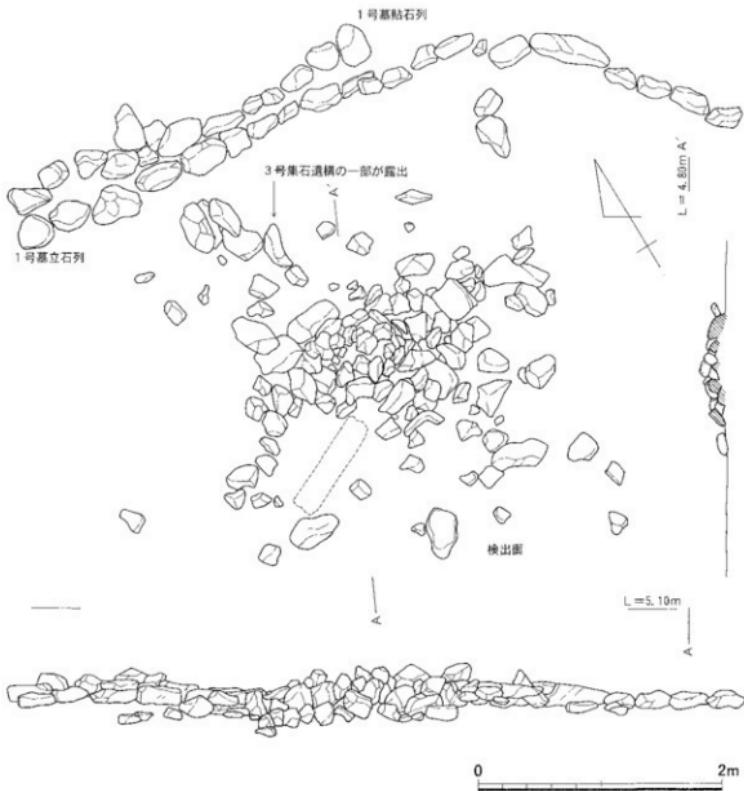


第48図 VII区1号集石遺構出土遺物
(S=1/3)

集石遺構の性格は不明である。ただし、墳丘周辺の堆積土から見て、1号墓とはほぼ同時期か、後出して造られたものと考えられる。

出土遺物(第48図)

1号集石遺構周辺の埋土から上器片が1点出土している。壺の口縁部で、擬凹線をナテ消している。弥生時代後葉(草

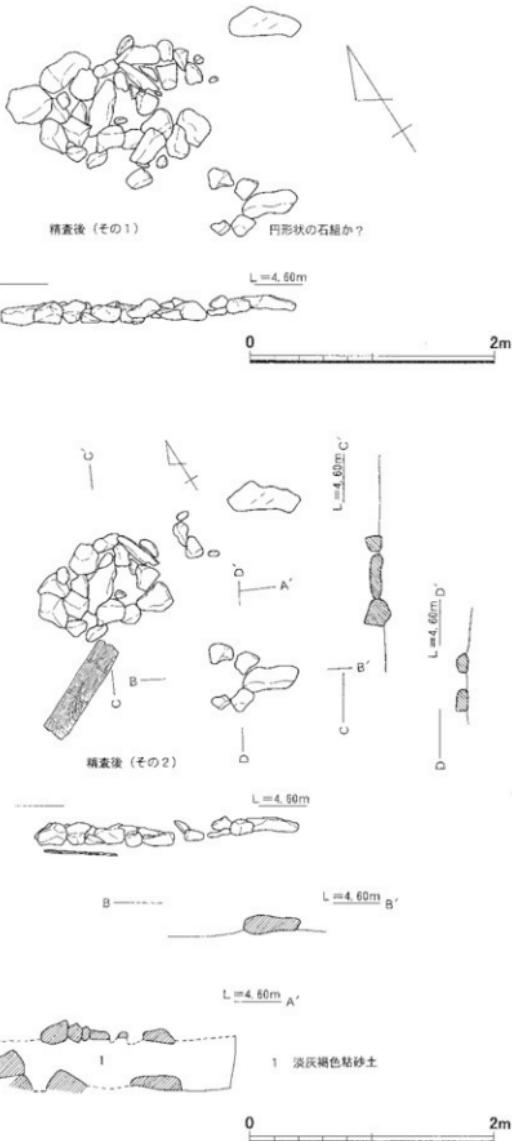


第49図 VII区2号集石遺構の平・立面図 (S=1/40)

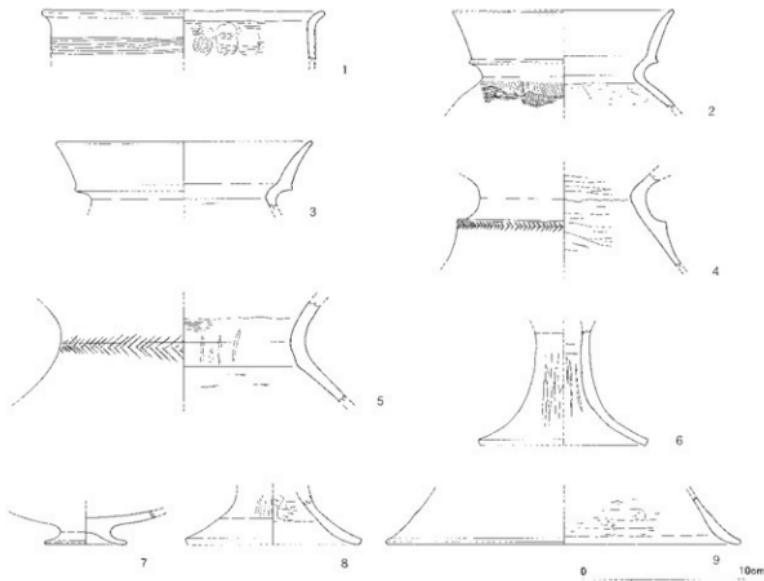
山4期)の時期が考えられる。

2号集石遺構(第49・50図)

墳丘南側の東よりに位置する集石遺構。その中心部は中野美保1号墓から約2.0m程度離れている。検出した段階では、同心円状に集石する中心部から縁辺に向かって石が散乱している状況が確認できた。



第50図 VII区 2号集石遺構精査時の平・立面図 ($S = 1/40$)

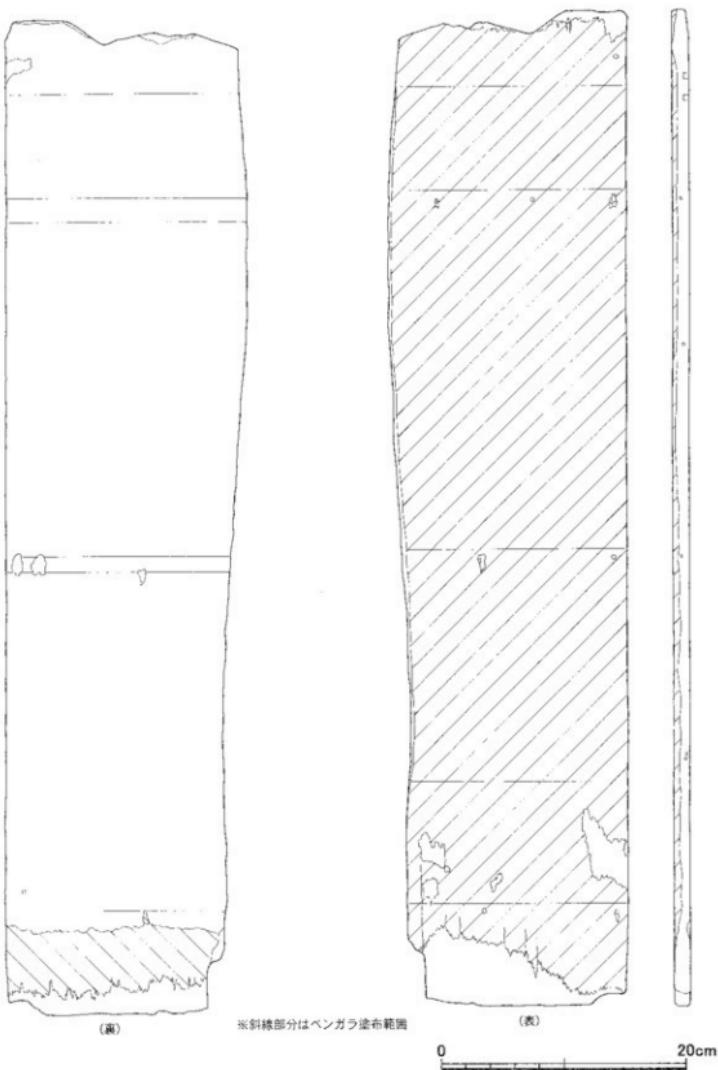


第51図 VII区 2号集石遺構周辺出土遺物 (S = 1 / 3)

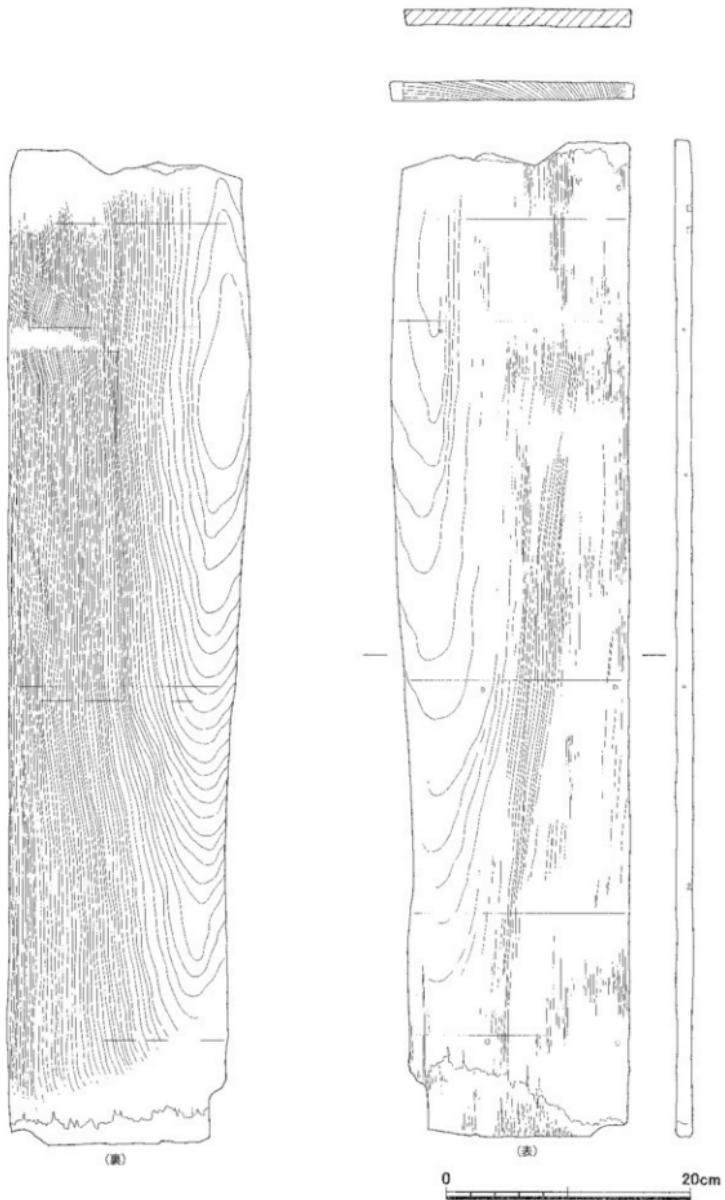
これらの散乱した石が2号集石遺構に付属するものか否かの判断は困難であった。そこで、浮いている石や中心部の上部にある石を2段階に涉って観察しながら除去し、1号集石遺構で採った方針で調査を行った。散乱した石のうち、掘わりの良い石を残しながら精査を行った結果、中心部の南側に半円状の石組が確認できた。同じく、中心部は同心円状に石が2~3重にめぐっているのが確認できた。さらに周囲の埋土を除去しながら中心部の外側の石を除去した。その結果、集石遺構の中心に20×30cm前後の空間があり、周囲の石に比べてやや小さい砾が1点存在するのが確認できた。また、中心部の東側にも弧状を描く石組が検出された。なお、2号集石遺構は同心円状に石が集石していると表現した。もちろん部分的にしか同心円状を呈していない集石もあるが、円形を意識していることは確認できるものと考える。

一方、中心部の南西部で木製品が1点出土している。2号集石遺構に直接伴う遺物かの判断は調査時点では出来なかった。調査時の土層観察では層位の違いを確認できなかつたが、木製品出土位置の周辺にのみ、石が見られない点は不自然であった。また、木製品自体が非常に新しい技術によつて加工されていることを指摘された^[6]。そこで、¹⁴C年代測定を実施したところ、17世紀後半~19世紀初頭の非常に新しいものとの測定結果が出た。このことから、木製品出土位置周辺に石が存在しない点も考慮すれば、本製品は後世の遺構、あるいは後世の搅乱に伴うものである可能性が非常に高い。なお、樹種鑑定の結果、ハリギリ (*Kalopanax pictus Nakai*) であることが同定された^[6]。

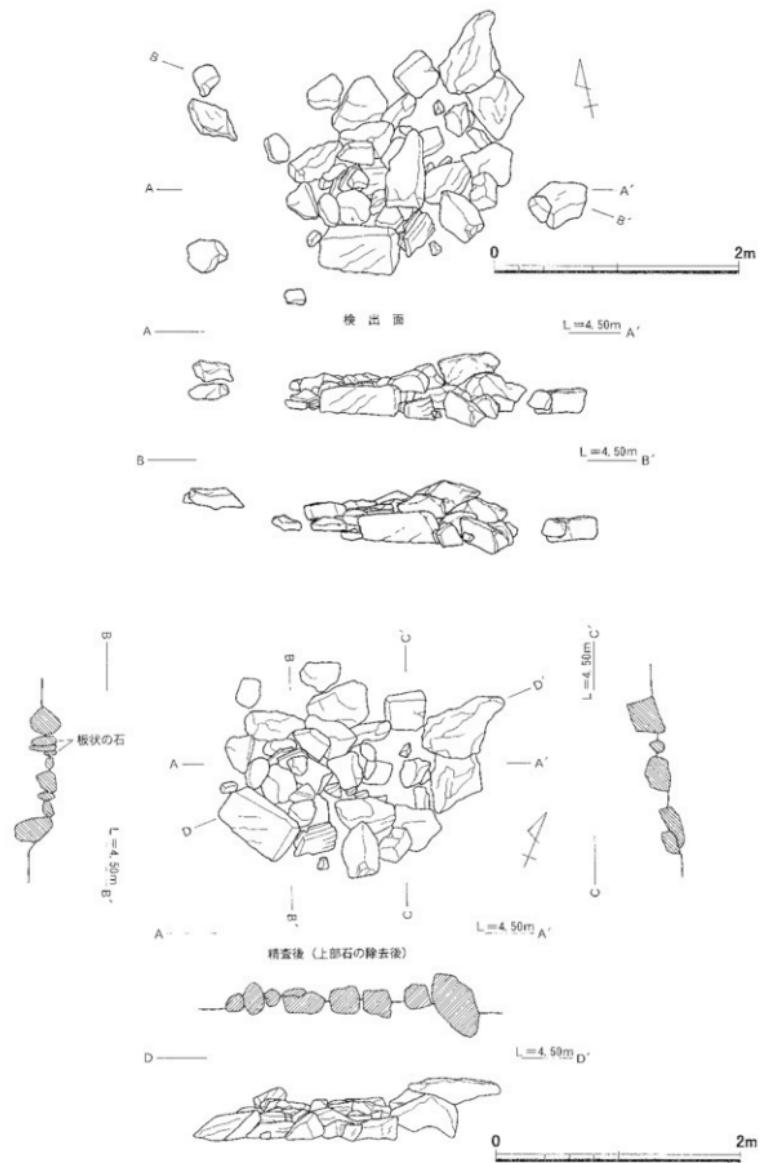
2号集石遺構に対しては、最終的に断ち割り調査を行つたが掘方等の土層の違いを確認できず、



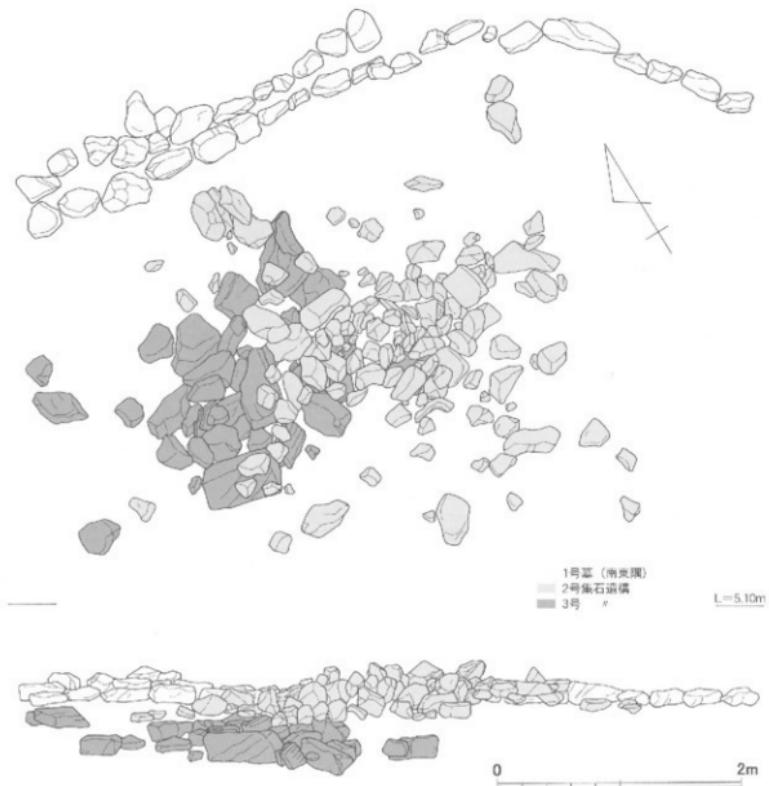
第52図 VI区2号集石遺構付近出土の不明木製品(1)(S=1/4)



第53図 VII区 2号集石造構付近出土の不明木製品 (2) (S = 1 / 4)



第54図 VI区 3号集石遺構の平・立面図 ($S = 1/40$)



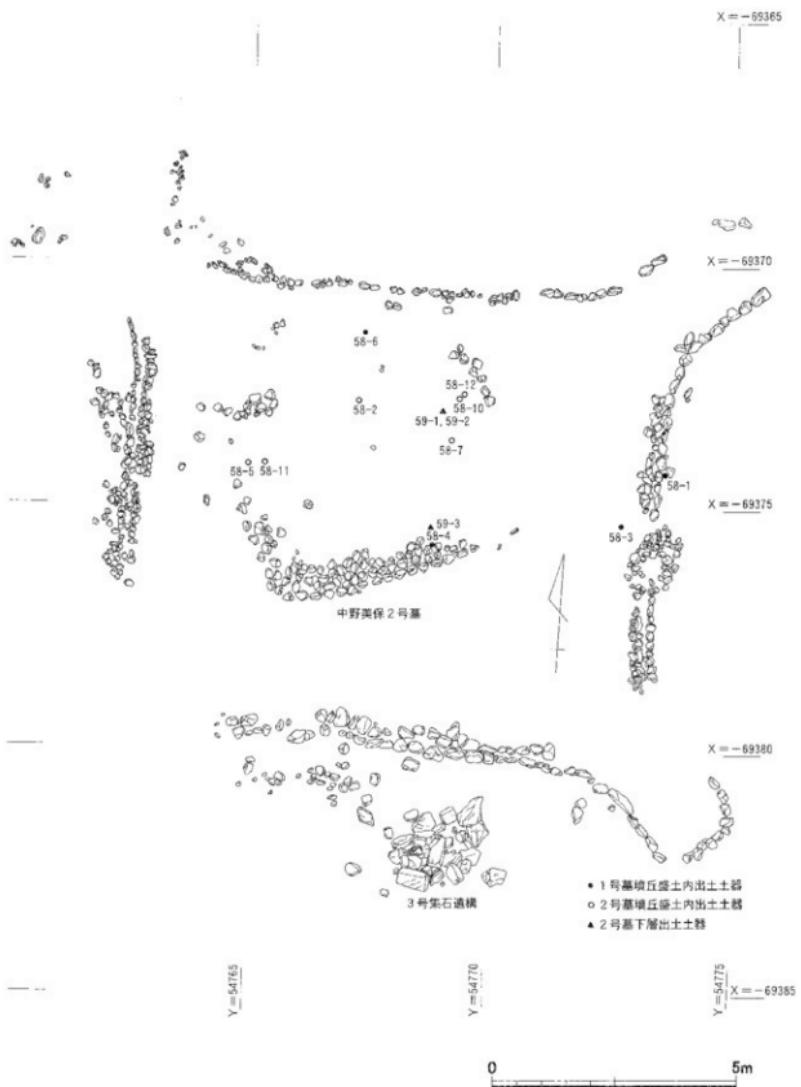
第55図 VII区中野美保1号墓南東隅と2号集石造構・3号集石造構の位置関係 ($S = 1/40$)

これも性格不明の遺構と報告せざるを得ない。ただし、中野美保1号墓の縁石基底部とほぼ同じ標高に営まれている点から、中野美保1号墓と同時期ないし後出するものと考えられる。また、断ち割り調査の際、その下部に別の集石が確認されることとなった。これを3号集石造構として報告する。

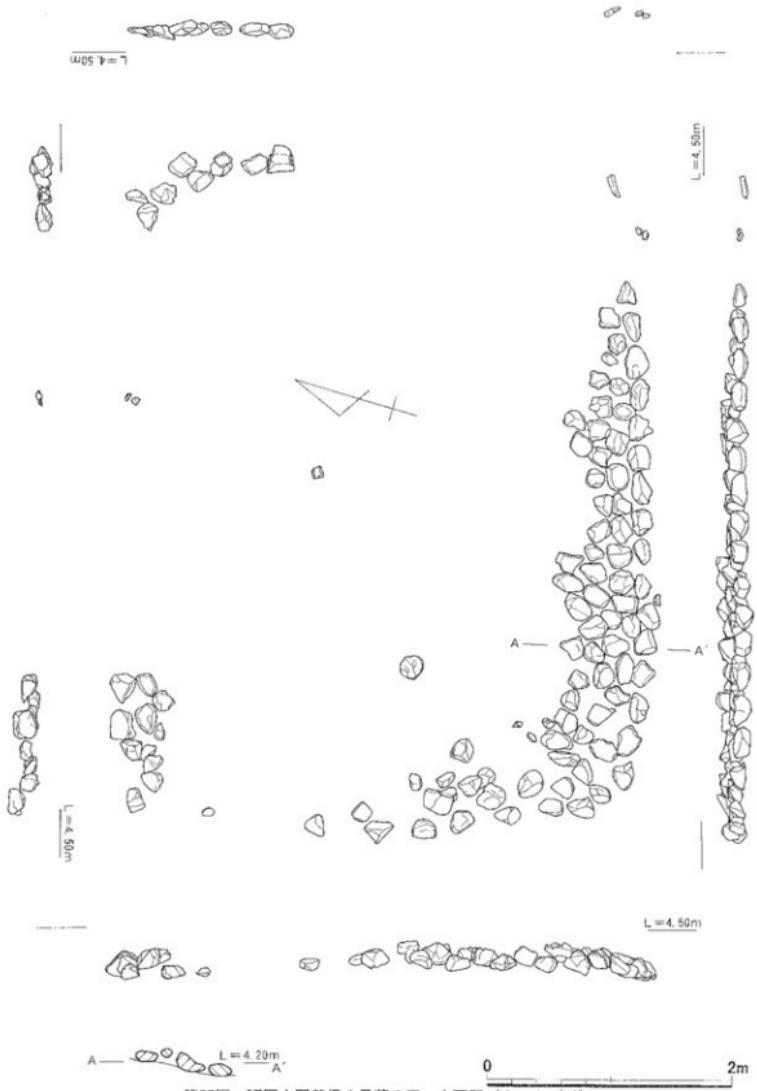
出土遺物（第51図）

2号集石造構の周辺埋土からは時期幅のある遺物が出土している。

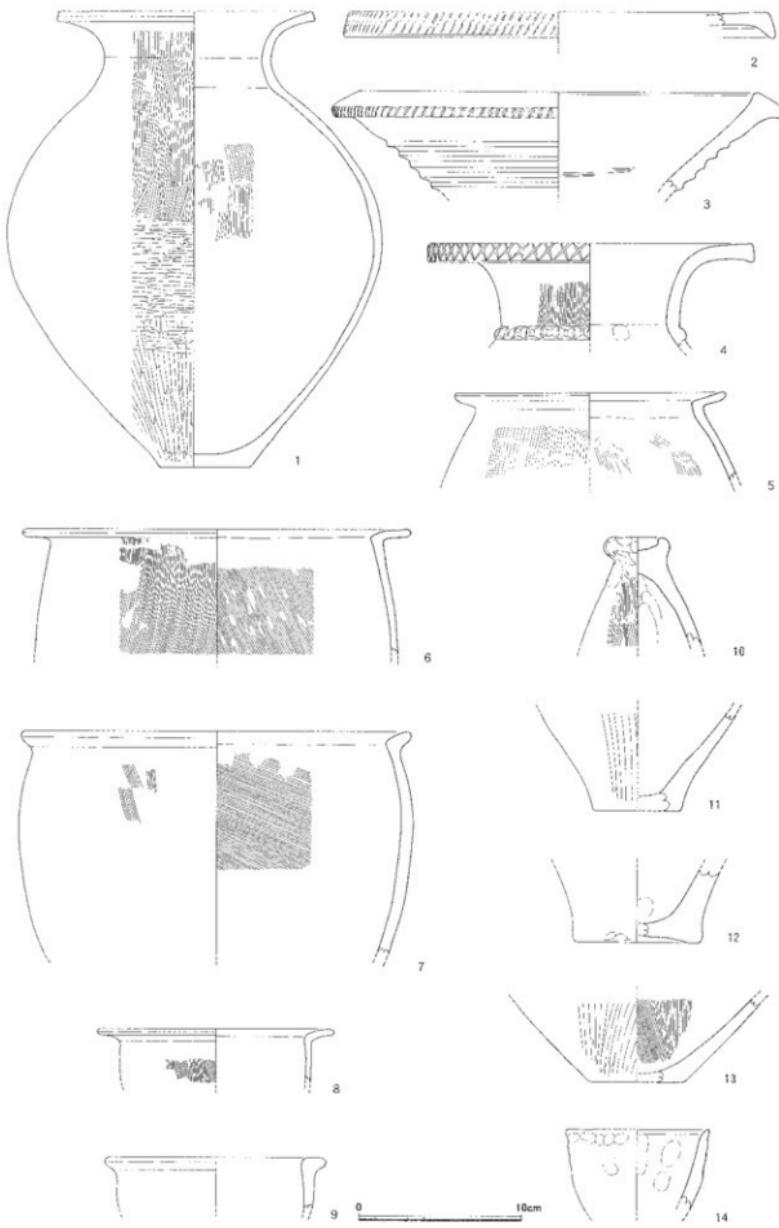
1は甕である。口縁直下に3条の直線文がめぐる。内面の調整には、横ハケ後に縦方向の指ナデが部分的に施されている。2・3は複合口縁の甕である。口縁部は外反し、端部は僅かに丸みを帯びる。口縁部の外面には強いナデが施されている。4の鼓形器台は下段に綾杉文が施されている。5はやや大型の鼓形器台で、くびれ部に綾杉文が施されている。9は鼓形器台の脚部掘である。内面には横方向のケズリが顕著である。6・8は高坏脚部である。いずれの裾端部も、面を成してい



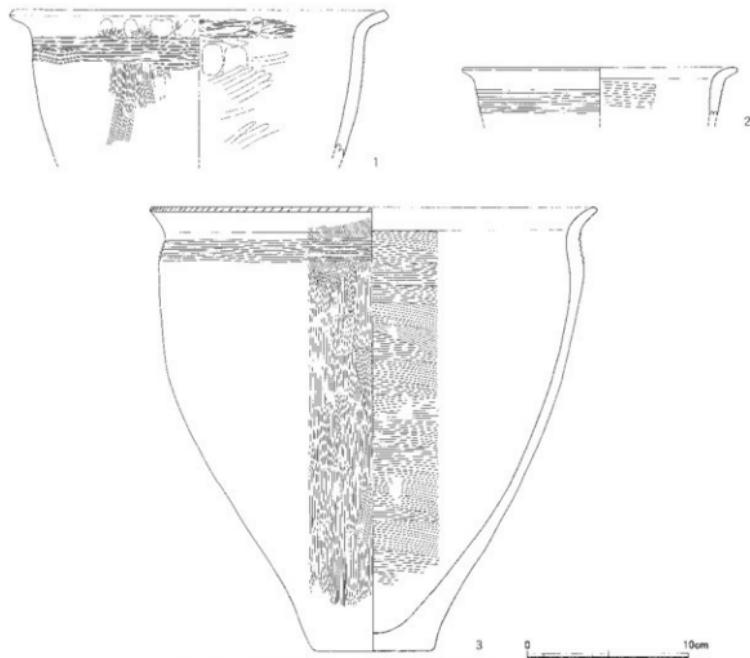
第56図 VII区中野美保1号墓・2号墓と3号集石遺構の配置図 ($S = 1/100$)



第57図 VII区中野美保2号墓の平・立面図 ($S = 1/40$)



第58図 VII区中野美保2号墓周辺（1号墓・2号墓埴丘盛土内）出土遺物（S=1/3）



第59図 VII区中野美保2号墓下層出土遺物 (S = 1 / 3)

る。7は低脚壺の脚部である。1はI~4様式(弥生時代前期後葉)、2・3は草田4期(弥生時代後期後葉)、4・5・9は草田4期、6~8は草田5~6期(弥生時代後期末葉)に相当するものと考えられる。1は同時代の弥生土器が1号墓埴内や2号墓下層から出土しており、混入したものと考えられる。6~8も上層からの混入と考えられ、4・5・9の土器が2号墓の時期に相当する。このことから、2号集石遺構の時期もこの時期に相当するものと考えられる。

3号集石遺構(第54図)

3号集石遺構は1号墓の南側から約1m離れた場所に位置し、1号墓南側縁石基底部から約40cm下位の標高約3.9mで検出されている。また、その上部には2号集石遺構が少し東にずれて営まれている。遺物は細片すら検出されていないため、時期は確認出来ない。また、湧水のため上層の違いを最終的には確認できなかったが、標高が1号墓より約40cmも低く、2号集石遺構の直下に営まれていることから中野美保1号墓に先行する可能性も考えられる(第55図)。さらに、1号・2号集石遺構に比べて使用される石材が大きい点が挙げられる(50~80cm前後のものが半数を占める)。

調査方法と記録方法は1・2号集石遺構のそれに準じている。3号集石遺構の規模は約2.6×1.6mの範囲に石が集中しており、直径1.0~1.2m程度の2つの円形状石組が眼鏡状に隣接しているように観察できる。湧水により下層の調査が続行不可能になったため、第54図にあるように、多方向からの実測図を作成した。特徴的な点は西側の円形状石組の中心部にのみ、2枚の板状の石が立てられた状態で検出されている。出土遺物がないため、時期決定は難しく、その性格も不明である。



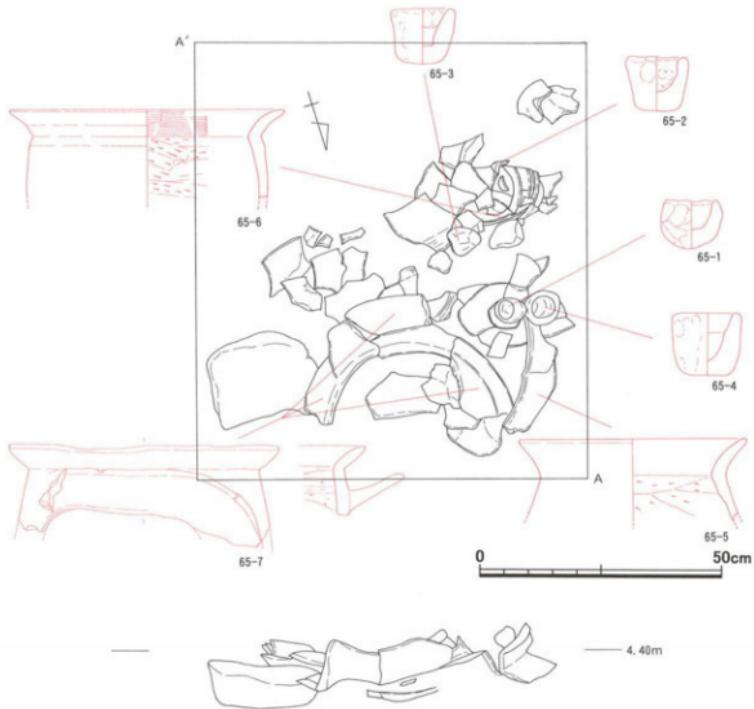
第60図 VII区中世水田遺構下層検出の遺構群（弥生時代～中世）（S = 1 / 300）



第61図 濱区中世水田遺構下層検出の遺構群（古代～中世）(S = 1 / 300)



第62図 Ⅳ区中世水田遺構下層検出の建物群、遺構配置図 ($S = 1/300$)

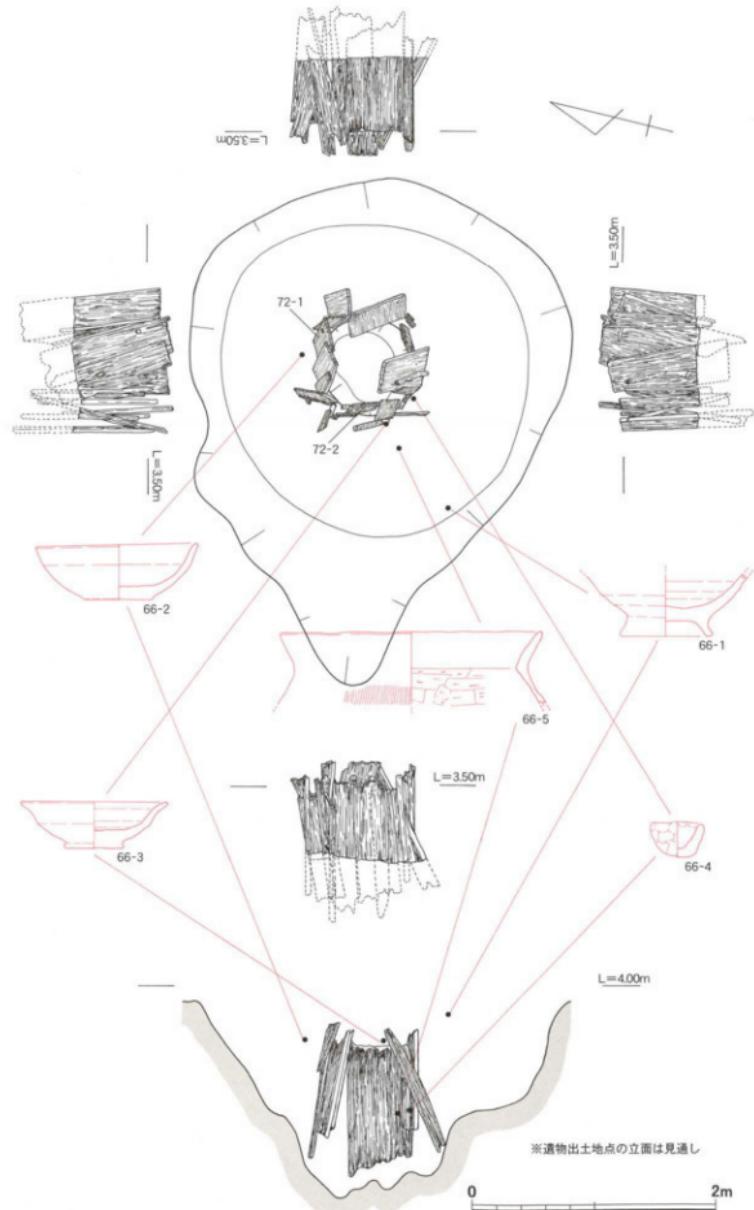


第63図 VIII区中世水田遺構下層検出の土器羨まり (S = 1 / 10)

ただし、後述する弥生時代中期中葉の中野美保2号墓とVIII区の遺構群の検出面とはほぼ同じ、標高約3.9mに位置することから、中期中葉に遡る遺構である可能性も考えられる。

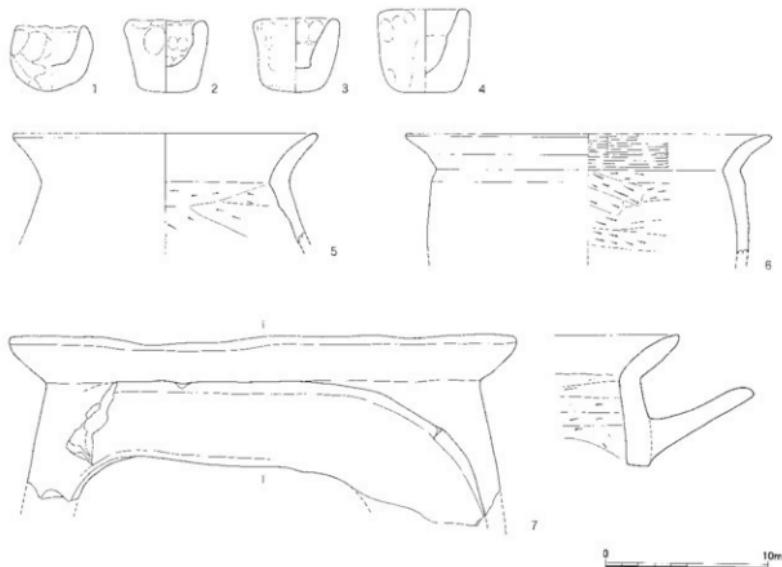
(3) 方形貼石墓：中野美保2号墓（第56・57図）

1号墓の調査において、主体部の検出や墳丘土層の確認のために入れたサブトレンチから多数の集石が確認された。これらの集石を当初は主体部に伴うものとして考えたが、土層の観察では掘方等を全く確認出来なかった。その後、中野美保1号墓では主体部の検出を平面的にも精査した。しかし、土中の水分が湧水のため飽和状態になり、墳丘の大半が泥沼化したため、これを断念した。結局、墳丘に多数入れたサブトレンチの甲斐もなく、主体部等の痕跡は確認できなかった。そこで、サブトレンチから検出された集石の性格を明らかにするため、中野美保1号墓の中心部から東西南北2方向の畦を設定し、墳丘内部の掘削を開始した。その直後、集石が直線上に並ぶ状況が見られ、斜面を形成していることが判明した。さらに南北方向の畦における土層観察の結果、中野美保1号墓墳丘内に別の盛り土が確認でき（第38図E-E'）、これを方形貼石墓（以下、中野美保2号墓）として認識した。

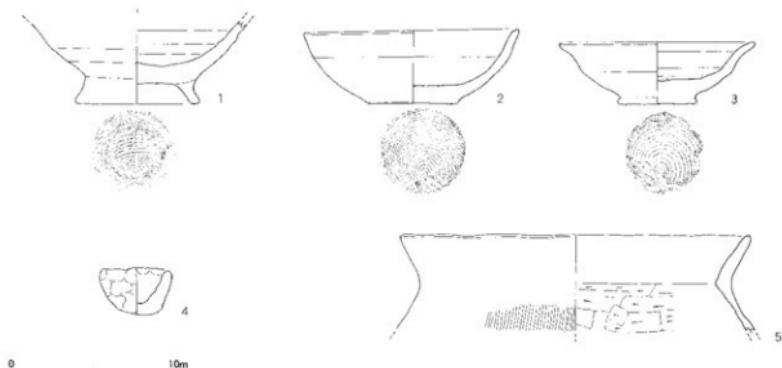


第64図 VII区中世水田下層検出井戸の遺物出土状況の平・立面図 ($S = 1 / 40$)

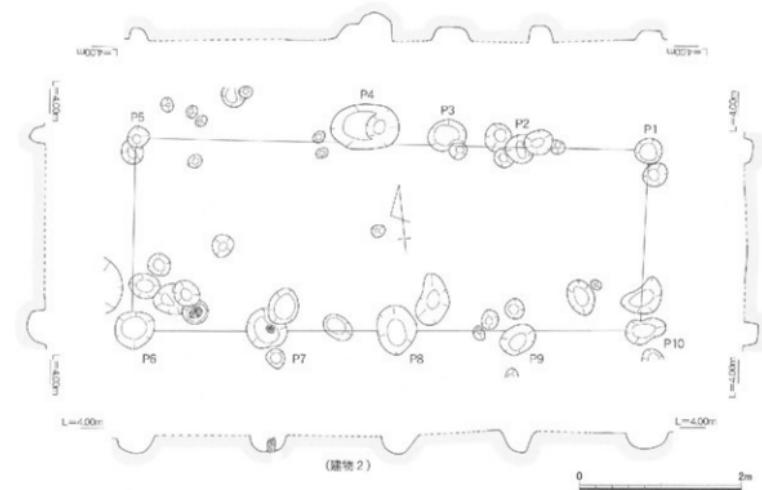
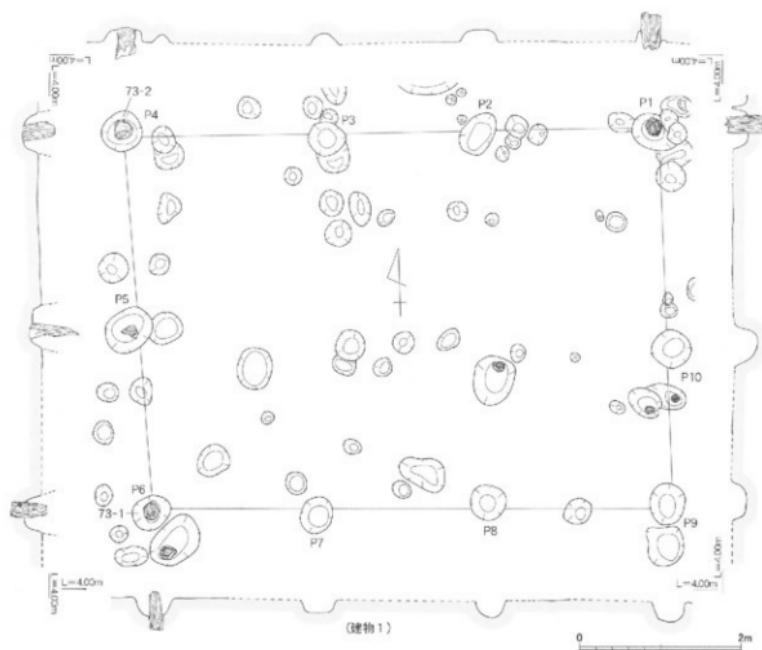
中野美保2号墓は、中野美保1号墓の墳丘上面から僅か20cmに満たない標高約3.9mに築造されている。さらに平面的には中野美保1号墓のほぼ中央に位置することから、中野美保1号墓に営まれた主体部の存在を仮定すれば、中野美保2号墓の墳丘は攪乱を受けていると考えた方が自然であつた。しかし、中野美保2号墓の墳丘自体に明確な攪乱痕跡は見られなかった。おそらく、中野美保1号墓の主体部がこの深さまで達していなかつた可能性が考えられる。一方、中野美保2号墓の墳丘が、中野美保1号墓造営の際に削平を受けていた可能性は完全には否定できない。これは、中野



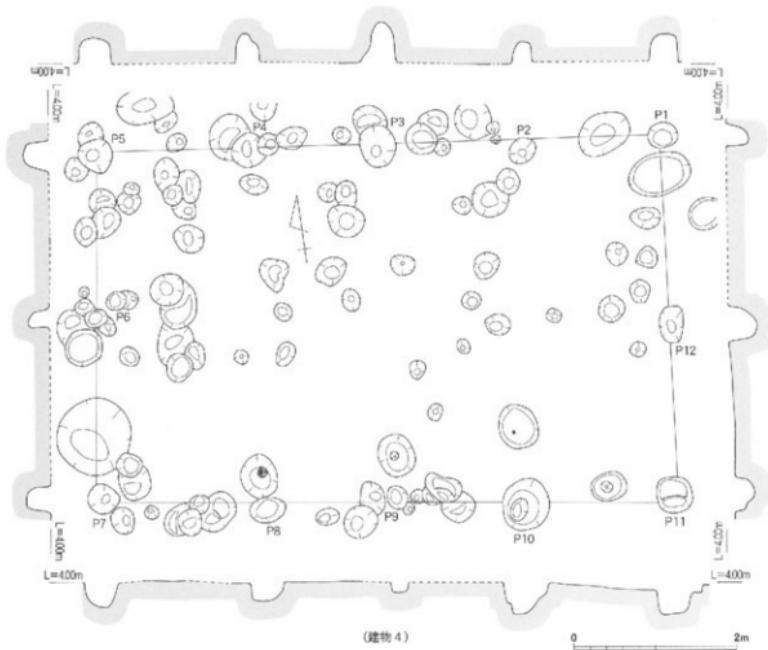
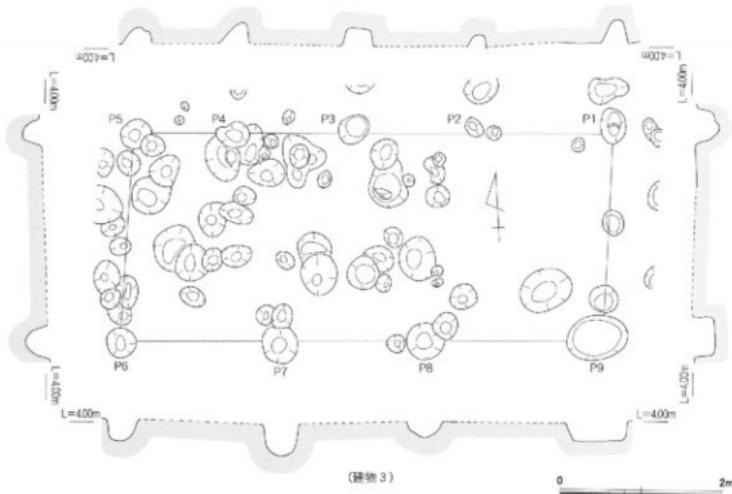
第65図 V區 A 包含層（3層）土器類より出土遺物（S=1/3）



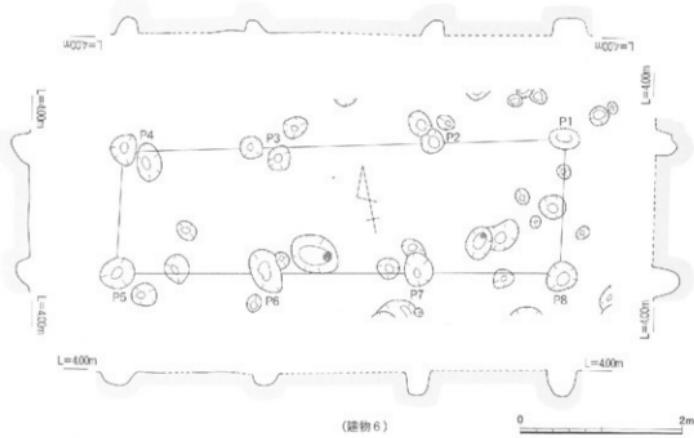
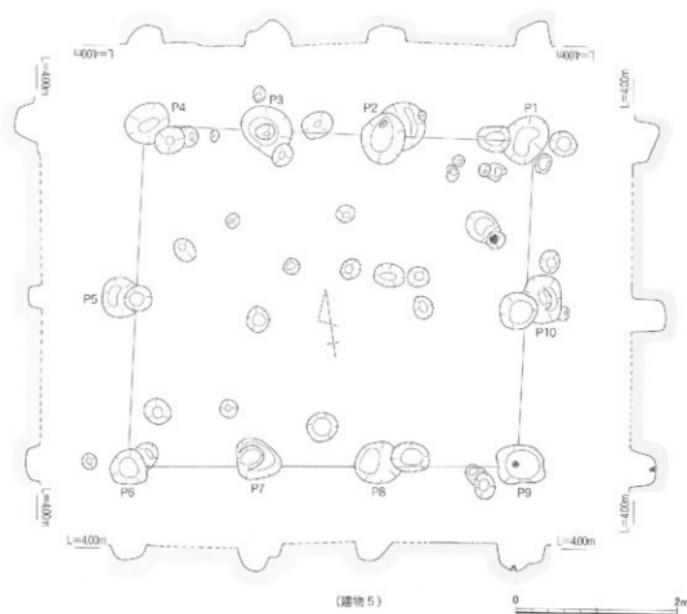
第66図 V區 中世水田下層検出井戸出土遺物（S=1/3）



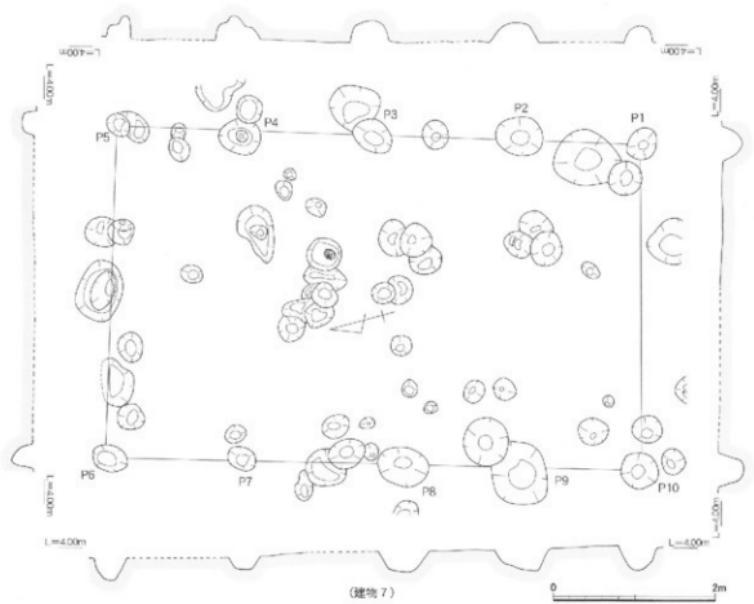
第67図 館区中世水田下層検出の建物1・2 (S=1/60)



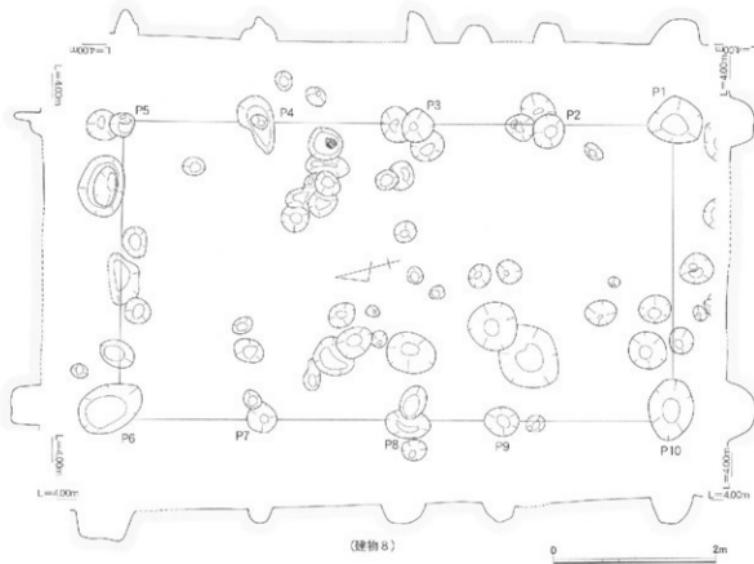
第68図 7区中世水田下層検出の建物3・4 (S = 1/60)



第69図 谷区中世水田下層検出の建物5・6 (S = 1 / 60)

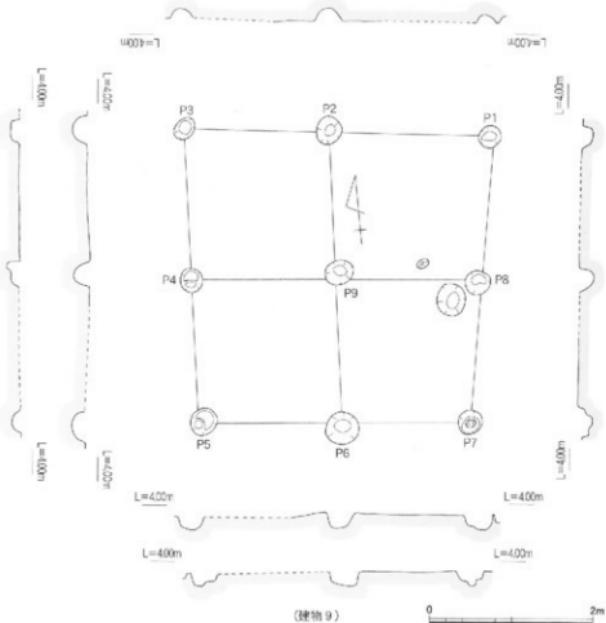


(建物 7)



(建物 8)

第70図 7区中世水田下層検出の建物 7・8 (S = 1 / 60)



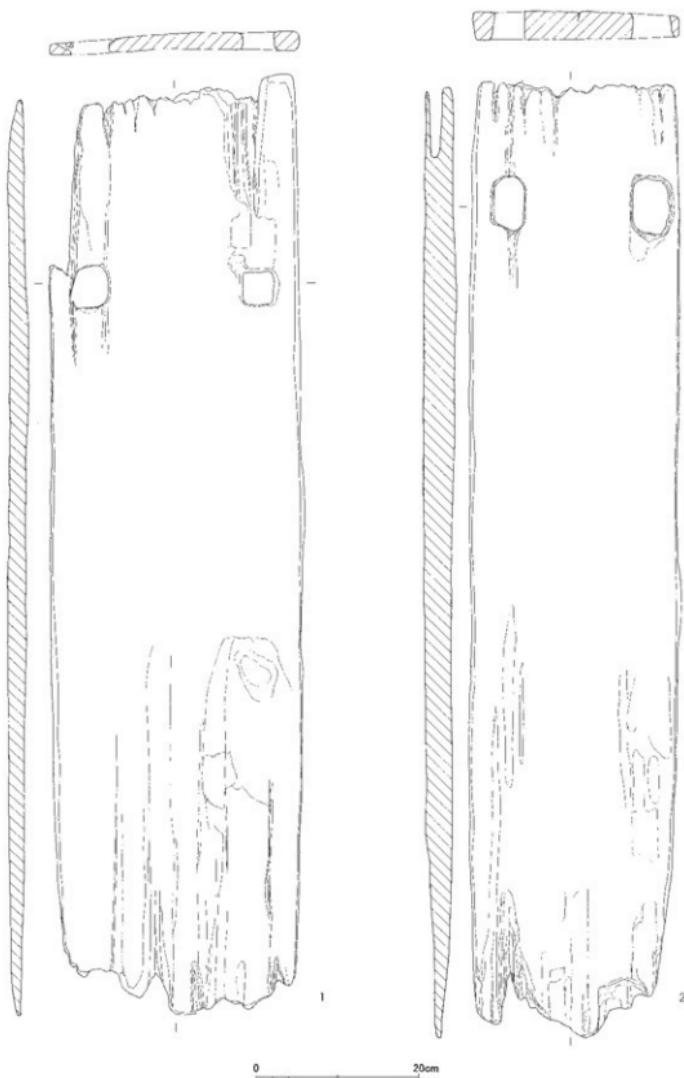
第71図 VII区中世水田下層検出の建物9 ($S = 1/60$)

美保2号墓に伴う貼石が部分的に検出されていないためである。中野美保1号墓に埋葬施設が複数営まれたと仮定すれば、貼石が見られない部分の説明になるかもしれないが、劣悪な土壤環境のためそれを証明する調査所見は得られなかった。

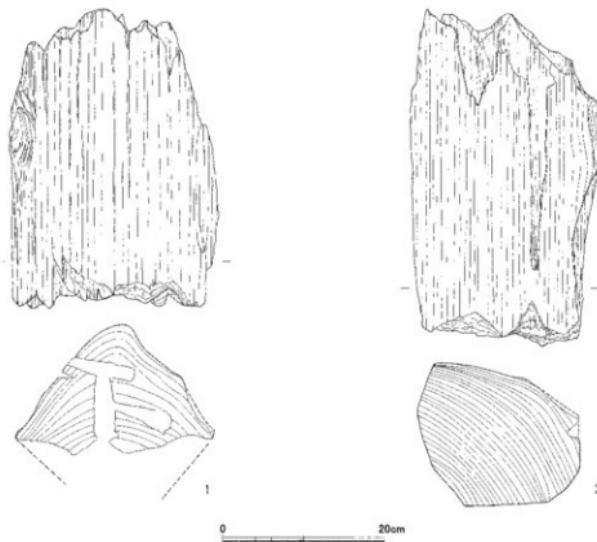
規模と配石構造

東西約5.5m×南北約4.5mの長方形である。貼石は南西隅で良好に遺存する。この良好な箇所を観察すると、墳丘の最縁辺の貼石列が中野美保1号墓の立石のように立ち気味になっている共通性が認められる。そして、この石列の内側の石が墳丘斜面に貼り付いている様子が観察できる。最も外側の石列は「立石」あるいは墳丘を縁取る「縁石」に相当するものと考えられる。これを含めて、3~4列の貼石が遺存している。使用石材の大きさは15cm前後である。

その他、墳丘南東隅～墳丘東側、墳丘北側では貼石の遺存が悪い。墳丘自体に部分的な削平等の擾乱を受けていた可能性が考えられる。しかし、転落等による貼石の残骸も墳丘西斜面の北側の数個の石を除いて墳丘周辺から殆ど検出されなかった。このことから、墳丘の四周全面に貼石が施されていなかった可能性も考えられる。また、貼石の遺存状態が良好な墳丘南側の貼石幅より墳丘北東部のそれのはうが2~3cm高い状況が確認された。北東部から南西側を中心に下がる僅かな地形の傾斜を利用して墳丘が造られた結果、貼石自体が南にのみ集中して施されていた可能性もある。



第72図 17区中世水田下層検出井戸の井戸枠 (S = 1 / 6)



第73図 Ⅳ区中世水田下層検出建物1の柱材 (S=1/6)

主体部

中野美保2号墓の主体部は、平面精査および断ち割り調査を行ったが、ついに検出することが出来なかった。大量の湧水が含まれた飽和状態の土層環境によるため、検出出来なかつた要因も挙げられるが、やはり、墳丘が削平されていた可能性も残る。ただ、墳丘中央部北寄りの墳丘盛土内より1個の石が確認された。特に、加工は施されていない角礫であり、墓壙等の掘方も検出されていない出土状況であることから、標石の可能性があるかどうかも判断し得ない。

遺物出土状況（第56図）・出土遺物（第58図）

1号墓で検出されたような、本来の原位置を保つと考えられる遺物は出土していない。ただし、土器片は多数検出されている。その出土位置から、①2号墓を覆っていた1号墓の盛土内より検出された土器、②号墓墳丘内出土の上器、③号墓墳丘盛土の下層から出土した土器の3つに分類できる。これらの様相から2号墓の時期を類推する。なお、一部を除いた各遺物の出土位置は第56図のドットで表現されている。

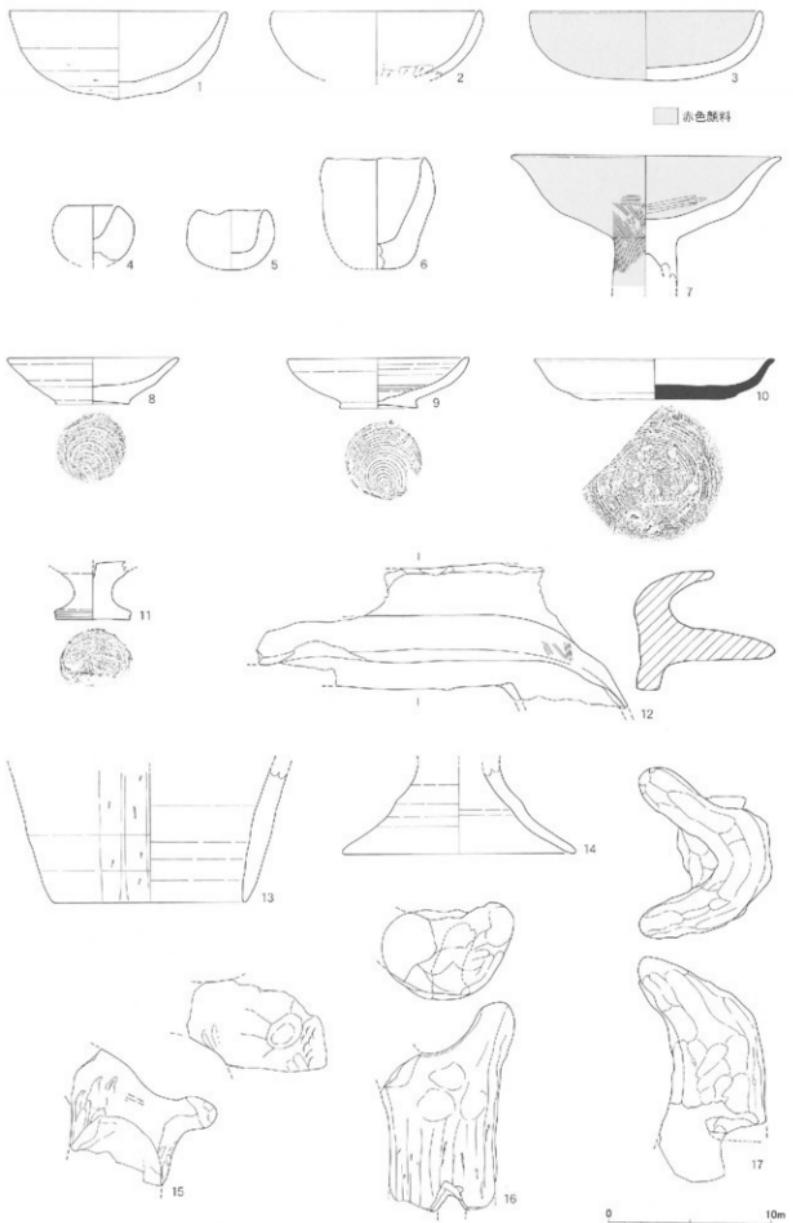
①1号墓墳丘盛土内出土土器（第58図1・3・4・6・8・9・13・14）

1・4は壺、3は広口壺である。3・4は口縁部を加飾し、3の頸部には断面三角形の貼り付け突帯文、4の頸部には指で摘んで加飾した浮文が貼り付けられている。6は口縁「く」の字状の壺である。Ⅲ-1～2様式（弥生時代中期中葉）の時期が考えられる。

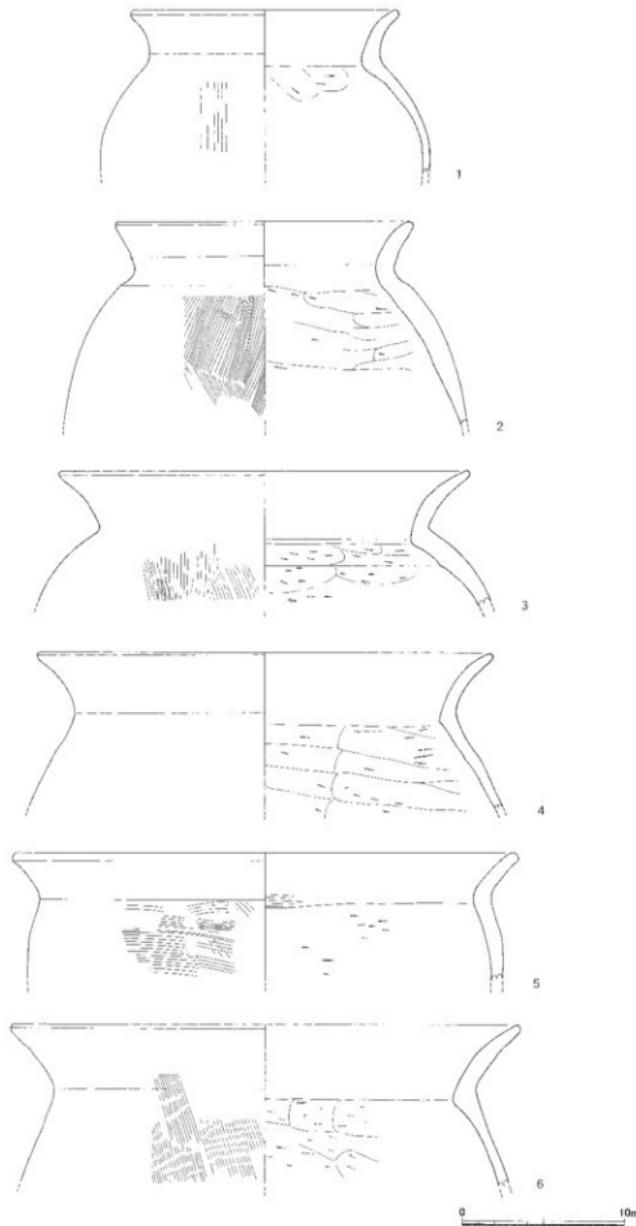
この他、墓の墳丘盛土内検出の土器が数点ある。8・9は断面「く」の字状口縁の小型の壺である。9の口縁部から頸部は肥厚する。13は壺の底部である。14は手捏ねの壺と考えられ、内外面共に指頭圧痕が頸部に認められる。Ⅲ-1様式（弥生時代中期中葉）の時期が考えられる。



第74図 V區A包含層(3層)出土遺物(1)(S=1/3)



第75図 Ⅲ区A包含層(3層)出土遺物(2)(S=1/3)



第76図 VII区A包含層（3層）出土遺物（3）（S=1/3）

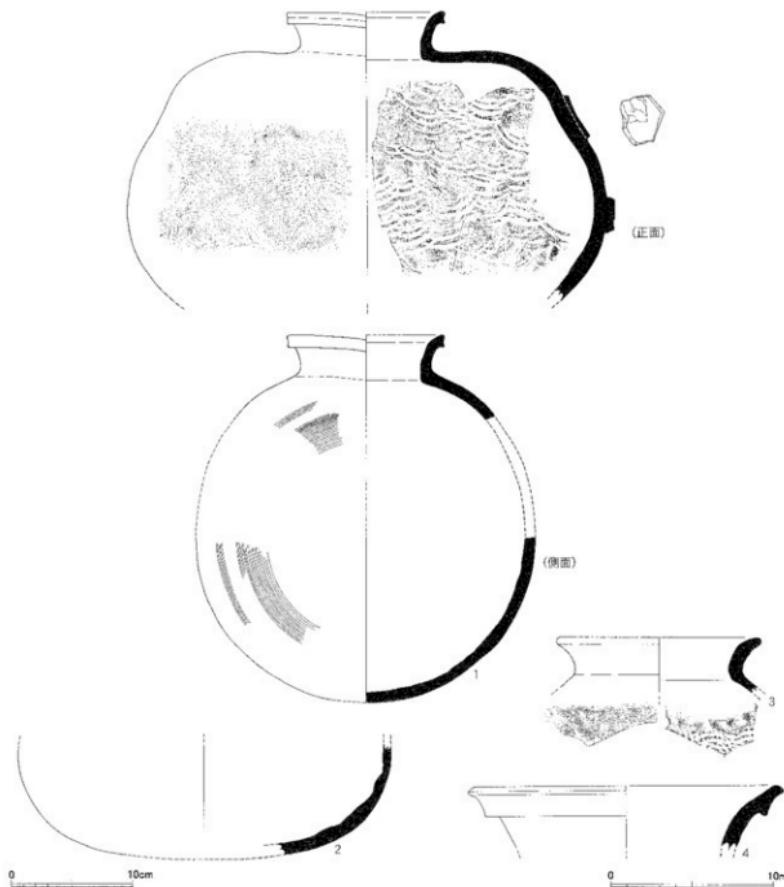
② 2号墓墳丘盛土内出土土器（第58図2・5・7、10～12）

2は口縁部に加飾を施した壺である。5の壺は口縁部が受け口状に僅かに内湾する。7は壺である。10は蓋と考えられ、つまみ部は手捏ね状に成形されているため、指頭圧痕が顕著である。11・12は壺の底部である。12の外面底部付近には強い指ナデが施されている。Ⅲ-1様式（弥生時代中期中葉）の時期が考えられる。

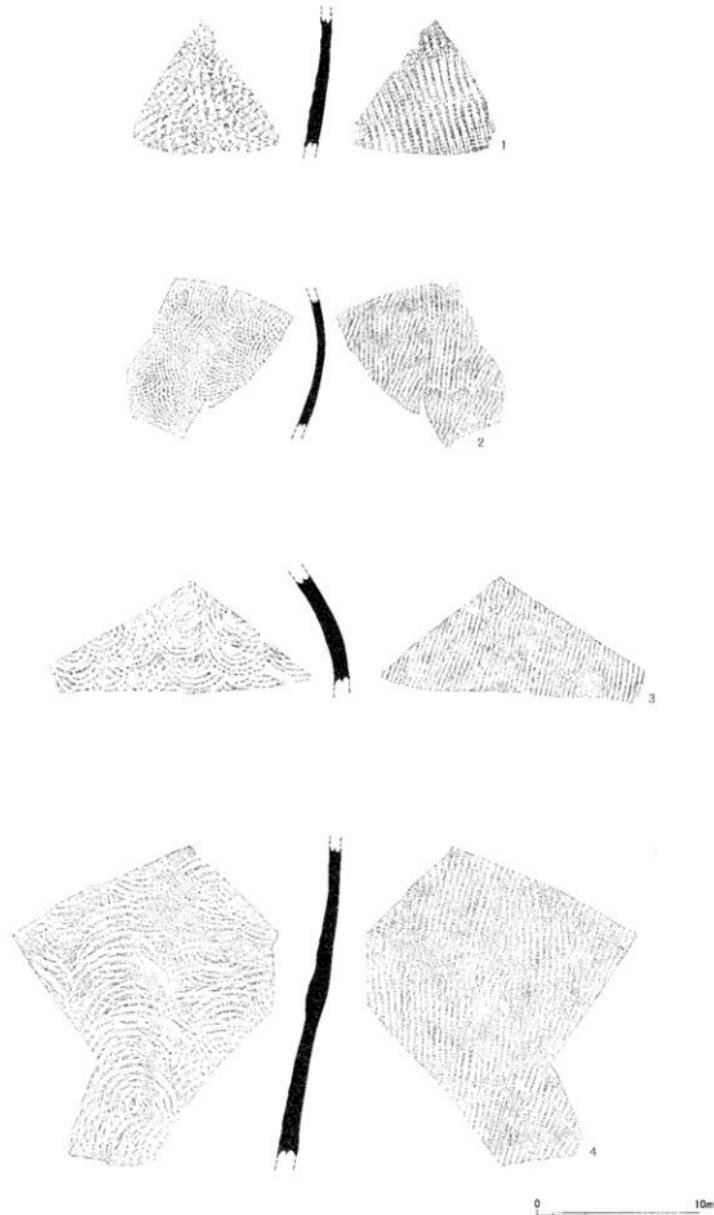
③ 2号墓下層出土土器（第58図1～3）

1～3は壺である。いずれも、①・②の土器に比べて胎土が粗い。I-4様式（弥生時代前期後葉）の時期が考えられる。

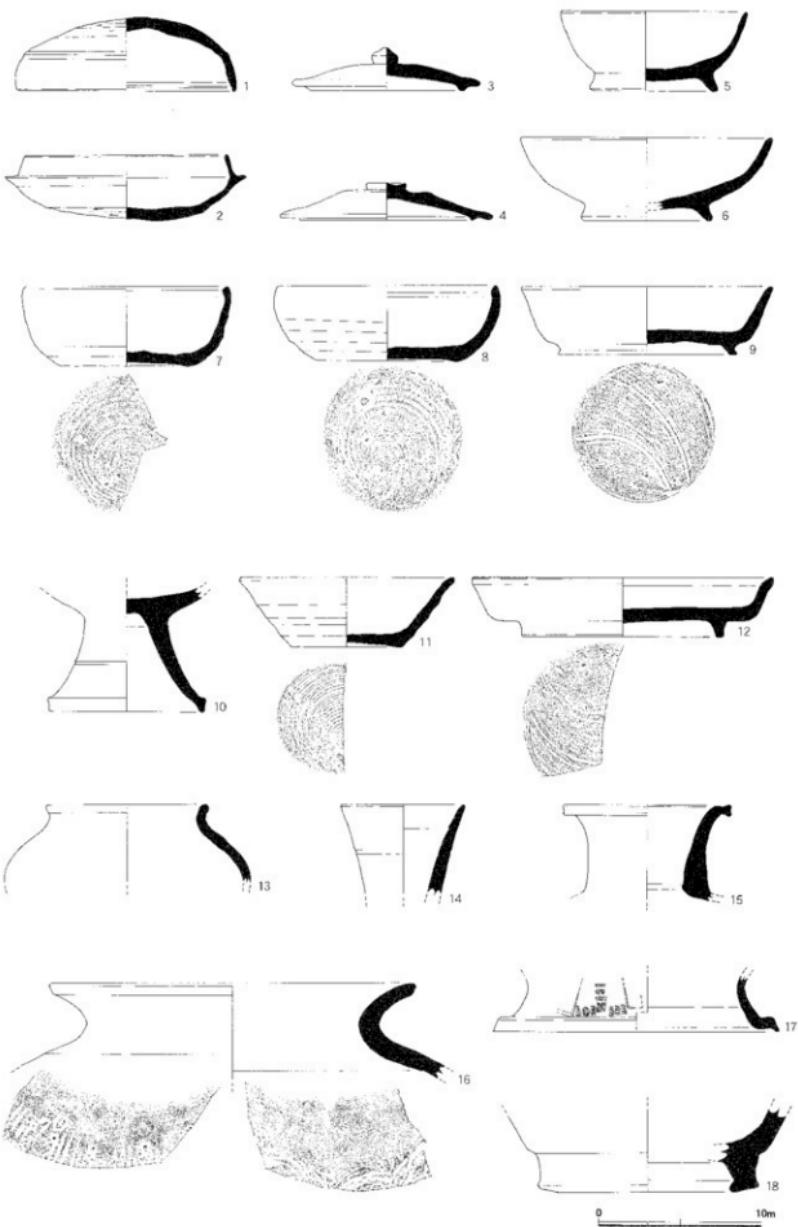
以上の土器の様相から、2号墓は弥生時代中期中葉に焼造が行われたものと考えられる。



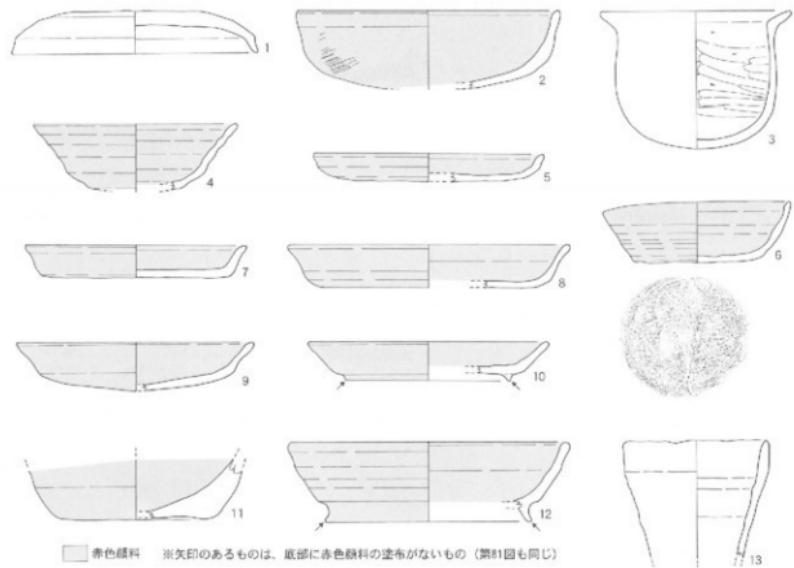
第77図 Ⅳ区A包含層（3層）出土遺物（4）（1・2はS=1/4、3・4はS=1/3）



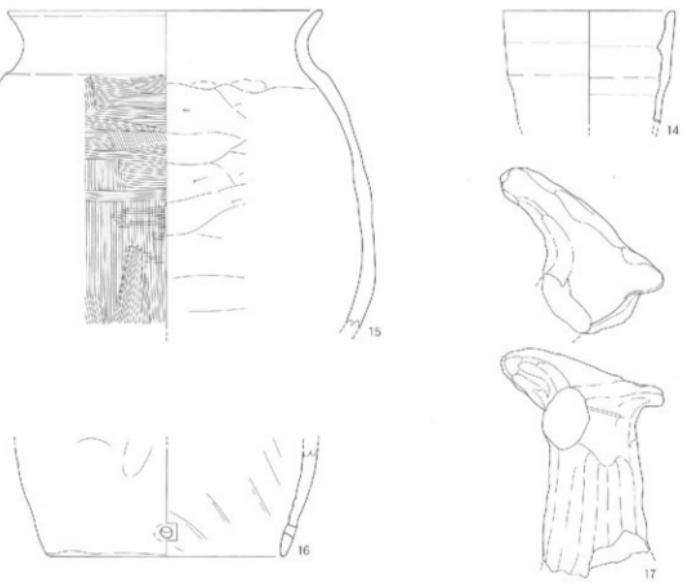
第78図 VII区A包含層(3層)出土遺物(5)(S=1/3)



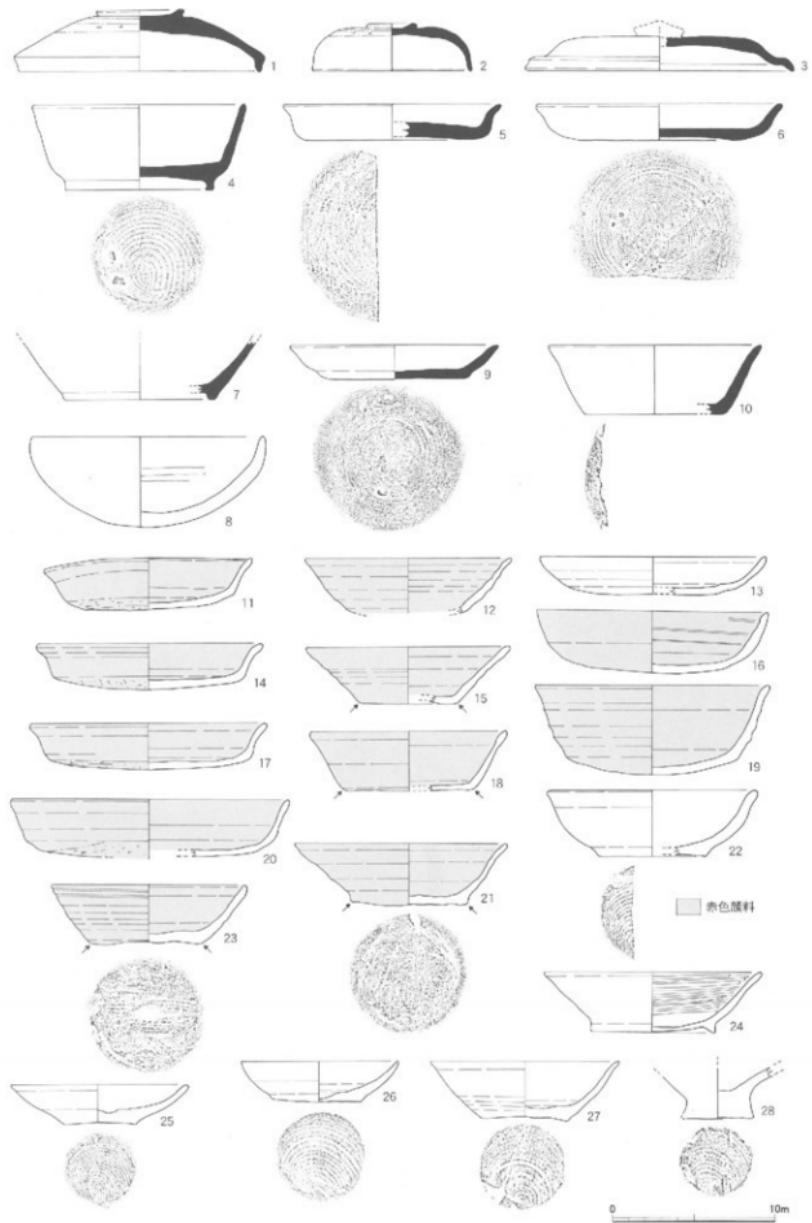
第79図 Ⅲ区B包含層(3層)出土遺物(1) (S=1/3)



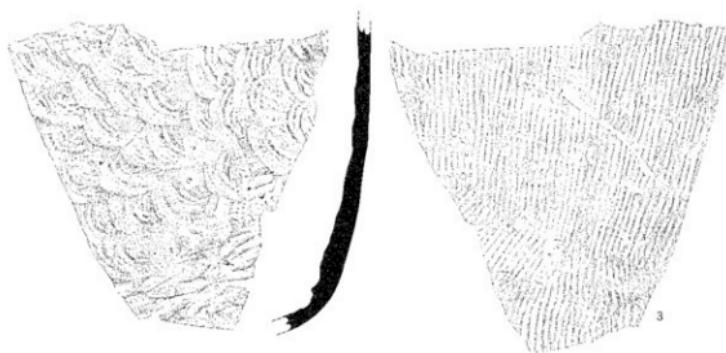
■赤色顔料 ※矢印のあるものは、底部に赤色顔料の塗布がないもの（第1図も同じ）



第80図 17区B包含層（3層）出土遺物（2）（S=1/3）

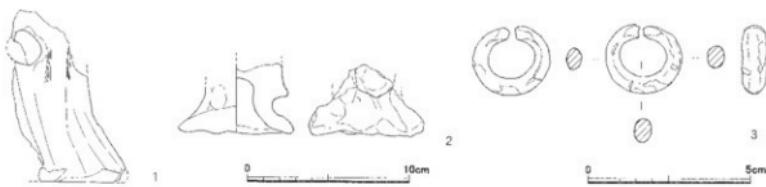


第81図 墓区C包含層（3層）出土遺物（1）（S=1/3）

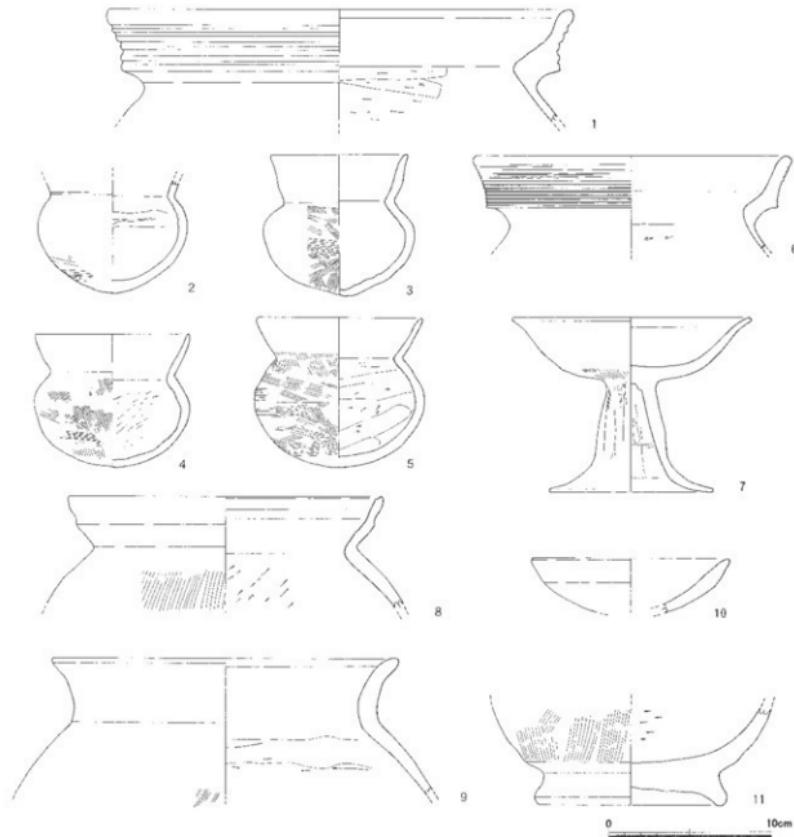


0 10cm

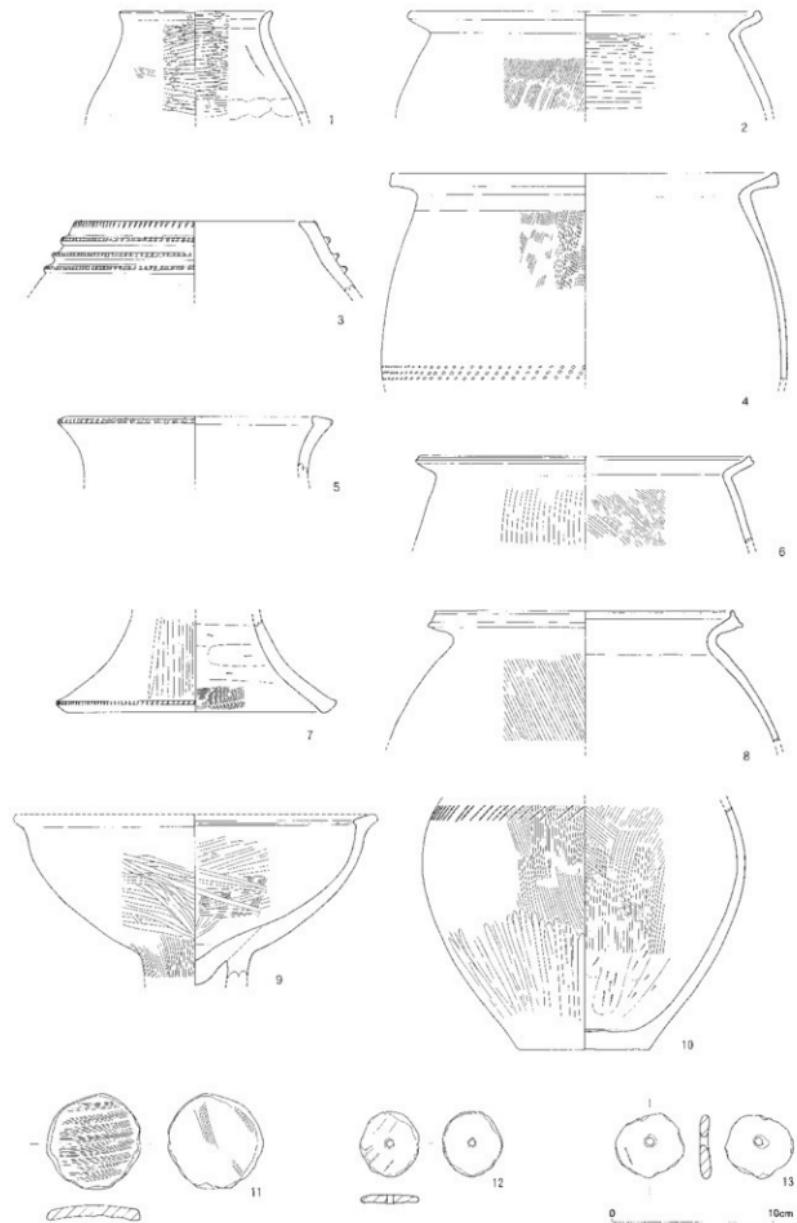
第82図 VII区C包含層（3層）出土遺物（2）（S=1/3）



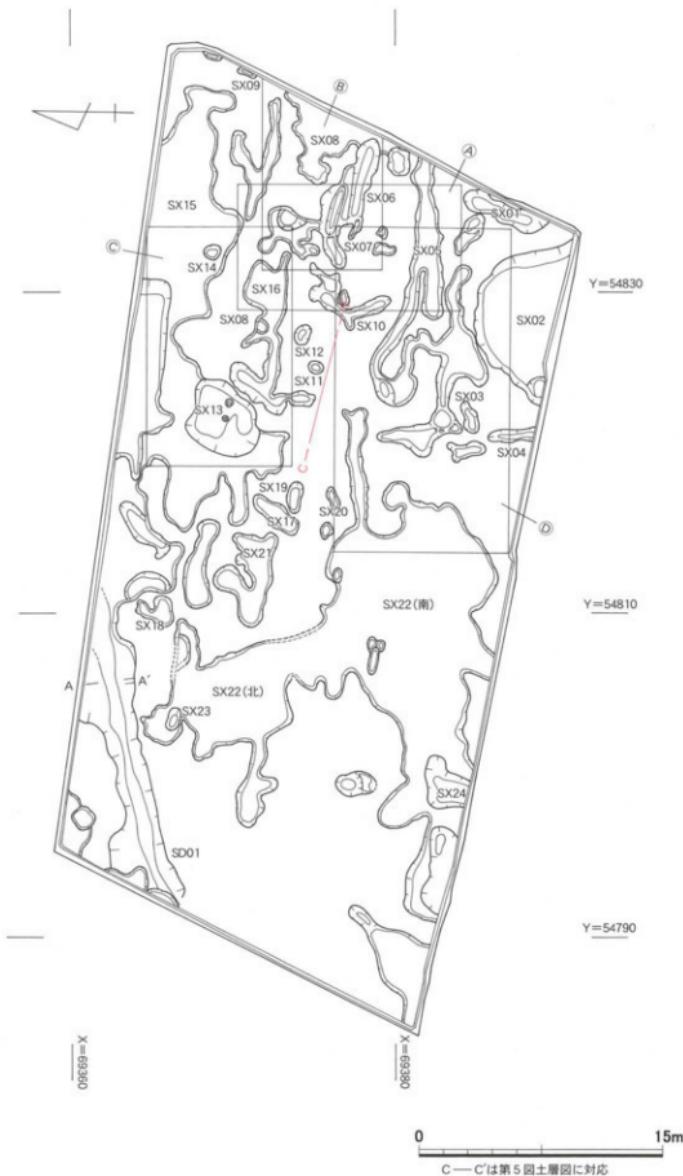
第83図 VI区C包含層（3層）出土遺物（3）（1・2はS=1/3、3はS=2/3）



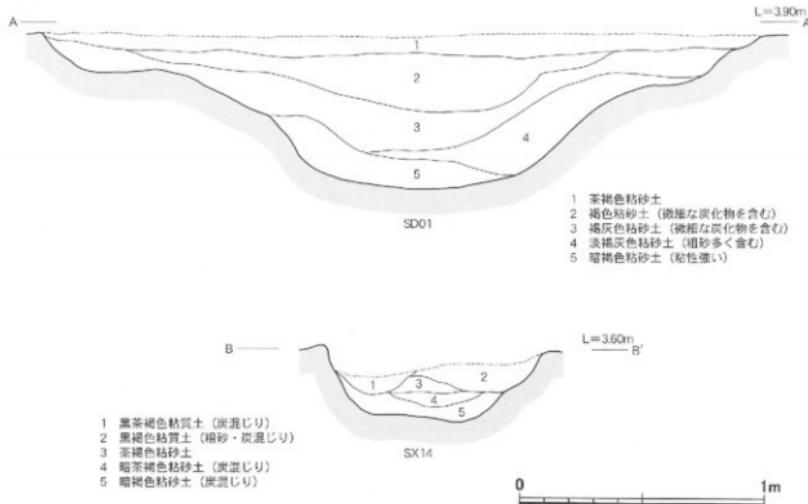
第84図 VI区C包含層（4層）出土遺物（1）（S=1/3）



第85図 VII区C包含層(4層)出土遺物(2)(S=1/3)



第86図 VII区中世水田下層検出弥生時代遺構群 (S = 1 / 300)



第87図 VII区 SD01・SX14土層断面図 ($S = 1/20$)

8. VII区 (第86図)

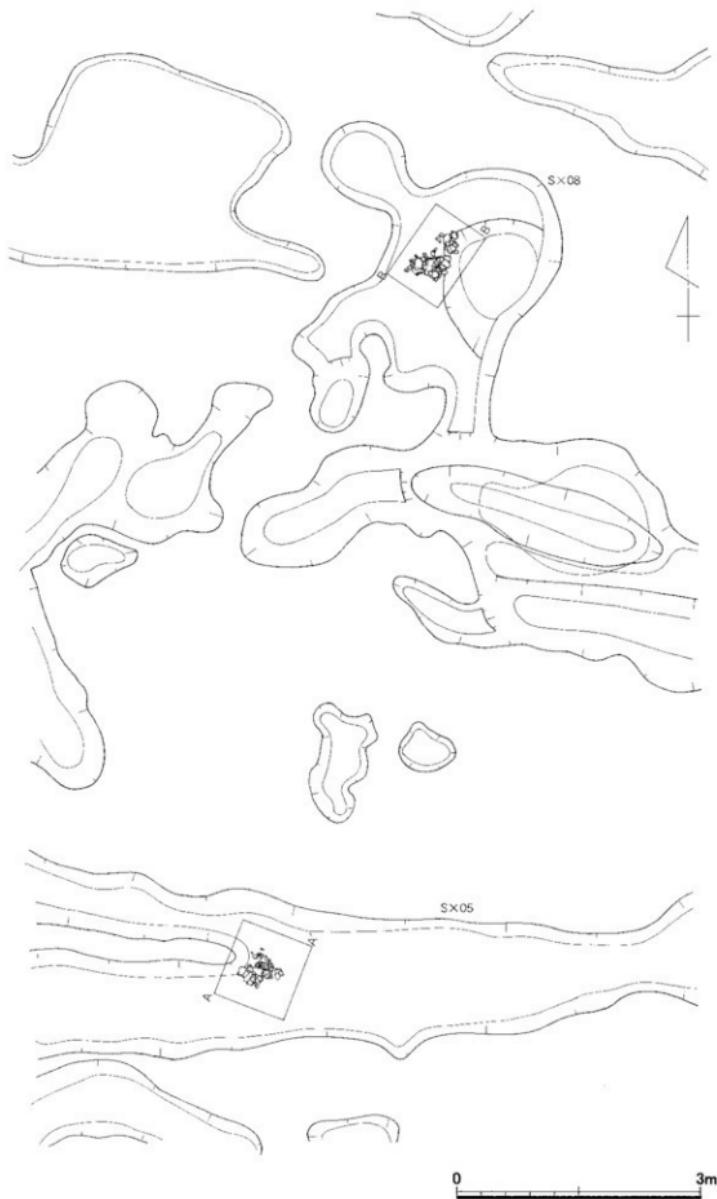
遺構

調査区の地表面には、多数の不整形な土壙や落ち込みが検出された。これらは一部を除いて明確な遺構と呼べるものではなく、弥生時代中期中葉～後葉にかけて、幾度とない開発や改変を受けた遺構の重複によるものと考えられる。このうち明確な遺構としては、素掘りの井戸1、断面が逆台形の溝1 (SD01) のみが確認できた。明確な遺構を含めて、これらの不整形な土壙の埋土は基本的に暗灰色粘砂土・粗砂である。また同一遺構内の深さも場所によってかなり異なるため、明らかに埋土の色調や土質が異なるものに限って土層の所見を掲載する。さらに、遺構の広がりが調査区の3分の1を占めるものもある。また、殆どの遺構からは、弥生時代中期中葉～後葉の土器が細片も含めて多数検出されている。以下、各遺構の所見と併せて検出された遺物について報告する。遺構の規模は東西・南北2方向の最大幅を記載し、深さは各遺構の上場・下場の平均標高から算出した数値を記載している。

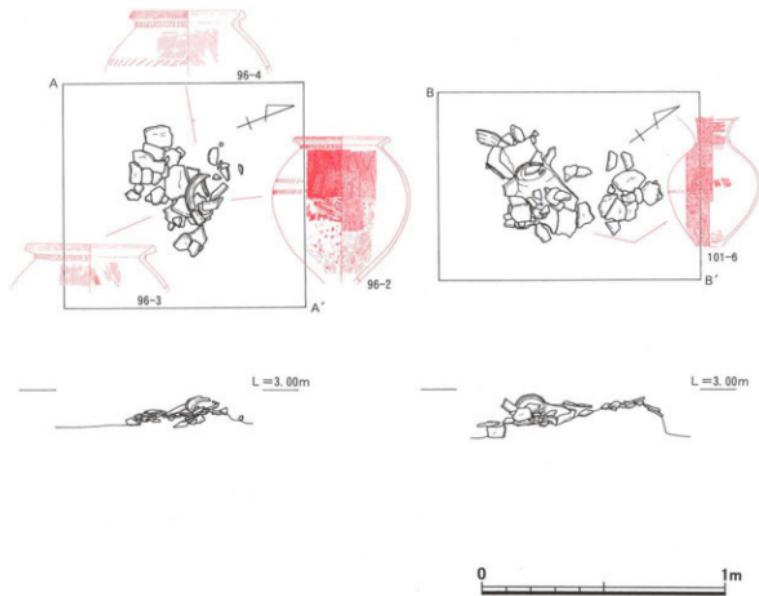
なお、遺構に伴う遺物は複数の同一器種や細片が多く含まれているため、包含層遺物と同じ方法で抽出した遺物のみを掲載する。ただし、一括性の高い遺物は可能な限り掲載した。非掲載遺物については表1を参照して頂きたい。

SX01 (第86図)

調査区の南東部で検出された土壙である。平面形態は細長い円形で、南北5m×東西1m、深さは19cmになる。調査区外に広がる遺構である。遺構埋土より検出された土器片は、一括でまとまつては出土していない。散発的な出土状況であった。



第88図 Ⅷ区弥生時代遺構群・遺物出土状況（第86図分割部分Ⓐ）（S=1/60）



第89図 Ⅷ区SX05・08検出時の遺物出土状況の拡大図 (S = 1/20)

出土遺物（第94図）

土器の出土点数は3点になる。1は断面「く」の字状口縁の壺である。口縁端部が上方に僅かに屈曲気味である。2は壺の底部で、外面底部付近まで、ミガキが施されている。3は口縁端部と頸部に加飾を施した広口壺である。Ⅲ-1～2様式（弥生時代中期中葉）の様相を示す。

SX02（第86図）

調査区の南東部で検出された半円形の土壤である。規模は現状で南北5m×東西10m、深さは13cmである。全容は調査区外まで広がるため不明である。当初は堅穴住居等の可能性を考えたが、すり鉢状の形態で溝などの痕跡は認められなかった。土壤の中央部に円形の落ち込みが2つ検出されたが、焼土や炭化物等を含めて遺物等は検出されなかった。この2つの落ち込みは、調査区南壁の土層断面にも2つ並んだ落ち込みが確認されているため、同一であるものと考えられる。このことから、複数の遺構が重なり合っていることは確実であるが、SX02の性格は不明である。

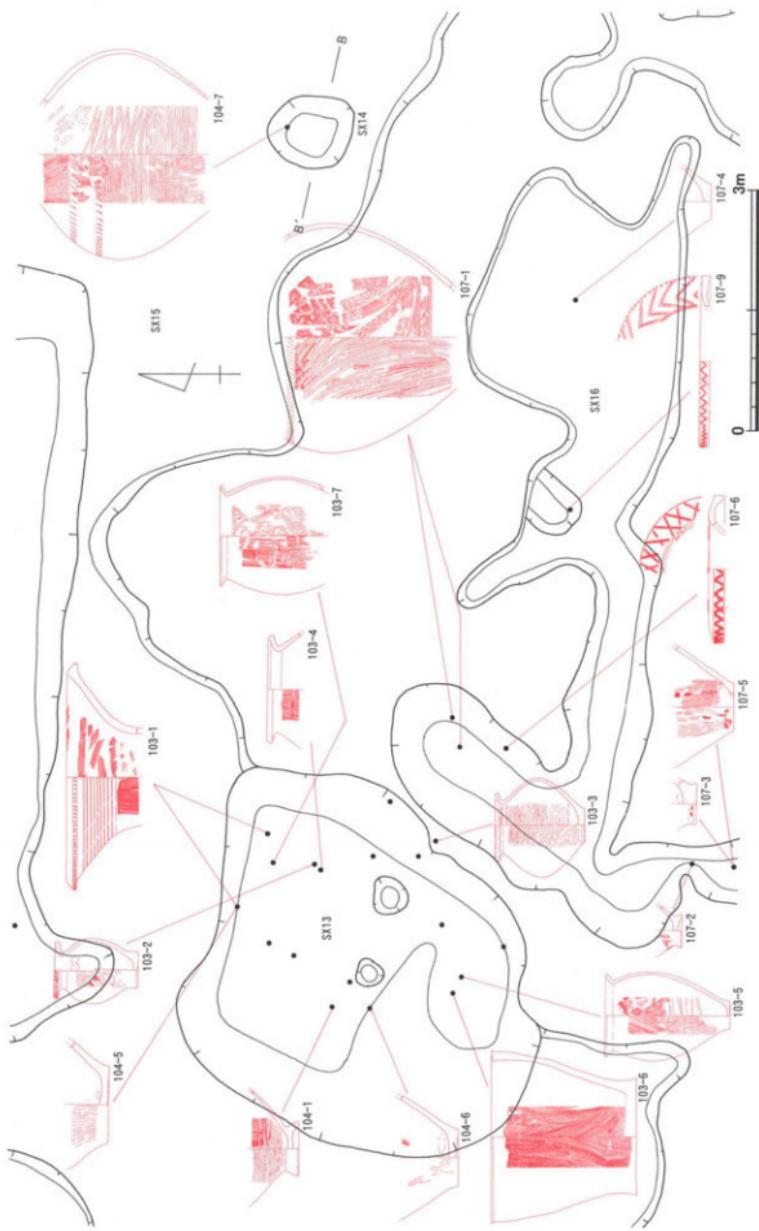
遺構埋土より検出された土器は第94図-4のほぼ完形に近い状態で出土した壺を除くと、破片が散発的に検出されたのみである。

出土遺物（第94図）

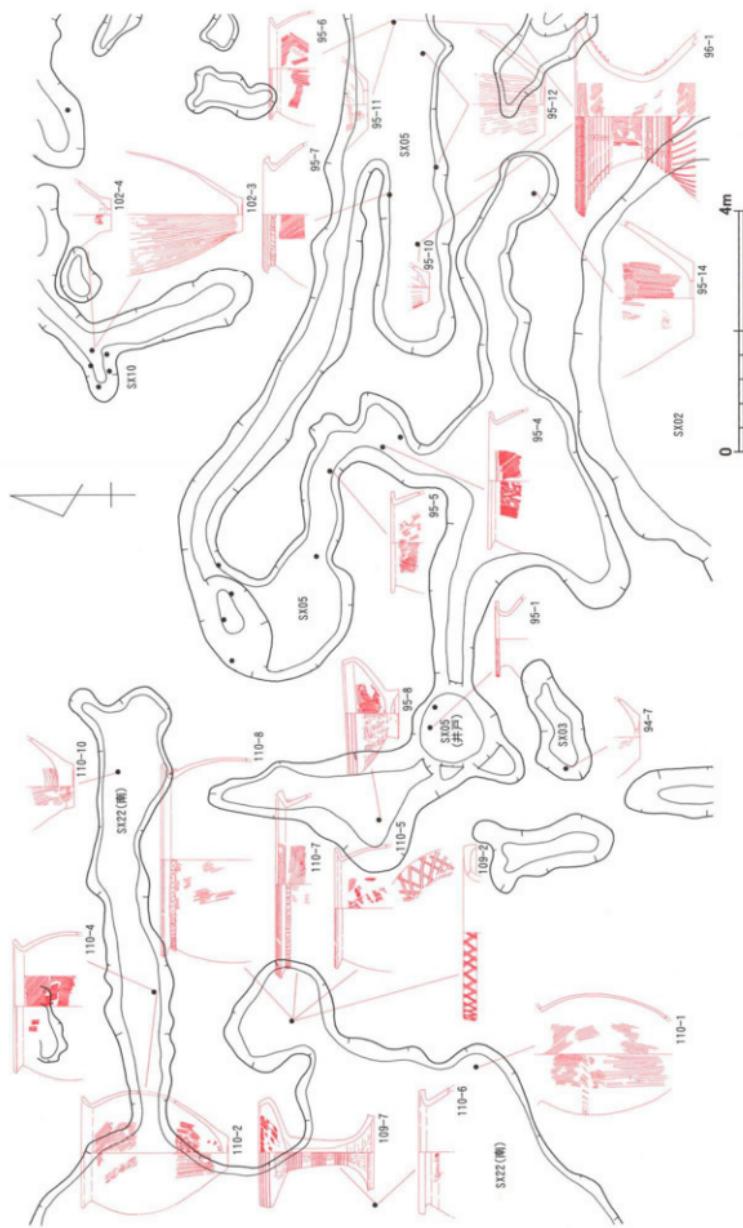
土器の出土点数は4点になる。掲載したのは4の壺、5の高杯である。4は口縁部に凹線が施され、頸部～肩部にかけての箇所に、1点の焼成後穿孔がなされている。外面底部の際までミガキが施されている。5は口縁端部に斜格子文が施されている。非掲載を含め、Ⅳ-1様式（弥生時代中期後葉）の様相を示す。



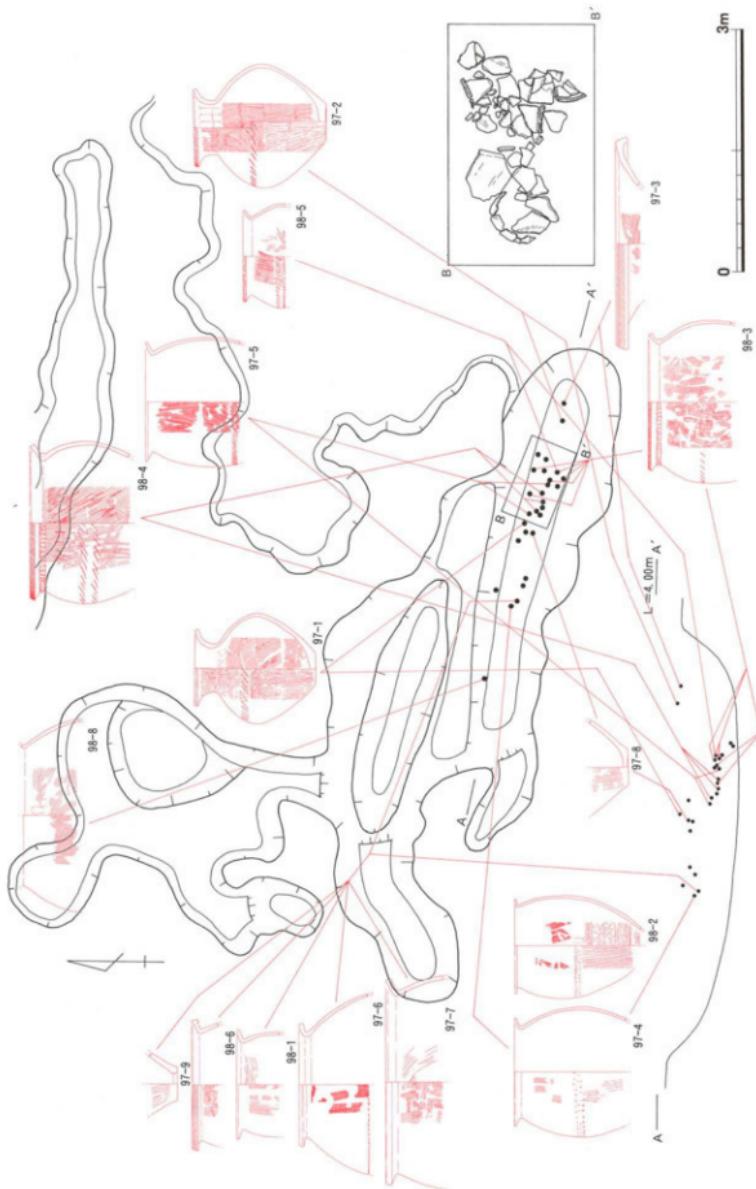
第90図 VIII区弥生時代遺構群・遺物出土状況（第86図分割部分③）(S=1/60)



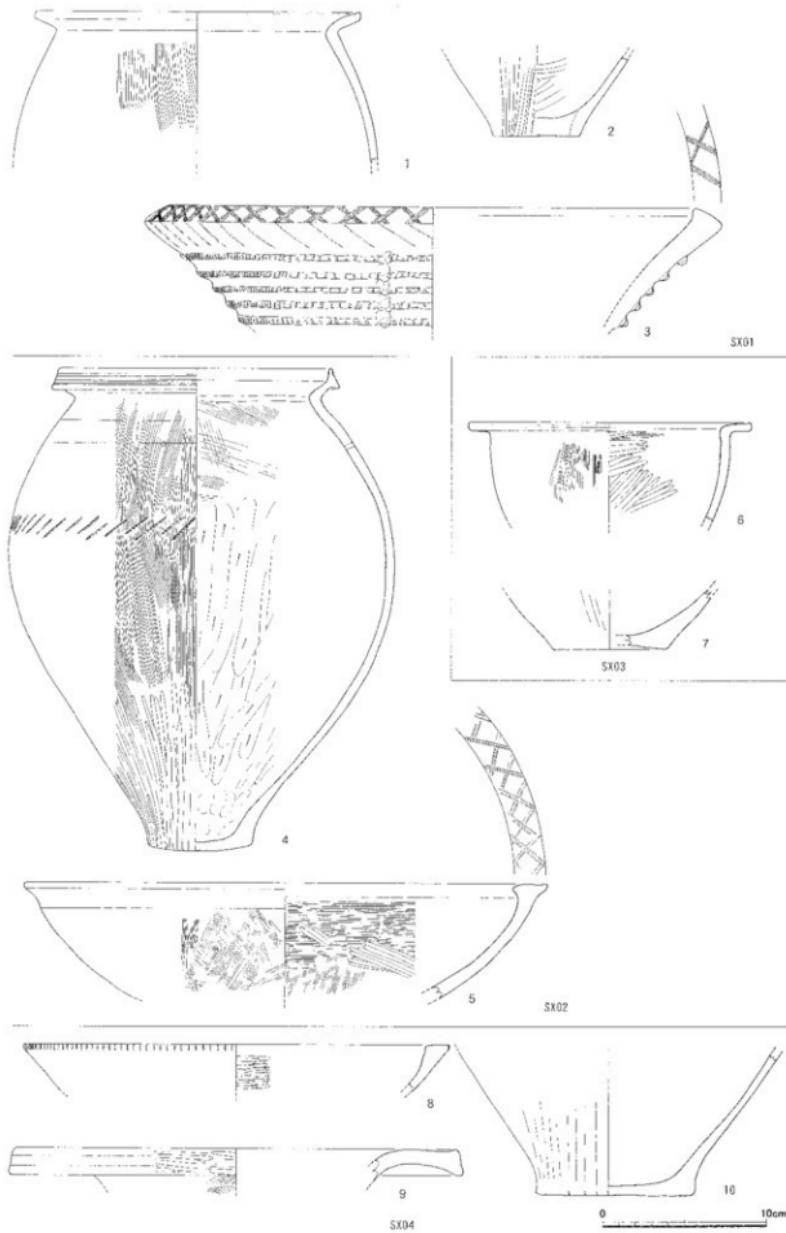
第91図 VIII区弥生時代遺構群・遺物出土状況（第86図分割部分◎）（S=1／60）



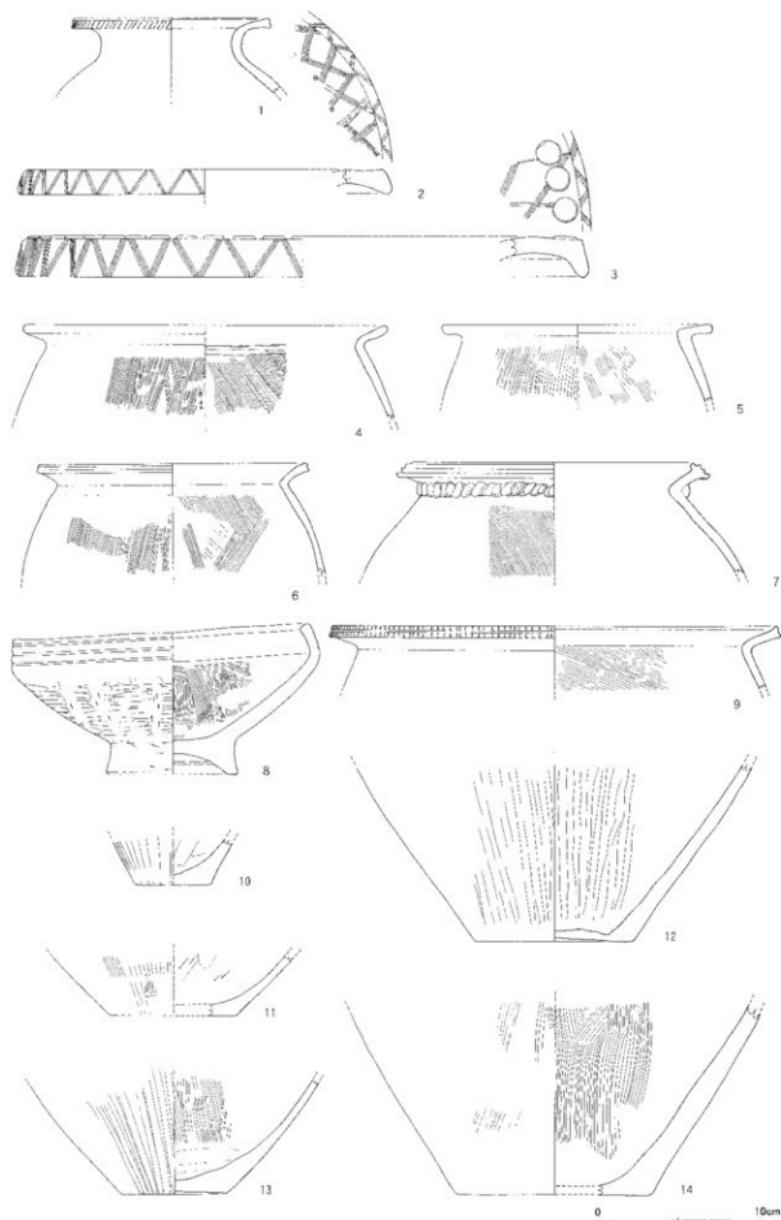
第92図 VIII区弥生時代遺構群・遺物出土状況（第86図分割部分⑩）（S=1／80）



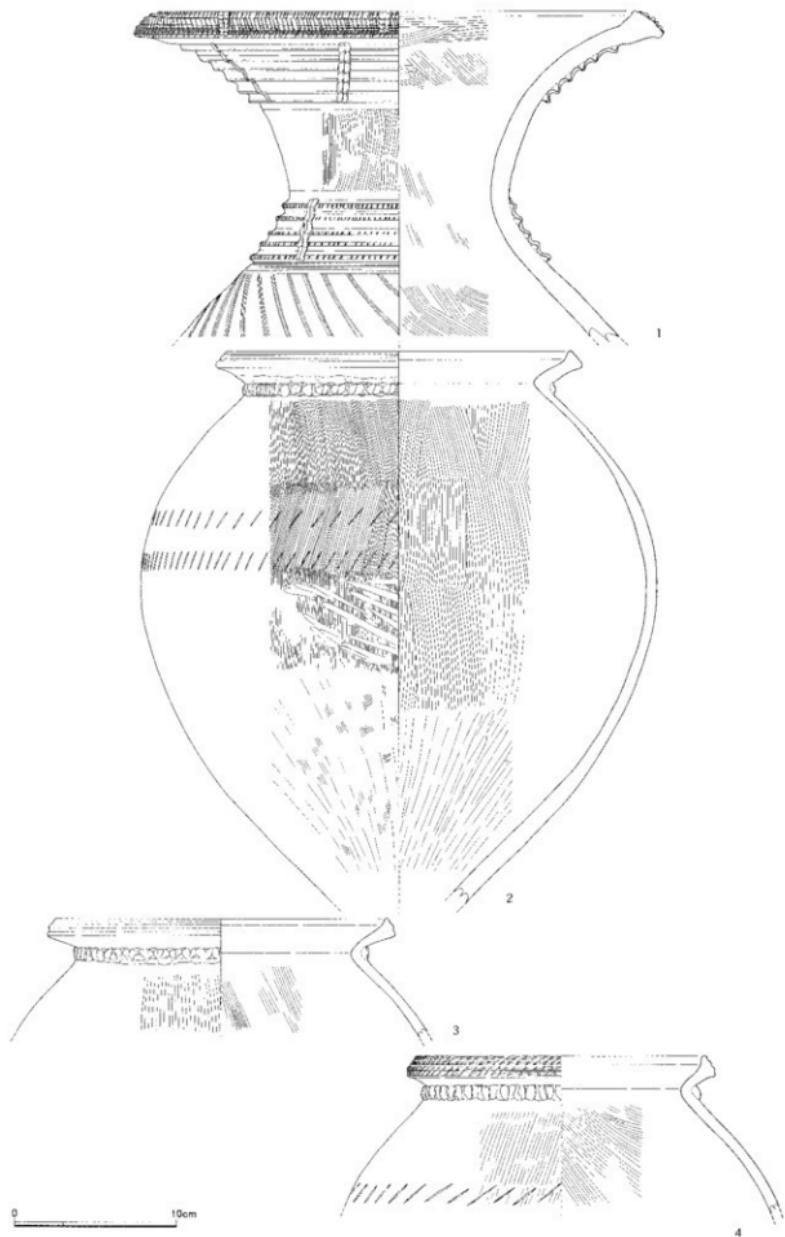
第93図 VII区弥生時代遺構群SX06遺物出土状況 ($S = 1 / 60$)



第94図 四区SX01・02・03・04出土遺物 (S = 1 / 3)



第95図 VIII区SX05出土遺物 (1) (S=1/3)



第96図 VIII区SX05出土遺物（2）(S = 1 / 3)

SX03（第86・92図）

調査区東部の南よりで検出された壺な格円形の土壙である。規模は南北1m×東西2m、深さ19cmである。出土遺物は遺構埋土より散見して出土し、破片が2点のみであった。

出土遺物（第94図）

土器の出土点数は2点になる。6の壺と7の壺底部である。6の口縁端部には1条の凹線らしき痕跡が見られるが、やや強いナデによる結果と考えられる。Ⅲ-2様式（弥生時代中期中葉）の様相を示す。

SX04（第86図）

調査区のはば中央部南よりで検出された現状で、南北3m×東西0.8m、深さ23cmの細長い土壙である。調査区外に遺構の続きが延びている。出土遺物は遺構埋土より散見的に土器の破片が出土し、個体数は5点になった。

出土遺物（第94図）

土器は非掲載分を含めて、5点出土している。8は高杯である。口縁端部には刻目が施されている。9は壺口縁である。特に目立った加飾は為されていない。10は外面にススが僅かに付着しており、比然の痕跡が見られたので壺の底部と考えられる。外面底部付近にはミガキ後に横ナデが施されている。

非掲載2点を含め、Ⅲ-1～2様式（弥生時代中期中葉）の様相を示す。

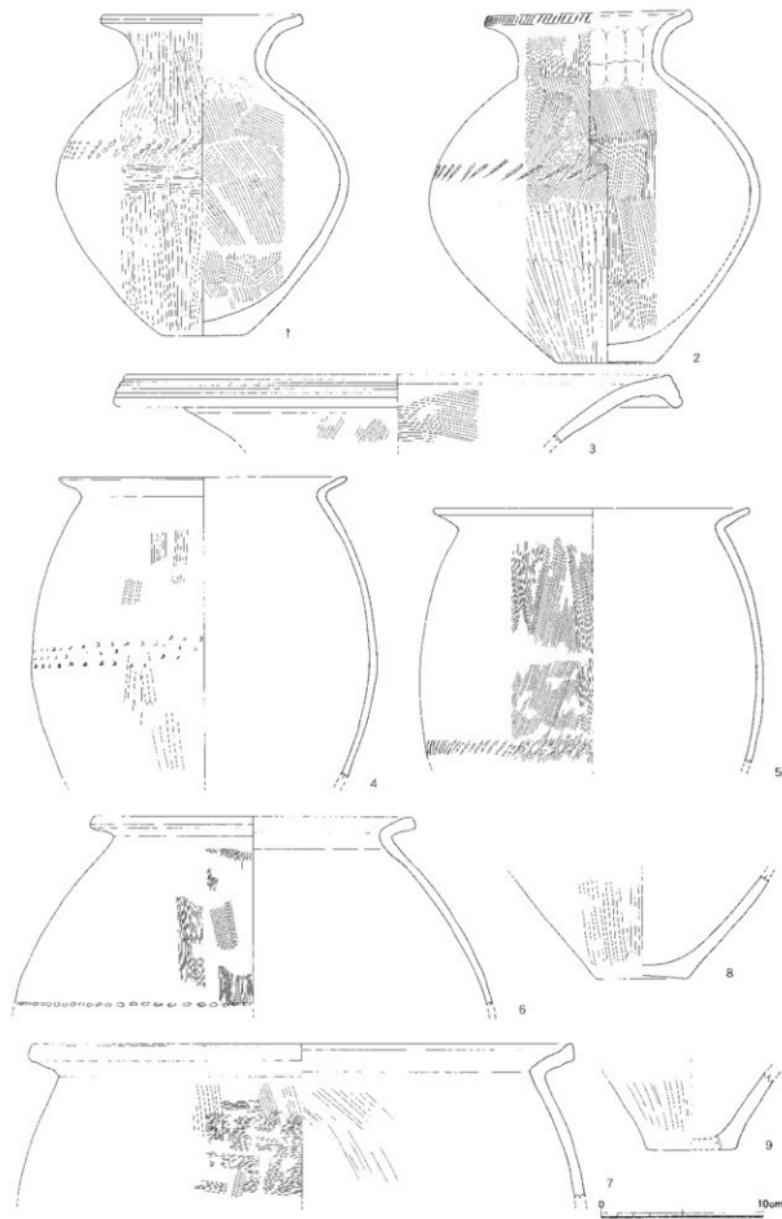
SX05（第86図）

調査区東側の中央部で検出された不整形の溝状の土壙である。先述した井戸も切り合っており、複数の遺構が重複しているものと考えられるが、その境界までは検出出来なかった。規模は南北7m×東西19m、深さ10cmである。また、西側では素掘の井戸と考えられる遺構が検出されている。平面規模は直径1.4～1.5m、深さ約56cmである。底は平らで、その直径は1.1mである。遺物は形態の判明するものが1点検出されている。

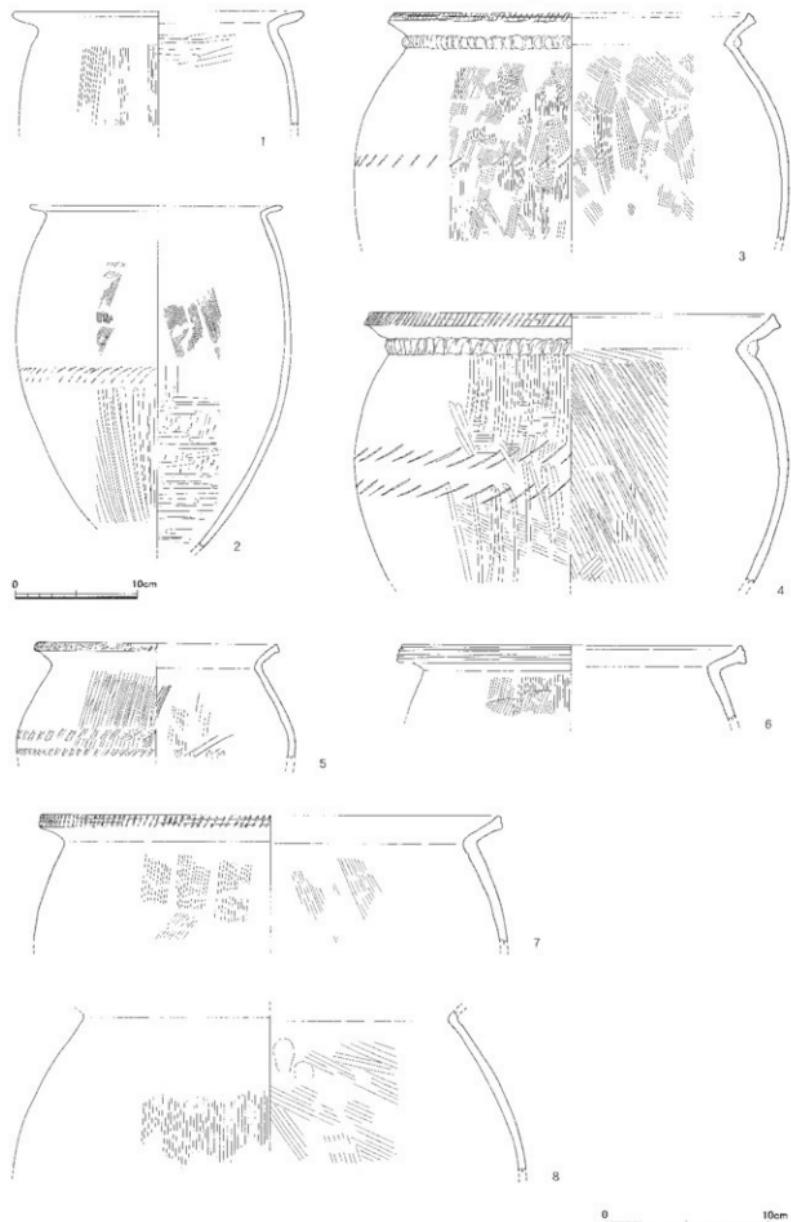
遺構検出面で土器片の集積が確認された（第88図）。精査の結果、3個体の土器が検出できた（第89図左）。また、SX05の埋土を掘削して行く過程で土器の破片が散発的に検出された（第92図）。

出土遺物（第95・96図）

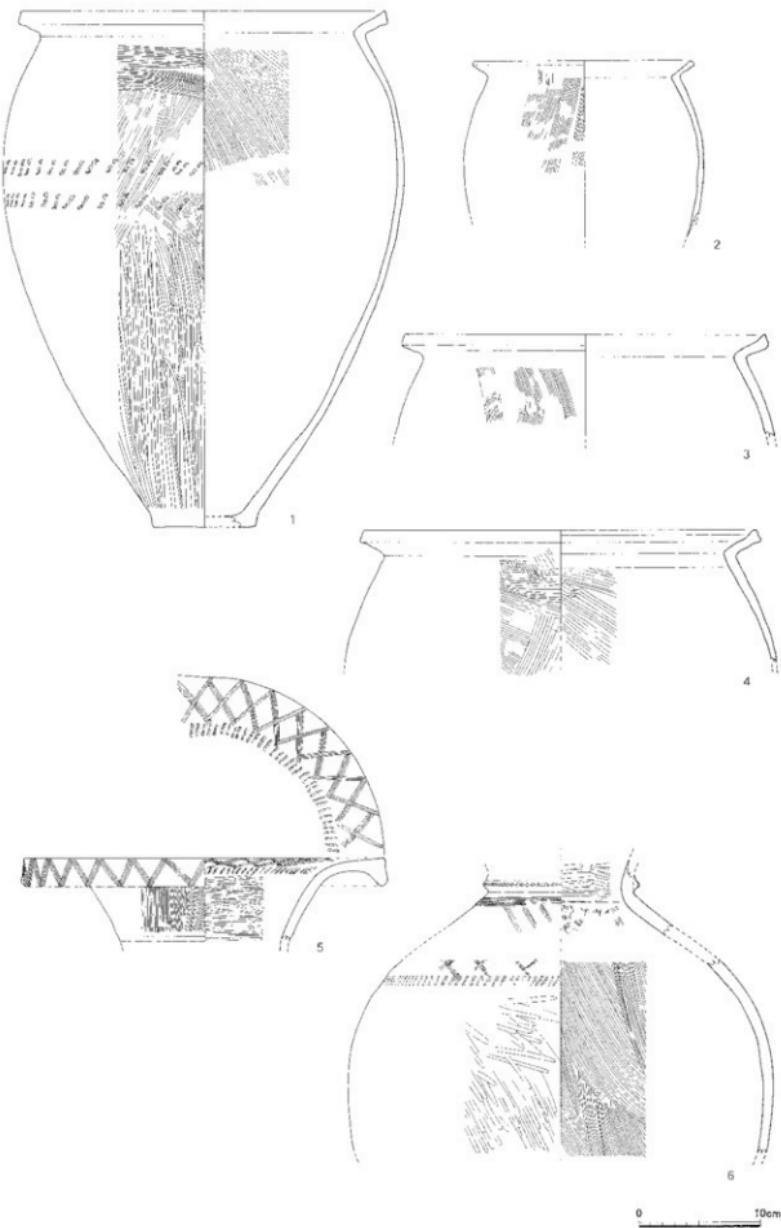
土器は非掲載を含め、37点出土している。Ⅲ様式～Ⅳ様式の特徴を持つ土器が混在して出土している。95-1～3は壺である。2・3は口縁部に斜格子文を施す加飾口縁壺である。また、2の口縁部には3つ以上の穿孔が為されている。4～7・9は壺である。4・5は口縁の断面形態が「く」の字状に屈曲し、一切の装飾を加えていない。若干口縁が肥厚していることから、Ⅲ-2様式の特徴を持つ。6は口縁端部に1条の凹線文が施されたものである。7は口縁端部の幅が広がり、3条の凹線文、頸部には「ネクタイ状」に貼り付け突帯文がめぐる。9は口縁端部に1条の凹線と斜行の刻目文を付加している。いずれも口縁の断面形態が「く」の字状に屈曲しているが、口縁の肥厚や加飾があるⅣ-1様式の特徴を有する。8は高台付きの鉢である。口縁に3条の凹線文があることから、Ⅳ-1様式の特徴を有する。10は壺の底部と考えられる。11～14は壺の底部と考えられる。壺と壺の違いをススや炭化物の有無によって判断できない場合、ここでは大きさの他に胴部の立ち上がりの角度を目安にしている。底部の直径が8cm以上の大型で、立ち上がりの角度が45度以下の緩いものを壺としておく。



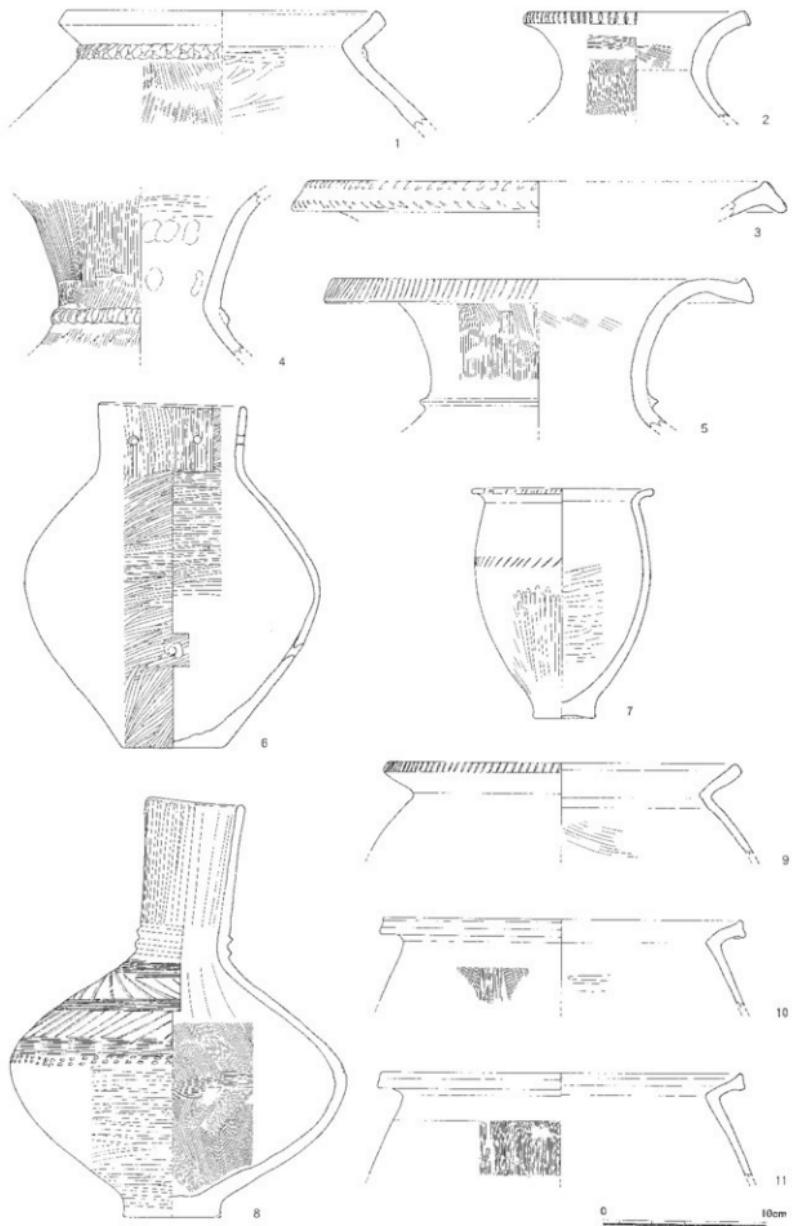
第97図 VII区SX06出土遺物 (1) (S=1/3)



第98図 VII区SX06出土遺物 (2) (1・4～8はS=1/3、2・3はS=1/4)

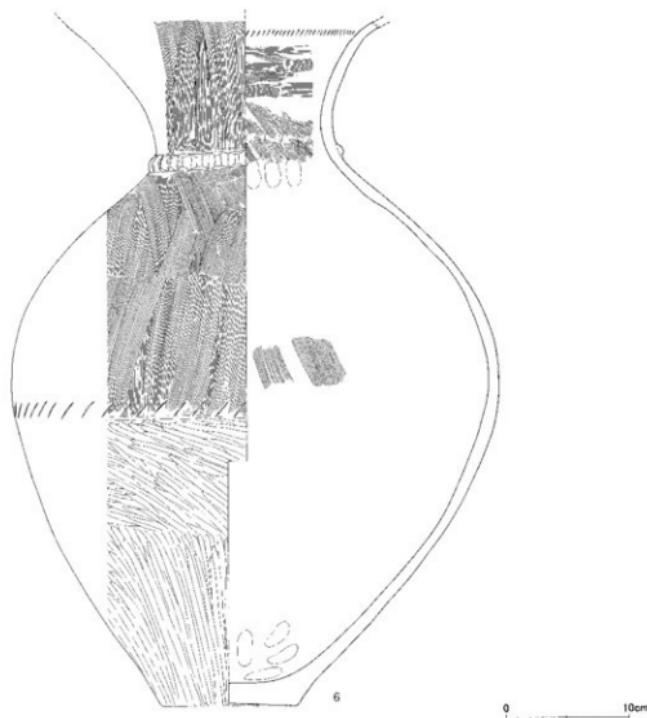
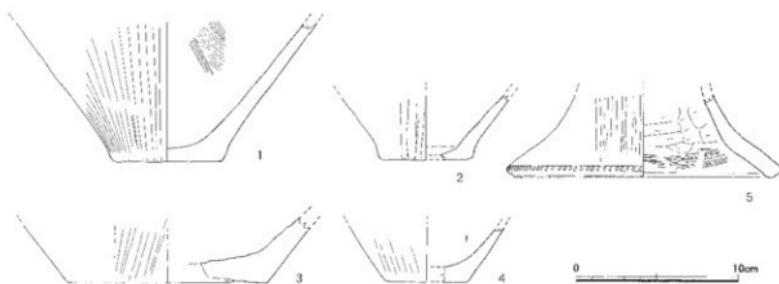


第99図 隋区SX07出土遺物 (S = 1 / 4)



第100図 VIII区SX08出土遺物 (1) (S=1/3)

96-1は大型の加飾口縁壺である。口縁部-頸部に多様な加飾が施されている。95-9・10と隣接して出土している。IV-1様式の特徴を有する壺である。96-2~4は造構検出面で確認された壺である。いずれも口縁部に2~3条の凹線文がめぐり、頸部には貼り付け突帯文が付加されてい



第101図 VIII区SX08出土遺物 (2) (1~5はS=1/3、6はS=1/4)

る。IV-1様式の特徴である。

以上のことから、SX05は弥生時代中期中葉～後葉の期間に、複数の遺構が切り合った遺構の综合体である可能性が考えられる。すなわち、出土状況を鑑みれば、埋土上層からIV-1様式が、埋土内からIII-2様式とIV-1様式が出土している。

SX06（第86・93図）

調査区東側の中央部で検出された遺構である。検出当初はSX08として括っていたが、遺構埋土の掘削中に南北1.6m×東西5.8m、深さ44cmの土壌が検出され、そこから多量の土器が出土地した。そこで、この遺構をSX08と別遺構として認識するに至った。埋土は淡黒灰色粘質土である。

遺物の出土状況は第93図にあるが、上層の土器群と下層の土器群に2分することができる。上層からはIII-1様式の特徴を持つ完形の壺が2個体、断面「く」の字状口縁の壺や壺が複数個出土している。一方、2個体の完形の壺に挟まれた範囲の下層（遺構底部付近）からは、III-2～IV-1様式の特徴を持つ、頸部に貼り付け突帯文が付加された壺2個体と、III-1様式の特徴を持つ口縁に刻目文を施した断面「く」の字状口縁の壺1個体が出土している。また、上層東側の完形の壺に隣接して、IV-1様式の特徴を持つ口縁部に凹線文を施す壺が出土し、上層の土器群に属する第97-9の壺底部に近接して、III-2様式の特徴を有する頸部に貼り付け突帯文が付加された壺が出土している。しかし、完形の壺の下からは土器が出土していない。これらを考え併せると、下層の土器群はSX06において、後から掘り込まれた別の土壌である可能性も考えられる。ただし、SX06の上層ではIII-1様式とIII-2様式、そしてIV-1様式にかかるものが併存している状況を確認することが出来る。

出土遺物（第97・98図）

土器は非掲載を含めて、42点出土している。97-1～3は壺である。このうち前二者は完形の壺である。3は口縁部に3条の凹線文がめぐる。2の口縁部には刻目文が施されている。4・5は断面「く」の字状口縁の壺である。6は口縁が肥厚した壺である。7は口縁が肥厚した壺である。8は壺底部、9は壺底部と考えられる。

98-1・2は断面「く」の字状口縁の壺である。3・4は頸部に貼り付け突帯文が付加されている壺である。口縁部には凹線文とまでは表現できないような溝が付加されている。5は口縁部に斜状の刻目文を付加した壺である。6・7は口縁に凹線を施した壺である。

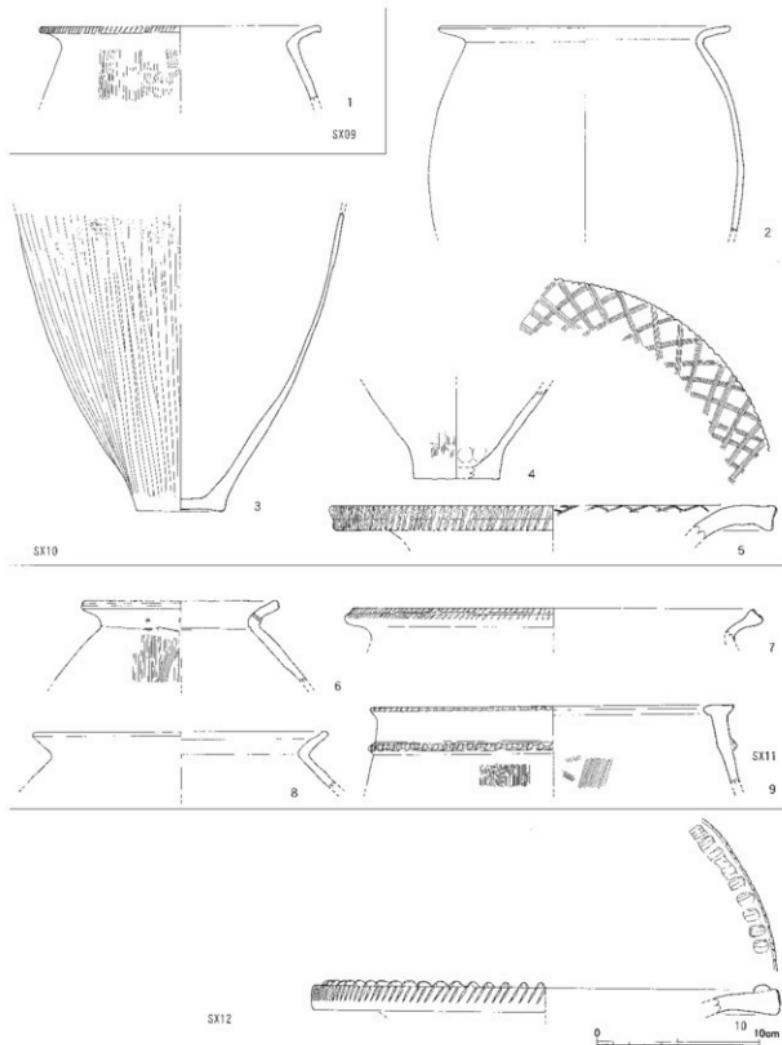
97-1・2・4・5と98-1・2はIII-1様式、97-6・7と98-3・4・5はIII-2様式、97-3、98-6・7はIV-1様式の特徴を持つものである。

SX07（第90図）

SX06の北に隣接している遺構である。規模は南北1.4m×東西2.15m、深さ30cm前後である。第90図の土壙図にある1～3層がその埋土になる。出土土器は主に1層から出土している。上器は黒斑を生じているものが大半を占める。比熱によって破損した土器を廃棄した土壙と考えられる。

出土遺物（第99図）

土器は6点出土している。1・3・4は口縁が肥厚した断面「く」の字状口縁の壺である。1は胴部の一部に黒斑が生じている。2は「く」の字状口縁の壺である。胴部の半分に黒斑が生じており、その境で破損している土器である。5は斜格子文などを口縁に加飾した壺である。6は頸部に直帶がめぐる壺である。

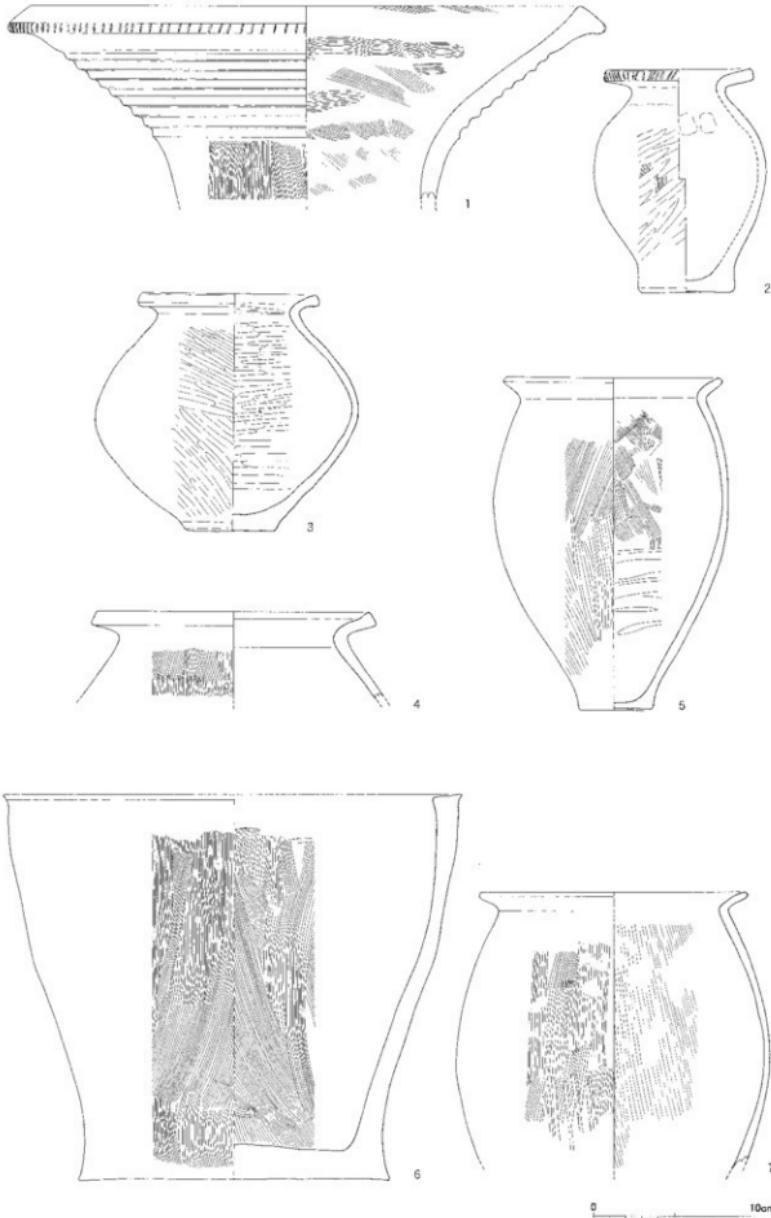


第102図 VIII区SX09・10・11・12出土遺物 (S=1/3)

SX08 (第90図)

SX06やSX07が切り合っている造構である。南北9m×東西11m、深さ13cmの規模である。調査区東端中央部とSX07の北西側と西側の部分を含めた範囲を指す。造構検出上面において、大型の壺が1点検出された(第88・89図)。

出土遺物は造構埋土より散見して土器の破片が出土している。



第103図 地区SX13出土遺物 (S = 1 / 3)

出土遺物（第100・101図）

土器は非掲載分を含めて、38点出土している。100-1は口縁が肥厚し頸部に貼り付け突帯文を付加された壺である。2～5は壺である。4は頸部に貼り付け突帯文を付加している。6・8は直口壺である。6は頸部に4箇所の焼成前穿孔、胴部下部に1箇所の焼成後穿孔を行っている。7・9は断面「く」の字状口縁の壺で、口縁部に斜状の刻目文を施す。7は小型の壺である。10・11は口縁部が肥厚する断面「く」の字状口縁の壺である。口縁部外側には強めのナデが施され、浅い溝がめぐらしがある。

101-1・2・4は壺の底部で、3は壺の底部である。5は高壺の脚部である。裾の縁に刻目文が施される。6は頸部に貼り付け突帯文がめぐる壺である。

100-1・4・10・11はⅢ-1様式、100-2・3・5～9はⅢ-2様式、101-1～4はⅢ様式の範疇、101-6はⅢ-2様式の特徴を持つものである。

SX09（第86図）

調査区北東部に位置する。南北1m×東西40cm、深さ19cmの土壙である。小規模な土壙であるが、一部が調査区外にかかっているため全容は不明である。遺構埋土より4個体分の土器の破片が散見して出土した。

出土遺物（第102図）

土器は非掲載を含めて、4点出土している。102-1は断面「く」の字状口縁の壺で口縁部に斜状の刻目文が施されている。Ⅲ-1様式の特徴を持つ土器である。非掲載には頸部に貼り付け突帯文を付加しているものがあり、Ⅲ-2様式の土器も含まれている遺構である。

SX10（第86・92図）

調査区東部のほぼ中央部に位置する。小さな土壙であり、複数の遺構が重なり合っている可能性がある。規模は南北約6m×東西3.8m、深さ30cmである。遺構埋土より10個体分の破片が散見して出土している。

出土遺物（第102図）

非掲載を含めて、10点出土している。102-2は断面「く」の字状口縁の壺である。3は壺の下半である。煮炊きによる「ふきこぼれ」の痕跡が明瞭に残っている。4は壺の底部である。5は斜格子文を施し、口縁端部に小口による刺突文を施した加飾口縁壺である。

土器は非掲載分を含め、Ⅲ-1様式を中心とする様相を示す。

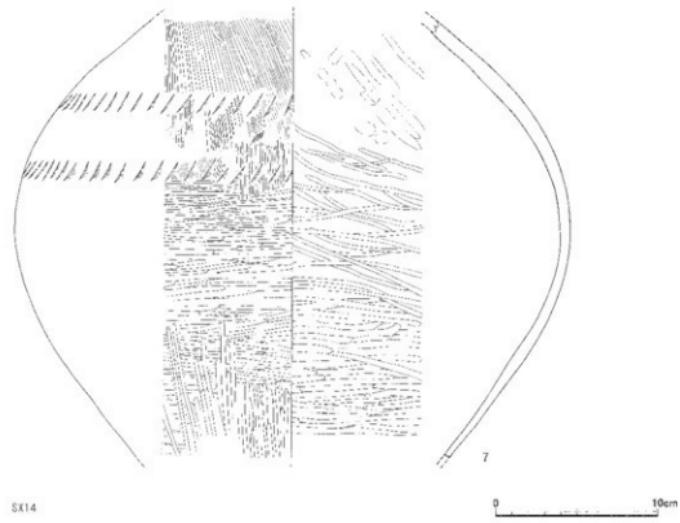
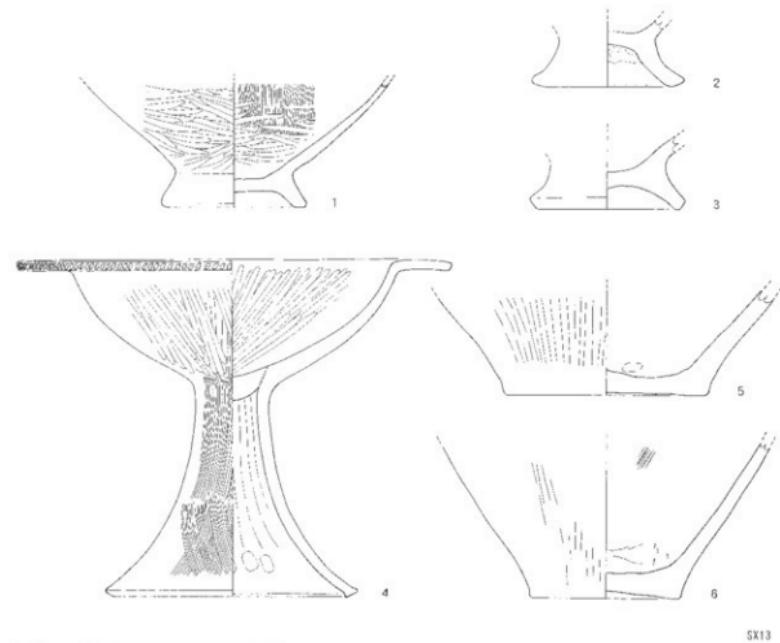
SX11（第86図）

調査区東部のほぼ中央部に位置する。直径約1m、深さ約15cmの円形の土壙である。遺構埋土内より6点の土器片が散見して出土した。

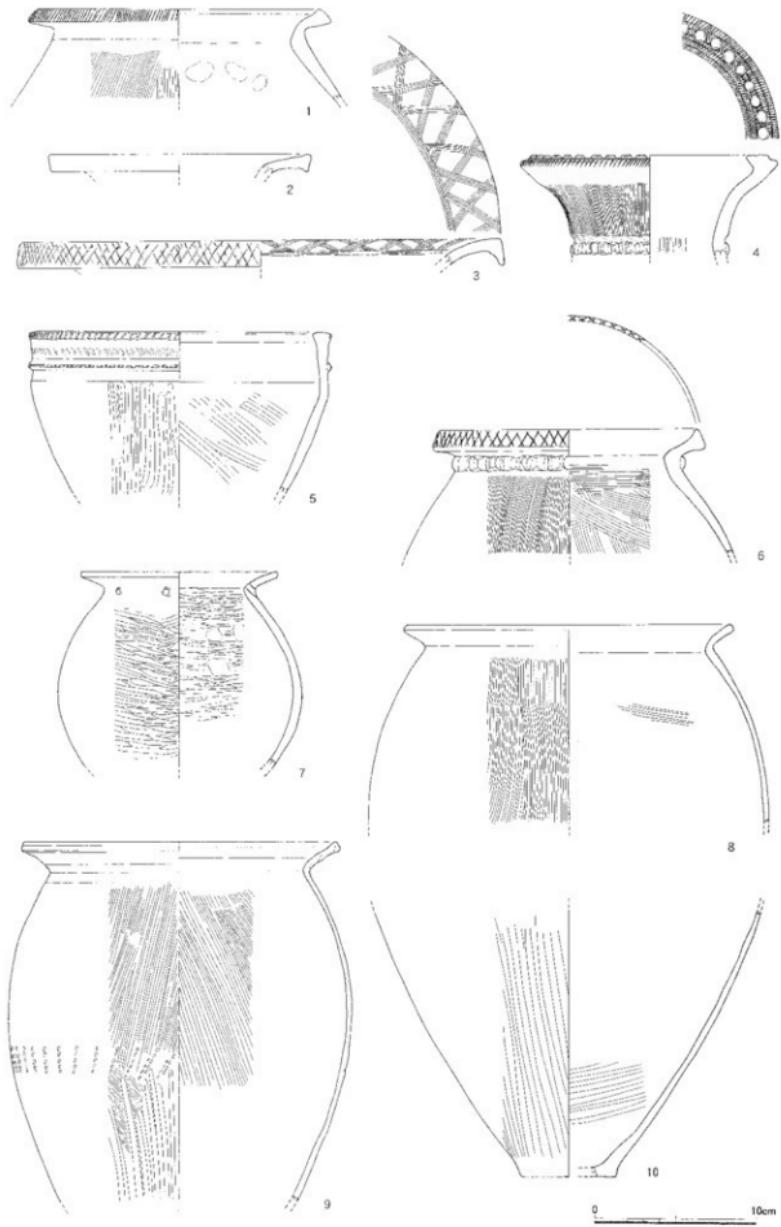
出土遺物（第102図）

土器は非掲載を含めて、6点出土している。102-6は口縁部に浅い1条の凹線文がめぐり、頸部に焼成前穿孔が2孔ある壺である。外面頸部付近には刷毛調整の起点があり、僅かに段差が生じている。7は1条の凹線文後に斜状の刻目文を施した壺である。8は「く」の字状に口縁を屈曲させる壺である。口縁は端部が僅かに上方へ屈曲する。9は口縁端部が水平方向に平らな面を形成し、口縁直下に貼り付け突帯文が付加された無頭壺である。

非掲載分を含め、Ⅲ-1～2様式を中心とする様相を示す。



第104図 VIII区SX13・14出土遺物 (S = 1 / 3)



第105図 VII区SX15出土遺物(1) (S=1/3)

SX12（第86図）

調査区東部のほぼ中央部、SX11より東に約1.5mのところにある南北1.0m×東西1.1m、深さ約20cmの円形の土壙である。2点の土器片が検出されている。

出土遺物（第102図）

土器は非掲載分を含めて、2点出土している。102-10は口縁端部に斜状の刻日文、同じく上部に貼り付け浮文を施した加飾口縁の壺である。非掲載分を含め、口縁部の肥厚がⅢ-2様式より顕著ではないため、Ⅲ-1様式を中心とする様相を示す。

SX13（第86・91図）

調査区中央部の北よりに位置する。SX15を切り込んで掘り込まれている遺構である。SX15との明確な境が検出されなかったため、遺構西側の上場は不明である。現存で、南北5.0m×東西4.0m、深さ21cmの方形の遺構である。遺構の中心部に浅いピットが2つ検出されているが、遺構全体としての性格は不明である。一方、完形に近い土器が同レベルで、集中して5点検出されている。一括発見された遺物群である可能性が高い（第91図）。

出土遺物（第103・104図）

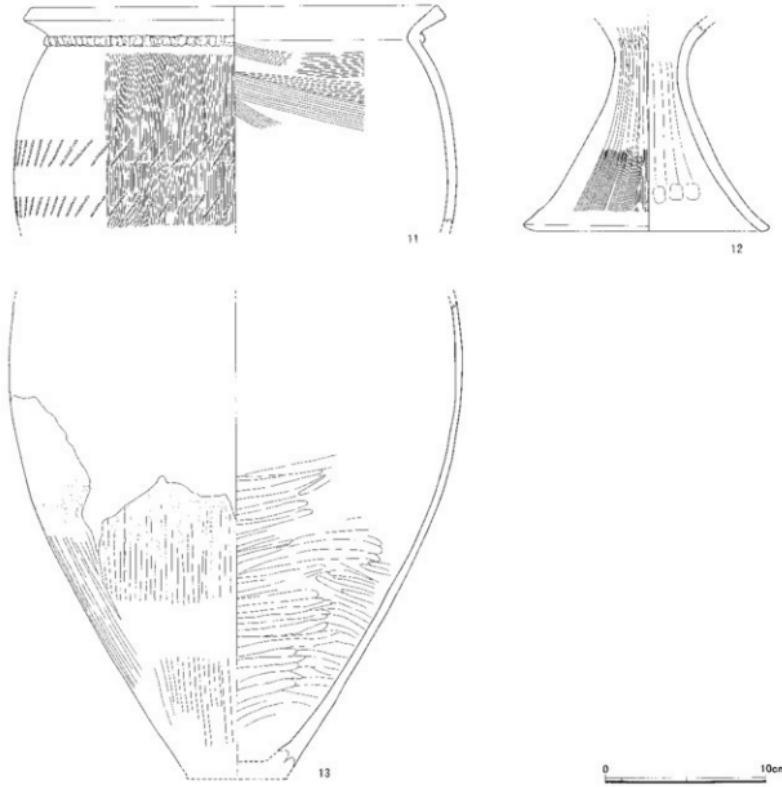
土器は非掲載分を含めて、39点出土している。このうち、掲載分は13点であり、うち5点が全体のプロポーションが判明する完形に近いものである。103-1は広口壺の口縁部（完存）である。口縁端部は肥厚し、頸部にかけて、凸線が9段形成されている。2は口縁部の一部は欠損しているが、完形の小型の壺である。外面にはミガキが施されて、底部付近はナデが施されている。胴部はハート形の黒斑が見られる。3もほぼ完形の小型の壺である。胴部は算盤玉状に張り出す形態である。内外面に丁寧なミガキが施されている。口縁部や頸部に焼成前の穿孔は見られず、内外面にも顏料等の塗布は見られないが、その形態から北部九州の直接的な影響を受けた壺である可能性が考えられる¹⁸⁾。4は口縁部しか検出されていないが、胴部が張り出すことから壺と考えられる。口縁は肥厚し、僅かに上方に屈曲する。5は断面「く」の字状口縁の壺である。全体の2分の1以上が残っている。胴部に焼成時破裂痕跡と思われる器壁が強けた痕跡が観察され、器壁断面にも黒化層は見られない。また、破裂痕が見られる箇所は器壁の厚みが1mm程度しか残存していないことから、すでに焼成後に穴を開いていた焼成失敗品である可能性も考えられる（図版77）。なお、焼成時失敗品については後述する。6はほぼ完形のハケツ形の土器である。内外面共に刷毛が施されている。口縁端部は上面に向けてほぼ水平になり僅かに内傾する。7は断面「く」の字状口縁の壺である。内外面共に刷毛が施されている。

104-1～3は高台付きの壺である。高台部の底径は8.0～9.0cm前後の規格性があるものの、その形態はそれぞれ異なっている点が挙げられる。4は口縁が鈎状に延びた高坏である。ほぼ完形で、坏部の内外面にミガキが施されている。また、半球体状の円盤が坏部と脚部の間に充填されている状況が確認できる。5は器壁に厚みがあり、壺の底部と考えられる。6は外面に僅かにススが付着しており、壺の底部と考えられる。

非掲載分を含めて、Ⅲ-1様式の様相を示す一括資料と考えられる。

SX14（第86・87・91図）

調査区北東部のSX15内に掘り込まれた南北1.0m×東西0.9m、深さ25cmのやや方形の土壙である。第87図の上層図にあるように、炭がかなり含まれている。ここからは、5層より壺の胴部片が



第106図 VII区SX15出土遺物（2）（S=1／3）

1点検出されている（第91図）。炭の他には焼土塊等や粘土塊も検出されておらず、土器等を廃棄したゴミ穴等の用途を持った土壙と考えられる。

出土遺物（第104図）

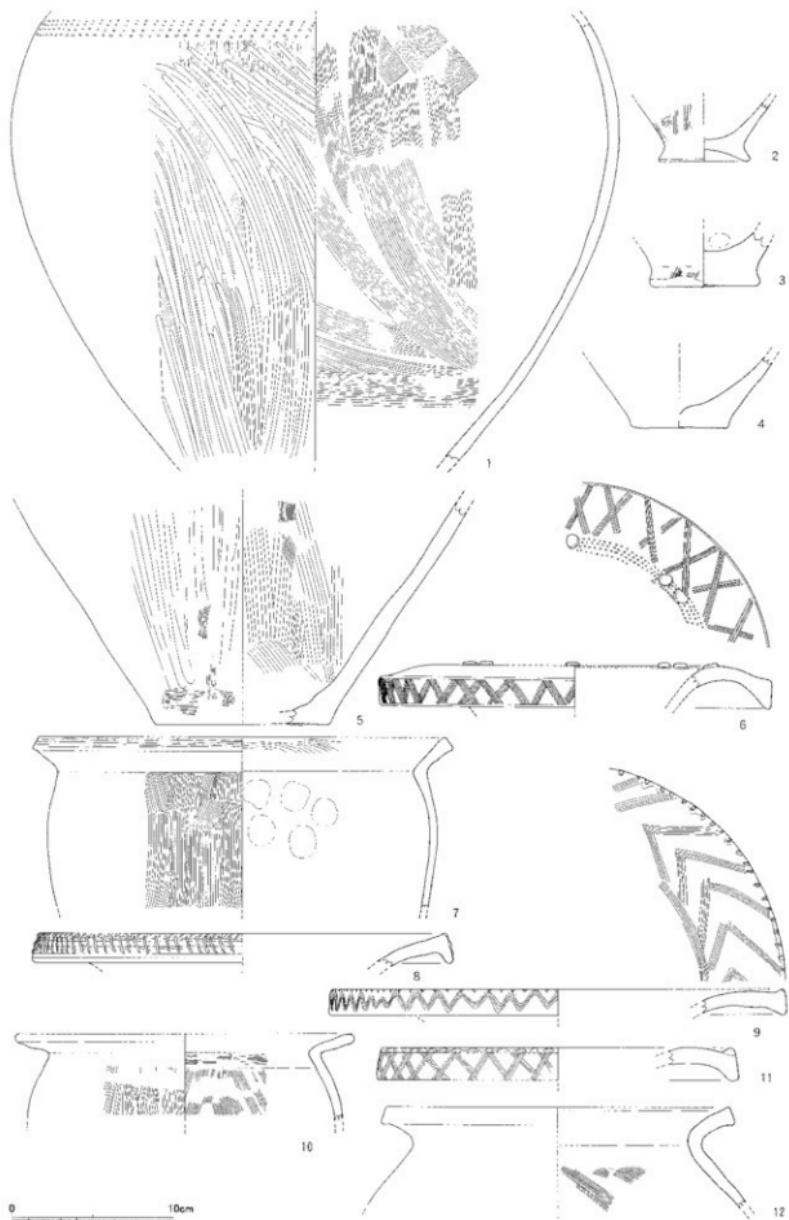
104-7の壺胴部片のみの出土である。肩部に2列の斜状列点文が施されている。胴部片は内外面に黒斑が見られ、2次焼成を受けた可能性もある。

SX15（第86図）

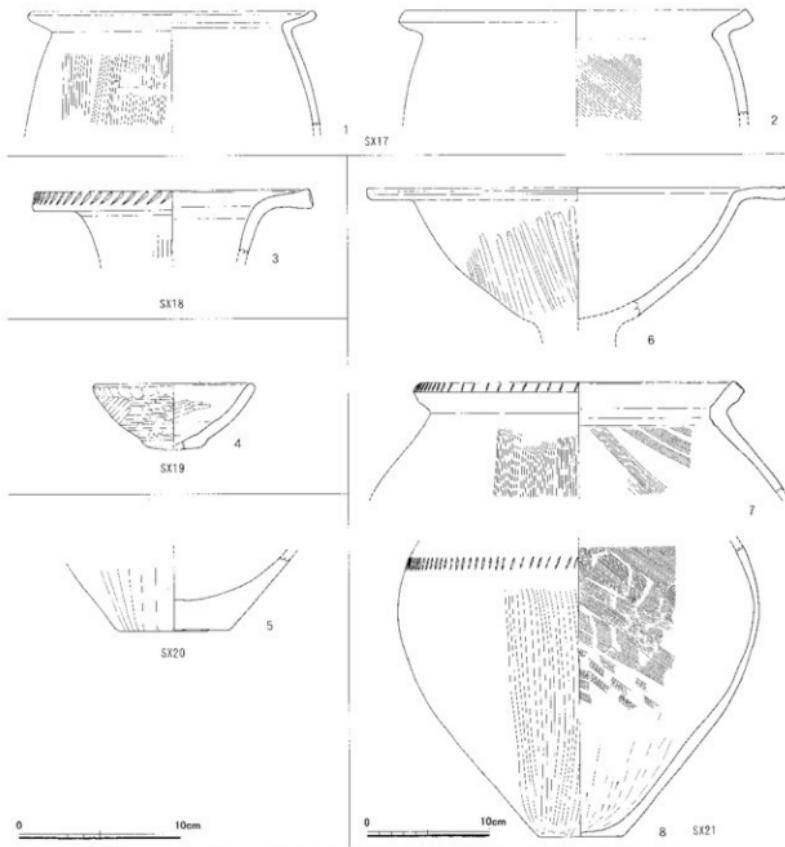
調査区北面に沿って広がる遺構である。SX13・14など、幾つかの遺構が切り合っている。西はSD01で切られている。規模も大きく、平面形もかなり歪である。東西方向の長さは約31mになる。土器は遺構埋土より散見して出土している。一箇所に集中して検出される傾向は無かった。

出土遺物（第105・106図）

非掲載分を含めて40点出土している。105-1は口縁部端部が肥厚し、上方に僅かに屈曲した壺である。斜状の刻目文がめぐる。2は加飾口縁の無い壺の口縁である。3は加飾口縁の壺である。



第107図 VII区SX16出土遺物 (S = 1 / 3)

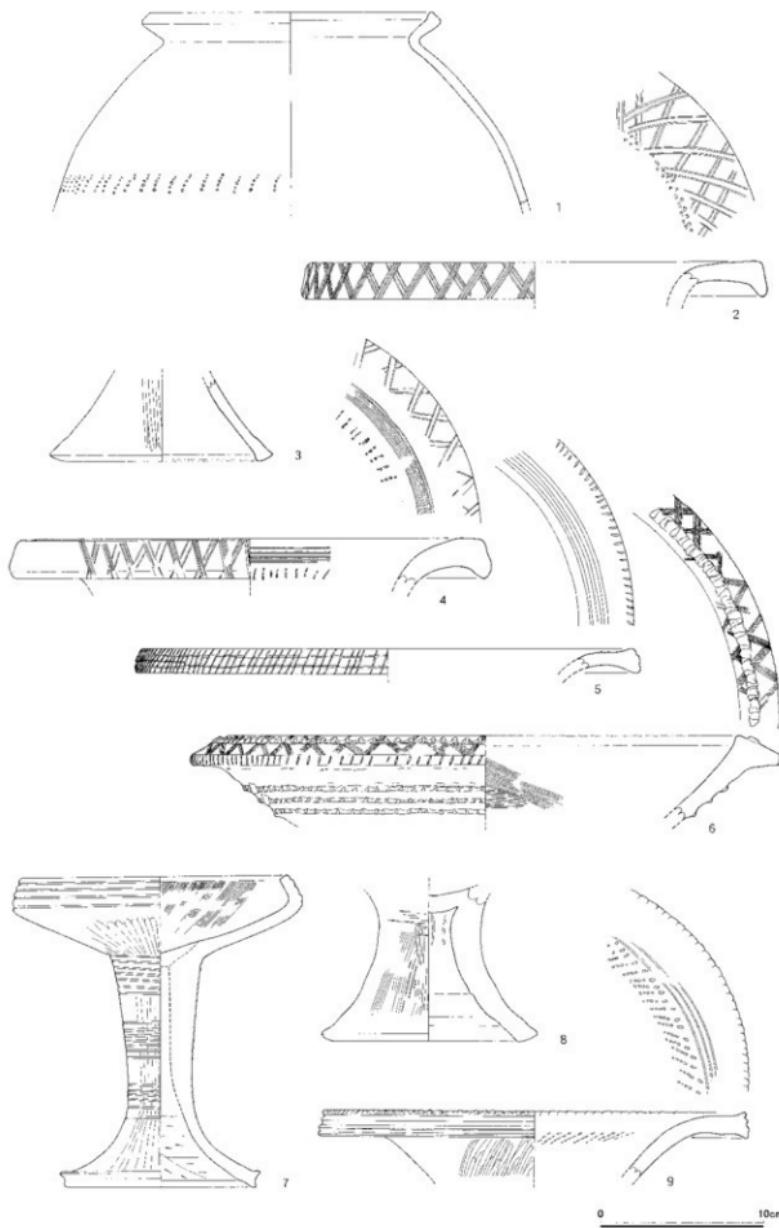


第106図 VIII区SX17・18・19・20・21出土遺物 (1~7はS=1/3、8はS=1/4)

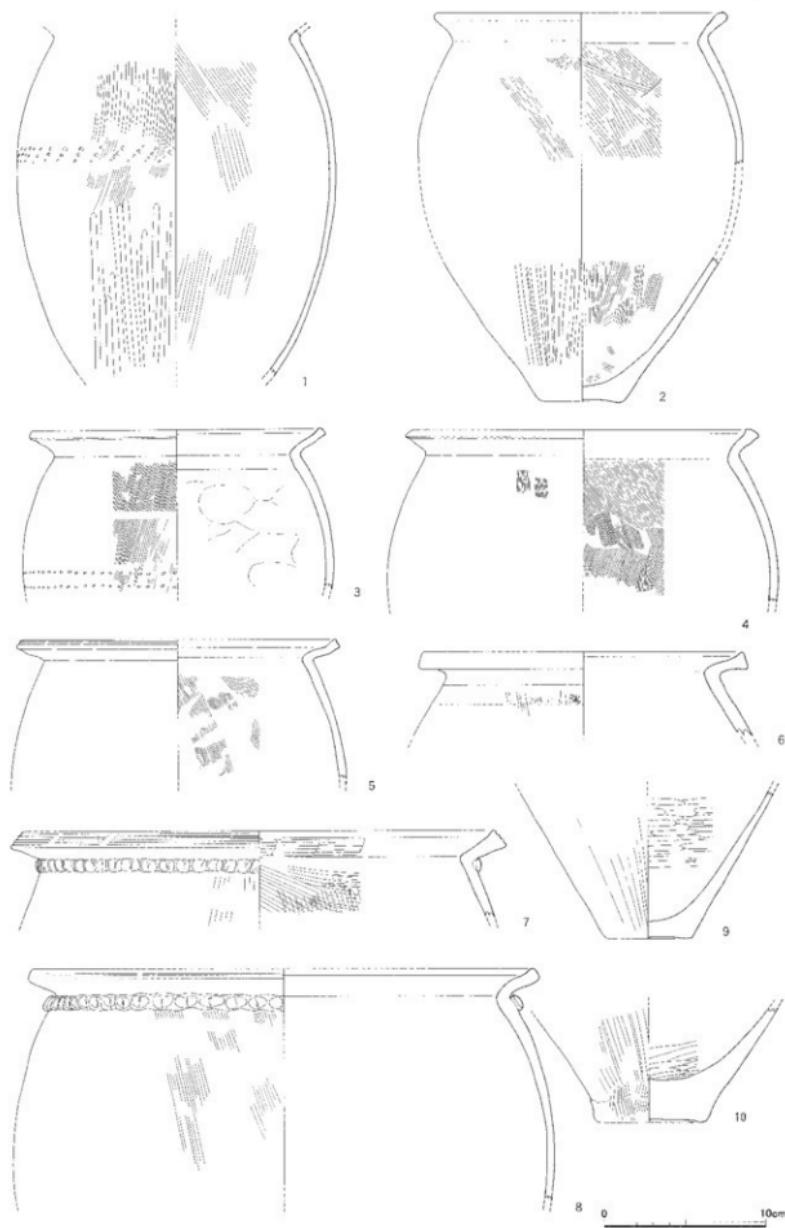
105-4は広口(長頸)壺である。口縁部は内傾しているが、水平方向の端部を形成している。円形浮文を貼り付けており、頸部には貼り付け突帯文を付加している。5は鉢である。口縁から頸部まで、斜状の刻目文や貼り付け突帯文を付加している。6は頸部に貼り付け突帯文を付加した壺である。口縁端部には刻目文を施している。7は断面「く」の字状口縁の壺である。内外面共に丁寧なミガキが施されている。頸部には焼成後穿孔が2孔空いている。8・9は断面「く」の字状口縁の壺である。9は口縁部に強いナデの痕跡が段状に見られ、粘土の継ぎ足し単位が確認できる。10は壺の下半部である。底部付近はミガキ後ナデを行っている。

106-11は頸部に貼り付け突帯文を付加した壺である。口縁端部はナデを施している。12は高坏脚部である。外面下半はミガキを施した後に刷毛が施されている。13は壺の下半部である。「ふきこぼれ」の痕跡が明瞭に残っているのが確認できる資料である。

これらの土器はⅢ-1~2様式の様相を示すものである。105-2・7・8・9はⅢ-1、105-1・



第109図 VII区SX22南出土遺物（1）（S = 1 / 3）



第110図 VIII区SX22南出土遺物（2）（S=1／3）

3・4・5・6・11はⅢ-2の特徴を示す。

SX16（第86・91図）

調査区北東部のSX08とSX13の間に位置する。複数の遺構が切り合っているものと考えられる。南北3m×東西10m、深さは平均で20cm前後の疊な土壌である。遺構埋土より遺物が散見されるが、殆どが破片でまとまって出土するものはない。遺構の性格は不明である。

出土遺物（第107図）

土器は非掲載物を含めて、19点出土している。107-1は壺の胴部である。2~5は壺底部である。2は高台が付くような形態である。6・8・9・11は口縁端部や上部に斜格子文や刻目文、円形浮文などを施した加飾口縁の壺である。このうち、8は口縁部に2条の凹線状の強いナデを施している。7は口縁部が肥厚した壺で、口縁端部に強いナデが施され、凹線状の施文がなされている。内面には指頭圧痕跡が頗著である。10は断面「く」の字状口縁の壺である。僅かであるが、口縁部が内湾している。12は口縁が肥厚した壺である。

SX16の遺物は非掲載分を含めて、全体的にⅢ-1様式の特徴を示す。ただし、一部に凹線状の強いナデが口縁部に施されているものもあり、新しい要素が含まれている。

SX17（第86図）

調査区のはば中央部に位置する。南北3.2m×東西1.2m、深さ28cm前後の細長い土壌である。出土土器は2点である。全て破片である。

出土遺物（第108図）

土器は非掲載物を含めて、4点出土している。108-1・2共に断面「く」の字状口縁の壺である。1の口縁部はやや内湾し、受け口状になっている。2は口縁が肥厚している。SX17の遺物は非掲載分を含めて、Ⅲ-2様式の様相を示す。

SX18（第18図）

調査区西部の北寄りに位置する。南北2.2m×東西1.8m、深さ20cm前後の瓢箪形の土壌である。2つの土壌が切り合っている可能性がある。遺構埋土より土器の破片が1点検出されている。遺構の性格は不明である。

出土遺物（第108図）

108-3は口縁部に斜状の刻目文が施された壺である。Ⅲ-1様式の様相を示す。

SX19（第86図）

調査区中央部に位置する。南北1m×東西1.8m、深さ26cm前後の楕円形の土壌である。遺構埋土より土器の破片が1点出土している。遺構の性格は不明である。

出土遺物（第108図）

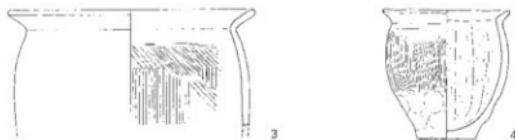
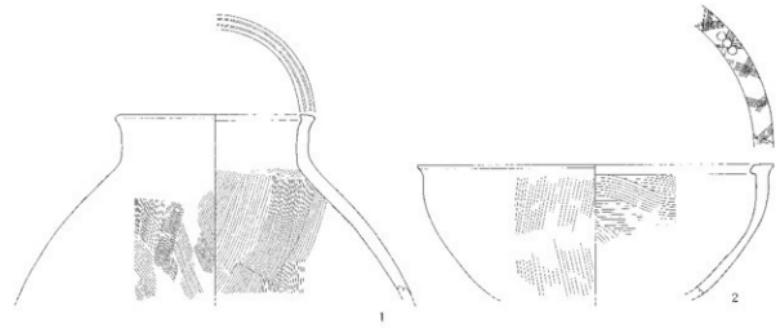
108-4は小型の壺である。胴部内外面にはミガキ、口縁端部外側には指頭圧痕が認められる。装饰性も無く、Ⅲ-1様式の範疇と考えられる。

SX20（第108図）

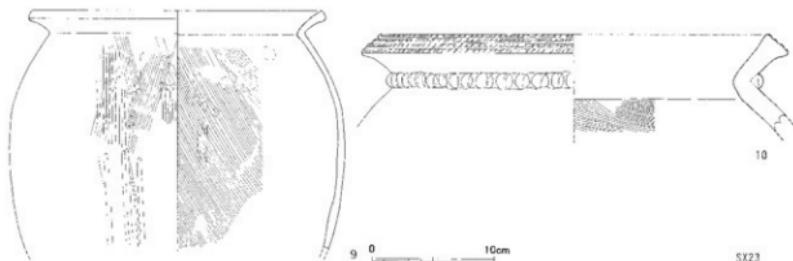
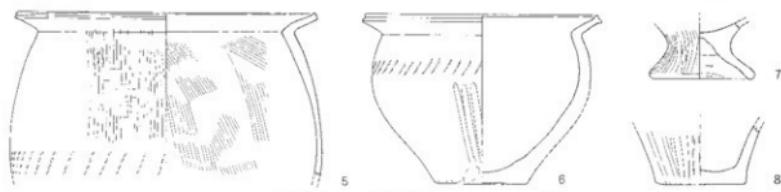
調査区の中央部、SX19の南側に位置する。南北60cm×東西1.2m、深さ14cmの楕円形の土壌である。遺構埋土より土器の破片が1点出土している。遺構の性格は不明である。

出土遺物（第108図）

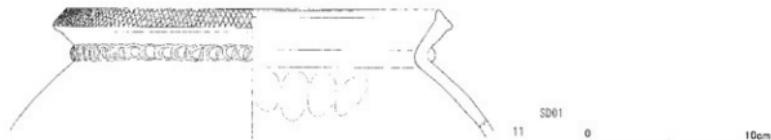
108-5は壺の底部である。外側の調整は、底部までミガキが施されている。Ⅲ様式の範疇と考え



SX22北



SX23



第111図 12区SX22北・SX23・SD01出土遺物 (1～8・10・11はS=1/3、9はS=1/4)

られる。

SX21（第86図）

調査区中央部の北寄りに位置し、複数の造構が切り合った可能性が考えられる。南北3.6m×東西4.4m、深さ24cm前後の壺な土壤である。造構埋土より土器の破片が3点出土している。

出土遺物（第108図）

土器は3点出土している。第108-6は口縁部が鈎状に水平に延びた高壺である。口縁部端には1条の凹線文がかすかにめぐる。7は口縁部が肥厚した断面「く」の字状口縁の壺で、斜状の刻目文が施されている。8は壺の下半部である。外面にススが付着している。底部付近まで施されたミガキの後、横ナデが施されている。6は水平に延びる鈎状の口縁、7は口縁の肥厚、8は内面下半のケズリ調整などⅢ-2様式の様相を示している。

SX22南（第86図）

SX22は広範囲に広がる造構であるため、便宜的に南北に分割している。複数の造構が重複、もしくは切り合っているものと考えられる。SX23・24はそのうちの一一部と考えられる造構である。現状で、SX22全体は南北20m×東西25mの広がりを持ち、深さは15cm前後である。造構埋土より遺物が散見されるが、まとまって出土する状況は見られなかった。

出土遺物（第109・110図）

上器は非掲載分を含めて、41点の土器が出土している。109-1は壺である。口縁端部が上向きになっている。2・4・5・9は加飾口縁の壺である。5は口縁端部に2条の沈線文を施した後に、斜状の刻目文を施している。9は口縁部に3条の凹線文を施している。3・8は高壺脚部である。後者の脚部は短く、器壁も3に比べると厚くなる。6は広口壺である。口縁部～頸部にかけて斜格子文や貼り付け突帯文等で装飾を施している。7は高壺である。ほぼ完形で、口縁部に4条の凹線文が施され、胸部掘は側面に面を成形している。

110-1～5は断面「く」の字状口縁の壺である。3～5は口縁部が上方に内湾し、肥厚する。5は口縁部に1条の凹線が施されている。6は口縁端部が肥厚した壺である。口縁部中程より上方に向かって緩やかな曲線を描く。7・8は頸部に貼り付け突帯文を付加する壺である。7の口縁端部は肥厚し、3条の凹線がめぐる。口縁部の内面には横方向の刷毛が施されている。8の口縁端部は7に比べてあまり肥厚していない。また、口縁部には強いナデが施されており、不明瞭ながら1条の凹線文状の浅い溝がめぐっている。9・10は壺の底部と考えられる。9は外面にススが付着している。10は器壁の立ち上がり角度が緩いため、壺の可能性もある。

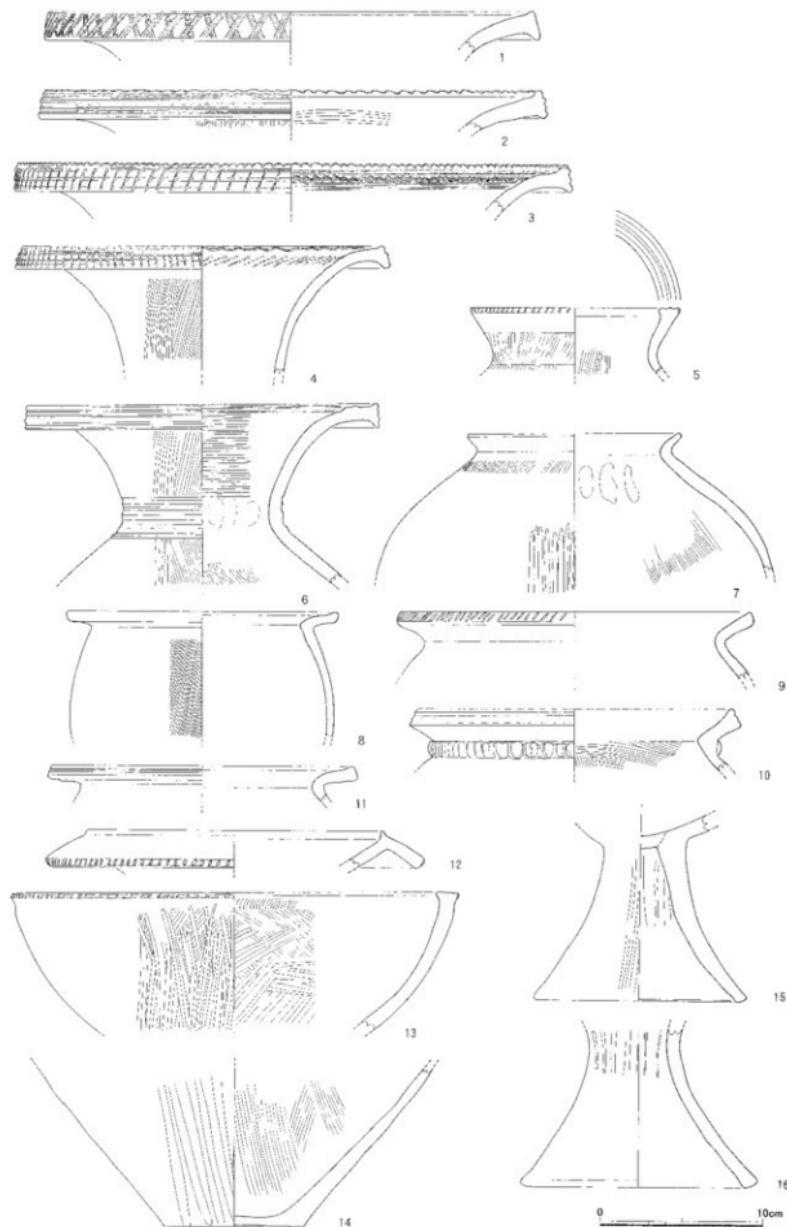
面積の広い造構であること、複数の造構が切り合っていることを考えると、時期の異なる遺物が含まれている可能性は高い。非掲載分を含め、Ⅲ-1～明瞭な凹線が口縁部に見られるⅣ-1様式までの様相を示す。

SX22北（第86図）

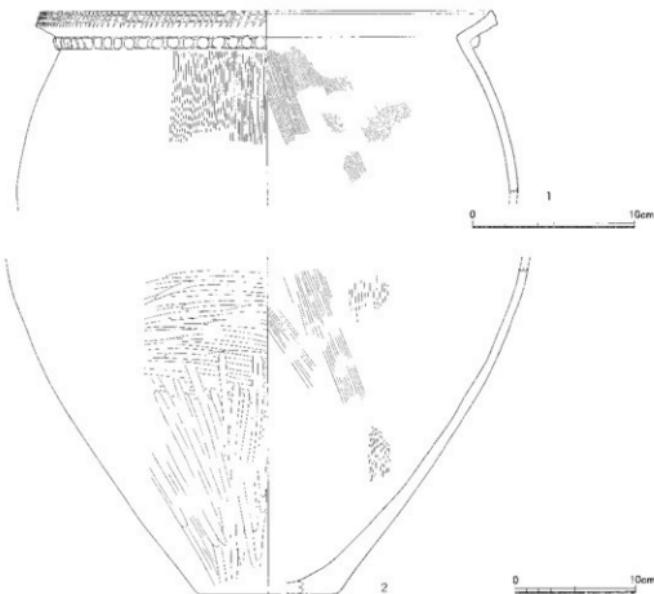
造構埋土より上器が散見して出土するが、まとまって出土する状況は見られない。

出土遺物（第111図）

土器は非掲載分を含め、12点出土している。1は直口壺である。口縁端部に2条の凹線文が施されている。2は高壺である。口縁端部は水平方向に平らな面を持つ。加飾はそこに施されている。3～6は断面「く」の字状口縁の壺である。4はミニチュアの完形の壺で、造構内埋土より単剣で



第112図 VIII区SX24出土遺物 (1) (S = 1 / 3)



第113図 調査区SX24出土遺物（2）（1はS=1/3、2はS=1/4）

出土した。内面全面の調整にはケズリが施されている。5・6は口縁端部に1条の凹線文が施されている。6の外面調整では、ミガキが施された後に底部付近でナデと指頭圧痕が確認できる。7は台付き壺の高台部分である。脚部内面には横方向のケズリが確認できる。8は壺の底部である。外面調整は底部付近までミガキが施された後に、部分的に底部付近でナデが施されている。

SX22南と同じく、Ⅲ-1～Ⅳ-1様式の様相を示す土器が混在している。

SX23（第86図）

SX22北を切って掘り込まれている南北0.9m×東西1.4m、深さ43cmの楕円形の土壙である。遺構埋上より土器片が出土しているが、遺構の性格は不明である。

出土遺物（第111図）

土器は2点出土している。111-9は断面「く」の字状口縁の壺であるが、口縁端部が肥厚している。

10は肥厚した口縁端部に3条の凹線文がめぐり、その上に斜状の刻目文が施された壺である。頸部には貼り付け突帯文が施されている。口縁が肥厚する9はⅢ-2、口縁部に凹線が施される10はⅣ-1様式の様相を示す。

SX24（第86図）

調査区西部の南側に位置し、SX22南の一部を切るかたちで存在する。南北3.0m×東西3.0m、深さ55cmの土壙である。遺構埋上より多数の土器片が出土している。

出土遺物（第112・113図）

土器は非掲載遺物を含めて、84点出土している。112-1～4・6は加飾口縁の壺である。2～4・

6は口縁部に3条の凹線文が施されている。5は直口壺で、口縁上部に2条の凹線文が施されている。7は口縁の径が小さく、肩部・胴部が張り出す壺である。8～11は壺である。8は口縁端部が上方に緩やかに屈曲している。9は口縁部が肥厚している。10・11は肥厚した口縁端部に凹線文が施されている。12は口縁上面が平坦になり、口縁端部が外方斜め下方向に向けて鉤状に発達した、「T」字形断面になる高坏である。13は12に比べて口縁端部は発達していないが、上面に平坦面を形成する高坏である。14は壺の底部である。15・16は高坏の脚部である。

113-1は肥厚した口縁端部に2条の凹線がめぐっており、その上から斜状の刻目文が施されている。また、頭部には貼り付け突帯文が施されている。2は大型の壺の底部である。外面底部付近までミガキが施された後に、底部付近でナデが施されている。

これらの土器は口縁端部が肥厚するものと、口縁部に凹線が施されているものとに大別できることから、Ⅲ-2～Ⅳ-1様式の様相を示す。

なお、非掲載分の中には、断面「く」の字状口縁の壺が存在する。これらは口縁が肥厚しないⅢ-1様式の様相を示す。このことを踏まえれば、SX24出土土器はⅢ-1～Ⅳ-1の上器が供伴している遺構と考えられる。層位を中心とする出土位置に時期差は認められなかった。また、土器の焼成状態を観察すると、破面内部に黒化層が見られる焼成不良のものが大半を示していた。このことから、一括で廃棄された土器群である可能性が考えられる。

SD01 (第86・87図)

調査区北西部で検出された断面台形状の溝状遺構で、SX15の西部を切っている。検出された遺構の全長は18m、幅3.0m、深さ60cmである。粘砂土で埋没している遺構からの土器は1点のみの出土である。

出土遺物 (第112図)

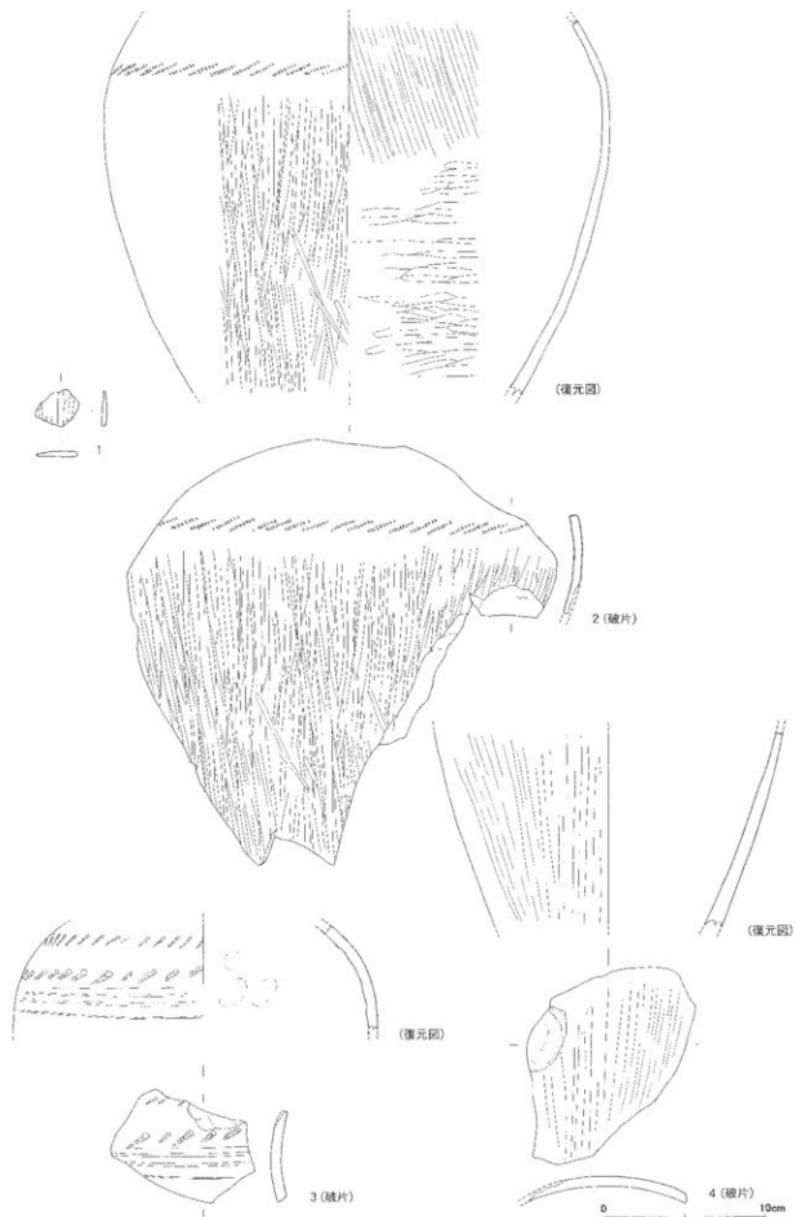
112-11は口縁が肥厚し、頭部に貼り付け突帯文を付加した壺である。Ⅲ-2様式（弥生時代中期中葉）の様相を示す。

包含層（4層）出土遺物

第84・85図にはⅣ区4層包含層遺物が掲載されている。4層からは弥生時代前期末～古墳時代後期の土器が検出されているが、その殆どが弥生時代中期のものである。古墳時代中期以降のものは検出できなかった遺構に伴う遺物、もしくは3層からの混入である可能性が考えられる。

84-1の壺には、口縁部にやや大振りの単位で凹線がめぐる。6の壺にも同様の凹線がめぐるが、口縁端部付近は一部ナデ消されている。弥生時代後期後葉のものである。2～5は小型の丸底壺で、3のように口縁部が直口化するものもある。この4点は近接して出土しているため、遺構に伴う可能性が考えられる。古墳時代中期と考えられる。7は高坏である。古墳時代後期のものと考えられる。8は口縁部が退化した段階の古墳時代中期以降の壺である。口縁端部が僅かに内傾し、内面に僅かに段が形成されている。10は古墳時代後期の壺である。9は古墳時代後期～古代の壺で、肩部は張り出さない形態である。11は高台付きの壺である。古墳時代後期～古代のものと考えられる。

85-1は弥生時代前期末の短頸壺である。内外面には口縁端部にまで、全面にミガキが施されている。2・4・6は弥生時代中期後半の壺である。2は口縁端部が上方に屈曲し、6は口縁部に1条の凹線が施されている。4は口縁部が肥厚している。3は無頸壺である。口縁端部に刻目文、口



第114図 VIII区出土弥生土器焼成失敗品 (1) ($S = 1/3$)



5 (破片)



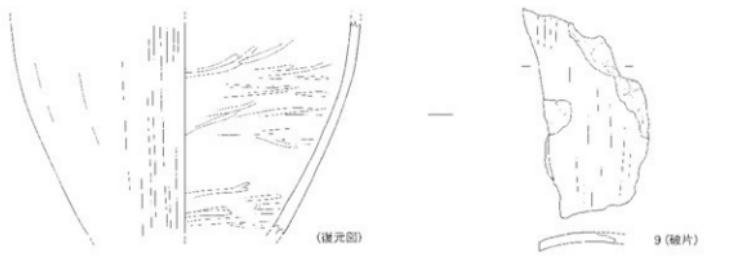
6 (破片)



7 (破片)



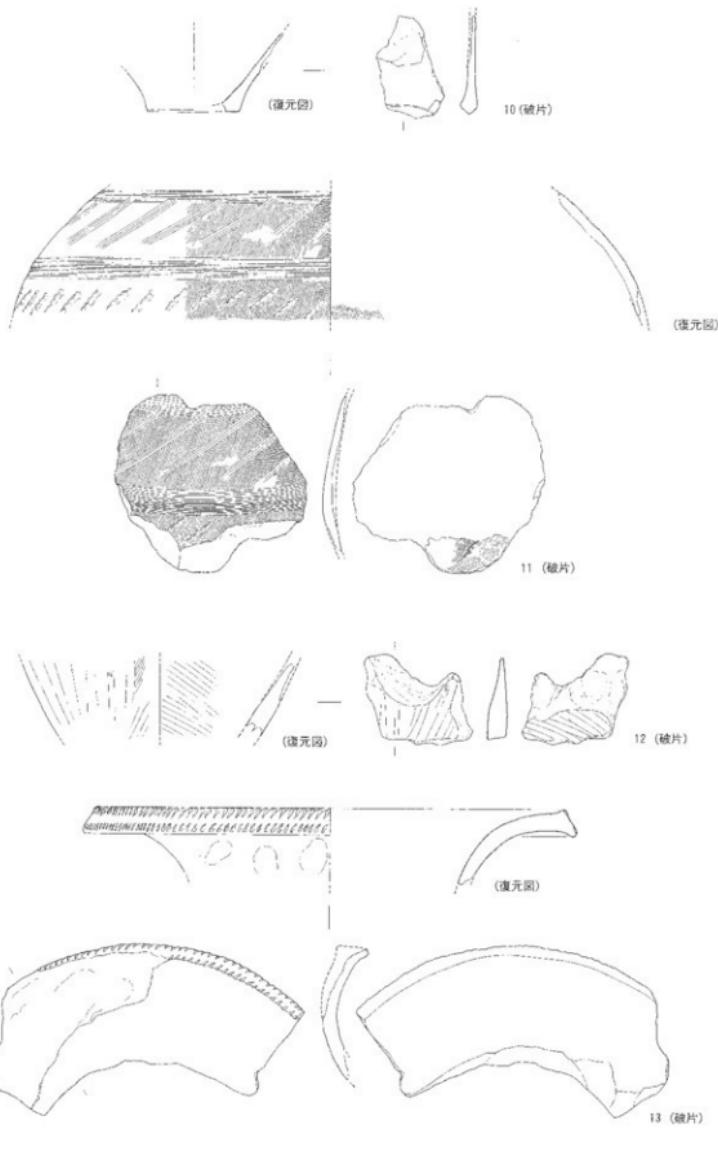
8 (破片)



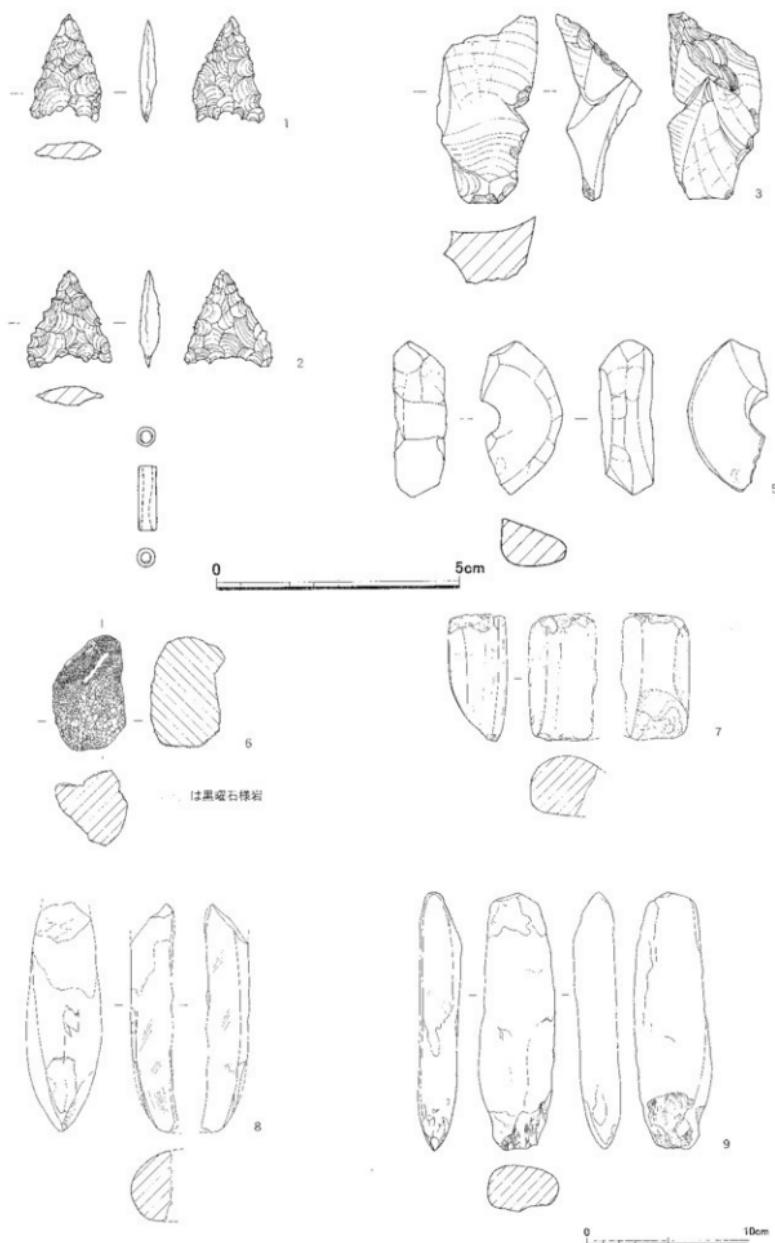
9 (破片)

0 10cm

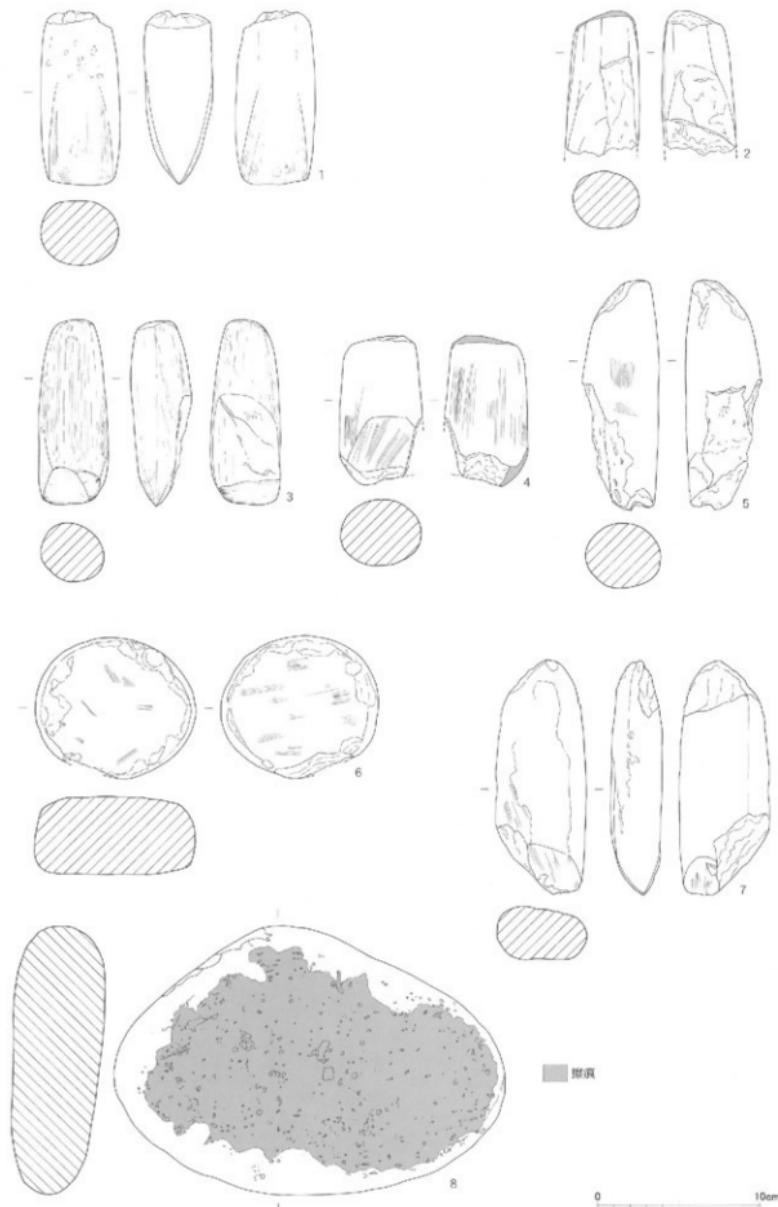
第115図 VIII区出土弥生土器焼成失敗品 (2) (S = 1 / 3)



第116図 いせき区出土弥生土器焼成失敗品（3）（S = 1 / 3）



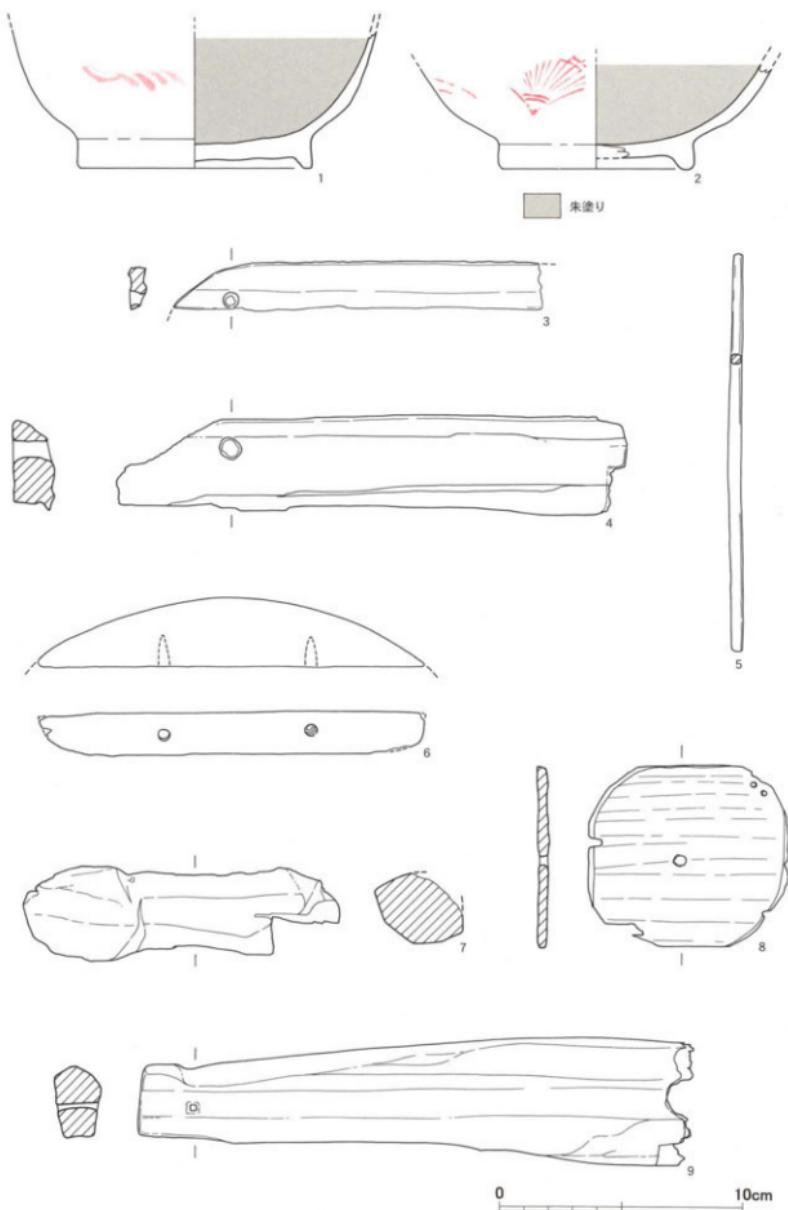
第117図 中野美保遺跡出土石製品 (1) (1~5はS=1/1、6~9はS=1/3)



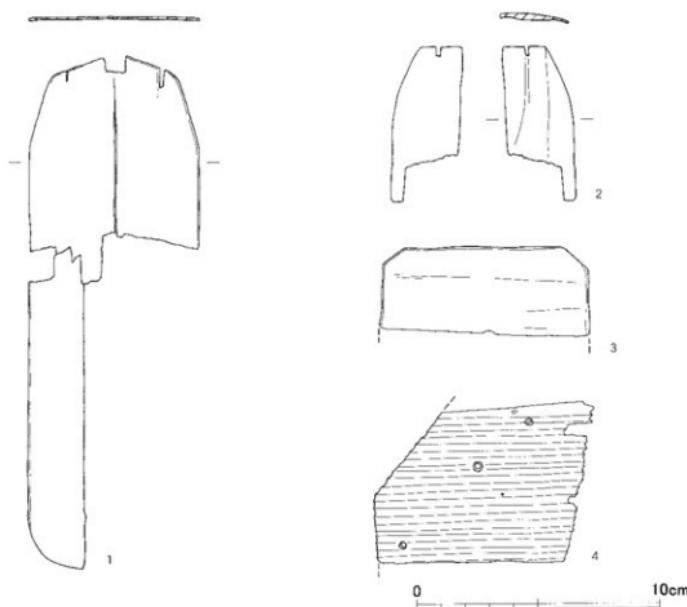
第118図 中野美保遺跡出土石製品（2）(S=1/3)



第119図 中野美保遺跡出土石製品（3）（S=1／3）



第120図 中野美保遺跡出土木製品 (1) ($S = 1/2$)



第121図 中野美保遺跡出土木製品（2）（S=1／2）

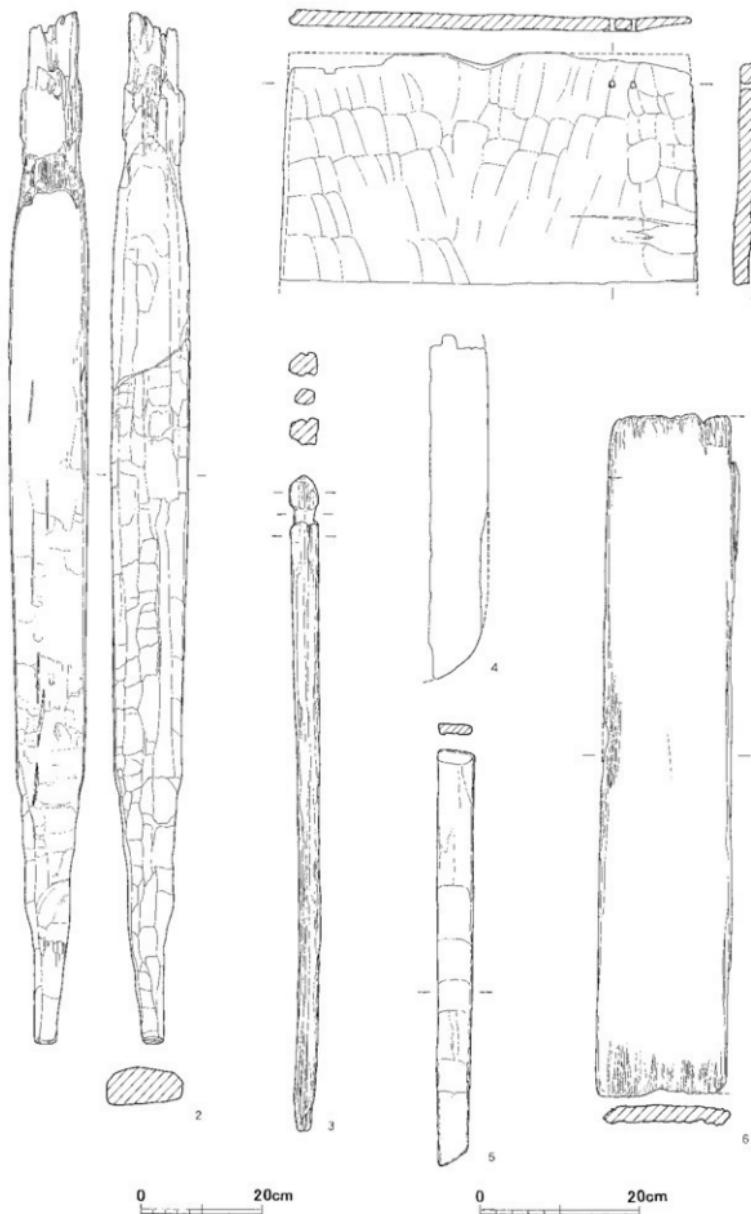
縁直下に3条の貼り付け突帯文が付加され、それぞれが加飾されている。5は直口壺である。口縁端部が内側に屈曲している。7は高壺の脚部である。8は口縁端部が発達したものである。円線は施されていないが、口縁端部の両端が丸く肥厚している。9は高壺である。口縁端部は失われている。10は壺の胴部である。外面底部付近はミガキの後に横ナデが施されている。11～13は紡錘車と考えられる上製円盤である。いずれも壺の胴部破片を成形して円形に仕立てている。1には穿孔が見られないが、2・3には穿孔が認められる。

弥生土器の焼成失敗品（第114～116図）

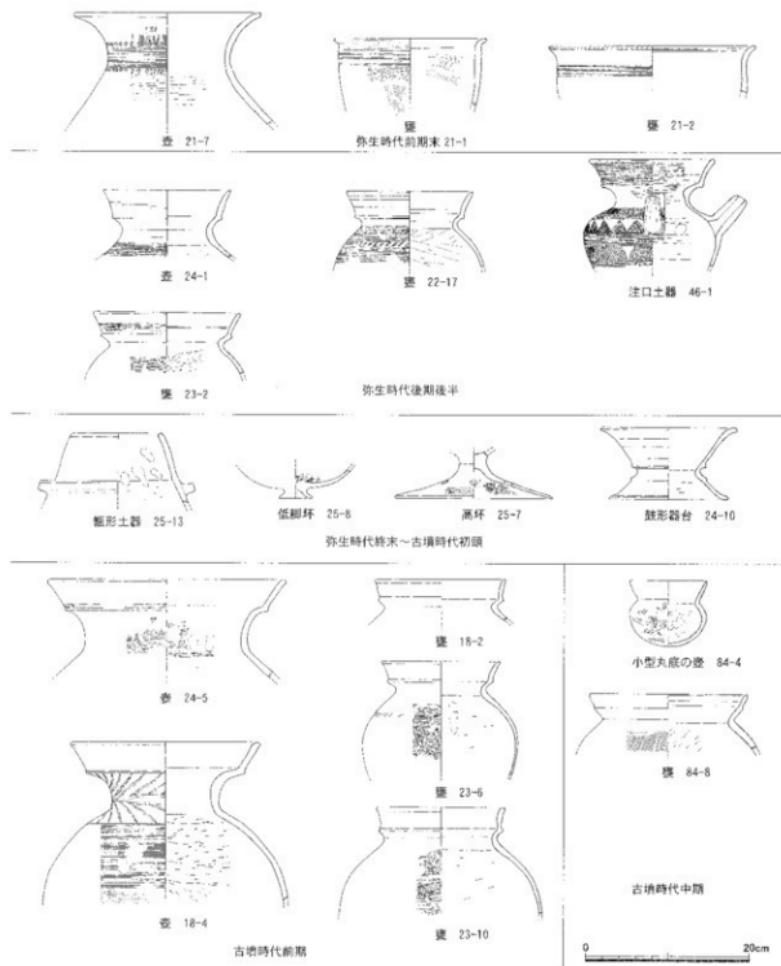
中野美保遺跡の竈区では、弥生土器の焼成時における失敗品の存在が明らかになった¹⁰⁾。ここでは、焼成失敗品を考究された田崎博之氏の観察と分類に従って報告する¹¹⁾。

確認された失敗品は全部で13点、個体数にして約12～13点である。第114～116図に個体としての実測図と破片の投影実測図を掲載した。いずれもⅢ様式のもとと考えられる。なお、個々の観察所見は表4に掲載している。

本遺跡では、焼成時破裂土器片1点と焼成時破裂痕土器12点の2種が出土している。このうち、前者の焼成時破裂土器片は焼成時に器壁から破裂剥離したもので、凸レンズ状に中央部が若干膨らみ、縁辺が薄くなるものである。ただし、この焼成時破裂土器片は薄い縁辺部が一部分にしか見られないことから、元々の破片がさらに細片化したものと考えられる。一方、後者の焼成時破裂痕土器は前者が破裂剥離した痕跡を有するもので、その剥離面は不整な円形もしくは橿円形のクレーター状を呈している。また、剥離によって器壁が薄くなり、一般的に考えて実用品になり得ない、穴の

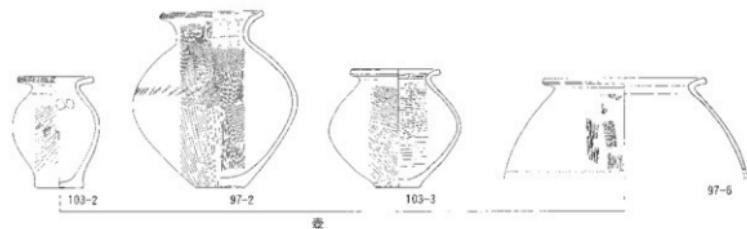


第122図 中野美保遺跡出土木製品 (3) (1・4・5はS=1/6、2・3はS=1/8)



第123図 中野美保遺跡出土土器一覧（1）（弥生時代前期・弥生時代後期～古墳時代中期）（S=1／6）

開いていた可能性が高い破裂痕土器も確認されている。焼成時に破裂した土器片と実用に供さない破裂痕土器の二者が存在する状況証拠から、中野美保遺跡周辺で土器の焼成が行われていた可能性が非常に高いことが指摘できる。また、SX06やSX07では炭化物の含まれた土層内から、山崎氏の分類による焼成時破裂土器が出土している。これらは通常の焼き上がりの色調の破片と黒斑の破片の接合するものや、黒斑が破片接合部で途切れたりするものである。しかし、2次的な熱受けることで黒化層・黒変部・黒斑が消失する事例が生じることがあり、これらの資料をもって土



卷

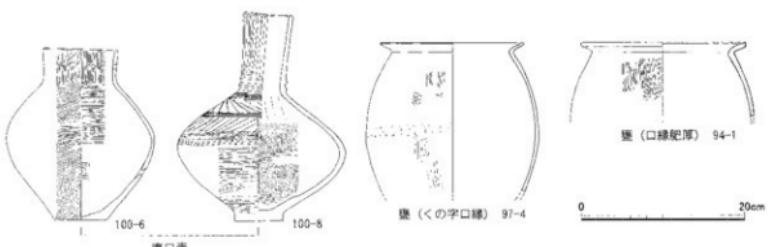


壺(加飾口縁) 107-6



無鉢壺 85-3

広口壺 109-6

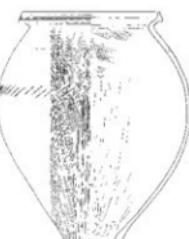


壺口壺

0 20cm



壺 ネクタイ(口縁キザミ) 98-4



壺(口縁凹輪文) 94-4



高环(口縁拘状) 104-4



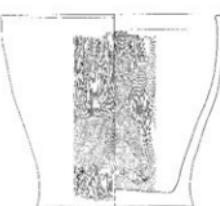
壺 ネクタイ(口縁凹輪文) 96-3



鉢 105-5

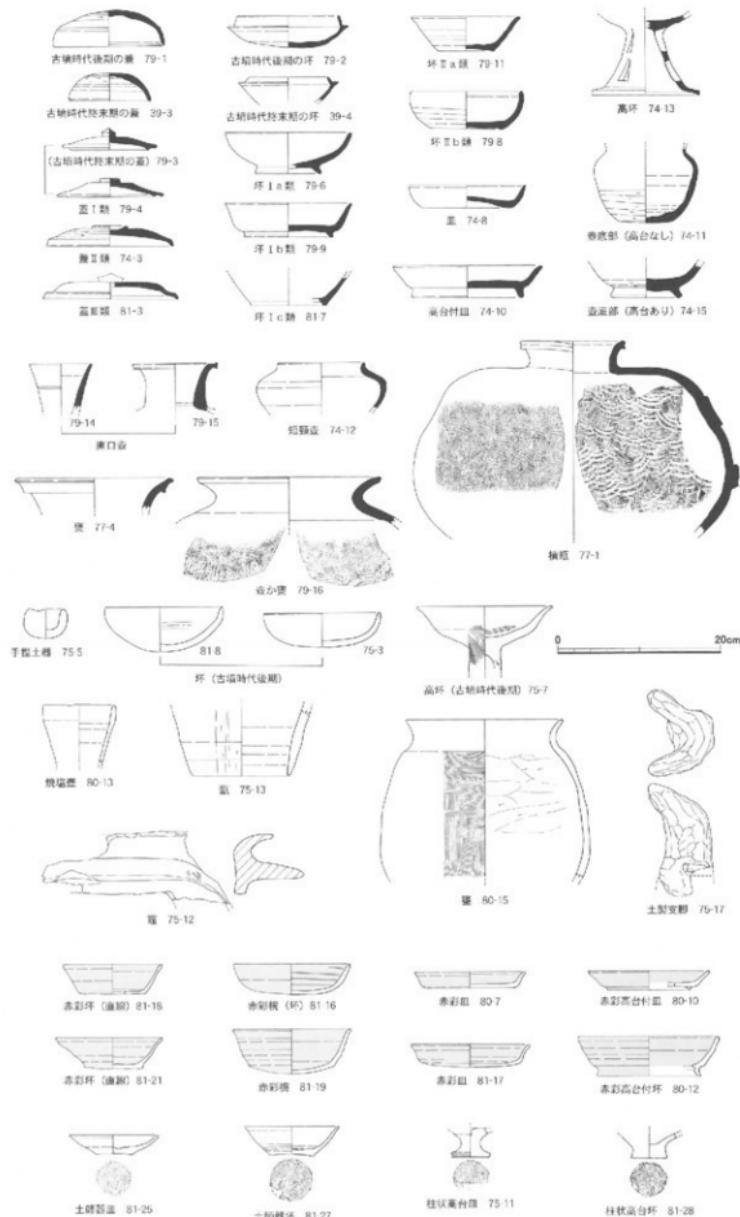


高台付壺 104-1



バケツ形の土器 103-6

第124図 中野美保遺跡出土土器一覧(2)(弥生時代中期)(S=1/6)



第125図 中野美保遺跡出土土器一覧（3）〈古墳時代後期～中世〉（S=1／6）

器焼成の根拠とするには出土状況の検討を含め、注意が必要と指摘されている^{注2}。なお、先述したSX06やSX07では炭化物が含まれてはいるが、スサ入り状焼粘（泥）土塊等が検出されておらず、上器焼成土塊の可能性は低い。

SX24から集中して焼成時破裂痕土器が出土している。また、先述したようにSX24出土の土器の大半が焼成不良のものである。このことから、Ⅲ-1～Ⅳ-1 様式の範疇にある焼成不良品を一括廃棄した造構である可能性が考えられる。

第5節 その他の遺物と出土土器一覧

1. 出土石製品（第117～119図）

掲載した石製品の大半は、調査区の4層と弥生時代の造構から出土したものである。表6に計測表を掲げている。なお、非掲載の石製品と併せて表2に出土一覧を掲載している。

117-1・2はそれぞれSX05、SX01から出土した黒曜石製の石鏃である。1は分析の結果、隱岐島産のものと判明している。3は黒曜石の未製品である。分析の結果、1と同様の隱岐島産であることが判明している。4はV型SX01から出土した両側穿孔の管状である。分析の結果、その产地は不明であった。5は紡錘車の破損品である。6は火山弾と考えられる多孔質の軽石である。一部に黒曜石状のものが付着していたため产地分析を行ったが、黒曜石ではなく、結晶鉱物である可能性が判明した。7～9、118-1～5・7は太形蛤刃石斧である。いずれも破損したものであるが、117-7、118-3は破損後も再利用している。前117-7は基部を含めて全長が短くなっている。118-3の刃部には切り合いの痕跡が見られる。118-6と7はすり石と石皿である。

119-1は大型石包丁様石器の可能性が考えられる。刃部には擦痕が見られるが、鋭い刃部ではない。2～5は穂摘具の未製品と考えられる。6～12は砥石である。6～8は薄い直方体をなし、4面が使用されている。8には刃部等を研いた際の浅い溝が見られる。9～11は破損しているものもあるが、全体的に6～8より分厚い直方体を基本とし、4面以上が使用されている。11には刃部等を研いた際の浅い溝が複数観察できる。同12は筋砥石と考えられる。複数の溝が切り合っている。

2. 出土木製品（第120～第122図）

不明品も含めて34点検出しているが、大半が破損しているため、ここでは代表的なものを掲載し、非掲載品の一部を写真図版に掲載する。出土位置をはじめ、観察所見の詳細は表7に記載している。

出土木製品の大半は一部を除いて、中世水田造構下層の3層包含層から検出されている。

120-1・2は漆器の椀である。両者とも内側は赤漆塗りである。3・6は曲物等の容器に伴う底板と考えられる。6は側面に部材を継ぎ足せるように目釘の孔が見られ、一部に木製の目釘が残存している。同-8も曲物等の容器に相当する蓋と考えるものである。4・5・7・9は不明製品である。5は八角形に面取りされ、両方の端部も面をなしている。一見して箸のように見える。7は火を受けており一部が炭化している。4・9共に穿孔が認められる。

121-1・2は板草履である。左右に鼻緒を施すための切り込みが認められる。3・4は曲物等の容器に伴う蓋に相当するものと考えられる。以上の木製品は120-1・2を除いて、3層包含層から出土している。いずれも中世～近世に属するものと考えられる。

122-1は建築部材等からの転用と考えられ、両面に筋状の工具痕が見られることから、作業台と